茨城県教育財団文化財調査報告第53集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書3（三和地区）

二十五里寺A・B・C遺跡　溜原A遺跡

下片田遺跡　中新田A・B・C遺跡

上片田A・B・C遺跡

財団法人　茨城県教育財団

正　誤　表

ページ	行	誤	正
挿図目次			
上片田C遺跡	第109図	楕円形系統住居跡一覧	円形系統住居跡一覧
表目次	表　15	楕円形系統住居跡一覧表	円形系統住居跡一覧表
196	1	第109図 楕円形系統住居跡一覧	第109図 円形系統住居跡一覧

茨城県教育財団文化財調査報告第53集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書3（三和地区）

二十五里寺A・B・C遺跡　溜原A遺跡

下片田遺跡　中新田A・B・C遺跡

上片田A・B・C遺跡

財団法人　茨城県教育財団

序

財団法人茨城県教育財団は，昭和57年度以降建設省関東地方建設局と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，新４号国道建設用地内に所在する埋蔵文化財の発掘を実施してまいりました。

建設省は，国道４号線の交通量の増加による交通渋滞の緩和をはかるため，埼玉県越谷市から茨城県五霞村，境町，総和町，三和町，結城市を通過して，栃木県宇都宮市に至る「新４号国道」の建設を進めております。その予定地内には貴重な埋蔵文化財が所在しており，開発にかかる遺跡については記録保存の措置が講ぜられております。

本書は，昭和59・60・62・63年度にかけて発掘調査を実施した三和町に所在する11の遺跡について，調査の成果を収録したものであります。本書が記録保存の役割としてだけでなく，教育及び研究の資料として，広く活用されることを希望いたします。

最後に，発掘調査及び整理に当たり，建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所，茨城県教育委員会，三和町教育委員会をはじめ，関係諸機関，関係各位の御指導・御協力に対しまして，心より謝意を表します。

平成元年９月30日

財団法人　茨城県教育財団

理事長　　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，建設省の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和59・60・62・63年度にかけて発掘調査を実施した，茨城県猿島郡三和町に所在する二十五里寺A遺跡ほか10遺跡の発掘調査報告書である。

2　二十五里寺A遺跡ほか10遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		竹内藤男	昭和58年12月～昭和61年3月
		川又友三郎	昭和61年4月～昭和63年5月
		礒田勇	昭和63年6月～
副理事長		川又友三郎	昭和58年7月～昭和61年3月
		礒田勇	昭和61年4月～昭和63年3月
		小林元	昭和63年4月～
常務理事		綿引一夫	昭和57年4月～昭和60年3月
		萩原藤之助	昭和60年4月～昭和61年3月
		滑川貞雄	昭和61年4月～平成元年3月
		小林洋	平成元年4月～
事務局長		小林洋	昭和58年4月～昭和60年3月
		堀井昭生	昭和60年4月～昭和62年3月
		坂場庸克	昭和62年4月～平成元年3月
		一木邦彦	平成元年4月～
調査課長		青木義夫	昭和59年4月～平成元年3月
		石井毅	平成元年4月～
企画管理班	班長	市毛洋一	昭和59年4月～昭和60年3月
	班長	北畠健	昭和60年4月～昭和62年3月
	班長	水飼敏夫	昭和62年4月～
	主任調査員	加藤雅美	昭和57年4月～昭和61年3月
	主任調査員	山本静男	昭和61年4月～平成元年3月
	主任調査員	小河邦男	平成元年4月～
	係長	田所多佳男	昭和60年4月～昭和62年3月
	係長	園部昌俊	昭和63年4月～

企画管理班	主　　任	山崎初雄	昭和60年4月～平成元年3月
	主　　事	鈴木三郎	昭和52年4月～昭和60年3月
	主　　事	海老沢一夫	昭和57年4月～昭和60年3月
	主　　事	大曽根徹	昭和58年4月～昭和61年3月
	主　　事	富永明	昭和62年4月～昭和63年3月
	主　　事	大部章	昭和61年4月～
	主　　事	吉井正明	平成元年4月～
調査班	班　　長	堀川計三	昭和59・60年度
	班　　長	倉本冨美男	昭和61・63年度
	班　　長	加藤雅美	昭和62年度
	主任調査員	中沢時宗	昭和59年度前半調査
	主任調査員	和田雄次	昭和60年度調査，昭和61年度整理・執筆
	主任調査員	久野俊度	昭和62・63年度調査
	主任調査員	桜井一美	昭和59年度前半調査，後半整理・執筆，昭和60・62年度調査
			昭和63年度整理・執筆
	調査員	小松崎猛彦	昭和63年度調査，平成元年度前半整理・執筆
	整理班長	渡辺千秋	昭和59年度
	整理班長	加藤雅美	昭和61年度，平成元年度
	整理班長	沼田文夫	昭和63年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，次のように執筆分担した。

第1章第1節，第2章第1・2節
第5章第1節二十五里寺A遺跡，第2節二十五里寺B遺跡
　第3節二十五里寺C遺跡，第4節溜原A遺跡，第6節中新田A遺跡
……桜井一美

第5章第5節下片田遺跡……和田雄次

第1章第2節，第3章，第4章
第5章第7節中新田B遺跡，第8節中新田C遺跡，第9節上片田A遺跡
　第10節上片田B遺跡，第11節上片田C遺跡，終章
……小松崎猛彦

4　上片田C遺跡の発掘調査に際しては，日本考古学協会員新井和之氏から御指導をいただいた。

5　本書に使用した記号等については，第4章遺構・遺物の記載方法を参照されたい。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査経過……2
第２章　位置と環境……6
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……7
第３章　調査方法……11
　第１節　地区設定……11
　第２節　遺構確認……12
　第３節　遺構調査……12
第４章　遺構・遺物の記載方法……13
　第１節　遺構の記載方法……13
　第２節　遺物の記載方法……15
第５章　遺跡の調査結果……17
　第１節　二十五里寺Ａ遺跡……17
　　1　遺跡の概観……17
　　2　調査経過……17
　　3　遺構・遺物……20
　　4　まとめ……27
　第２節　二十五里寺Ｂ遺跡……29
　　1　遺跡の概観……29
　　2　調査経過……29
　　3　遺構・遺物……32
　　4　まとめ……33
　第３節　二十五里寺Ｃ遺跡……35
　　1　遺跡の概観……35
　　2　調査経過……35
　　3　遺構・遺物……38

4　まとめ……62
第4節　溜原A遺跡……65
1　遺跡の概観……65
2　調査経過……65
3　遺構・遺物……65
4　まとめ……68
第5節　下片田遺跡……69
1　遺跡の概観……69
2　調査経過……69
3　遺構・遺物……73
4　まとめ……90
第6節　中新田A遺跡……93
1　遺跡の概観……93
2　調査経過……93
3　遺構・遺物……96
4　まとめ……101
第7節　中新田B遺跡……103
1　遺跡の概観……103
2　調査経過……103
3　遺構・遺物……105
4　まとめ……105
第8節　中新田C遺跡……107
1　遺跡の概観……107
2　調査経過……107
3　遺構・遺物……110
4　まとめ……113
第9節　上片田A遺跡……115
1　遺跡の概観……115
2　調査経過……115
3　遺構・遺物……115
4　まとめ……118
第10節　上片田B遺跡……119

1　遺跡の概観 ……119
2　調査経過 ……119
3　遺構・遺物 ……121
4　まとめ ……129
第11節　上片田C遺跡 ……131
1　遺跡の概観 ……131
2　調査経過 ……131
3　遺構・遺物 ……132
4　まとめ ……192
終章　むすび ……197

挿　図　目　次

第 1 図　茨城県内新 4 号国道関係遺跡分布図……3～4
第 2 図　新 4 号国道周辺の遺跡分布図……9
第 3 図　グリッド概念図……11

二十五里寺Ａ遺跡

第 4 図　二十五里寺Ａ遺跡地形図……18
第 5 図　二十五里寺Ａ遺跡全体図……19
第 6 図　第 1 号溝実測図……21
第 7 図　第 1 号井戸状遺構実測図……22
第 8 図　第 1 号井戸状遺構出土遺物実測図(1)……23
第 9 図　第 1 号井戸状遺構出土遺物実測図(2)……24
第 10 図　第 1 号井戸状遺構出土遺物実測図(3)……25
第 11 図　グリッド出土土器拓影図……26

二十五里寺Ｂ遺跡

第 12 図　二十五里寺Ｂ遺跡地形図……30
第 13 図　二十五里寺Ｂ遺跡全体図……31
第 14 図　グリッド出土土器拓影図……32

二十五里寺Ｃ遺跡

第 15 図　二十五里寺Ｃ遺跡地形図……36
第 16 図　二十五里寺Ｃ遺跡全体図……37
第 17 図　第 1 ・ 2 号住居跡実測図……39
第 18 図　第 1 ・ 2 号住居跡出土土器拓影図……40
第 19 図　第 1 ・ 2 ・ 3 号溝実測図……41
第 20 図　グリッド出土土器拓影図(1)……52
第 21 図　グリッド出土土器拓影図(2)……53
第 22 図　グリッド出土土器拓影図(3)……54
第 23 図　グリッド出土土器拓影図(4)……55
第 24 図　グリッド出土土器拓影図(5)……56
第 25 図　グリッド出土土器拓影図(6)……57
第 26 図　グリッド出土土器拓影図・実測図(7)……58
第 27 図　グリッド出土土器実測図(8)……59
第 28 図　グリッド出土石器類実測図(1)……60
第 29 図　グリッド出土石器類実測図(2)……61
第 30 図　採土工事説明図……62

溜原Ａ遺跡

第 31 図　溜原Ａ遺跡地形図……66
第 32 図　溜原Ａ遺跡全体図……67
第 33 図　グリッド出土土器拓影図……67

下片田遺跡

第 34 図　下片田遺跡地形図……70
第 35 図　下片田遺跡全体図……71
第 36 図　下片田遺跡グリッド図……72
第 37 図　土坑実測図(1)……74
第 38 図　土坑実測図(2)……75
第 39 図　第21号土坑実測図・遺物出土位置図……77
第 40 図　グリッド出土土器拓影図(1)……80
第 41 図　グリッド出土土器拓影図(2)……81
第 42 図　グリッド出土土器拓影図(3)……82
第 43 図　グリッド出土土器拓影図・実

測図(4)……83
第44図　グリッド出土土器実測図・土製品実測図……84
第45図　出土石器実測図(1)……86
第46図　出土石器実測図(2)……87
第47図　出土石器実測図(3)……88
第48図　出土石器実測図(4)……89

中新田A遺跡

第49図　中新田A遺跡地形図……94
第50図　中新田A遺跡全体図……95
第51図　グリッド出土土器拓影図(1)……98
第52図　グリッド出土土器拓影図(2)……99
第53図　石器実測図 ……100

中新田B遺跡

第54図　中新田B遺跡全体図 ……104
第55図　中新田B遺跡東西土層図 ……105

中新田C遺跡

第56図　中新田B・C遺跡地形図 ……108
第57図　中新田C遺跡全体略図 ……109
第58図　第1・3号溝実測図 ……111
第59図　第2号溝実測図 ……112
第60図　出土遺物実測図・拓影図・石器実測図・鉄製品実測図 ……114

上片田A遺跡

第61図　上片田A遺跡地形図 ……116
第62図　上片田A遺跡全体図 ……117
第63図　上片田A遺跡東西土層図 ……118

上片田B遺跡

第64図　上片田B遺跡全体図 ……120
第65図　土坑実測図 ……121
第66図　第1号溝実測図……123～124
第67図　第2・3号溝実測図 ……125
第68図　出土遺物実測図・拓影図・石器実測図・鉄製品実測図(1) ……126
第69図　出土遺物実測図・石器実測図・鉄製品実測図(2) ……127

上片田C遺跡

第70図　上片田B・C遺跡地形図 ……133
第71図　上片田C遺跡全体図 ……134
第72図　第1号住居跡実測図 ……135
第73図　第1号住居跡遺物出土位置図 …136
第74図　第1号住居跡出土遺物実測図 …139
第75図　第1号住居跡出土遺物拓影図(1) 141
第76図　第1号住居跡出土遺物拓影図(2) 142
第77図　第1号住居跡出土遺物拓影図(3) 143
第78図　第1号住居跡出土遺物拓影図(4) 144
第79図　第1号住居跡出土遺物実測図・拓影図(5) ……145
第80図　第2号住居跡実測図 ……147
第81図　第2号住居跡遺物出土位置図 …148
第82図　第2号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1) ……150
第83図　第2号住居跡出土遺物拓影図(2) 151
第84図　第2号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3) ……152
第85図　土坑実測図(1) ……158
第86図　土坑実測図(2) ……159
第87図　土坑実測図(3) ……160

第88図　第1号溝実測図 ……165
第89図　第4・5号溝実測図 ……166
第90図　第2・3号溝実測図……167～168
第91図　第6・7号溝実測図 ……169
第92図　第8号溝実測図 ……170
第93図　第9号溝実測図 ……171
第94図　第10号溝実測図 ……172
第95図　第1号井戸状遺構実測図・出土遺物実測図 ……174
第96図　グリッド出土遺物拓影図(1) ……176
第97図　グリッド出土遺物拓影図(2) ……177
第98図　グリッド出土遺物実測図・拓影図(3) ……178
第99図　石器実測図(1) ……180
第100図　石器実測図(2) ……181
第101図　石器実測図(3) ……182
第102図　石器実測図(4) ……183
第103図　石器実測図(5) ……184
第104図　石器実測図(6) ……185
第105図　石器実測図(7) ……186
第106図　石器実測図(8) ……187
第107図　石器実測図(9) ……188
第108図　第1・2号住居跡出土土器文様組成比 ……193
第109図　楕円形系統住居跡一覧 ……196

表　目　次

表1　周辺の遺跡一覧表 ……10
表2　土坑一覧表 ……73
表3　石器観察表……101
表4　溝一覧表……110
表5　石器観察表……113
表6　鉄製品観察表……113
表7　溝一覧表……125
表8　石器観察表……129
表9　鉄製品観察表……129
表10　古銭観察表……129
表11　住居跡一覧表……149
表12　土坑一覧表……160
表13　溝一覧表……164
表14　石器観察表……189
表15　楕円形系統住居跡一覧表……195

写真図版目次

二十五里寺A遺跡

PL 1 調査前全景，調査後全景

PL 2 土層観察用トレンチ，第1号溝

PL 3 第1号井戸状遺構遺物出土状況，第1号井戸状遺構

PL 4 第1号井戸状遺構出土木片

PL 5 グリッド出土土器

二十五里寺B遺跡

PL 6 調査前全景，調査後全景

PL 7 土層観察用トレンチ，グリッド出土土器

二十五里寺C遺跡

PL 8 調査前全景(山林部)，調査前全景

PL 9 グリッド発掘による確認調査，山林部作業風景

PL 10 調査後全景，第1号住居跡

PL 11 第2号住居跡，第1号溝土層セクション

PL 12 第2号溝，第3号溝土層セクション

PL 13 第1号住居跡出土土器，第2号住居跡出土土器（表・裏）

PL 14 石器(1)

PL 15 石器(2)

溜原A遺跡

PL 16 調査前全景，調査後全景

PL 17 土層観察用トレンチ，グリッド出土土器

下片田遺跡

PL 18 調査前全景，グリッド試掘終了全景

PL 19 第1・2・3・4・5・6号土坑

PL 20 第7・8・9・10・11・12号土坑

PL 21 第13・14・15・16・17・18号土坑

PL 22 第19・20号土坑，第21号土坑遺物出土状況，第21号土坑，グリッド遺物出土状況

PL 23 作業風景

PL 24 グリッド出土土器・土製品

PL 25 石器(1)

PL 26 石器(2)

PL 27 出土剝片・鉄製品

PL 28 グリッド出土陶器

中新田A遺跡

PL 29 調査前全景，グリッド試掘終了全景

PL 30 作業風景

PL 31 グリッド出土土器(1)

PL 32 グリッド出土土器(2)

中新田Ｂ遺跡

ＰＬ　33　調査前全景，東西土層セクション，調査後全景

中新田Ｃ遺跡

ＰＬ　34　調査前全景，グリッド試掘終了全景
ＰＬ　35　第１号溝，第２号溝

上片田Ａ遺跡

ＰＬ　36　調査前全景，東西土層セクション，調査後全景

上片田Ｂ遺跡

ＰＬ　37　調査前全景，調査グリッド試掘終了全景
ＰＬ　38　遺構確認状況，第１号土坑，第１号溝
ＰＬ　39　出土土器，石器・鉄製品

上片田Ｃ遺跡

ＰＬ　40　上片田Ｃ遺跡全景（航空写真）
ＰＬ　41　調査前全景，グリッド試掘終了全景
ＰＬ　42　作業風景，遺構確認状況
ＰＬ　43　第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡
ＰＬ　44　作業風景，第１号住居跡遺物出土状況，現地説明会
ＰＬ　45　第２号住居跡遺物出土状況，第２号住居跡
ＰＬ　46　第１号土坑土層セクション，第２・３・４・５・６号土坑
ＰＬ　47　第７・８・９・10・11・12号土坑
ＰＬ　48　第13・14・15・16・17・18号土坑
ＰＬ　49　第１・２・３・４・５・６号溝
ＰＬ　50　第７・８・９・10号溝，第１号井戸，遺跡全景
ＰＬ　51　第１・２号住居跡・井戸状遺構・グリッド出土土器
ＰＬ　52　第１号住居跡出土土器(1)
ＰＬ　53　第１号住居跡出土土器(2)
ＰＬ　54　第１号住居跡出土土器(3)
ＰＬ　55　第１号住居跡出土土器(4)
ＰＬ　56　第２号住居跡出土土器(1)
ＰＬ　57　第２号住居跡出土土器(2)，グリッド出土土器(1)
ＰＬ　58　グリッド出土土器(2)
ＰＬ　59　グリッド出土土器(3)
ＰＬ　60　石器(1)
ＰＬ　61　石器(2)
ＰＬ　62　石器・樹木(3)

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

一般国道4号は通称奥州街道とも呼ばれ，本土を縦貫する幹線道路である。全延長は791.5㎞のわが国で最長の路線であり，東京都中央区日本橋を起点とし，埼玉・茨城・栃木・福島・宮城・岩手を縦断し青森市に至っている。

近年の産業・経済の発展，人口の集中等から，本国道の交通量の増加は著しいものがある。建設省宇都宮国道工事事務所管内には，古河・小山・宇都宮等の各市街地が広がり，現国道の拡張は極めて困難である。

そこで建設省は，交通量の増加に対応するとともに将来にわたる交通量の緩和をはかるため，昭和40年に調査を開始し，昭和44年に「新4号国道改築事業」の計画を提示した。新4号国道改築事業は埼玉県越谷市と栃木県宇都宮市を結ぶ約82㎞で，そのうち茨城県の総延長は21.35㎞あり，南から五霞村・境町・総和町・三和町・結城市を通過する予定である。

これに伴い，同年，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に，当該路線上の埋蔵文化財の有無，その位置，その取り扱いについての照会がなされた。茨城県教育委員会では直ちに分布調査を実施し，総和町に12遺跡(内1遺跡は境町にもかかる)，三和町に12遺跡，結城市に3遺跡，計27遺跡を確認した。(第1図)

昭和57年8月から総和地区の発掘調査が開始され，12遺跡のうち11遺跡を昭和59年3月までにほぼ終了した。

三和地区については，昭和59年1月17日，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に，新4号国道改築事業の施工に係る三和地区の埋蔵文化財の確認調査及び遺跡の取り扱いについて照会がなされた。茨城県教育委員会では再度分布調査を行い，同年，三和地区の二十五里寺A遺跡ほか11遺跡（S 12～S 14・S 16・S 18～S 24）を埋蔵文化財包蔵地（二十五里寺D遺跡は，茨城県教育委員会が試掘調査を行い，遺構・遺物が検出されないため調査対象外とした。)として，発掘調査による記録保存の措置を講ずるよう回答するとともに，調査機関として茨城県教育財団を紹介し，同年3月16日，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育財団に発掘調査の依頼があり，以後両者間で協議を重ね，昭和59年4月11日委託契約を結んだ。こうして当財団による，新4号国道関係遺跡の三和地区における発掘調査は昭和59年4月から実施されることになった。

なお，新4号国道路線上の27遺跡の略号については，路線の走る南から北に向かって，第1図のように記号を付した。

第2節　調査経過

新4号国道地内に所在する各遺跡の調査経過については第5章以下で記すことにして，ここでは昭和59年度以降の，調査経過の概略を年度ごとに記述する。

昭和59年度

昭和59年4月からは，三和地区の二十五里寺A・B・C遺跡，溜原A遺跡の調査を進めた。これらの遺跡は遺構・遺物が少なかったため，昭和59年9月末日で調査を終了し，10月からは昭和57年～昭和59年の3か年間に調査をした15遺跡（総和町10遺跡，三和町4遺跡，結城市1遺跡）の整理を行った。

昭和60年度

当年度は，総和地区の北新田A遺跡のうち用地問題のため未調査であった500㎡，溜原B遺跡，三和地区の下片田遺跡を1年間の予定で調査したが，溜原B遺跡と下片田遺跡は，遺構・遺物が少なかったため9月末日で調査を終了した。溜原B遺跡の調査をもって，総和地区の新4号国道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査はすべて終了した。その後は，契約を変更し，10月から昭和61年3月までの予定で結城地区の善長寺遺跡の調査に入った。善長寺遺跡は多くの竪穴住居跡が検出されたため，昭和61年4月以降も調査を継続することになった。

昭和61年度

4月から8月まで前年度からの善長寺遺跡を調査し，9月から小田林遺跡の調査を実施した。なお，善長寺遺跡と前年度調査した下片田・溜原B遺跡の整理を後半に行った。

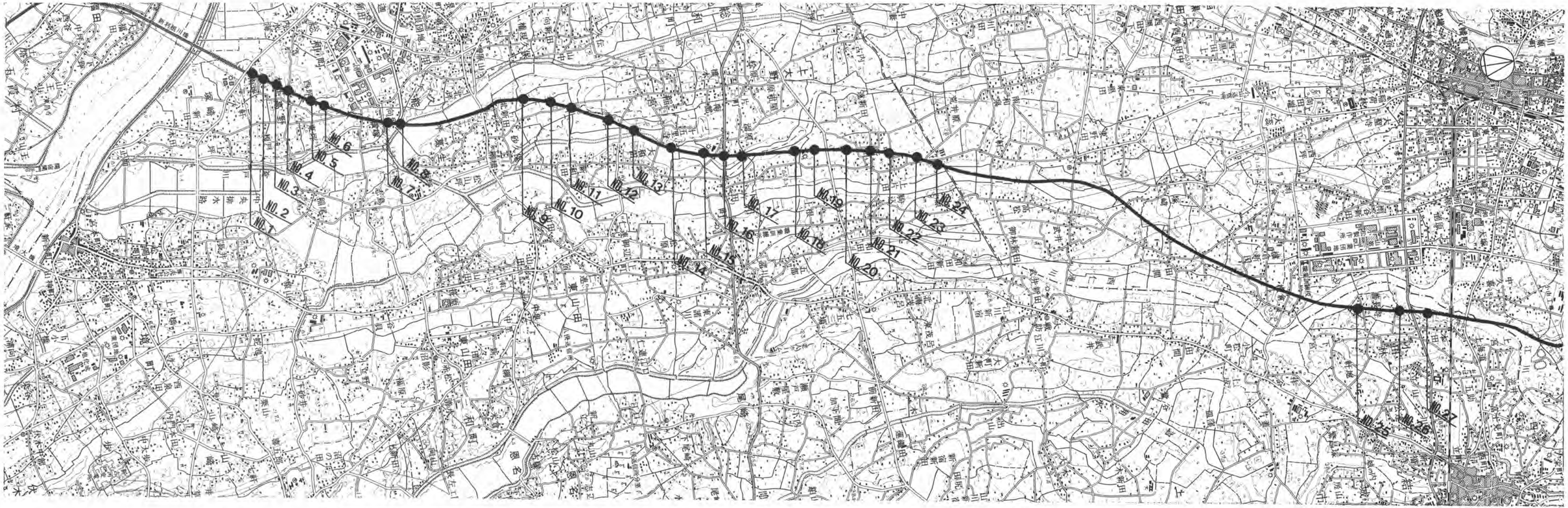
昭和62年度

4月以降も，引き続いて前年度からの小田林遺跡の調査を実施し，10月末日に終了した。

11月から中新田A遺跡の遺構調査と上片田C遺跡と中新田C遺跡の試掘・遺構確認調査を実施した。中新田A遺跡は同年3月末日で終了した。

昭和63年度

4月以降も，引き続いて前年度からの中新田C・上片田C遺跡の継続調査と，中新田B・上片田B遺跡の調査を含めて当初1年間の予定で調査を開始したが，中途において，遺構・遺物が少ないため，調査日程の大幅な短縮が予想された。同年6月22日，建設省宇都宮国道工事事務所と茨城県教育委員会，茨城県教育財団との三者協議において，来年度調査予定の上片田A遺跡（調査面積10,400㎡）を今年度の調査遺跡に加えることで合意し，5遺跡の調査を実施することになった。これらの5遺跡は遺構・遺物が薄いため，調査期間が予定より半年間短縮され昭和63年9月末日に調査が終了した。茨城県における「新4号国道」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，昭和57年4月，結城地区の本田遺跡の調査に始まり，昭和63年9月末日，三和地区の上片田A



No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺遺名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名
1	S1	南坪A遺跡	6	S6	西坪B遺跡	11	S11	北新田C遺跡	16	S16	溜原A遺跡	21	S21	中新田C遺跡	26	S26	小田林遺跡
2	S2	南坪B遺跡	7	S7	向坪A遺跡	12	S12	二十五里寺A遺跡	17	S17	溜原B遺跡	22	S22	上片田A遺跡	27	S27	本田遺跡
3	S3	南坪C遺跡	8	S8	向坪B遺跡	13	S13	二十五里寺B遺跡	18	S18	下片田遺跡	23	S23	上片田B遺跡			
4	S4	高野遺跡	9	S9	北新田A遺跡	14	S14	二十五里寺C遺跡	19	S19	中新田A遺跡	24	S24	上片田C遺跡			
5	S5	西坪A遺跡	10	S10	北新田B遺跡	15	S15	二十五里寺D遺跡	20	S20	中新田B遺跡	25	S25	善長寺遺跡			

0 1 2 km

第1図　茨城県内新4号国道関係遺跡分布図

遺跡の調査をもってすべての調査を終了した。

なお，各遺跡の調査面積，期間，担当者は次のとおりである。

略　号	遺　跡　名	面　積	調　査　期　間	担　当　者
S　12	二十五里寺A遺跡	9,600 m²	昭和59.4.1～59.9.30	中沢時宗・桜井一美
S　13	二十五里寺B遺跡	6,900 m²	昭和59.4.1～59.9.30	中沢時宗・桜井一美
S　14	二十五里寺C遺跡	1,100 m²	昭和59.4.1～59.9.30	中沢時宗・桜井一美
S　16	溜原A遺跡	3,400 m²	昭和59.4.1～59.9.30	中沢時宗・桜井一美
S　18	下片田遺跡	17,600 m²	昭和60.7.1～60.9.30	和田雄次・桜井一美
S　19	中新田A遺跡	7,891 m²	昭和62.11.1～63.3.31	久野俊度・桜井一美
S　20	中新田B遺跡	6,200 m²	昭和63.4.1～63.9.30	久野俊度・小松崎猛彦
S　21	中新田C遺跡	8,400 m²	昭和63.2.1～63.3.31	久野俊度・桜井一美
			昭和63.4.1～63.4.30	久野俊度・小松崎猛彦
S　22	上片田A遺跡	10,200 m²	昭和63.8.1～63.9.30	久野俊度・小松崎猛彦
S　23	上片田B遺跡	6,200 m²	昭和63.4.1～63.9.30	久野俊度・小松崎猛彦
S　24	上片田C遺跡	5,400 m²	昭和63.1.1～63.3.31	久野俊度・桜井一美
			昭和63.7.1～63.9.30	久野俊度・小松崎猛彦

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

三和町は茨城県の南西部に位置し，東は八千代町，西は総和町，南は猿島町，境町，北は結城市，栃木県小山市に隣接している。町域は東西約６km，南北約11kmの南北に長い地形で，面積50.16km²，人口26,712人を有している。地域内は比較的平坦な台地と狭小な低地からなり，台地は山林や畑地として利用されており，京浜地方に出荷するための野菜栽培が盛んである。しかし，近年になって東京都心から60kmという近距離のため，都市化，工業化の波を受け，農地の宅地転用，兼業農家の増加が見られる。さらに新４号国道の開発促進が，いっそう農村部の産業，経済，生活等に変化をもたらしつつある。

当町及びその周辺は，飯沼川と旧長井戸沼の支流に沿って形成された狭小な沖積低地と，猿島台地の洪積地とから成っている。猿島台地は，利根川と飯沼川の間にあり北西から南東方向へ延びており，関東構造盆地の中心部に近い古河市で標高15～16ｍで南東に向かってしだいに高くなる平均標高20ｍ前後の台地である。この台地は，数多い利根川水系の侵食作用によりいたるところに沖積低地が形成されて複雑な地形をしているが，南縁部は台地と低地との区別がしがたく，標高13～15ｍの利根川低地へと緩やかに傾斜している。当町の沖積低地は，利根川の氾濫期に侵食谷の合流付近を土砂によって閉塞され数多く形成された沼の周辺に位置し，後に，近世から近代にかけ干拓開発事業が行われ，穀倉地帯となったところである。

なお，当町の東側には飯沼川を挟んで結城台地が対峙し，更に，猿島台地の北には，それに連なるように栃木県宇都宮付近より宇都宮西台地が北方より垂下して来ている。

新４号国道は，総和町の稲宮地区の南部から三和町大和田地区の西部にはいり，下片田地区をへて，上片田地区の北部に達する。それはほぼ当町の西部を縦断するように南南西から北北東に向かって，栃木県小山市の南へと延びている。新４号国道の計画線上にある各遺跡は，三和町の大和田地区・下片田地区・上片田地区の台地上に所在する遺跡である。遺跡の存在する台地は，標高20～25ｍの北から南へ向かって緩やかに傾斜をしながら旧長井戸沼へ半島状に延びている。その台地の西側に宮戸川，東側に大川がそれぞれ南流し旧長井戸沼で合流している。大川から台地中央部に支谷が樹枝状に入り込んでいる。各地区は，畑地と山林が混在しており各地区の東部・西部をほぼ南北に貫いた大川水系の谷を中心に水田が形成され，台地上の平坦部分に集落が分布している。縁辺部は緩斜面で水田との比高は２～３ｍである。

ここで調査遺跡を南から北へたどってみると，三和町大和田地区から西へ500ｍの地点に総和町に隣接して二十五里寺Ａ遺跡，二十五里寺Ｂ遺跡が存在する。両遺跡は大川から入り込んだ支

谷によって開析された台地の縁辺部に広がり，東側の水田に向かってわずかに傾斜している。水田との比高は2～3mで標高18～20mである。二十五里寺B遺跡の約1.1km北方には大川の支流によって開析された，沖積地の間を北から南に向かって緩やかに傾斜しながら伸びる狭小な半島状の台地がある。この台地の南端から約200m北に寄った地点に二十五里寺C遺跡が所在する。この北方約250mを東西に国道125号線が走り，その南側に溜原A遺跡が接している。国道の北側は総和町の一部で溜原B遺跡が所在している。

第2節　歴史的環境

猿島台地の北西部に位置する三和町・総和町には，先土器時代から歴史時代にかけての遺跡が数多く分布しているが，現在までのところ発掘調査事例は極めて少ない。しかし，新4号国道バイパス建設に伴う発掘調査を実施している遺跡も多数あり，わずかながら原始古代のようすが明らかになりつつある。

この地域での先土器時代の遺跡としては，二十五里寺遺跡（二十五里寺C遺跡）から採土工事中にナイフ形石器が採集されたことが報告されている[(1)]。したがって，この地域にも先土器時代から人々が生活していたことがうかがえる。

縄文時代の遺跡は比較的少ないが，中期から晩期までの遺跡が確認されている。縄文時代中期に編年される遺跡としては，前述の二十五里寺C遺跡〈S 14〉がある。この遺跡は大川の支流によって開析された沖積地を東・西・南の三方に臨む北から南に緩やかに傾斜しながら伸びる半島状の台地上に位置し採土工事中に加曽利E式土器が出土している。後期から晩期の遺跡としては，同じく二十五里寺C遺跡があげられ，やはり採土工事中に注口形土器をはじめ，独鈷石，石剣，土偶，土製耳飾，有孔土製円盤，土版等がさらに採集されている。そのほか宮戸川の縁辺台地上に所在し後期に編年される古内遺跡や飯沼川を西に望む結城台地縁辺部に位置する恩名観音面遺跡（40）があり，茨城県史料によると加曽利B式・安行Ⅲa式の土器が出土していると報告されている。

弥生時代の遺跡では，飯沼川の西側台地上に所在する西のうせん山遺跡や，東側に飯沼川を望む猿島台地の縁辺部に位置する五十塚金糞遺跡〈25〉があげられる。西のうせん山遺跡は，昭和32年に調査され，竪穴住居跡2軒の検出と，木炭・灰・弥生式土器が出土したと報告[(6)]されている。また，五十塚金糞遺跡は，弥生式土器に混って金糞が出土したと報告[(7)]されている。

古墳時代になると，遺跡も増加する。飯沼川に面する東縁辺部台地上の五十塚古墳群[(8)]〈24〉は22基の円墳からなり埴輪・直刀が出土した。三和町北方の台地上で東の飯沼川へ急傾斜する縁辺部近くには遠官台古墳群[(9)]〈10〉があり，10基の古墳は円墳で，発掘調査をした1基から小口積の竪穴式石室から直刀が出土した。昭和57年度に茨城県教育財団が発掘調査した向坪B遺跡[(10)]は，

総和町の南東部標高16mの台地で，東に宮戸川を望む台地縁辺部に位置し，和泉期の住居跡から祭祀用と思われる子持勾玉を含む石製模造品が出土した。つづいて昭和58年度に茨城県教育財団が発掘調査した北新田A遺跡[11]からは古墳時代五領期から奈良・平安にかけての集落跡が検出された。

その後，当地方には脇街道として結城街道が栄えるが諸将の争奪地でもあり，各地に城が築かれた。その名残りを諸川西門(もろかわにしもん)城跡〈19〉・柳橋(やぎはし)城跡〈16〉・関根豪族屋敷(せきねごうぞく)跡〈22〉などの中世の城館跡に見ることができる。

以上のように，三和町及びその周辺の台地には，原始・古代・中世にわたる遺跡が多く点在し生活が営まれてきたことがうかがえる。

※文中の〈　〉の中の番号は，第2図中の該当番号を表す。

参考文献

(1)・(2)・(3)　田川良・道沢明　「茨城県猿島郡三和町二十五里寺遺跡の研究」(「なわ」14)　昭和50年

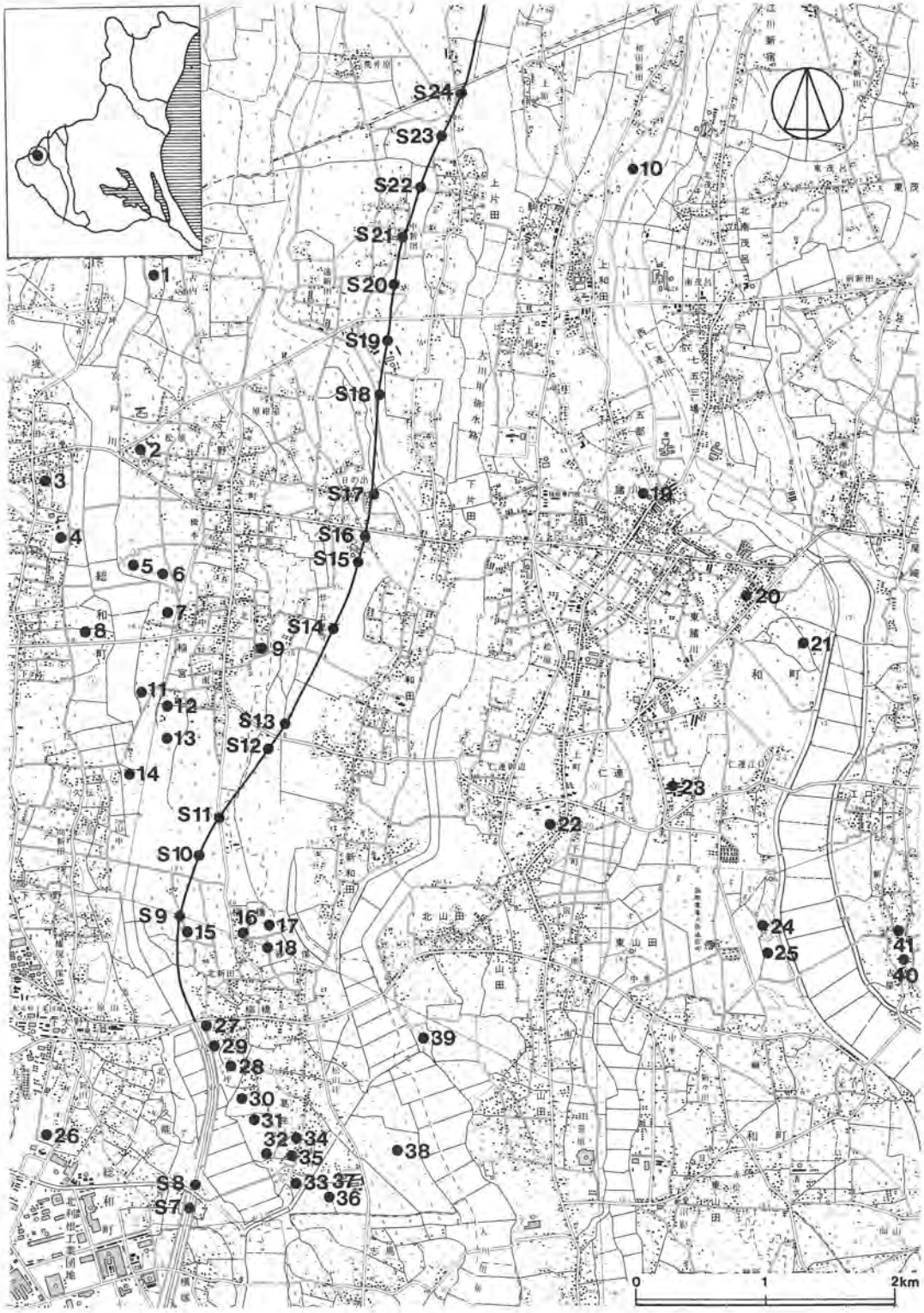
(4)　『茨城県史料考古資料編先土器・縄文時代』　茨城県　昭和54年

(5)・(6)・(8)・(9)　今井隆助　『猿島の郷土史』　渓水社　昭和40年

(7)　中村俊夫　『三和の郷土史』　八千代印刷　昭和52年

(10)　『年報2』　財団法人　茨城県教育財団　昭和57年度

(11)　『年報3』　財団法人　茨城県教育財団　昭和58年度



第２図　新４号国道周辺の遺跡分布図

表１　遺跡一覧表

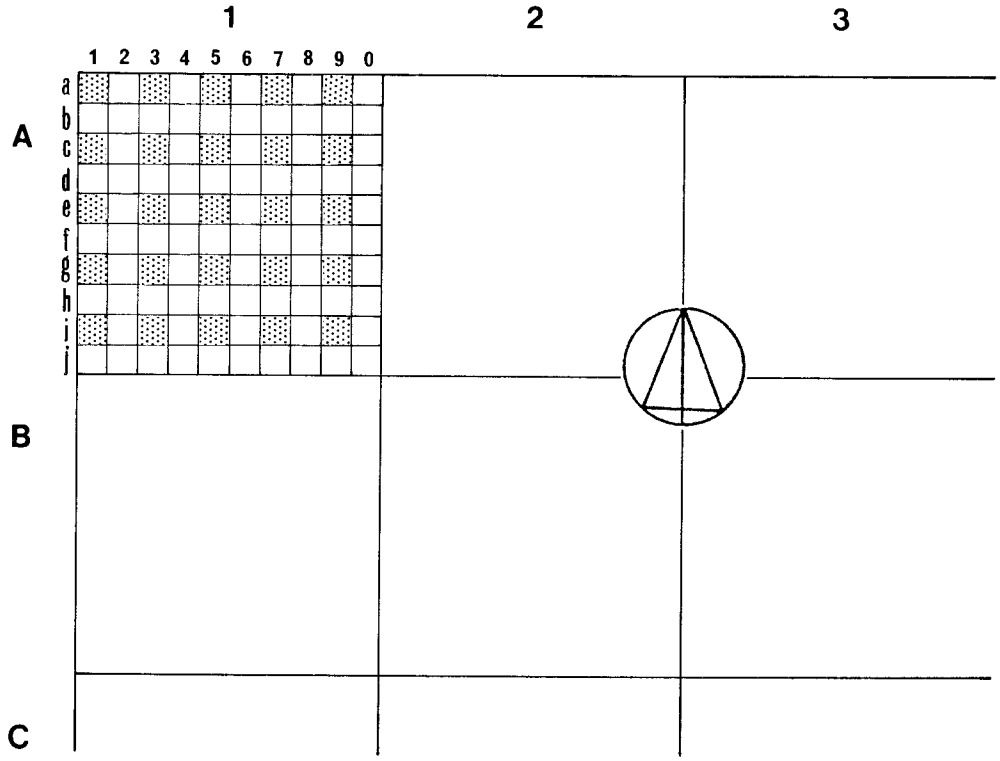
番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
S 7	向坪A遺跡	〃					
S 8	向坪B遺跡	〃				○	
S 9	北新田A遺跡	〃				○	
S 10	北新田B遺跡	〃				○	
S 11	北新田C遺跡	〃				○	
S 12	二十五里寺A遺跡	〃		○		○	
S 13	二十五里寺B遺跡	〃		○		○	
S 14	二十五里寺C遺跡	集落跡		○		○	
S 15	二十五里寺D遺跡	包蔵地					
S 16	溜原A遺跡	〃		○		○	
S 17	溜原B遺跡	〃					
S 18	下片田遺跡	〃					
S 19	中新田A遺跡	〃					
S 20	中新田B遺跡	〃					
S 21	中新田C遺跡	〃					
S 22	上片田A遺跡	〃					
S 23	上片田B遺跡	〃					
S 24	上片田C遺跡	集落跡		○			
1	古内遺跡	包蔵地		○			
2	地蔵堂遺跡	〃		○		○	
3	旧円満寺遺跡	寺院跡					○
4	金糞B遺跡	製鉄跡					
5	本田山古墳群	古墳群				○	
6	本田山B遺跡	製鉄跡					○
7	北久保遺跡	包蔵地				○	
8	蔵三遺跡	〃					○
9	東小路遺跡	製鉄跡					○
10	遠宮台古墳群	古墳群				○	
11	神辺遺跡	包蔵地				○	
12	高草遺跡	包蔵地				○	
13	高草前古墳群	古墳群				○	
14	赤上遺跡	包蔵地				○	
15	香取前遺跡	〃				○	
16	柳橋城跡	城館跡					○
17	弁才天A遺跡	包蔵地				○	
18	弁才天B遺跡	〃					○
19	諸川西門城跡	城館跡					○
20	土手宇遺跡	〃					○
21	大塚古墳群	古墳群				○	
22	関根豪族屋敷跡	城館跡					○
23	西のうせん山遺跡	包蔵地			○		
24	五十塚古墳群	古墳群				○	
25	五十塚金糞遺跡	包蔵地			○		
26	西原遺跡	〃			○		
27	萩山A遺跡	〃			○	○	
28	萩山B遺跡	〃				○	○
29	萩山C遺跡	製鉄跡					○
30	鍋穏遺跡	包蔵地				○	
31	安戸井遺跡	〃				○	
32	磯ノ木A遺跡	〃				○	
33	二階木B遺跡	〃				○	
34	磯ノ木C遺跡	製鉄跡					○
35	磯ノ木B遺跡	包蔵地				○	
36	二階木A遺跡	〃				○	
37	二階木C遺跡	〃				○	
38	杉の木遺跡	〃				○	
39	東の門西の門城跡	城館跡					○
40	恩名観音面遺跡	包蔵地		○	○		
41	恩名遺跡	〃		○			

第３章　調査方法

第１節　地区設定

各遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系を基にして，100 mごとのＸ軸，Ｙ軸の交点を遺跡内に求め，それを基準点とした。その交点が遺跡内にない場合は，遺跡に最も近い交点を起点とし，そこから 40 mの倍数で遺跡内まで平行移動し，基準点とした。基準点から座標北で 40 m方眼の大調査区を設定した。さらに大調査区を４m方眼の小調査区に分割した。つまり，４m方眼の小調査区を 100 個設定したわけである。

大調査区の名称は，北から南へ大文字で，「Ａ」・「Ｂ」・「Ｃ」……とし，西から東へ大文字で，「１」・「２」・「３」……とし，Ａ１区，Ｂ２区等と表記した。小調査区の名称は，北から南へ小文字で，「ａ」・「ｂ」・「ｃ」……「ｉ」・「ｊ」とし，西から東へ小文字で，「１」・「２」・「３」……「９」・「０」とし，大調査区と合せて「Ａ１a_1」・「Ｂ２b_2」区のように表記した。この小調査区をグリッドと呼称した。



第３図　グリッド概念図

第2節　遺構確認

遺構の確認作業は，第3図のように，全調査区の4分の1の割合で，人力によるグリッドの表土を除去するという方法で行うことを基本としたが，単一年度内における調査遺跡数が多いことや，調査計画策定上遺構の有無を早く確認する必要から，重機と人力の併用を行った遺跡もある。検出される遺構が薄いと判断された場合には，遺構の確認状況に応じて，周囲のグリッドを拡張し遺構を確認した。遺構の分布が濃密な場合は，土層を観察し，遺構・遺物を破壊しないと考えられる層まで，重機によって全域を表土除去し，その後に遺構確認を行った。表土からの出土遺物は，出土したグリッド名，層位，年月日を記録して取り上げた。

第3節　遺構調査

各遺構の調査については次のような方法を用いた。

住居跡の調査は，長径方向とそれに直交する方向に，土層観察用ベルトを設け，1～4区に分割して掘り込む4分割法で実施し，地区の名称は北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は，長径で二分する二分割法で調査をし，井戸の調査は土坑の調査に準じた。溝の調査は，適宜な位置に土層観察用のベルトを設定し，掘り込んだ。

土層については，土質，色相，各種粒子の含有状態，粘性，硬さ，締まり，吸水性，混入物等と堆積状況を観察して，土層断面図を作成した。

遺物の取り上げについては，各遺構の遺物出土状況図を作成し，地区名，出土位置，遺物番号，レベル，年月日等を記録して取り上げた。

平面実測については，グリッド設定の基準線をもとにした水糸方眼地張測量で行った。土層断面，遺構断面の実測は，標高を用いて水糸を水平にセットし，水糸を基準として実測した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順を基本とした。図面，写真等に記録できない事項については，調査日誌や遺構カードに記録した。

第４章　遺構・遺物の記載方法

第１節　遺構の記載方法

本書における遺構等の記載方法は，下記の要領で統一した。

1　使用記号

竪穴住居跡－ＳＩ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　井戸－ＳＥ　ピット－Ｐ

樹木－Ｗ　土器－Ｐ　土製品－ＤＰ　拓本土器－ＴＰ　鉄－Ｍ　石器－Ｑ

2　遺構に伴う施設等の表示方法

焼土　　炉

3　土層の分類

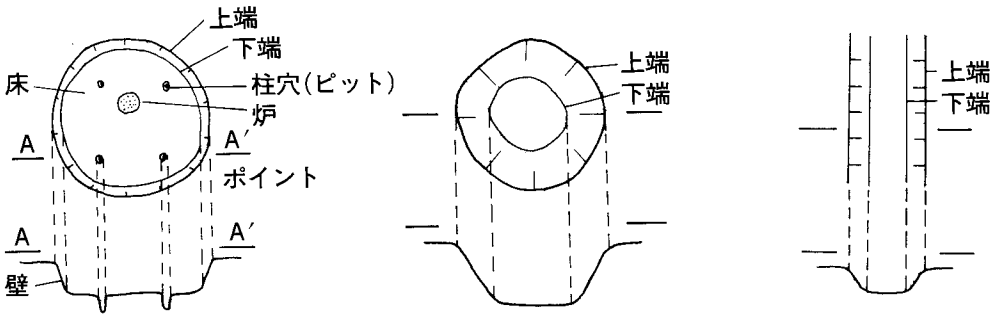
土層観察は，『新版標準土色帖』（小山忠正・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し，整理の段階で土層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって載せた。

番号	土色名	色　相　　明度/彩度	含有物
1	黒色	Hue 7.5YR 2/1 1.7/1	a・ 黒色土粒子多量
2	黒褐色	Hue 7.5YR 3/1 3/2 3/2 2/3	a 黒色土粒子中量
3	極暗褐色	Hue 7.5YR 2/3	a′ 黒色土粒子少量
4	暗褐色	Hue 7.5YR 3/3 3/4	a″ 黒色土粒子極少量
5	褐色	Hue 7.5YR 3/2 4/3 4/4 4/6 5/6	b・ 焼土粒子多量
6	にぶい褐色	Hue 7.5YR 5/3 5/4	b 焼土粒子中量
7	灰褐色	Hue 7.5YR 4/2	b′ 焼土粒子少量
8	にぶい赤褐色	Hue 7.5YR 4/4	b″ 焼土粒子極少量
9	明褐色	Hue 7.5YR 5/6 5/8	c 焼土ブロック
10	橙色	Hue 7.5YR 6/6	d・ 炭化粒子多量
11	にぶい黄橙色	Hue 10YR 6/4	d 炭化粒子中量
12	褐灰色	Hue 10YR 4/1	d′ 炭化粒子少量
			d″ 炭化粒子極少量
			e 炭化物
			f・ ローム粒子多量
			f ローム粒子中量
			f′ ローム粒子少量
			f″ ローム粒子極少量
			g・ ロームブロック多量

			g　ロームブロック中量 g′　ロームブロック少量 g″　ロームブロック極少量 h　ソフトローム i　ソフトロームブロック j’　ハードブロック多量 j　ハードブロック中量 k　カクラン l　腐葉土 m　粘土ブロック n　砂

4　遺構実測図と作成方法

(1)　住居跡　　(2)　土坑　　(3)　溝



○　住居跡は，縮尺 20 分の 1 の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，3 分の 1・4 分の 1 に縮小して掲載した。

○　土坑は，縮尺 20 分の 1 の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，3 分の 1 に縮小して掲載した。

○　溝は，縮尺 20 分の 1 の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，3 分の 1・4 分の 1 に縮小して掲載した。

5　一覧表の見方について

(1)　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)							

○　位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○　主軸方向は，座標北と長径のなす角度で示した。

○　平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

○　規模の長径×短径は上面の計測値，壁高は残存壁高の計測値を記した。

○　床面は，「平坦」，「凹凸」，「緩い起伏」に分類して記した。

○　柱穴数は，その住居跡に伴うと考えられる柱穴数を記した。

○　炉は，その種別を記し，検出されない住居跡については無とした。

○　覆土は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」，撹乱を受けている場合は「撹乱」と記した。

○　出土遺物は，主な遺物名や出土量を記した。

○　時期は，出土遺物から時期判定の可能な範囲で，土器型式によって記した。

○　備考は，重複関係等について記した。

(2)土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					

○　壁面は，底面からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

○　坑底は，「平坦」，「椀状」，「皿状」，「凹凸」というように表記した。

○　その他の欄は，住居跡一覧表の項目に準じた。

第2節　遺物の記載方法

1　実測図の作成方法と掲載方法

(1)作成方法

○　土器は，四分割法を用い，中心線の左側に外面，右側に内面及び断面を図示した。

○　石器・石製品は，展開図法を基本とした。

○　上記以外の遺物については，効果的と思われる方法で実施した。

(2)掲載方法

○　実測図の掲載にあたっては，縮尺2分の1，3分の1を基本としたが，遺物の大きさによって原寸で掲載した。

○　土器拓影図は，右側に断面を載せ，表裏2面を掲載したものは，断面を挟んで左側に表面，右側に裏面を掲載した。縮尺3分の1を基本としたが，遺物の大きさによっては原寸で掲載した。

○　胎土に繊維が含まれる土器については，断面中にドットを落として示した。

○　石器実測図中における使用痕は，次のように表した。敲きの範囲は，←□□→および◌で，磨りの範囲は，←○○→および◌で，凹みの範囲は破線で◌，砥石の使用範囲は←で，それぞれ表した。

○　遺物に付した番号は，土器，土製品，石器ごとに通し番号をつけ，遺構実測図，写真，図版及び一覧表の備考欄に表した。

2　出土遺物観察表について

遺構ごとの遺物を，次のような表にまとめた。

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　　考

○　番号は,実測図中の番号と同じものである。

○　法量は，口径－A，器高－B，底径－C，単位はcmである。なお，(　)は推定値で，〔　〕は現存高である。

○　胎土・色調・焼成の欄は，上から胎土・色調・焼成の順で記した。色調については，前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については，良好，普通，不良に3分類し，焼き締って硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剝落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。

○　備考は，完存率や付着物，その他必要と思われる事項を記した。

○　なお，この表で解説できない遺物については，文章で解説した。

○　法量は，それぞれの最大値を記し，(　)をつけた数値は，一部を欠損しているものの現存高である。

出土土器拓影図解説表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備考

第５章　遺跡の調査結果

第１節　二十五里寺Ａ遺跡

１　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町大字大和田字三峰原 2,138-1 ほかに所在し，調査対象面積は，9,600 m² である。現況は，畑と一部山林である。三和町の西端にあたり，三和町大和田地区から総和町稲宮南地区に通じる道路の南側で，大和田集落の西約 750 mに位置している。 遺跡は，宮戸川左岸の台地の東縁辺部で，台地の東端を南流する大川の支流によって開析された水田に面して，西から東に緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。標高約 18.5～20 mで，水田との比高は 2～3.5 mほどである。当遺跡の北側には，二十五里寺Ｂ遺跡が大和田地区から稲宮地区に通じる道路をはさんで隣接し，南西約 600 mに北新田Ｃ遺跡が所在している。当遺跡の調査から，溝１条と井戸状遺構１基を検出したが，時期，性格は不明である。遺物は井戸状遺構から古墳時代鬼高期に比定される甕・壷・埦の土師式土器と木片数点が出土した。

２　調査経過

〈昭和 59 年度〉

５月前半　　調査の諸準備を整え，14 日から当遺跡の調査を開始した。上物除去及び草刈り作業後調査前全景の遺跡写真撮影を実施した。Ｘ軸＋20,420 m，Ｙ軸－4,000 mの交点を基準として方眼杭打ちを行い，調査区を設定した。

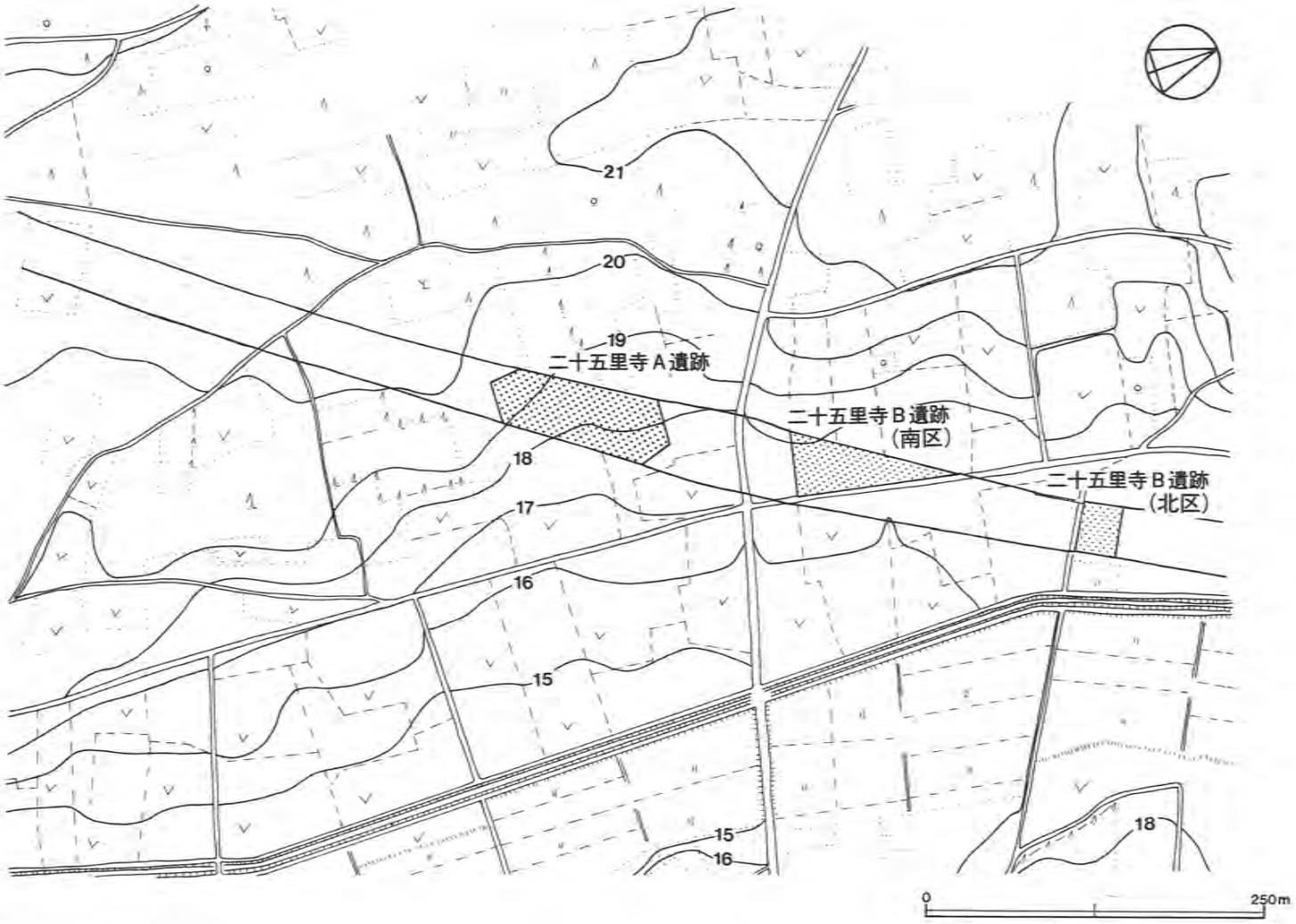
５月後半　　４分の１の割合で，遺跡の南側Ｄ１区から北に向かってグリッド発掘を実施した。縄文式土器片が数片出土した。

　　続いてグリッド発掘を実施したが，遺跡の中央部は凹地となり，確認面まで 60～100 cmと深く粘土質で作業もあまり進まなかった。

６月前半　　Ａ２区のグリッドから焼土・炭化物を含む落ち込みと，Ｂ３区上部からＡ２区下部にかけて溝状遺構を確認した。調査後の全景写真撮影を行い８分の１発掘調査を終了した。15 日より二十五里寺Ｂ遺跡の調査に移った。

８月後半　　二十五里寺Ｃ遺跡・溜原Ａ遺跡の調査が，残り少なくなったため，17 日から草刈りとその焼却作業をした。続いて重機を導入して，残り８分の１のグリッド発掘と遺跡の東西・南北に土層観察用トレンチ発掘を行った。

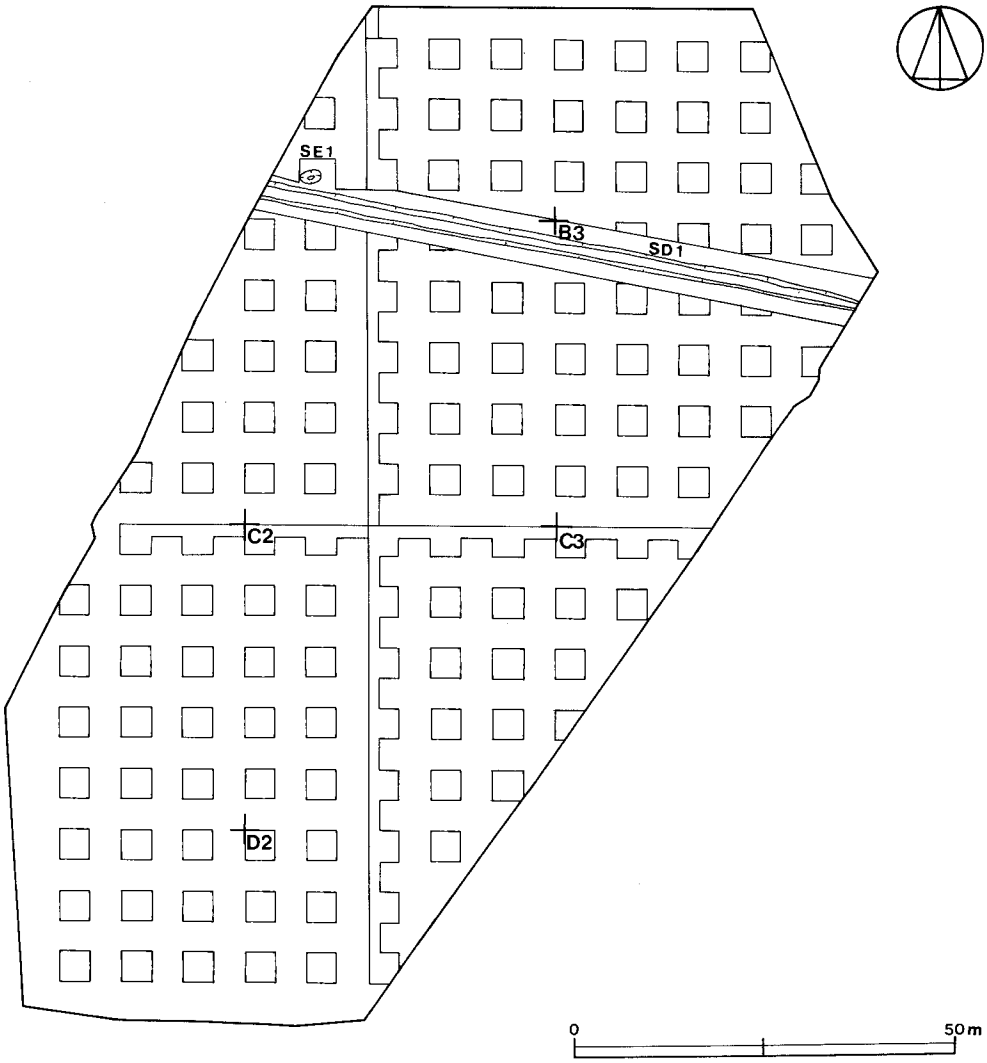
９月前半　　重機によるグリッド発掘終了後，慎重に遺構確認作業をしたが，新たな遺構



第4図　二十五里寺A遺跡地形図

は確認できなかった。

9月後半　　6月前半に遺構が確認されたグリッドを中心にして拡張した後，大調査区B2・B5区にわたって直線的に走っている溝1条と，A2h3調査区の井戸状遺構1基を確認した。井戸から木片数点，土師式土器2個体分が出土した。調査後の遺跡全景撮影を行い調査地域内の全ての調査を完了した。



第5図　二十五里寺A遺跡全体図

3　遺構・遺物

当遺跡から溝１条，井戸状遺構１基が検出された。

(1)　溝

第１号溝（第６図）

本跡は，大調査区Ｂ２・Ｂ３区に確認されたもので，西北西から東南東へ遺跡を横断するように延びている。Ｂ３a_2調査区に検出された溝の北西部の主輔方向は，N—79°—Wを指し，東南東方向へ直線的に延び，さらに東側の低地へ向かっている。検出した溝の全長は約78ｍである。

溝の上幅は1.5～２ｍ，下幅は0.5～１ｍである。遺構確認面から溝底面までの深さは40～55㎝で中央部付近がやや深い。溝底面のレベル差は，西北西部が東南東部より約30㎝高い。断面形は「⌊」形を呈しており，壁，底面ともハードロームで硬い。溝内の覆土は４層にわかれており，自然堆積の状況を示している。全層にローム粒子やロームブロックを含み，上層は暗褐色土，下層は黒褐色土が堆積している。溝から遺物は出土していない。

(2)　井戸状遺構

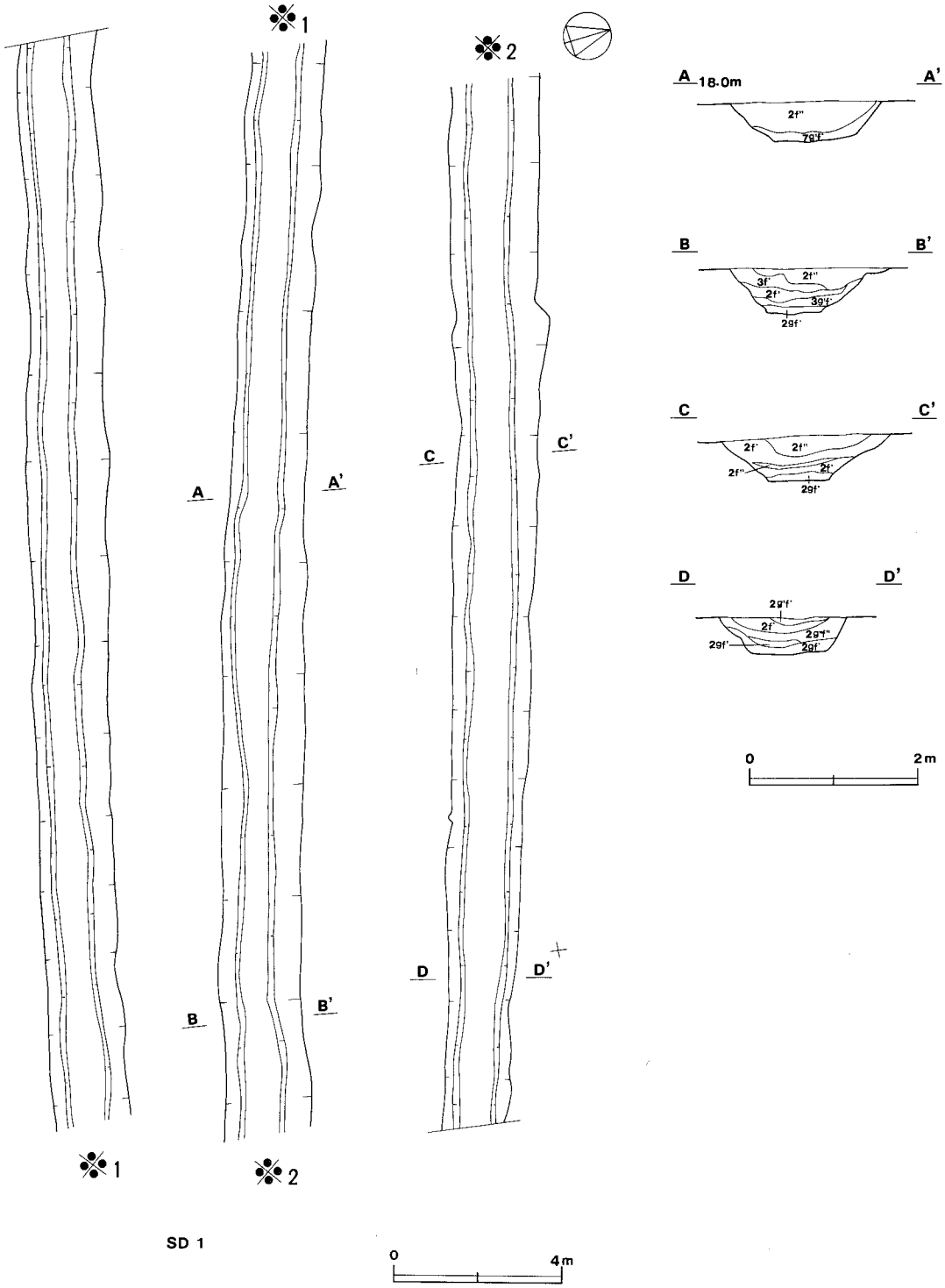
第１号井戸状遺構（第７図）

本跡は，Ａ２h_3調査区を中心に確認されたもので，遺跡の北西端に位置し，本跡の南側３ｍに第１号溝が接近している。本跡の掘り方は，上縁で長径2.42ｍ・短径2.0ｍで，平面形は楕円形状を呈し，深さは1.60ｍであり，長径方向はN—66°—Eである。

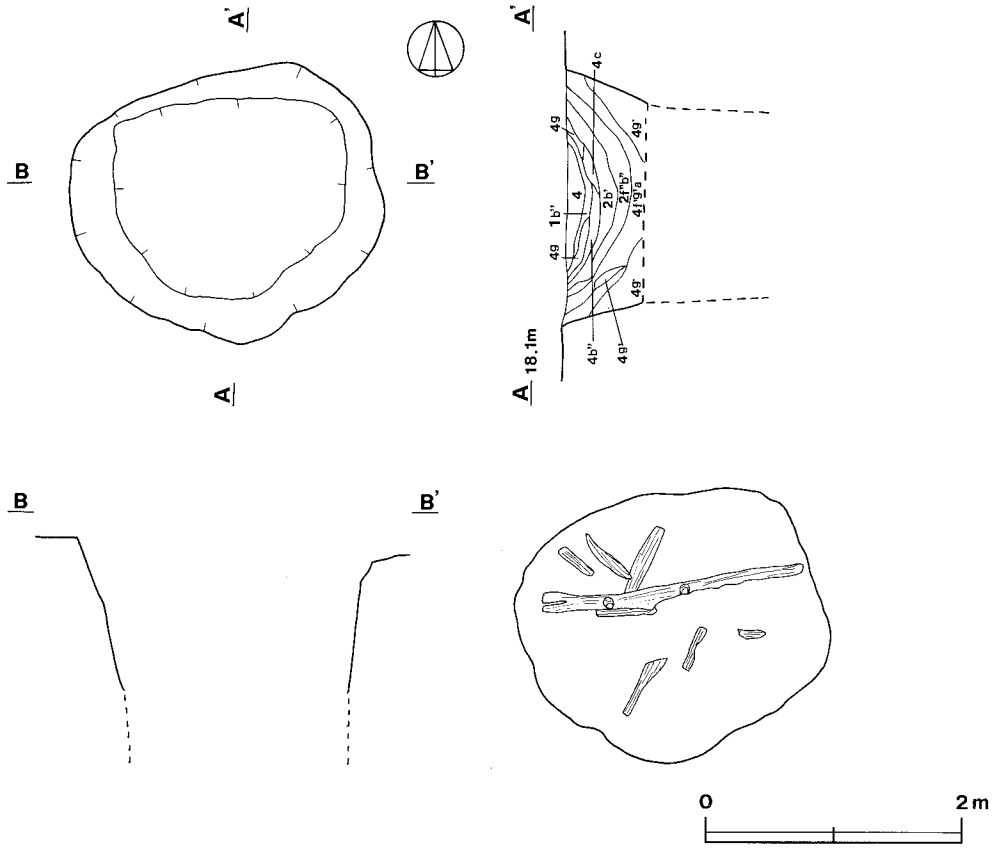
遺構確認面から約1.20ｍまでは外傾ぎみに掘り下げ，以下は椀形状に掘り込んでいる。底部は中央部を深さ40㎝ほど掘りくぼめており，底部から30～40㎝ほど上部の西壁から水が湧いている。

覆土は自然堆積の状態を示し，10層まで観察できる。上層は黒褐色土が中心で，下層になるほど褐色土の粘土質ローム粒子が多くなっており，また下層については水を多く含み，しかもやわらかである。

出土遺物は，確認面から1.20ｍの覆土より木片数点が出土し，さらに井戸底部からやや浮いた状態で破砕した土師器の甕・壺・椀が出土している。



第6図　第1号溝実測図



第7図　第1号井戸状遺構実測図

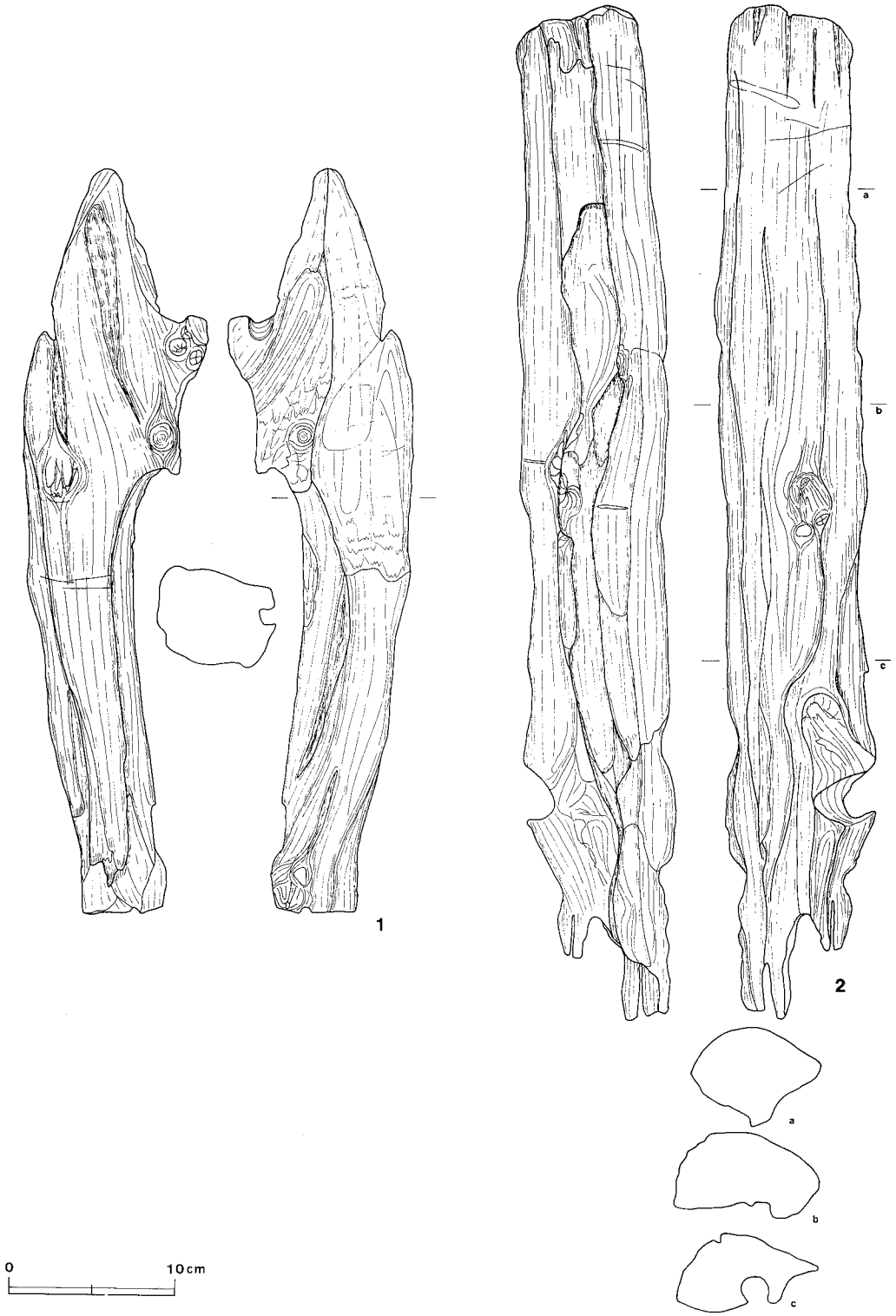
木片（第8・9図）

1は，全体の形が弓なりに残存している。表面の腐蝕が進行し，亀裂が無数に観察される。木片の一方は火を受けて黒く炭化して幅広く残存し，火を受けない側は他端にかけ細くなっている。他の3片（2～4）と同一個体の一部で，心持材である。木片は自然木で使用痕，加工痕はみられない。長さは45 cm，幅は10 cm，厚さは6 cmで，木質はナラ(注1)であり，用途は不明である。

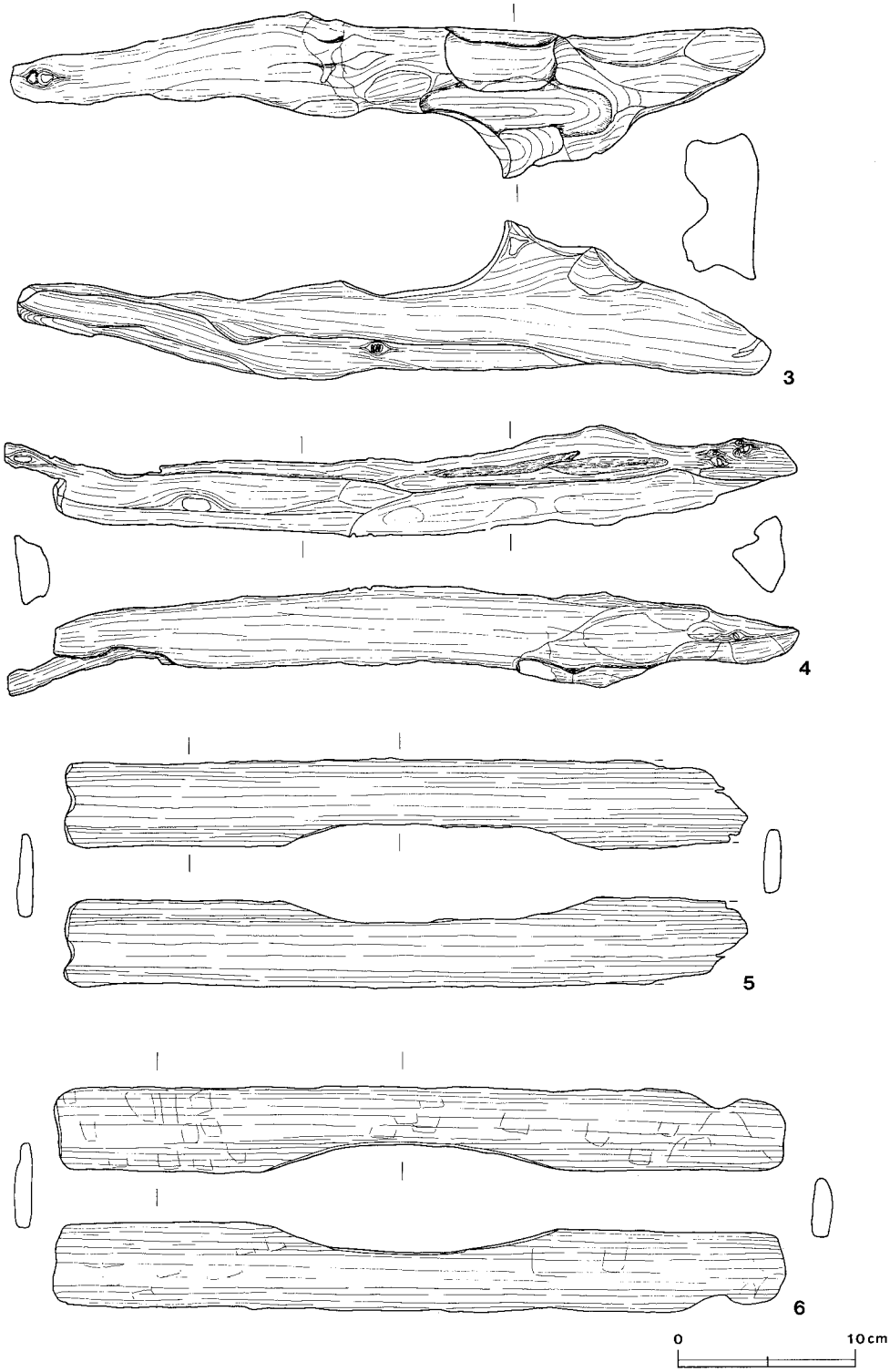
2は，断面形は「⌓」状を呈している。木片端部の一方は截断されたあとが観察されるが，他方の木口は腐蝕が進行し，細く光っている。全体的に黒褐色をしているが，火を受けた様子はみられない。長さは61 cm，幅は9 cm，厚さは6 cmで，木質はナラであり，用途は不明である。

3は，全体にねじれて「こて」状を呈している木片である。表面全体に腐蝕が進行し樹皮を剝離している。長さは45 cm，幅は9 cm，厚さは4 cmで，木質はナラであり，用途は不明である。

4は，断面形は「⌓」形を呈している心持材である。表面の約2分の1は火を受け黒く炭化している。他の部分は腐蝕がひどいが，火を受けた痕跡はみられない。木芯面は平坦で剝離したものと思われる。長さは45 cm，幅は6 cm，厚さは3 cmで，木質はナラであり，用途は不明である。



第８図　第１号井戸状遺構出土遺物実測図(1)

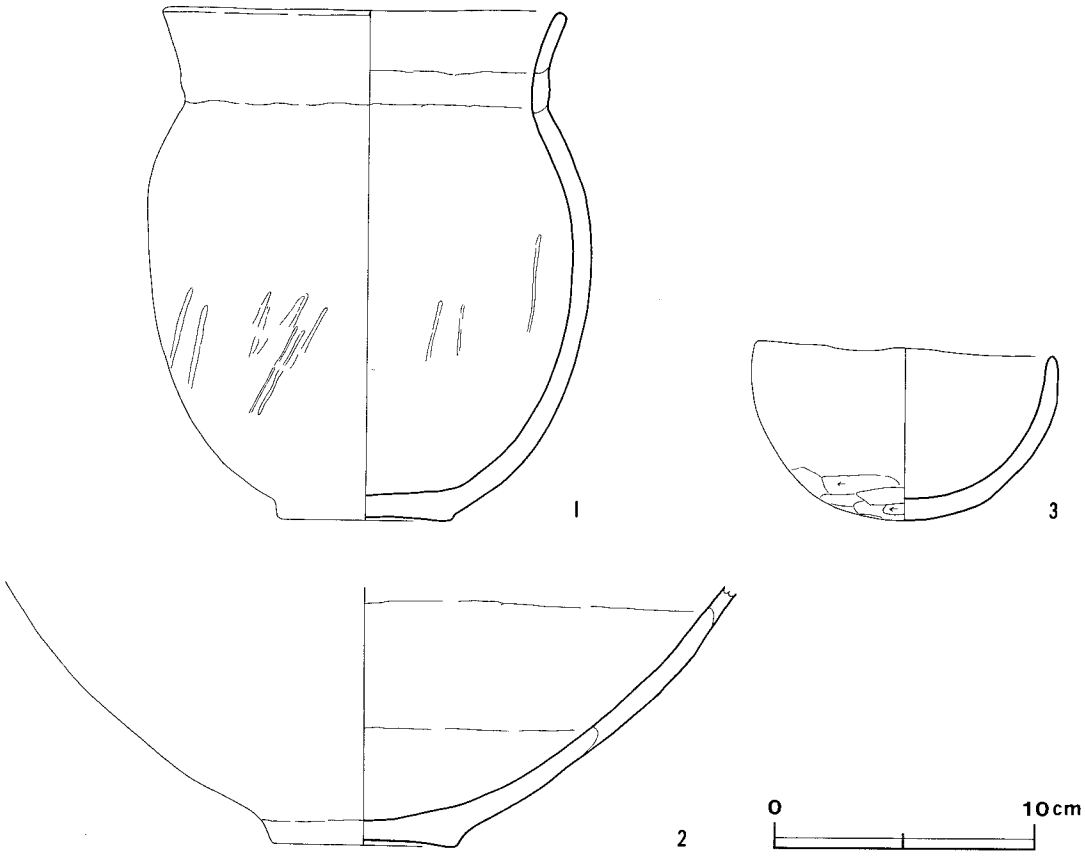


第９図　第１号井戸状遺構出土遺物実測図(2)

5は，柾目薄板である。一端は腐蝕して鋭角に残存しているが，他方の端の中央部は「ᑕ」状に窪んでいる。板材の長辺の中央部は約4分の1ほどまで「⌐」状にえぐられている。長さは39cm，幅は5cm，厚さは1cmで，木質はカシであり，用途は不明である。

6は，柾目薄板である。5と同一形状をしていたものと思われるが，両端の形状は腐蝕が進行して判明しない。中央部の窪みは，5より大きく，まるくえぐり取られている。長さは42cm，幅は5cm，厚さは1cmで，木質はカシであり，用途は不明である。

PL4の7は，断面形は「⌓」状を呈しており，自然木を半截したものと思われる。腐蝕が進行し樹皮は残っていない。表面に無数の亀裂が観察される。一端から約85cm中央よりに，長辺5.8cm，短辺4.5cmの方形の孔があけられている。また他端から約35cm中央よりに長辺6.4cm，短辺4.5cmの方形の孔があけられている。この孔は同じ向きであるが，使用痕は確認できない。木芯部まで黒灰色をおびている。木口にはひび割れが木目に平行に入っているのがみられる。長さは190cm，幅は10cm，厚さは5cmで，木質はナラであり，用途は不明である。



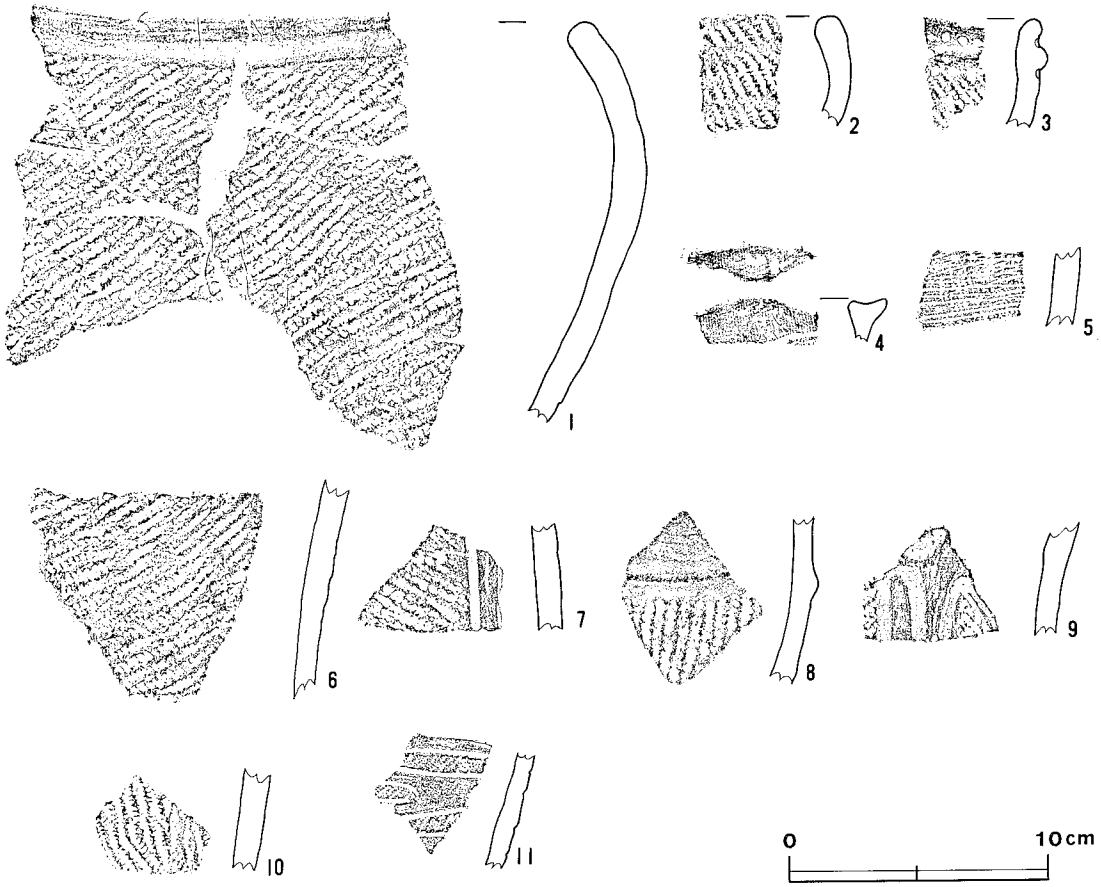
第10図　第1号井戸状遺構出土遺物実測図(3)

第1号井戸状遺構出土土器観察一覧表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	甕	口径 15.8 器高 20.5 底径 6.8	底部の中央部は僅かにくぼんでいる。最大径を胴中位にもち，口縁部は直立気味に開き，胴部上半に輪積み痕がみられる。器面に斜位の沈線を施している。	内面…口縁部横ナデ 外面…口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ 底面…ヘラけずり	砂粒 にぶい橙色 普通	90% 外面全体に煤付着,内面下半に炭化物付着
2	壺	底径 7.2	胴部は大きく外反し，底部は平底で中央にくぼみがある。	内面…ナデ 外面…粗いナデ 底面…口縁部横ナデ	砂粒 浅黄橙色 普通	底部 100% 内面に煤付着
3	埦	口径 11.4 器高 7.1	丸底で深く，底部よりふくらみをもって立ち上がり，口縁部はやや内彎する。口縁部直下に最大径をもつ	内面…口縁部横ナデ 外面…口縁部横ナデ 内外面…赤彩	砂粒 浅黄橙色 普通	90%

(3) グリッド出土土器（第11図）

当遺跡から縄文式土器片が少量出土した。次のとおりである。



第11図　グリッド出土土器拓影図

グリッド出土土器拓影図解説表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備考
第11図	1	C1i9 I層	深鉢・口縁部	口唇直下に一条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。	
〃	2	C2i3 I層	口縁部	口唇部からRL縄文を施している。	
〃	3	B3c5 I層	〃	口唇直下に隆線を巡らし，円形刺突文を隆線の上・下に施し，以下に縄文を施している。	
〃	4	B3c5 I層	〃	波状の口縁部片で，口唇部上面が少し凹んでいる。	
〃	5	C2i3 I層	胴部	条線を横位に施している。	
〃	6	C1i9 I層	深鉢・胴部	1と同一個体の胴部片で，LR縄文を施している。	
〃	7	C2i3 I層	胴部	縦位の沈線と縄文を施している。	
〃	8	B3a7 I層	〃	微隆線の下位に斜位回転のLR縄文を施している。	
〃	9	A3g7 I層	〃	U字状，逆U字状文の沈線間に縄文を施している。	加曽利EIII
〃	10	C2e7 I層	〃	LR縄文を施している。	
〃	11	B3a7 I層	〃	横位の沈線の区画内に縄文が充填されている。	堀之内II

4 まとめ

当遺跡の大調査区B2区・B3区に溝1条が確認された。溝は西北西から東南東に真っすぐに遺跡を横断して調査区域外へ延びる。溝の両端における底面の高低差は30cmで，東方の低地へと傾斜している。覆土は自然堆積であり，溝に伴う出土遺物は皆無である。溝は，西方から東方の低地に向って真っすぐに延びており，溝の西端3mに井戸状遺構が検出されているので，排水溝とも考えられるが流水時の沈殿層が確認されず，溝の性格は明らかでない。

井戸状遺構は，遺跡の北西部で1号溝の北側3mに検出されたものである。本跡に伴う付属施設を検出することはできなかった。本跡の平面形はほぼ円形を呈し，覆土は自然堆積で，下部は粘土質であり湧水があった。出土遺物は確認面から1.20mの覆土中から木片7点が出土している。火を受けた痕跡があるが腐蝕が進んでおり，また形状からは本跡に伴うものかどうかは判別できない。また底部からわずかに浮いて破砕した状態で鬼高式I期の甕・壺・椀が出土した。したがって，本跡は，鬼高I期に使用され，その時期に放棄されたのか，または，鬼高I期以前のそれほどはなれていない時期に使用され放棄されたものと考えられる。

当遺跡は西に向って次第に高くなる台地上に位置し，遺跡の西側には土器片が散在していることを考え合わせると，遺跡の中心は，調査区域の西側に所在し，調査区域はその東端部にあたる

ものと考えられる。今後，新しい資料が得られれば遺跡の時期や性格等がさらに解明されるものと思われる。

(1) 1～7の樹種同定は，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究員　光谷拓実氏の御指導によった。

第2節　二十五里寺B遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町大字大和田字日枝東(ひえひがし)2,175ほかに所在し，調査対象面積は，6,900 m²である。現況の大半は畑地で，一部水田になっている。当遺跡は三和町の西端にあたり，三和町大和田地区から総和町稲宮南地区に通じる道路の北側で，大和田集落の西約500 mに位置している。遺跡は，宮戸川左岸の台地の東側で，台地の東端を南流する大川の支流に向かって緩やかに傾斜する位置に立地し，農道によって南区と北区に分断されている。南区は標高約18 mで，北区は標高約17 mである。なお，東側は水田となっている。当遺跡の周辺には，二十五里寺A遺跡が大和田地区から稲宮地区に通じる道路を挟んで，南側に隣接し，北方約1.5 kmに二十五里寺C遺跡が，同じ新4号バイパス計画線上に所在している。当遺跡からは，縄文式土器片が極少量出土しただけである。

2　調査経過

〈昭和59年度〉

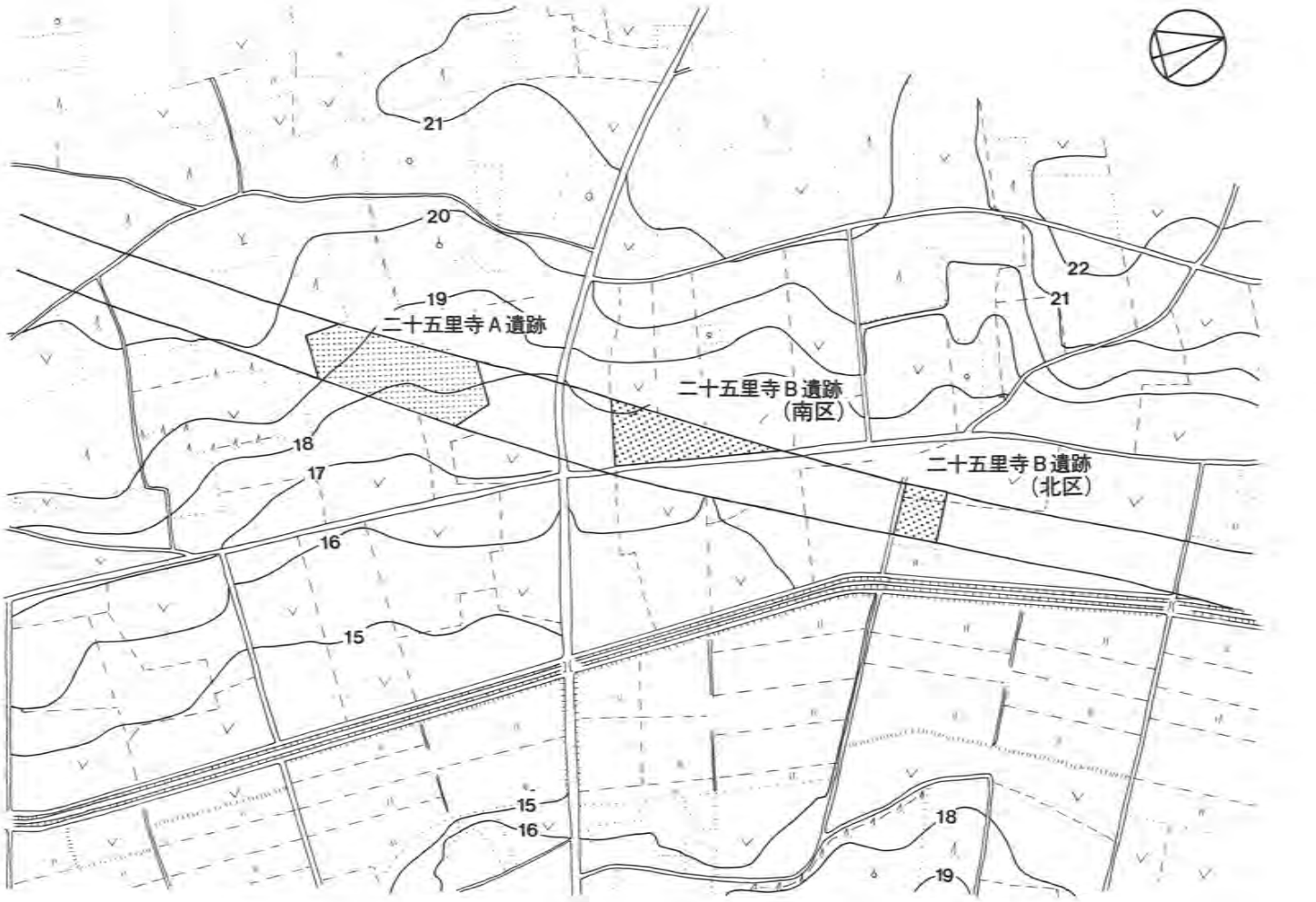
6月後半　二十五里寺A遺跡が6月14日に終了し，6月15日から当遺跡の調査を開始した。上物除去や草刈り後，発掘前の遺跡全景写真撮影を実施した。X軸＋20,540 m，Y軸－3,960 mの交点を基準にして方眼杭打ちを実施し，北区・南区に調査区を設定した。

南区から8分の1の割合でグリッド発掘を実施し，確認面まで40～50 cmの深さであった。縄文式土器片が極少量出土しただけで，遺構は確認できなかった。

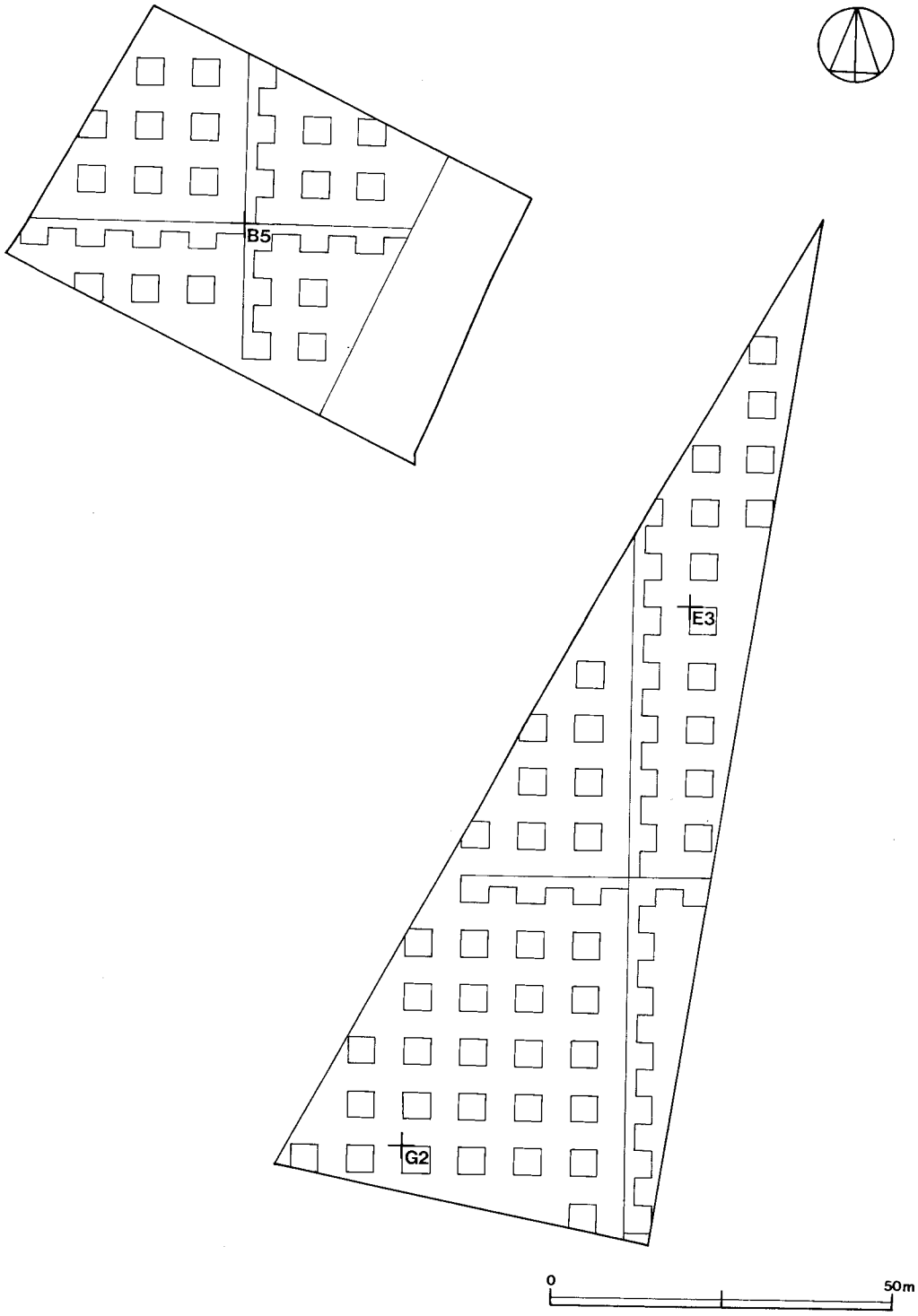
7月前半　北区は，確認面まで60～95 cmと深く，湧水のあるなかで作業を進めた。縄文式土器片数点が出土したが，遺構は確認できなかった。8分の1の発掘が終了したため全景写真撮影を行った。6日から二十五里寺C遺跡の調査に移った。

9月前半　グリッド発掘の前に，8月29日から草刈りを行い，3日から発掘調査を再開した。重機を導入し残り8分の1のグリッド発掘及び土層観察用のトレンチ発掘を行った。

慎重に遺構確認を実施したが，遺構は確認できず，また遺構に伴う遺物は出土しなかった。10日に調査終了の全景写真撮影を行い，調査区域内のすべての調査を完了した。



第12図　二十五里寺Ｂ遺跡地形図



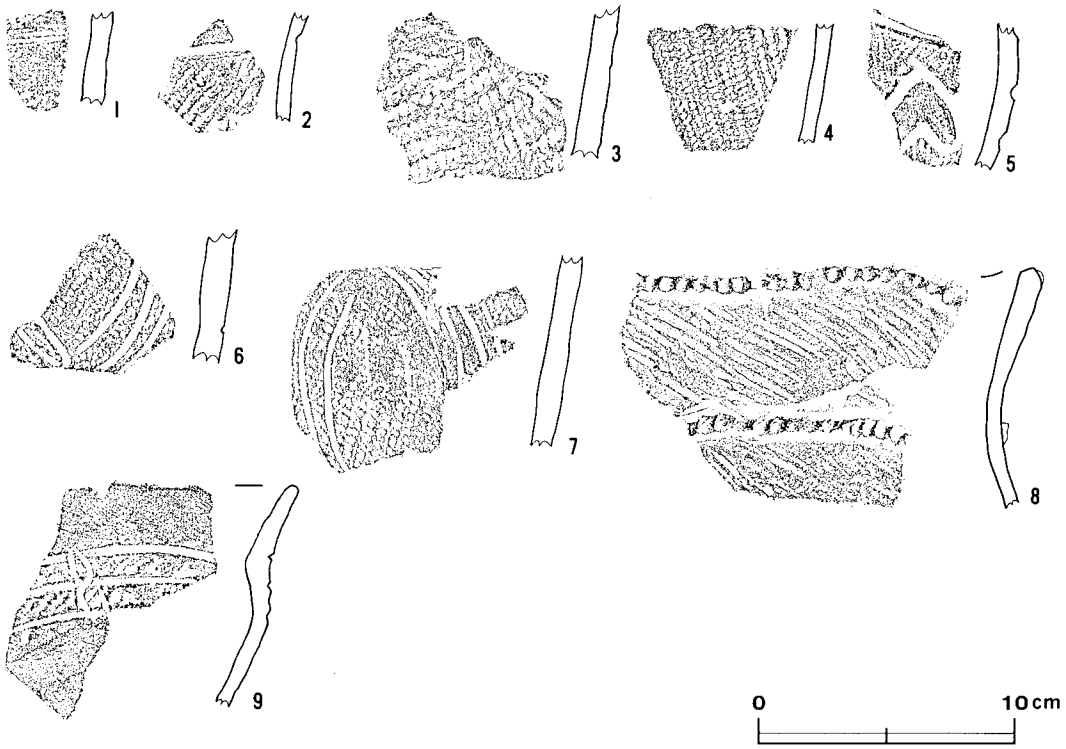
第13図　二十五里寺Ｂ遺跡全体図

3　遺構・遺物

当遺跡では，遺構は検出されず，４分の１のグリッド発掘中にわずかに縄文式土器片・土師式土器片が出土した。

(1)グリッド出土土器（第 14 図）

当遺跡から出土した縄文式土器片は，次のとおりである。



第14図　グリッド出土土器拓影図

グリッド出土土器拓影図解説表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第 14 図	1	E 2 i7	胴　部	横ナデを施している。	
〃	2	E 2 i9　Ⅰ層	〃	横位の沈線の下位にLR縄文を施している。	
〃	3	A 4 i9　Ⅰ層	〃	単節斜縄文を施している。	
〃	4	E 2 i3　Ⅰ層	〃	外面に異条縄文を，内面に縦ナデを施している。	
〃	5	G 2 a9　Ⅰ層	〃	曲線的な磨消帯縄文を施している。	称名寺式
〃	6	B 4 a7　Ⅰ層	〃	縄文の地文上に，弧状の沈線を施している。	堀之内式

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第14図	7	B5a1　Ⅰ層	胴　部	6と同一個体と思われる。	堀之内式
〃	8	E3e1　Ⅰ層	口縁部	内面は横ナデ，外面は波状の口縁部とくびれ部分に紐線を各1条ずつ貼り付けて，斜位の条線を施している。	加曽利B式
〃	9	A5i3　Ⅰ層	〃	内面はヘラ状工具による調整，胴部に平行沈線を施し，間に縄文を充塡し，縦位の入組文で区切られている。	〃

4　まとめ

当遺跡の調査の結果，縄文式土器片や土師式土器片が極少量出土したが，遺構は検出できず，遺跡の性格や時期は不明である。しかし，当遺跡の西側に土器片が散在していることを考え合わせると，遺跡の中心は調査区域の西側にあると推察される。今後，新しい資料が得られれば遺跡の性格や時期についてさらに解明されるものと思われる。

第3節　二十五里寺C遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町大字大和田字二十五里寺1,842ほかに所在し，調査対象面積は，1,100㎡である。現況は畑と山林である。当遺跡は，二十五里寺集落の東約300m，国道125号線の南約800mに位置し，三和町の西端にあたる。遺跡は，南北に延びる狭小な半島状の台地の南端部より約200m北に寄った台地上に立地し，畑と長さ約70m・幅1.5mの細長い山林から成っている。台地の東西両側には，大川の支流によって開析された沖積地が入り込み東・西・南に水田が形成されている。また台地は北側から緩やかな傾斜地となっている。当遺跡を含めた台地一帯は，かつて採土工事が行われ，新4号国道敷地の東側に沿ってわずかに山林が旧地形をとどめているにすぎない。その後採土された後の台地は水田と畑に利用されている。当遺跡の調査区域は採土された畑と，旧地形として残る山林の一部でありほとんどが削除されていた。標高は畑で約20m，山林部で約22.7mである。水田との比高は山林部が約4～5m，畑は約2～3mである。付近には，南方約1.1㎞に二十五里寺B遺跡，西方約500mに東小路（ひがしこうじ）遺跡があり，国道125号線の南側に溜原A遺跡が所在している。当遺跡の山林部から，住居跡2軒と溝3条が検出されたが，住居跡から出土した遺物は，五領期に比定される極少量の土器片であった。溝からの出土遺物は少量の石器片であり性格や時期等は不明である。畑からは加曽利E式から安行Ⅰ・Ⅱにかけての縄文式土器片が出土したが，完形及び復元できるものはなかった。

2　調査経過

〈昭和59年度〉

7月前半　　二十五里寺B遺跡の調査が5日に終了したため，6日より当遺跡の調査を開始した。上物を除去し草刈りを行った後，発掘前の遺跡全景写真撮影を実施した。X軸＋21,340m，Y軸－3,560mの交点を基準に方眼杭打ちを行い，調査区を設定した。

畑の部分は，4分の1の割合でグリッド発掘を実施したが，各グリッドから縄文式土器片が出土しただけで，遺構は確認できなかった。

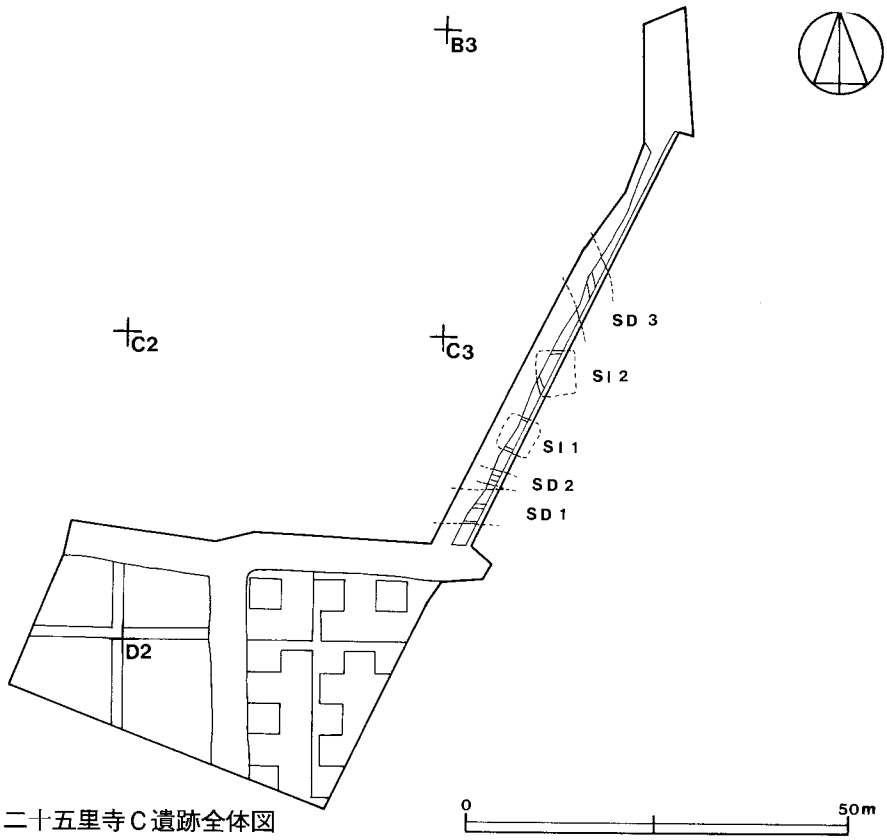
第15図　二十五里寺Ｃ遺跡地形図

7月後半　続いて，比較的多く土器片が出土した地点を中心にグリッドの拡張を実施したが遺構は確認できなかった。さらに，土層観察用のトレンチ発掘を実施した。

並行して，トレンチ発掘時の排土を利用し，山林部西壁面に沿って作業用道路を造成しながら山林部の調査準備を行った。畑部分の調査は25日に終了した。山林部の西側部の調査を開始した。

8月前半　畑部分の調査が7月25日に終了したため，すでに地山まで削除されている西壁面の清掃によって遺構の有無を断面的に観察して，遺構の確認作業を行った。その結果，数か所で落ち込みが認められた。続いて，山林部全面の表土除去作業を行い，住居跡2軒と溝3条の存在を明確に確認した。1日から，遺構の調査を行い，住居跡から土師器片を極少量であるが検出し，古墳時代の遺跡であることが判明した。7日から，溜原A遺跡の調査に主力を注ぐため，一時調査を中断した。

8月後半　溜原A遺跡の調査もほぼ終了に近づいたため，調査区が狭小のため作業員5名で当遺跡の遺構調査に全力をあげて23日に実測を行い遺構調査を終了した。調査後遺跡の全景写真撮影を実施し二十五里寺C遺跡を完了した。



第16図　二十五里寺C遺跡全体図

3　遺構・遺物

当遺跡の山林部から，住居跡２軒，溝３条が検出された。

山林部は当遺跡の中心から北東に位置し，山林部の西側は土取りされて水田となり，南側も土取りされて畑となっている。山林部の西側を含む調査区域は，幅５m，長さ 78 mと細長い区域である。したがっていずれの遺構も西側は破壊され，東側は調査区域外に含まれるため，実際調査できた区域は崖を含んだ幅 1.5～2.5 m，長さ 78 mである。

(1)　住居跡

第１号住居跡（第 17 図）

本跡はＣ３d_3調査区を中心に確認されたもので山林部に位置し，南側２mに第２号溝，北側３mに第２号住居跡が近接している。平面形は壁が直線的に検出されているので，方形か長方形を呈するものと推定される。

残存壁高は，北側約 28 cm・南側約 30 cmで，壁面はやや軟弱で，ほぼ垂直に立ち上がる。床面は踏み固められて平坦である。住居跡の中央より東側にあたる部分は調査区域外にあり，西側にあたる部分は土取りのため破壊されていたので，住居跡の全体の約４分の１にあたる部分しか調査できなかった。壁溝，ピット，炉は確認されなかった。覆土は，２層に分けられる。上層は腐植土が混入して締まりがなく黒褐色で，下層はローム粒子が混入する暗褐色土が堆積している。

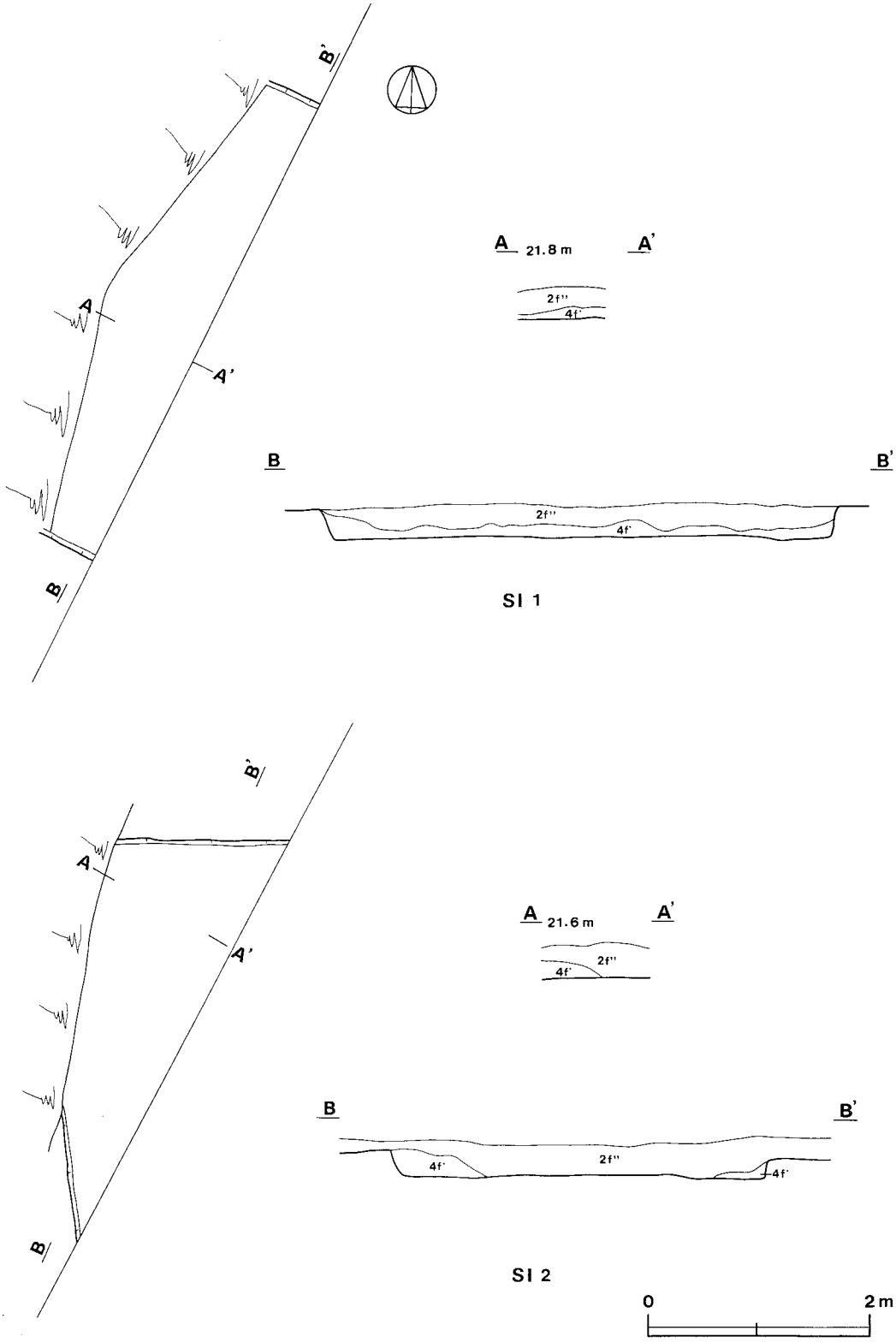
遺物は中央よりの覆土から一括して土師式土器の胴部片４片が出土した。出土土器は，いずれも古墳時代五領期に比定される土器片と考えられる。

第２号住居跡（第 17 図）

本跡はＣ３b_4 調査区を中心に確認され山林部に位置し，南側３mに第１号住居跡が隣接している。主軸方向は第１号住居跡よりも，北方向に寄っていると思われる。平面形は，北側と西側の壁が直線的に残存していることから，方形か長方形を呈するものと推定される。

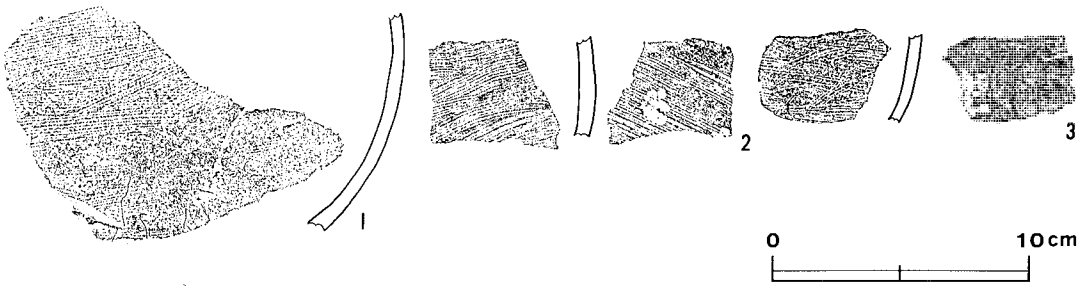
残存壁高は，北側約 18 cm，西側約 22 cmで，壁面はやや軟弱でほぼ垂直に立ち上がる。床面は踏み固められて平坦である。住居跡全体の約４分の１にあたる部分しか調査できなかった。北東コーナー，南西コーナーを含む東側は調査区域外であり，北西コーナーを含む西側は土取りにより破壊されていた。壁溝，ピット，炉は確認されなかった。覆土は２層で，上層は黒褐色でローム粒子を微量に含んでいる。下層は両壁ぎわに沿ってローム粒子を多量に含む暗褐色土が堆積している。

遺物はいずれも土師器で，北壁近くの床面直上より出土し，出土土器は胴部の細片で，表に



第17図　第１・２号住居跡実測図

刷毛目痕，赤彩を施したものが見られる。古墳時代五領期に比定される土器と考えられる。



第18図　第1・2号住居跡出土土器拓影図

出土土器（第18図1・2・3）

1は第1号住居跡から出土した土師式土器片の拓影図である。1は外面に刷毛目整形痕が残り，内面にはナデ整形が施されている。色調は明褐色を呈し，胎土は砂粒・スコリアを含み，焼成は普通である。

2・3は，第2号住居跡から出土した土師式土器片の胴部片で，その拓影図である。2・3とも外・内面に刷毛目整形痕が残っている。いずれも色調は灰褐色を呈し，胎土は砂粒を含み，焼成は普通である。

(2)　溝

第1号溝（第19図）

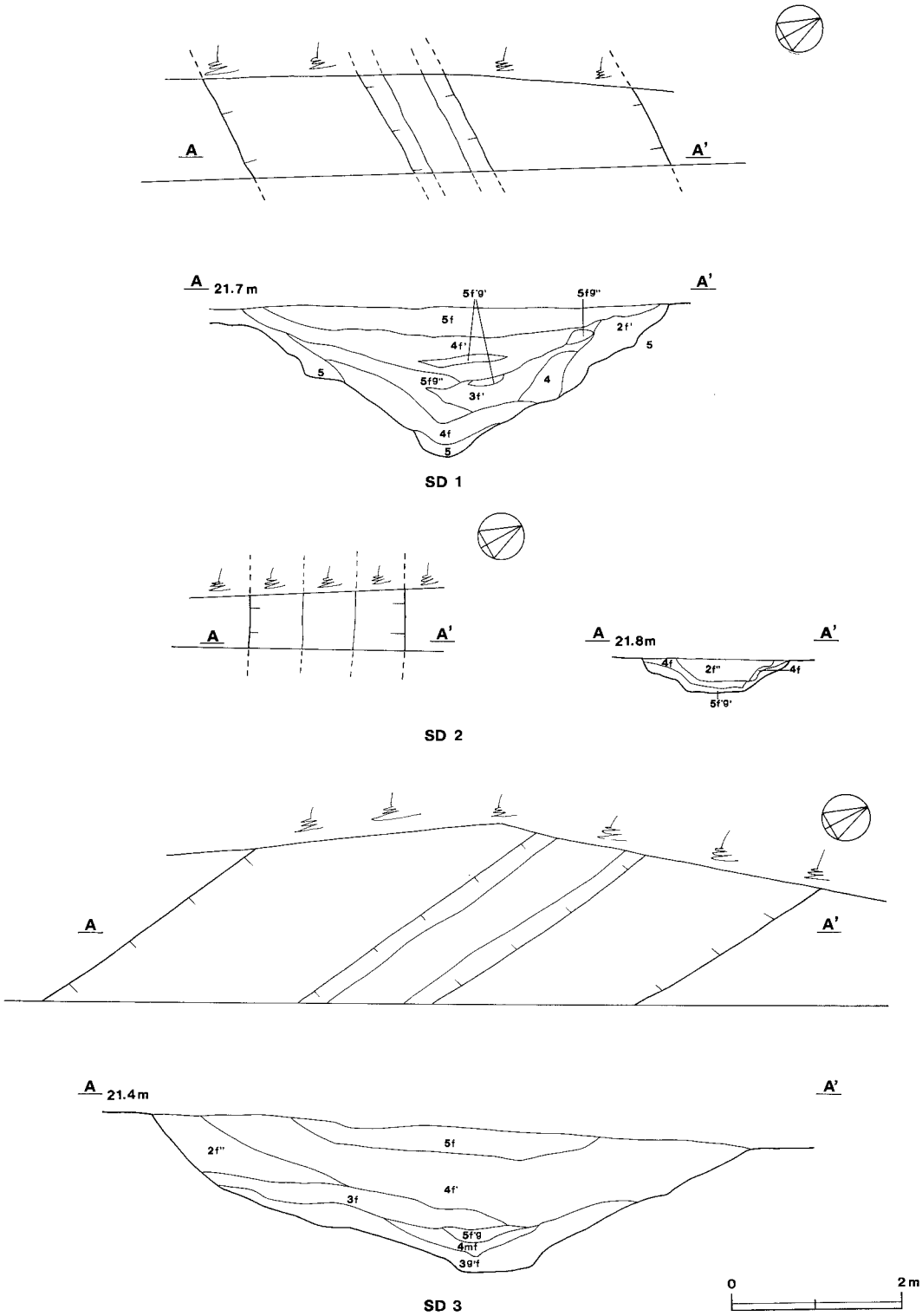
本跡は，山林部南側の調査区C3f_2に確認された。北側2mに第2号溝が隣接している。

本跡は，調査区を緩やかに北側へ延び，東側の山林部の調査区外へも延びている。調査区内の本跡の長さは2mほどであり，上幅は4.4m，下幅は0.4mほどである。遺構確認面から溝底までの深さは182cmほどである。壁面はロームで比較的軟らかく，外傾して立ち上がる。底面はロームで0.4mの幅を有し，断面は「_/」状を呈している。覆土は7層で，自然堆積の状態を示し，ローム粒子，ロームブロックを含む褐色土，暗褐色土が中心である。

遺物は，磨石・敲石・石皿片等の石器ほか，わずかに縄文式土器片，土師式土器片が散在的に覆土から出土した。

第2号溝（第19図）

本跡は山林部の調査区C3e_2に確認された。南側2mに第1号溝，北側3mに第1号住居跡が近



第19図　第１・２・３号溝実測図

接している。

調査区を南東方向へ一直線に東側の調査区外へ延びている。調査区内の本跡の長さは0.7mほどで，上幅は1.8mである。遺構確認面から溝底までの深さは，38～42cmである。壁面はロームで，やや軟らかく外傾して立ち上がっている。底面はロームで0.7mの幅を有し，断面は「　」状を呈している。覆土は自然堆積の状態で，上層にはローム粒子を微量に含む黒褐色土，下層には褐色土が堆積している。

遺物は，覆土から土師式土器の小片が出土し，いずれも磨滅しており流れ込んだものと思われる。

第3号溝（第19図）

本跡は，山林部中央より北に向かう緩やかな傾斜地の調査区B3h_5を中心に確認された。南側5mに第2号住居跡が所在する。

調査区内を南南東へ向かって調査区外へ延びている。調査区内の本跡の長さは1.6mほどで，上幅は4.3mほどである。遺構確認面から溝底までの深さは，170cm前後である。壁面はロームで比較的軟らかく，緩やかに外傾して立ち上がる。底面はロームで0.4mほどの幅を有し，断面は「　」状を呈している。覆土は自然堆積の状態を示し，ローム粒子を含む褐色土，暗褐色土が堆積している。

遺物は，磨石・石皿片・石臼片と少量の土師式土器片が覆土から出土し磨滅しているものが多い。

(3)　グリッド出土土器（第20～27図）

畑部から遺構は検出されず，縄文中期後葉から晩期前葉にかけての縄文式土器片が多量に出土した。しかし，採土工事及び，耕作等から遺物のほとんどが小さく破砕されて，層位的な出土状況も正確でない。当遺跡から出土した縄文式土器片は，次のとおりである。

グリッド出土土器拓影図解説表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第20図	1	D1a_0　II層	口縁部	内側と外側に条痕文，口唇にキザミ目を施している。	茅山式
〃	2	D1a_9　〃	〃	口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下にLR縄文を施している。	加曽利E式
〃	3	D1a_0　〃	口辺部	内彎する口辺部片。口唇部を欠損し，1条の沈線を巡らし，以下に異条縄文を施している。	〃

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第20図	4	C2i_1　I層	口辺部	隆線を施し,以下に粗い縄文を施している。	加曽利E式
〃	5	表　採	〃	微隆線で区画し,区画内に縄文を充塡している。	〃
〃	6	D2d_7	口縁部	口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。	〃
〃	7	表　採	胴　部	隆線を垂下させ，後に縄文を施している。	〃
〃	8	D1a_9　II層	〃	微隆線の下位にLRの縄文を施している。	〃
〃	9	C1i_0　I層	〃	粗い異条縄文を施している。	〃
〃	10	C1j_9　〃	〃	微隆線間に斜位・横位回転の縄文を施している。	〃
〃	11	D1a_9　〃	〃	RL縄文を施し,以下に縦ナデ整形を施している。	〃
〃	12	C2i_1　II層	口縁部	波状口縁部片で，微隆線で口縁部無文帯を区画し，以下に縄文を施している。	〃
〃	13	D1b_0　I層	胴　部	微隆線による区画内に異条縄文を施している。	〃
〃	14	C1h_9　〃	口縁部	口縁部無文帯を1条の隆線で区画している。	〃
〃	15	表　採	胴　部	微隆線による曲線的区画をし，区画内に縄文を充塡している。	〃
〃	16	D1a_9　II層	〃	「U」字状の沈線区画内に縄文を施している。	〃
〃	17	D1a_8　II層	〃	微隆線で曲線的区画を施している。	〃
〃	18	C2j_1　I層	〃	横位の微隆線の下位に縄文を施している。	〃
〃	19	D2h_1　〃	〃	横位の微隆線を施している。	〃
〃	20	D1b_9	口縁部	口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に無節縄文を施している。	〃
〃	21	表　採	胴　部	縦位の磨り消し帯を有し，区画外に縄文を施している。微隆線による区画内に縄文を施している。	〃
〃	22	〃	〃	微隆線による区画内に縄文を施している。	〃
〃	23	〃	〃	微隆線による区画内に縄文を施している。	〃
〃	24	〃	〃	縦位の沈線区間に縄文を充塡している。	〃
〃	25	D2g_3　I層	〃	曲線的沈線の区画間に縄文を充塡している。	〃
〃	26	C2i_1　〃	〃	弧状の沈線区画内に縄文を施している。	〃
〃	27	D2a_1　〃	〃	弧状の沈線で区画し，区画内を磨り消し，区画外に縄文を施している。	〃
〃	28	C2i_5　I層	〃	2条の沈線で区画し，区画内を磨り消し，区画外に縄文を施している。	〃
〃	29	B3トレンチ内	〃	沈線で区画し，区画内を磨り消し，区画外に縄文を施している。	〃
〃	30	表　採	〃	曲線的沈線区画内に縄文を施している。	称名寺式
〃	31	〃	口縁部	口縁直下に1条の横位の沈線を巡らし，以下に縄文を施している。	堀之内式
〃	32	〃	〃	31と同一個体	〃

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第20図	33	D1b9　I層	口縁部	波状口縁で刺突・斜位の沈線を施し，貫通孔を有す。波頂部上面に隆沈文による渦巻文を施している。	堀之内式
〃	34	D2a1　II層	〃	全面に縄文を施している。	〃
〃	35	表　採	〃	縄文の地文に,横位に3条の沈線を施している。	〃
〃	36	〃	〃	キザミ目を有する隆線を口縁直下に付し，以下に横位の沈線を施している。	〃
〃	37	D1b0　I層	〃	幾何学的沈線区画内に縄文を施している。	〃
第21図	38	D1a9　II層	胴　部	縄文地文上に，横位・縦位の沈線文を施している。	〃
〃	39	C2i1　II層	〃	縄文地文上に縦位・斜位の沈線文を施している。	〃
〃	40	D1a8　〃	〃	縄文の地文上に，縦位の平行沈線を施している。	〃
〃	41	D2b1	〃	斜行する沈線間に，無節の縄文が充塡されている。	〃
〃	42	D1a0	〃	縄文地文上に縦位の沈線を施している。	〃
〃	43	C2i1　I層	〃	縄文地文上に，曲線的沈線文を施している。	〃
〃	44	D1a8　II層	〃	縄文地文上に縦位の沈線を施している。	〃
〃	45	D1a9　〃	〃	縄文の地文に，縦位の沈線を施している。	〃
〃	46	D1a8　〃	〃	斜格子状の条線文を施している。	〃
〃	47	D1a9　I層	〃	縄文を地文に，横位と斜位の沈線を施している。	〃
〃	48	D2b1　〃	〃	縄文を地文に，蛇行沈線を施している。	〃
〃	49	C2i3　〃	口縁部	波状の口縁部片で,蛇行沈線と円形の刺突を施している。波頂部上面に刺突を施している。	〃
〃	50	C2i1　I層	胴　部	V字状の沈線区画内に縄文を施している。	〃
〃	51	D1a9	口縁部	口縁直下に1条の沈線を巡らし，口唇部にキザミ目を加え，以下に縄文を施している。	加曽利B式
〃	52	C2j1	〃	波状口縁で，斜位・横位の沈線を巡らしている。	〃
〃	53	C2i1	〃	波状口縁で，斜位の沈線を施している。	〃
〃	54	表　採	〃	波状口縁部片で，口縁直下に1条の紐線を貼り付け，紐線上にキザミを施す。以下に横位の沈線文を施している。	〃
〃	55	D2b1	〃	口縁部無文帯の直下に1条の列点刺突文を施している。	〃
〃	56	B3トレンチ内	〃	口縁直下の2条の沈線間に刺突文を施し，以下にRL縄文を施している。	〃

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第21図	57	B3トレンチ内	口縁部	口縁直下の2条の沈線間に刺突を付し，以下に縄文を施している。	加曽利B式
〃	58	C1 i_9	〃	縄文地文上に格子状の沈線を施している。内面の口唇直下に1条の沈線を有している。	〃
〃	59	表　採	〃	口唇直下に1条の横位の沈線を施している。	〃
〃	60	D1 c_0	〃	縄文を地文に，横に走る8本の平行沈線を施している。	〃
〃	61	C1 j_0	〃	波状口縁で，山形を呈する把手である。	〃
〃	62	C1 j_9　I層	胴　部	粗い縄文の地文に，斜行する沈線を施している。	〃
〃	63	D1 a_0	〃	62と同一個体である。	〃
〃	64	D2 a_1	〃	縄文の地文に沈線を斜格子状に施している。	〃
〃	65	C2 j_1　I層	〃	横位の紐線にキザミを施し，以下に縄文を施している。	〃
〃	66	D2 g_7　〃	〃	2条の沈線間に円形刺突文を付し，以下に縄文を施している。	〃
〃	67	D1 a_8　II層	〃	紐線を貼り付け，紐線上にキザミを施し，斜位の条線文を施している。	〃
〃	68	C2 i_1　〃	〃	胴部に横位の沈線を巡らし，以下に刺突文と磨り消し縄文を施している。	〃
〃	69	D1 a_9　〃	〃	紐線上にキザミを施している。	〃
〃	70	C2 j_1　I層	〃	押圧を加えた紐線の上位と下位に横位の沈線を施している。	〃
〃	71	C2 i_1　II層	〃	横位の沈線間にキザミを施している。	〃
〃	72	D1 a_9　I層	〃	横位の沈線間にキザミを施している。	〃
〃	73	D1 b_0	〃	斜位の条線を施している。	〃
〃	74	表　採	〃	横位のキザミの下に斜位の沈線を施している。	〃
〃	75	D1 a_9　II層	〃	くびれ部に刺突文を有し，上位と下位の弧状沈線区画内に縄文を配し，区画外は磨り消しを施している。	加曽利BIII
第22図	76	トレンチ内	〃	くびれ部に刺突文列を施している。	〃
〃	77	D1 b_8　I層	口縁部	口縁部に縄文帯を施し，以下に横の沈線を施している。	安行式
〃	78	C2 j_1	〃	口縁部に縄文帯を施し，弧状の沈線間に縄文を施している。	〃
〃	79	C2 i_0	〃	横走する沈線の間に刺突文を施している。	〃
〃	80	D2 b_1　I層	〃	口縁直下に刺突文と1条の沈線を巡らし，以下に縦位の条線を施している。	〃

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第22図	81	表　採	口縁部	口縁直下に刺突文を巡らし，以下に横の沈線を施している。	安行式
〃	82	C2j_1　I層	〃	キザミを付した紐線を貼り付け，以下に弧状の沈線を施している。	〃
〃	83	D1b_9　〃	〃	口唇直下にキザミと1条の沈線を施している。	〃
〃	84	表　採	〃	口唇直下にキザミを付し，以下に弧状の沈線を施している。	〃
〃	85	D1a_0　I層	〃	口唇直下の横位に刺突文を施し，以下に沈線を巡らしている。	〃
〃	86	C2i_2　〃	〃	刺突文を横位に巡らし，以下に整形痕が残っている。	〃
〃	87	D2a_1　〃	〃	口縁部縄文帯を施し，以下に横走する刺突文と斜行する沈線を施している。	〃
〃	88	D1a_0　II層	〃	口縁直下には刺突文列と1条の沈線が横走している。	〃
〃	89	表　採	〃	刺突文の下に横位の沈線を巡らしている。	〃
〃	90	C1i_9　I層	〃	口縁直下に2条の刺突文を巡らしている。	〃
〃	91	表　採	〃	口唇直下に1条の紐線を貼り付け，紐線上に刺突文を施している。	〃
〃	92	D1a_9　II層	〃	弧状の条線文を施している。	〃
〃	93	表　採	〃	口縁直下に紐線を貼り付け紐線上にキザミを付して以下に斜位の沈線を施している。	〃
〃	94	C2j_1	〃	口縁直下に1条の細い紐線を貼り付け，紐線上にキザミを施している。以下に曲線文で区画し，区画外は横位の条線を施している。	〃
〃	95	D1a_9　II層	〃	口縁直下に刺突文を有し，横走する沈線の下位に斜位の条線がわずかに残っている。	〃
〃	96	D2d_7	〃	口唇に列点状刺突文を施し，以下に縦位の沈線を配している。	〃
〃	97	D1b_9　I層	〃	口唇直下に斜位のキザミを有する紐線を貼り付け，下位に横位と弧状の沈線を施している。	〃
〃	98	山林部	〃	口縁にキザミを付し，縦位の沈線を施している。	〃
〃	99	D1a_0	〃	口縁に紐線を貼り付け，爪形状のキザミを施している。	〃
〃	100	D2c_1	〃	紐線に爪形状の押捺を施し，ナデ整形後縦位の沈線を付けている。	〃
〃	101	表　採	〃	ナデ整形痕を残している。	〃
〃	102	D2b_1　I層	〃	紐線に爪形状の押捺を施している。	〃

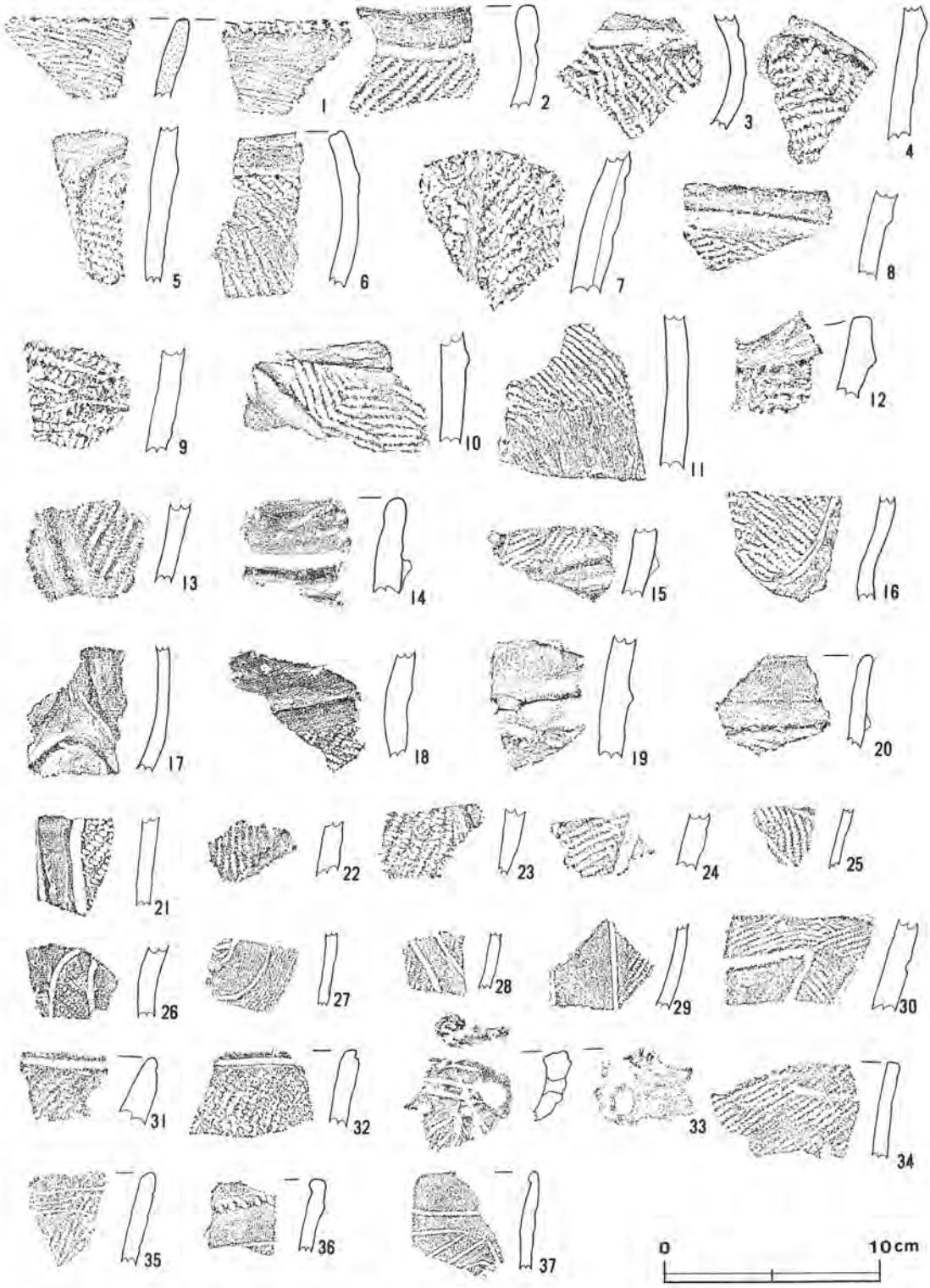
図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第22図	103	C1 j_0　I層	口縁部	紐線に縦位のキザミを付け，下位に斜位の沈線を施している。	安行式
〃	104	表　採	〃	紐線に細い刺突文を施している。	〃
〃	105	D1 a_8　II層	〃	紐線の下部にキザミを付し，斜行の沈線に太い弧状の沈線を施している。	〃
第23図	106	C2 j_1　〃	〃	刺突文の下位に横位の沈線を施している。	〃
〃	107	表　採	〃	紐線を貼り付け，紐線上にキザミを施している。	〃
〃	108	〃	〃	口唇直下にキザミを施し，以下に斜位の沈線と横位の沈線で区画している。	〃
〃	109	D2 a_0　I層	〃	口唇直下にキザミを施している。	〃
〃	110	表　採	〃	口唇直下のキザミの下位に横の沈線を施している。	〃
〃	111	C7 i_1　I層	胴　部	縦・横の平行沈線を施している。	〃
〃	112	C2 j_1　〃	〃	沈線間に爪形状の押捺を施している。	〃
〃	113	C1 j_2　〃	〃	無節縄文に縦位の沈線を施している。	〃
〃	114	表　採	〃	縦位の沈線を施し，その後2本を1単位とする斜位の沈線を施している。	〃
〃	115	〃	口縁部	口縁直下の爪形状の押捺文の下位に，斜位の条線を施している。	〃
〃	116	〃	〃	口縁直下の紐線にキザミを付し，以下に斜位の沈線を施している。	〃
〃	117	D1 a_9	〃	紐線を口縁直下に巡らし、爪形状の押捺を付し，以下に斜位の沈線を施している。	〃
〃	118	C2 j_1	〃	口縁部に刺突文と横位の沈線を巡らし，以下に斜位の沈線を施している。	〃
〃	119	C1 i_9　I層	〃	三角形状に刺突を施している。	〃
〃	120	C1 a_0　II層	〃	口唇直下の紐線にキザミを付し，以下の横走する条線の地文上に弧状の沈線を施している。	〃
〃	121	D1 a_0　I層	〃	横位の沈線から縦位の弧状沈線を施し，中に刺突文を付す。口唇にキザミがわずかに付されている。	〃
〃	122	C1 i_9	〃	無文の波状口縁の把手に貼り付けを施している。	〃
〃	123	表　採	〃	横位の沈線間に刺突文を施している。	〃
〃	124	〃	〃	2条の横走する沈線を施している。	〃
〃	125	D2 a_1　I層	〃	口唇直下に2条の沈線を巡らし，以下に3条の弧状の沈線を施している。	〃

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第23図	126	D1a8　I層	胴　部	紐線を貼り付けし，爪形状の押捺を施し，以下に横位の条線を施している。	安行式
〃	127	D1a0　II層	〃	紐線に半截竹管による押捺を付け，以下に縦位の沈線を施している。	〃
〃	128	D2b1	〃	横位・斜位の条線を施している。	〃
〃	129	D2a1　I層	〃	斜位の沈線を施している。	〃
〃	130	D1a8　〃	〃	条線の地文上に縦位の沈線を施している。	〃
〃	131	C1i9　〃	〃	斜位の条線を施している。	〃
〃	132	C2j3　〃	〃	横位の2条の沈線間にキザミを施し，以下に弧状の沈線を施している。	〃
〃	133	D2a5　〃	〃	斜位の条線を施している。	〃
〃	134	D1b9　〃	〃	2～3本を1単位とする縦位の条線を施している。	〃
第24図	135	表　採	〃	斜位の条線を施し，その後に横位の沈線を施している。	〃
〃	136	D2b1　I層	〃	横位の浅い平行沈線を施している。	〃
〃	137	C2j1　II層	〃	斜位の条線文を施している。	〃
〃	138	D1a0　〃	〃	斜位の条線文を施している。	〃
〃	139	D2a1　I層	〃	斜位の条線文を施している。	〃
〃	140	D1a9　II層	〃	斜位の条線文を施している。	〃
〃	141	D1a0　〃	〃	縦位の条線を施している。	〃
〃	142	C2j1　〃	〃	沈線で区画し，斜位の細い沈線を綾杉状に施している。	〃
〃	143	〃	〃	曲線的沈線の区画内に細い沈線を綾杉状に施している。	〃
〃	144	C1j1	口縁部	帯縄文を施している口縁部片である。	〃
〃	145	表　採	〃	細い曲線的沈線区画内に縄文を施している。	〃
〃	146	C1i0　I層	〃	細い曲線的沈線区画内に縄文を施している。	〃
〃	147	D2b1	〃	縄文の間に3条の沈線を巡らしている。	〃
〃	148	C2i3　I層	〃	帯縄文の下位に横走する沈線を施している。	〃
〃	149	山林部　〃	〃	帯縄文の間に沈線を施している。	〃
〃	150	D2a1　II層	〃	口縁に帯縄文を施している。	〃
〃	151	C2j1　〃	〃	帯縄文の下位の沈線間を磨り消している。	〃
〃	152	C1i0　I層	〃	帯縄文の間は磨り消されている。	〃
〃	153	D2a2　II層	〃	口縁に帯縄文を有し，以下に横位の沈線を施している。	〃
〃	154	C2h1　〃	〃	帯縄文の下位に横位の沈線を施している。	〃
〃	155	D2a8　I層	〃	帯縄文を施している口縁部片である。	〃

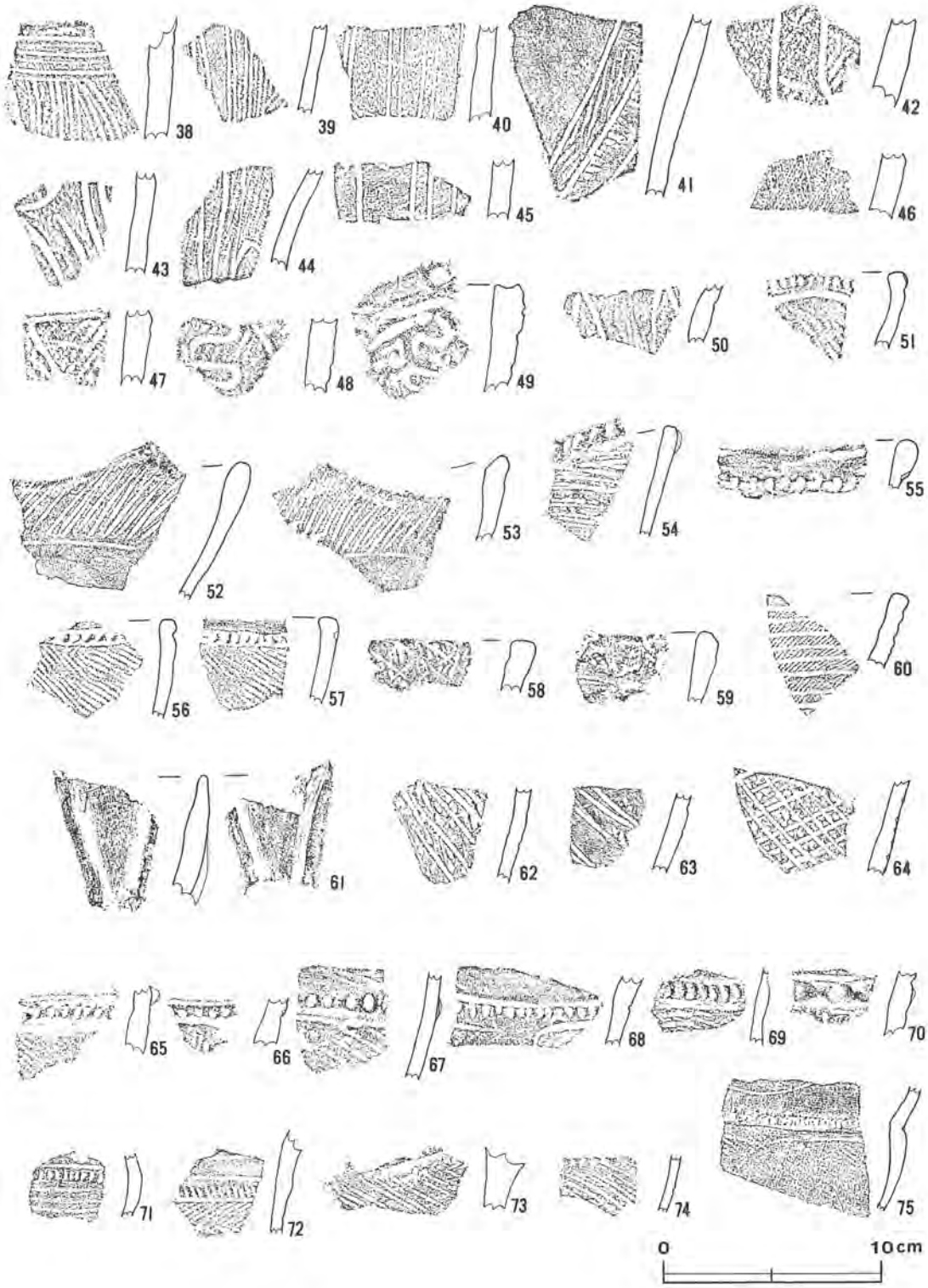
図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第24図	156	D1a9　I層	口縁部	内彎した口縁部片で帯縄文の間を磨り消している。	安行式
〃	157	D1a0　〃	〃	縄文を横位の沈線で区画し，以下を磨り消している。	〃
〃	158	表　採	〃	帯縄文の間に沈線を施している。	〃
〃	159	D1b8	〃	口唇直下に帯縄文を施している。	〃
〃	160	C2i1　II層	〃	帯縄文を有する口縁部片である。	〃
〃	161	D1a0　〃	〃	口縁の帯縄文の下位にわずかに無文帯を有している。	〃
〃	162	C1i9　I層	〃	帯縄文の下位に横位の沈線を施している。	〃
〃	163	D1c9　〃	〃	帯縄文の下位に横位の刺突文とキザミ目を施している。	〃
〃	164	C2i1	〃	帯縄文の間に横位の沈線文を施している。	〃
〃	165	D2b2　I層	〃	波状口縁で帯縄文に，横位の押捺を付けた縦位の瘤状突起を貼り付ける。下位に縄文を施している。	〃
第25図	166	D1a0	〃	帯縄文の下位に横走する沈線を施し，口唇部に瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	167	D1a9　II層	〃	帯縄文間に沈線を施し瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	168	表　採	〃	帯縄文下位に沈線を施し，口唇から縦位に瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	169	表　採	〃	波状口縁の把手で，ゆるやかに外反し瘤状突起を貼り付け，以下に穿孔の一部が観察される。	〃
〃	170	C1i9　I層	〃	帯縄文を施し，瘤状小突起を貼り付けている。	〃
〃	171	C1h9	〃	帯縄文間を沈線で区画し瘤状小突起を貼り付けている。	〃
〃	172	表　採	〃	口唇直下に瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	173	D1a0	胴　部	帯縄文間に縄文を施し，瘤状突起を貼り付け中央を押圧している。	〃
〃	174	C1j9　I層	口縁部	帯縄文を有し，口唇から縦位に瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	175	D1a0	〃	帯縄文に横にキザミを付した瘤状突起を縦位に貼り付けている。	〃
〃	176	D1a0　I層	〃	口縁部に帯縄文を巡らし，3条の沈線を施し口唇部に貼り付けた瘤状突起の表には横位に，裏には縦位にキザミが施されている。	〃

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第25図	177	C 1 i_9	口縁部	口縁の帯縄文に縦位のキザミを付した瘤状突起を貼り付けている。	安行式
〃	178	C 1 i_0　I 層	胴　部	帯縄文とキザミを施し，区画内は磨り消されている。	〃
〃	179	表　採	口縁部	波状口縁部に帯縄文を施し，その下位に沈線を施す。瘤状突起に横位のキザミを付けている。	〃
〃	180	D 1 a_9　II 層	〃	波状口縁部に瘤状突起を縦列に2個貼り付け，突起上に縦位のキザミを施している。	〃
〃	181	D 1　I 層	〃	帯縄文に瘤状突起を貼り付け，横にキザミ目を施し，以下に瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	182	D 2 b_2　〃	〃	縄文を施した後に沈線を付し，瘤状突起にキザミを施す。	〃
〃	183	C 1 j_9　〃	〃	弧状の沈線を施し，瘤状突起を口唇部から縦位に貼り付け，突起にキザミを入れている。	〃
〃	184	表　採	〃	波状口縁部で口唇直下に紐線を貼り付け，爪形状の押捺を加えている。	〃
〃	185	D 1 a_9　II 層	〃	波状口縁部に内面から外面にかけてキザミを付けた瘤状突起が貼り付けられたが，波状口縁の頂部が欠損したため，内面と外面に瘤状突起が残っている。	〃
〃	186	C 1 j_0　I 層	〃	2条の沈線間にキザミを施している。	〃
〃	187	D 2 a_1　II 層	〃	粘土を貼り付け縦位のキザミを施している。	〃
〃	188	C 1 i_9　〃	〃	口縁に粘土を貼り付け，縦位のキザミを内・外面に付けている。	〃
〃	189	D 2 a_1	胴　部	縄文を巡らし以下に弧状の条線を施した後，1条の太い沈線を横に走らせている。	〃
〃	190	C 1 i_0	〃	曲線的な沈線区画内に縄文を施している。	〃
〃	191	C 1 j_1　I 層	〃	曲線的な沈線区画内に縄文を施している。	〃
第26図	192	D 1 b_9　〃	〃	横位の沈線間に縄文を施し，区画外は磨り消している。	〃
〃	193	C 1 h_9　〃	〃	口縁の下にあり，帯縄文の下位に平行な列点状刺突文を施している。	〃
〃	194	C 1 i_9　〃	〃	キザミを施した横位の隆起線で区画し，上位に縄文を施している。	〃
〃	195	D 2 b_1　II 層	〃	縦位の隆起線に細かいキザミが施されている。	安行式
〃	196	表　採	〃	帯縄文と瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	197	C 1 i_9　I 層	〃	横位の沈線間にキザミを施し，上位には縄文を施している。	〃
〃	198	表　採	〃	帯縄文に粘土を貼り付けている。	〃

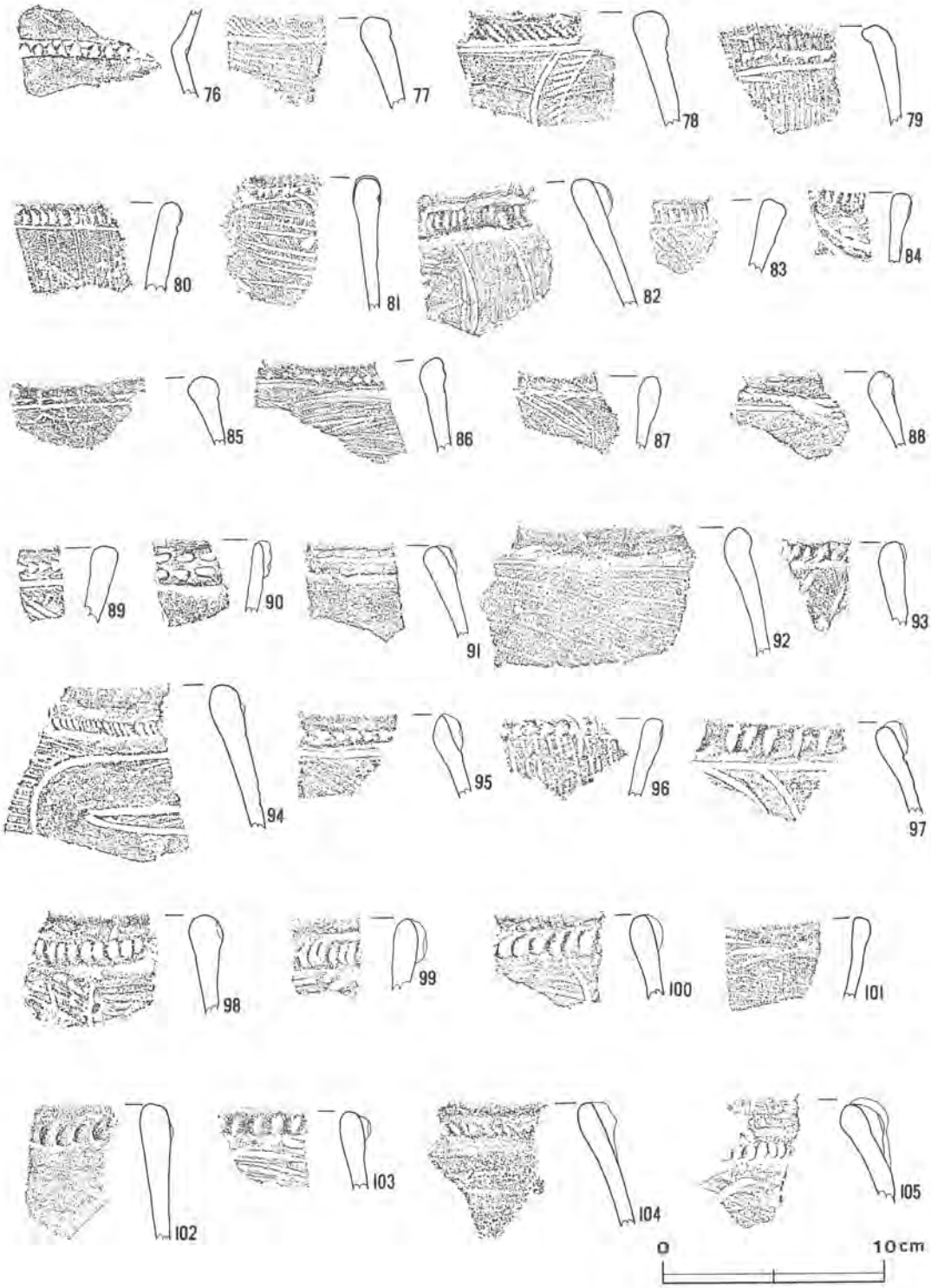
婦版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第26図	199	表　採	胴　部	沈線で区画し，外にキザミ，内に斜格子目状の沈線を施す。ブタ鼻状突起を貼り付けている。	安行式
〃	200	表　採	口縁部	帯縄文下に枠状沈線を加え，瘤状突起の下にキザミを付けている。	〃
〃	201	C2j_2　I層	胴　部	2つの瘤状突起を貼り付け，突起に縦位のキザミを施している。	〃
〃	202	D1a_0　〃	〃	縄文の地文にブタ鼻状突起を貼り付け，後に横位の沈線で区画し，区画内にキザミをつける。	〃
〃	203	C2h_1　〃	口縁部	沈線で区画し2列の刺突文を施している。	〃
〃	204	D1b_0　〃	〃	無文帯の下に横走する沈線を施している。	〃
〃	205	C2i_1　II層	〃	帯縄文を有し，口唇から3本の横位の沈線を施している。	〃
〃	206	C2i_2	〃	弧状の沈線で区画し，区画内に縄文を施している。	〃
〃	207	C2i_1　II層	〃	「く」の字状に折れる口縁部片で縄文を施している。	〃
〃	208	表　採	胴　部	横・縦位の沈線で区画し，区画内に刺突を縦列させている。	〃
〃	209	C1i　I層	〃	横位の紐線を貼り付け，上にキザミを施している。	〃
〃	210	D1a_8　II層	〃	弧状の沈線で区画し，区画内は縄文を充填している。	〃
〃	211	C1i_9　I層	〃	縄文を地文に沈線で区画し，区画内を磨り消している。	〃
〃	212	D2b_1　〃	〃	直線・曲線的な沈線を施している。	〃
〃	213	C2i_1　II層	〃	瘤状突起に横位のキザミを施している。	〃
〃	214	表　採	〃	縦位の沈線間に縄文を施している。	〃
〃	215	D2a_2　II層	〃	横位の沈線間に縄文を充填している。	〃
〃	216	D1a_9　〃	口縁部	波状口縁に沈線を施し，粘土粒を貼り付けている。	〃
〃	217	表　採	〃	口唇に紐線を貼り付けている。	〃
〃	218	D2a_1　I層	〃	縄文を地文に，横位の沈線を施している。	〃
〃	219	D1b_8	〃	口縁に帯縄文を施し，2本の横位の沈線を施している。縦位の瘤状突起に横のキザミを施している。	〃
〃	220	表　採	〃	帯縄文を施し，以下に沈線を付し，口唇から縦位に瘤状突起を貼り付けている。	〃
〃	221	D2b_7	胴　部	玉抱き三又文を有する薄手の土器である。	〃



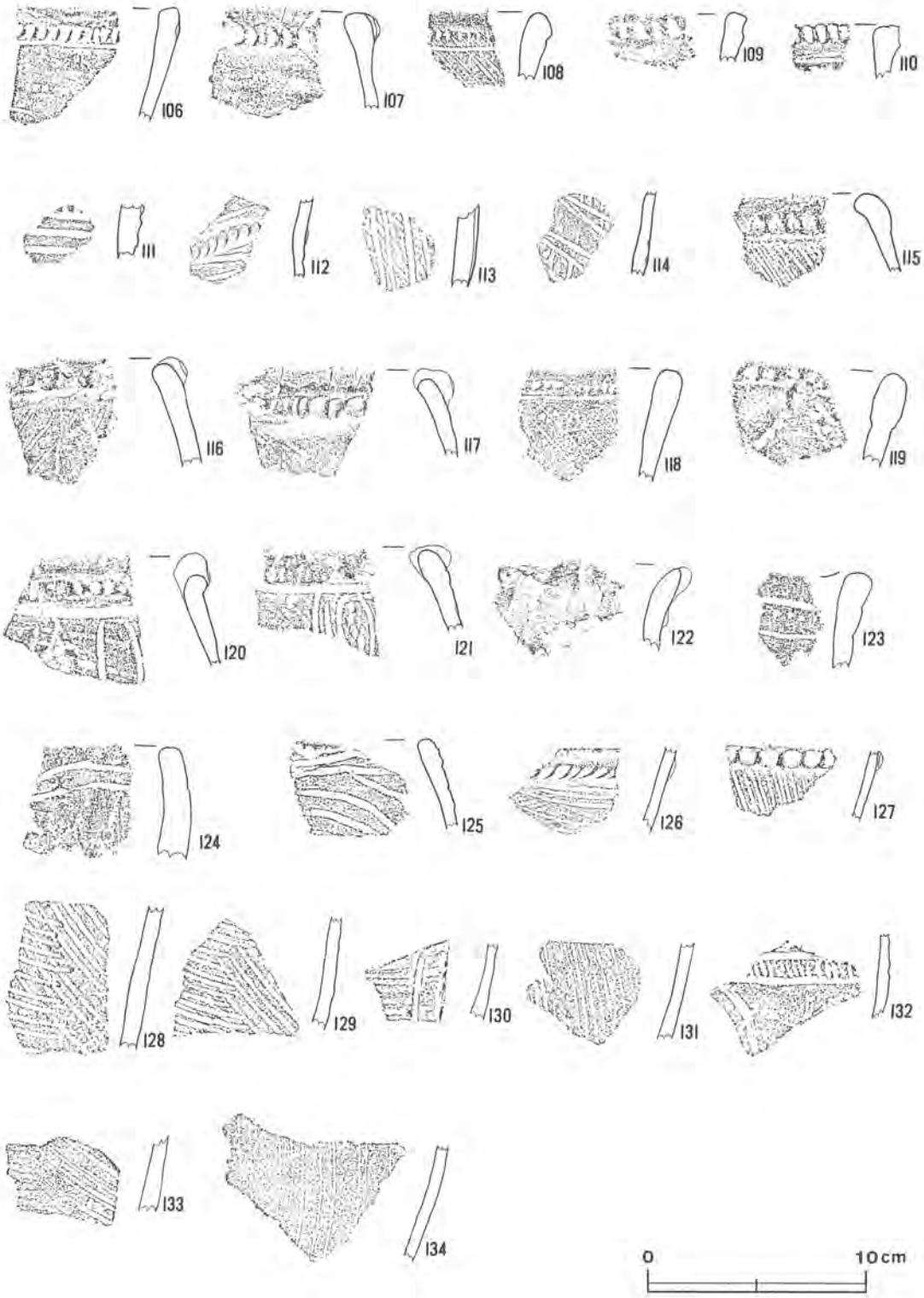
第20図　グリッド出土土器拓影図(1)



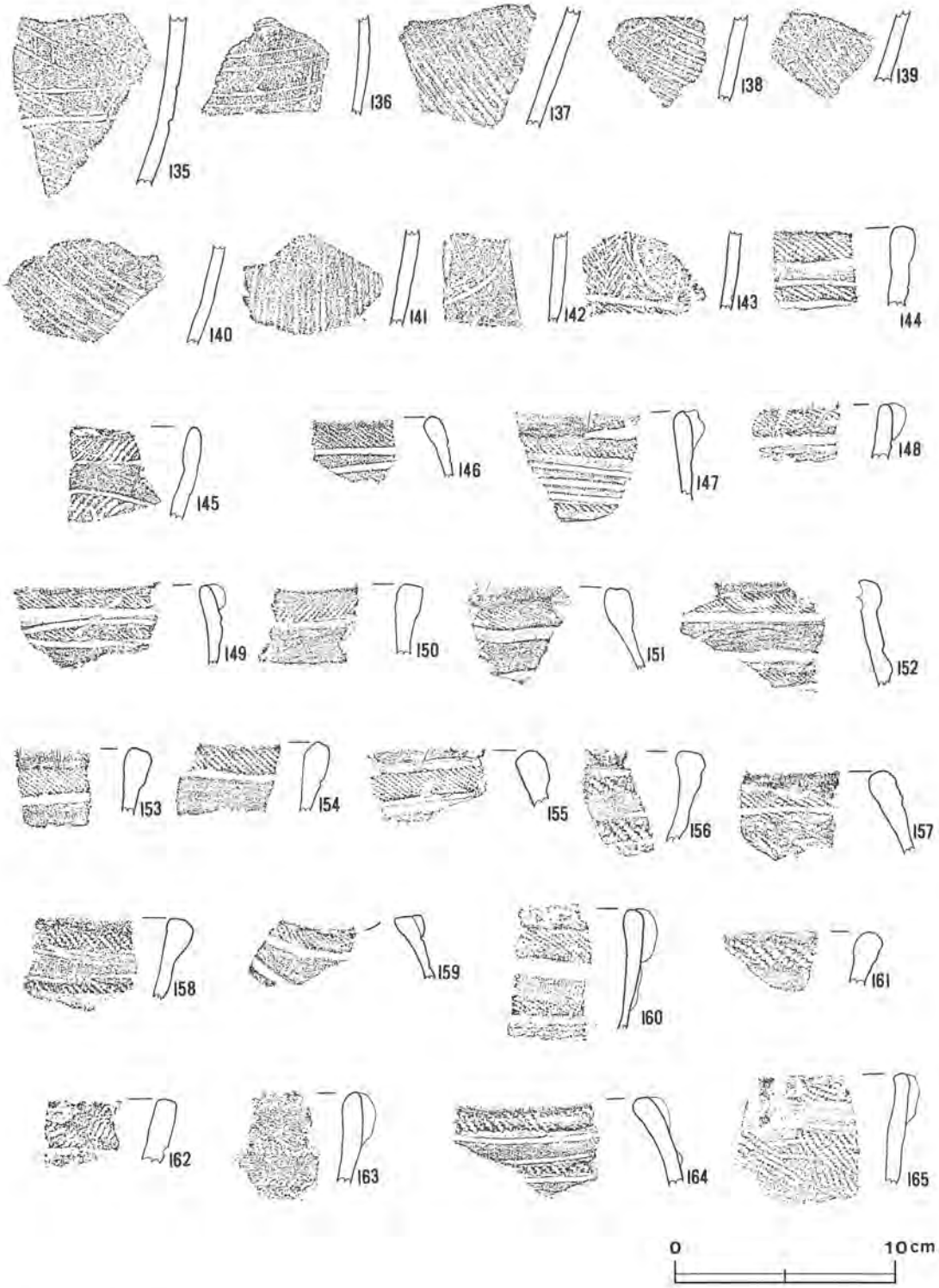
第21図　グリッド出土土器拓影図(2)



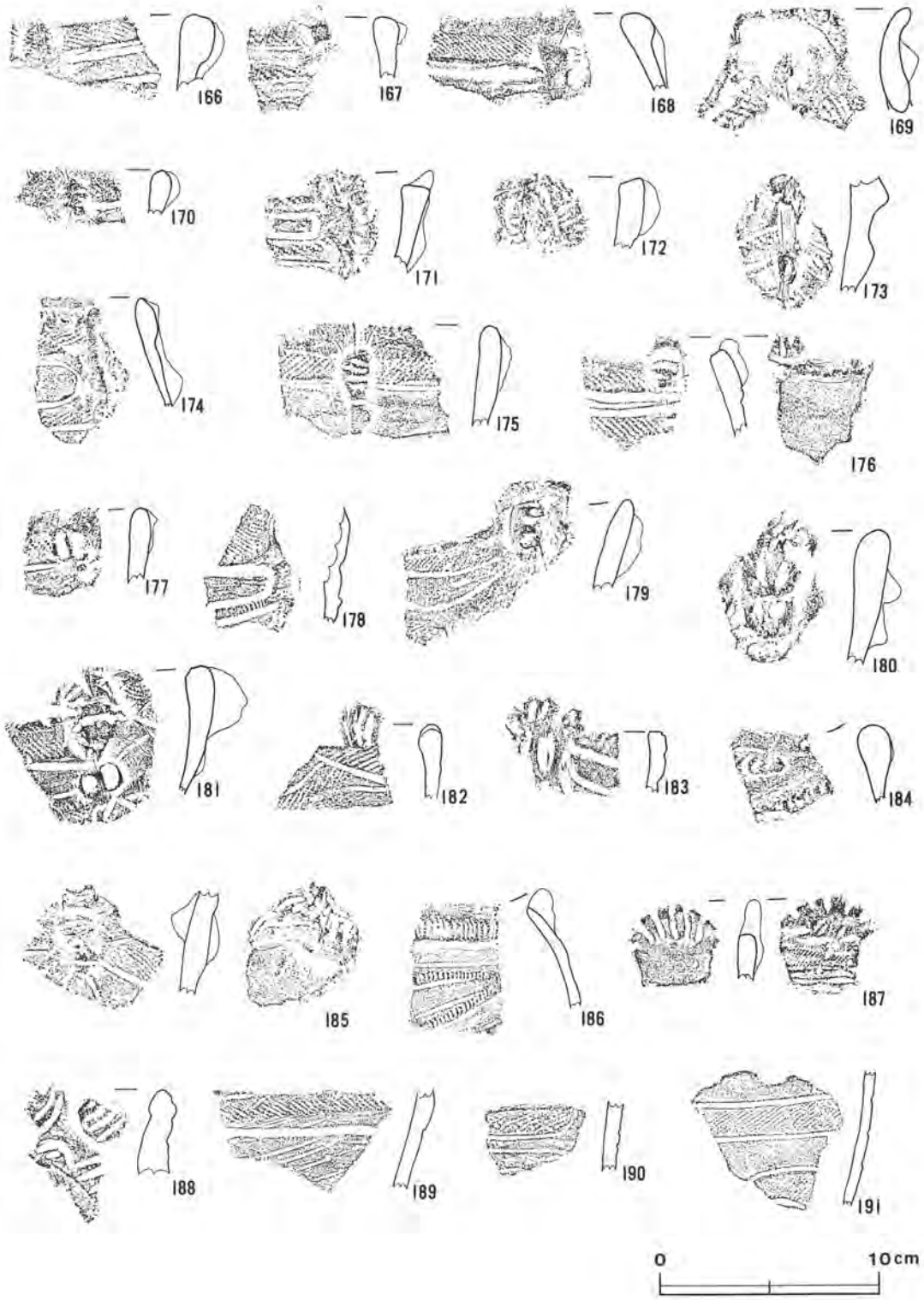
第22図　グリッド出土土器拓影図(3)



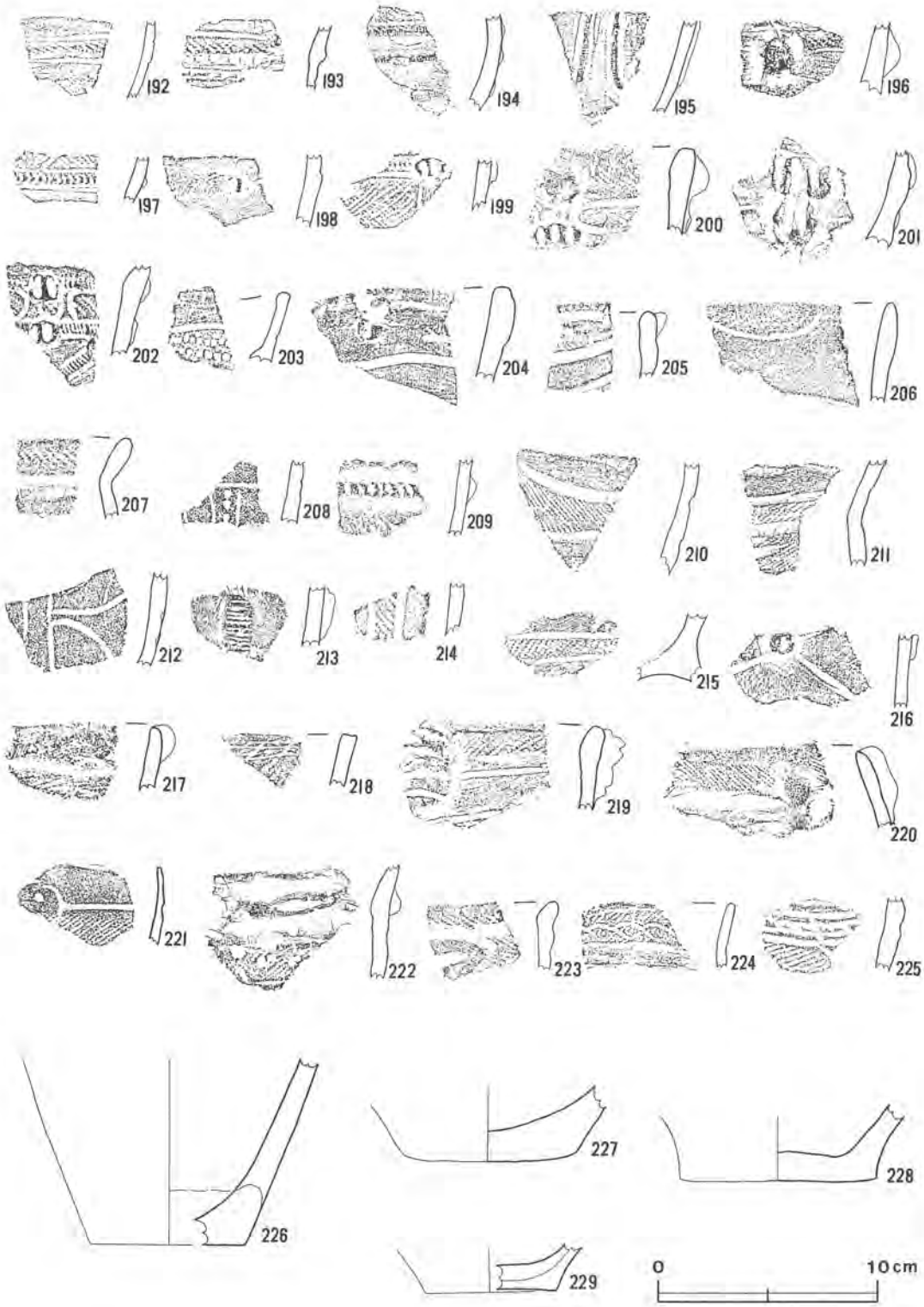
第23図　グリッド出土土器拓影図(4)



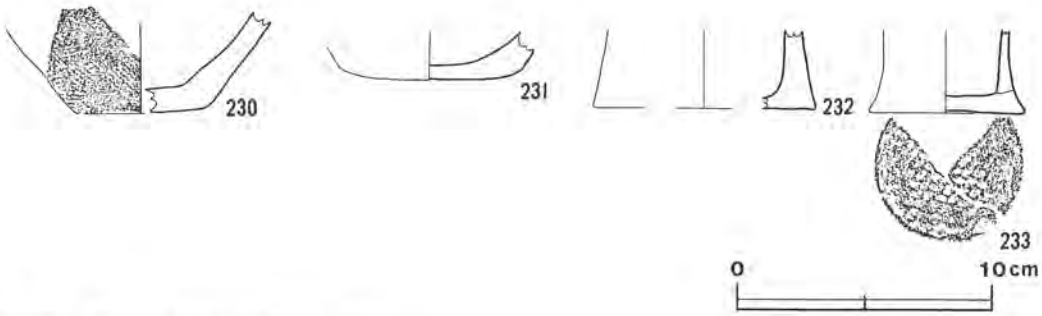
第24図　グリッド出土土器拓影図(5)



第25図　グリッド出土土器拓影図(6)



第26図　グリッド出土土器拓影図・実測図(7)



第27図　グリッド出土土器実測図(8)

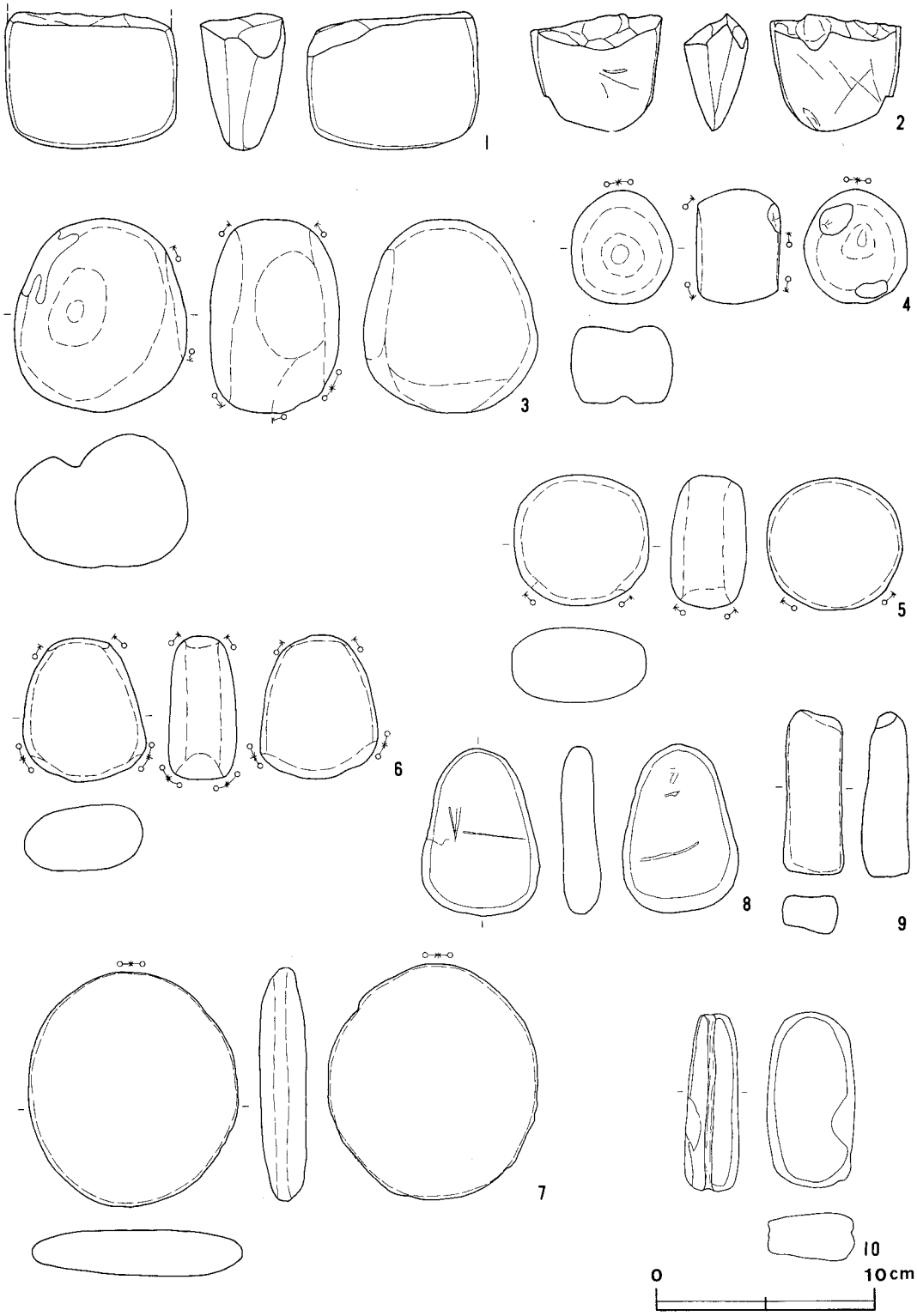
図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第26図	222	山林部	胴　部	瘤状の突起間に横位の沈線を有し，以下に縄文を施している。	安行式
〃	223	表　採	口縁部	太い沈線で区画し，縄文を施している。	前浦式
〃	224	D1a0　II層	〃	結節回転文を有する縄文を施し，横走させる下位に横位の沈線帯を施している。	大洞式
〃	225	D2a1　I層	胴　部	羊歯状文を施し，以下に縄文を施している。	〃
〃	226	D1a0	底　部	外面＝縦位のヘラ削りを加えている。	不明
〃	227	表　採	〃	外面＝横位のヘラ削りを加えている。	〃
〃	228	山林部I層	〃	外・内面は横位のナデ整形を加えている。	〃
〃	229	D9b6　〃	〃	外・内面はナデ整形を加えている。	〃
第27図	230	C2h3　〃	〃	底部に縄文を残している。	〃
〃	231	表　採	〃	内面＝縦位のヘラ削りを加えている。	〃
〃	232	C1h9　I層	〃	外・内面はナデ整形を加えている。	〃
〃	233	D1a9　II層	〃	網代痕を有する。	〃

(4)　石器類（第28・29図）

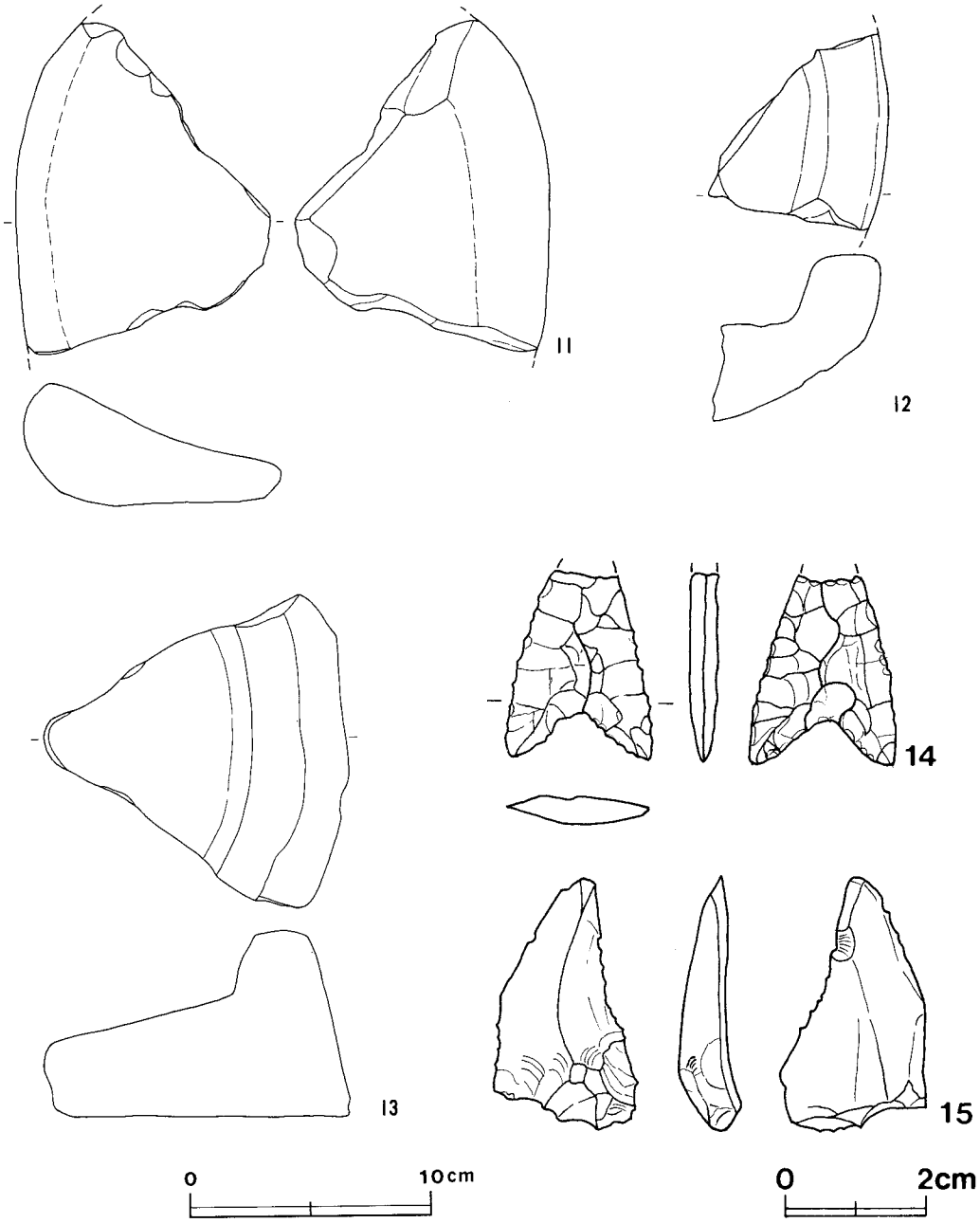
当遺跡から出土した石器類は，次のとおりである。磨石，敲石，石錘は完存品である。

グリッド出土石器類解説表

No.	器　種	出土位置	層位	石　質	備　考
第28図1	磨製石斧	C2j2	I層	砂岩	基部欠損　刃縁部に使用痕が認められる。
〃　2	〃	表　採		緑泥片岩	基部欠損　刃縁部に使用痕が認められる。
〃　3	磨　石	D2e1	I層	安山岩	片面の中央に凹み1か所がある。
〃　4	〃	SD1	覆土	〃	両面に浅い凹みが認められる。
〃　5	〃	C2j3	I層	〃	外周面に磨痕が認められる。



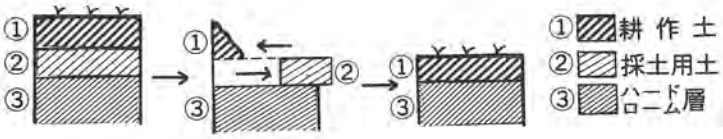
第28図　グリッド出土石器類実測図(1)



第29図　グリッド出土石器類実測図(2)

No.	器　種	出土位置	層位	石質	備　考
第28図 6	磨　石	C 1 j_9	I 層	安山岩	外周面の縁辺に磨痕が認められる。
〃 7	〃	SD 3	覆土	〃	全周を磨石として使用している。
〃 8	敲　石	SD I	〃	砂岩	先端に敲打痕が観察される。
〃 9	砥　石	C 1 j_9	〃	硬質砂岩	長軸の片面に極浅い溝状の磨痕が観察される。
〃 10	石　錘	D 2 c_1	〃	安山岩	長軸の側面に極浅い一条の溝を巡らす。
第29図 11	石　皿	SD 1	〃	〃	石皿片。両面を使用して凹みを有している。
〃 12	〃	SD 3	〃	砂岩	石皿片。一面が使用により大きく凹んでいる。
〃 13	石　臼	〃	〃	安山岩	石臼片，底部はかなり厚く，中心部に向かってあげ底状にうすくなっている。
〃 14	石　鏃	D 2 b_1	I 層	チャート	薄身で，丁寧なつくりであるが先端部が欠損している。
〃 15	掻　器	表　採	〃	チャート	片面縁部に刃つぶしが施されている。

4　まとめ



第30図　採土工事説明図

二十五里寺C遺跡を含めた周辺地区は，前節でも触れたように，以前からの地形をわずかに残す山林部を除いて，土砂の採土工事のためにハードローム面（③）が露出し，ハードローム面が水田や畑として耕作されている。

当遺跡の中央を，農道が東から西へ横断しており，その北側の山林部の西側の一部と南側の畑部分が調査地区であった。細長い山林部は，西から採土が行われ，西壁の断面に検出した遺構の全てが確認できた。畑部分は，約2mの深さでエリア全面に採土が行われたと推定され，遺構はその時破壊されたものと思われる。調査の結果，現地形をとどめていたわずかな山林部から，住居跡2軒・溝3条を検出し，畑部分から磨滅した縄文式土器片を多量に採取した。畑部分から出土した縄文土器片は，採土を行うとき表土を一旦除去し（①），その下を採土し（②），採土した後に，表土をもどして畑としたといわれているので，その表土に混入していた土器片が採取できたものと思われる。

(1)　遺構について

住居跡2軒とも土師器片を伴っていた。平面形は，いずれも方形を呈するものと推定される。壁は軟弱で，ほぼ垂直に立ち上がり，床面は平坦で，踏み固められていた。しかし，いずれの住

以外は，調査区内が狭いため，それぞれの形態及び構造について，詳細に調査することはできなかった。出土土器も第1号住居跡が覆土からで，第2号住居跡は床面からであった。土器は，土師式土器の胴部片で表面に刷毛目整形痕を残しており，古墳時代前期の五領期に比定されるものと思われる。第2号住居跡から，赤彩の施された土師式土器の小片が出土した。

溝は，遺跡の山林部に3条確認され，いずれも東の調査区外に延びている。第1・2号溝は近接し，第3号溝は第2号住居跡の北側からやや離れて検出された。第2号溝は小規模で，東側の調査区外へと直線的に延びている。遺物は，土師式土器の小片が出土しているが，その出土状況から判断して遺構に伴うものではないと考えられる。第1・3号溝は調査区外の山林部で接続するらしく，方形状に掘られた東コーナー部を調査したものと推定される。溝に伴うと考えられる遺物は出土していないが，時期は遺物の流れ込みからみて古墳時代以後と考えられる。性格等については不明である。

(2) 縄文式土器について

当遺跡で最も多く出土したのは，縄文土器片である。しかし，その大部分は，採土工事のとき表土を一旦とり，その下層を採土して，表土をもどして畑としていた所から出土したものであるため，耕作により細かく砕かれ，磨滅したものであった。遺物の層位的な出土状況をみても，新旧入り乱れて層位に関係なく出土している。

土器の器形をうかがえるものはなく細片である。したがって型式分類が困難なため，以下のように概略を記述するにとどめた。

当遺跡からは，縄文中期・後期・晩期の各時期に編年される破片が出土した。中期では，加曽利E式(第20図2～29)に属するものが出土し，文様としては断面三角形を呈する微隆線文によって区画され，その内部に縄文が施されるもの，半截竹管の背の部分を器面に押しつける沈線文で長楕円形に区画し，磨消部と内部に縄文部を区別しているものがみられる。

後期に編年される土器群としては，称名寺式，堀之内I・II式，加曽利BI・II式，安行I・II式に属するものが出土している。後期の土器片は，採取した土器の割合でみると，全体の9割を占める。その中で，中心は加曽利B式・安行式のものである。称名寺のものは（第20図30）わずかに数片のみであり，いずれも胴部片で，半截竹管による手法を用いて器面を区画し，区画外を磨消し区画内に縄文を施している。堀之内式（第20図31～37，第21図38～50）の土器は，口唇部に沈線文を巡らし，口縁部から胴部にかけ曲線文（第21図43・44），直線文（第21図40），蛇行沈線文（第21図48・49）を施す沈線文系の土器片で，地文はそのほとんどが縄文である。これに対して，磨り消しや縄文を施す土器片が出土している。前者は堀之内I式に，後者は堀之内II式に編年されるものと考えられる。加曽利B式（第21図51～75，第22図76）の精製土器は，磨り消し縄文の手法に弧線文（第21図75），入組状文が加わり，器壁は丹念にヘラ磨きされ黒色を

呈しているものが多い。粗製土器は，大型になり紐線文（第21図65〜70）の貼り付けが特徴となり，口縁部から縄文を地文とし斜行する沈線を施している。安行式土器は，文様が口縁に帯縄文（第24図144〜155），連続刺突文（第22図85〜91）を付し，さらに瘤状突起（第24図165・第25図166〜185）が貼り付けされ，その上に縦位のキザミが施され，瘤状の形が「ブタ鼻状」に似ているのが特徴である。粗製土器（第22図77〜105・第23図106〜134）は紐線文を貼り付けし，口縁部から胴部にかけて斜位・弧状の条線文が施されている。

晩期に編年される土器群としては，安行IIIa式（第26図221），前浦式（第26図223），大洞式（第26図224・225）に属すると思われる土器片が出土しているが，数は少ない。

(3) その他の遺物

遺跡の調査結果では，土器以外土製品は出土しなかった。石器類は15点で欠損しているものがほとんどである。磨製石斧，石錘，掻器等の石製品がみられた。

当遺跡は，遺物等から判断して，縄文中期後葉から集落が営まれはじめ，後期から晩期にかけて隆盛期をむかえたものと思われる。それは極めて時間的に長い期間である。当遺跡の周辺地域には，現在は晩期にまで存続する遺跡は認められず，当遺跡のみであることから，本地域における当時の人々の重要な生活舞台であったと考えられる。また，茨城県下においては，晩期は県西の南地域で安行系土器が多く出土し，県北では大洞系土器が出土すると指摘されている[注(1)][注(2)]。当遺跡において数は少ないが，安行式土器と大洞式土器の混入していたことは，関東地方の縄文時代晩期前葉の土器型式に大洞系土器の影響が，さまざまな形でおよんでいるといわれていることを明確に示すものであり，各土器の分布圏を検討していく上で，貴重な遺跡であったと考えられる。

また，山林部から古墳時代前葉の住居跡2軒が検出され，採土されて畑とした地域から，縄文時代後期中葉から晩期前葉にかけての土器片が多量に出土していることを考え合わせると，縄文時代の採集経済から弥生的な生産経済を経て古墳時代まで，本地域が安定した自然的な生活環境を維持していたものと思われる。

最後に，採土工事の際，当遺跡から多量の土器片・土製品・石製品が出土しており[注(1)]，石錘・石鏃・各種石斧・石棒・石皿・磨石・土錘・土偶・土版・耳飾り・岩偶・岩版・独鈷石・有孔土製円板など[注(2)]の一部が総和町教育委員会に保存されているが，かなりの遺物が散逸してしまったようである。

注

(1) 田川良・道沢明 「茨城県猿島郡三和町二十五里寺（つうへいじ）遺跡の研究」『なわ』 昭和50年

(2) 川崎純徳 「縄文時代，土偶，土版，岩版，資料（その1）」常総台地研究会資料1 昭和47年

第4節　溜原A遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町大字大和田字溜西1,776-5ほかに所在し，調査対象面積は，3,400㎡である。現況は畑である。当遺跡は三和町の西端で，当町を横断する国道125号線の南側に位置し，北約100mに総和町溜原の集落，東約600mに下片田集落がある。遺跡の東側は，大川の支流によって開析された狭小な水田である台地は標高約22mで，水田との比高は約4mである。当遺跡の北東約200mの東に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に溜原B遺跡が所在している。遺跡からは極少量の縄文式土器片と土師式土器片が出土した。

2　調査経過

〈昭和59年度〉

7月後半　二十五里寺遺跡の遺構調査と並行して，27日に当遺跡の調査を開始した。草刈り作業を行った後，調査前の遺跡全景写真撮影を実施した。X軸＋22,060m，Y軸—3,240mの交点を基準として方眼杭打ちを行い，調査区を設定した。

8月前半　続いて4分の1の割合でグリッド発掘を実施した。確認面までの深さは30～40cmである。縄文式土器片や土師式土器片がそれぞれ数点出土したが，遺構は確認できなかった。

8月後半　グリッド発掘を続いて実施したが，やはり遺構や遺物を確認できなかった。その後土層観察調査をするため，当遺跡の東西，南北に幅1mのトレンチを入れた。23日に調査後の遺跡全景写真撮影を行い，調査地域内の全ての調査を完了した。

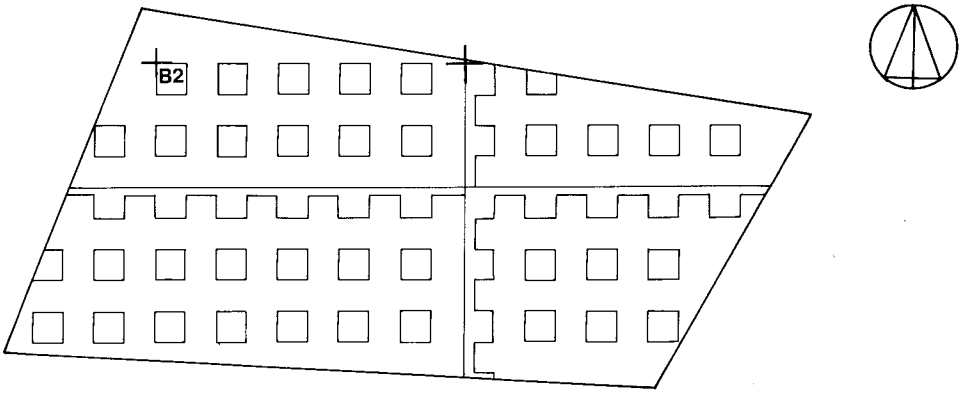
3　遺構・遺物

当遺跡では遺構は検出されず，わずかに縄文式土器片・土師式土器片が検出された。

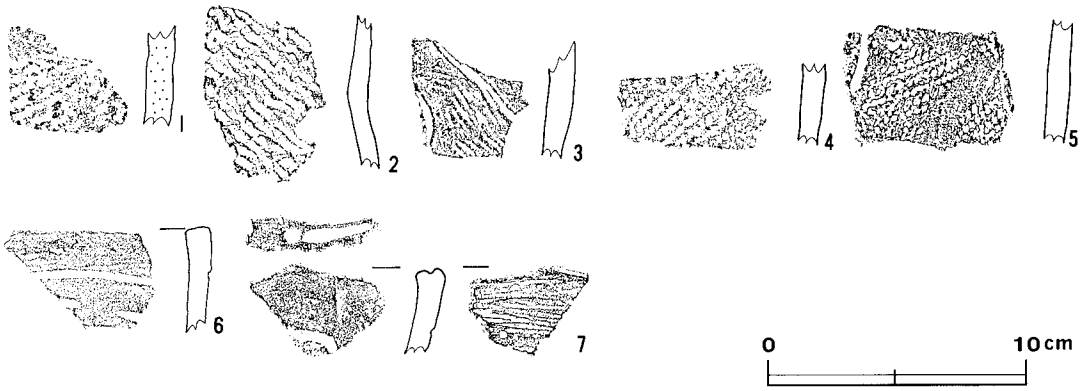
(1)　グリッド出土土器（第33図）

当遺跡から出土した縄文式土器片は，次のとおりである。

第31図　溜原Ａ遺跡地形図



第32図　溜原A遺跡全体図



第33図　グリッド出土土器拓影図

グリッド出土土器拓影図解説表

図版番号	遺物番号	出土地点	器形・部位	表面・裏面の特徴	備考
第33図	1	B3c9　I層	胴部	単節の縄文を施している。繊維をふくむ。	
〃	2			内側―ヘラ状の工具で調整，外側―「く」の字状に外傾して無節の縄文を施している。	
〃	3	B3g7　〃	〃	縄文地文上に沈線を施している。	
〃	4	B3i7　〃	〃	LR縄文を施している。	
〃	5	B3i7　〃	〃	LR縄文の地文上に沈線を施している。	
〃	6	B3g7　〃	口縁部	内側―磨き，外側―口唇直下に沈線が巡っている。	
〃	7	B3g7　〃	〃	波状口縁部で沈線を施している。口唇部上面に刺突文と沈線文を施している。	

4　まとめ

調査の結果，縄文式土器・土師式土器の小破片を表土層から採集することはできたが，遺構は検出されなかったため，遺跡の性格や時期を明確にすることはできないが，遺物の出土状況から，集落は，道路建設予定地の区域外に形成されていたものと推定される。

第5節　下片田遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町大字下片田字中道西715-3ほかに所在し，三和町の北西部に位置する。現況は畑で，面積は17,600㎡である。栃木県小山市から南流する大川と，三和町の西端を南へ流れる大川の支流によって挟まれた南北方向に延びる細長い台地の北部に立地している。遺跡の南側の一部は水田になっており，北から南にかけて緩やかに傾斜しており，標高は19～24mである。水田との比高は0～5mである。当遺跡の約200m南を国道125号線が東西に走り，遺跡の南東約1,300mに三和町の中心部がある。

当遺跡の近くには，北東約1.8㎞に後円山古墳（三和町駒込），東約1.2㎞に諸川八幡塚古墳（三和町諸川）などがある。また，北西約1.6㎞に奈良・平安時代の製鉄跡である弁天遺跡（総和町上大野）があり，南西約1.8㎞に同じく製鉄跡である東小跡遺跡（総和町稲宮）がある。さらに東約1.5㎞に鎌倉・室町時代の諸川西門城跡（三和町諸川）が所在する。

当遺跡からは，縄文時代の土坑が1基，時期不明の土坑が20基検出されている。遺物は，グリッドから縄文式土器片や，土師器片・内耳土器片・陶器片・石器が遺物収納箱に7箱出土し，第21号土坑から石器・剝片が1箱出土している。

2　調査経過

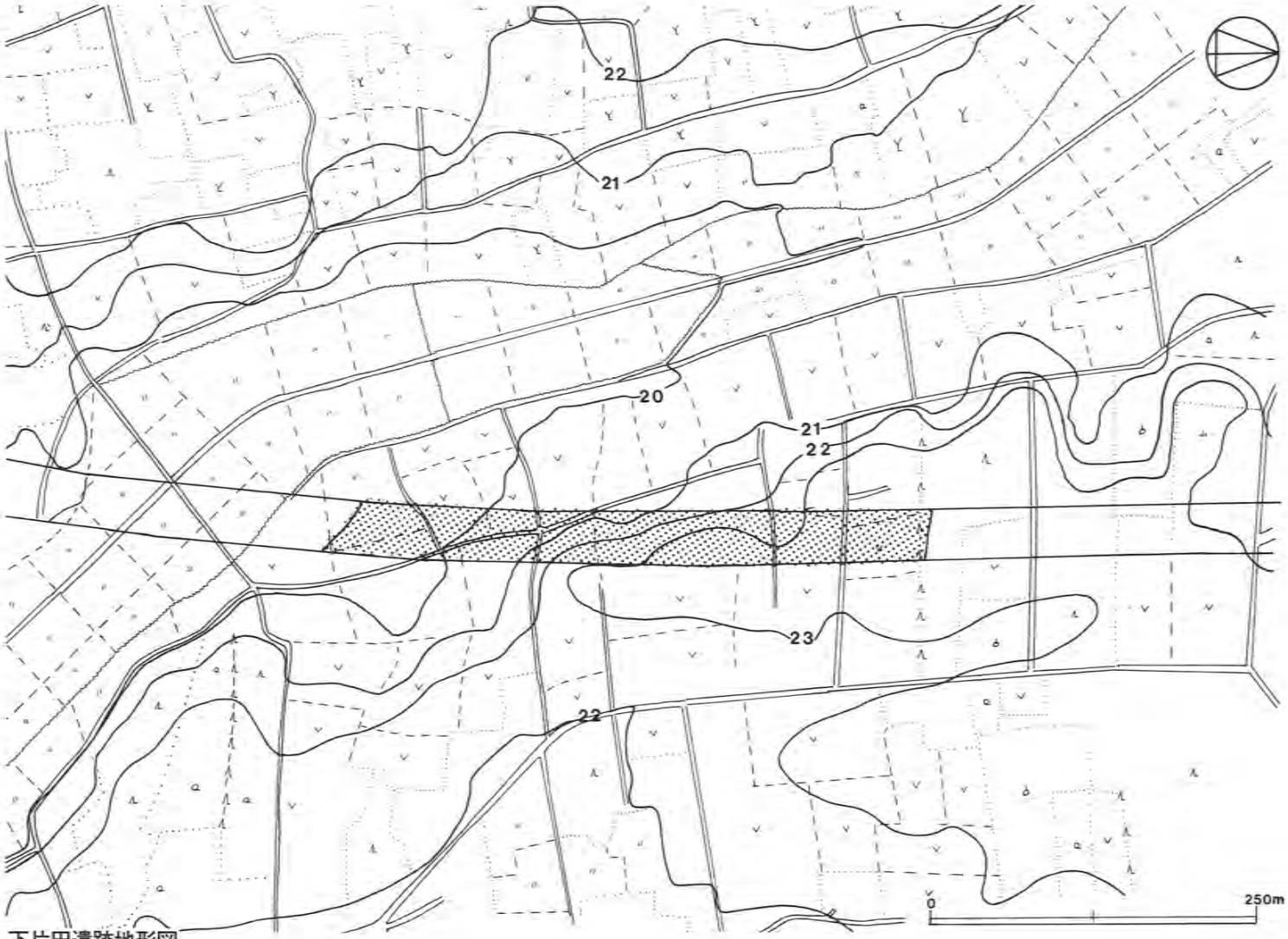
〈昭和60年度〉

7月　　1日に草刈り・上物除去を開始し，4日に草刈りを終了して発掘前の全景写真を撮影した。5日，グリッド杭打ちを行い，グリッド発掘による遺構確認に着手した。10日までに16分の1グリッド発掘を終了したが，各グリッドからの出土遺物は極めて少なく，遺構も確認できなかった。

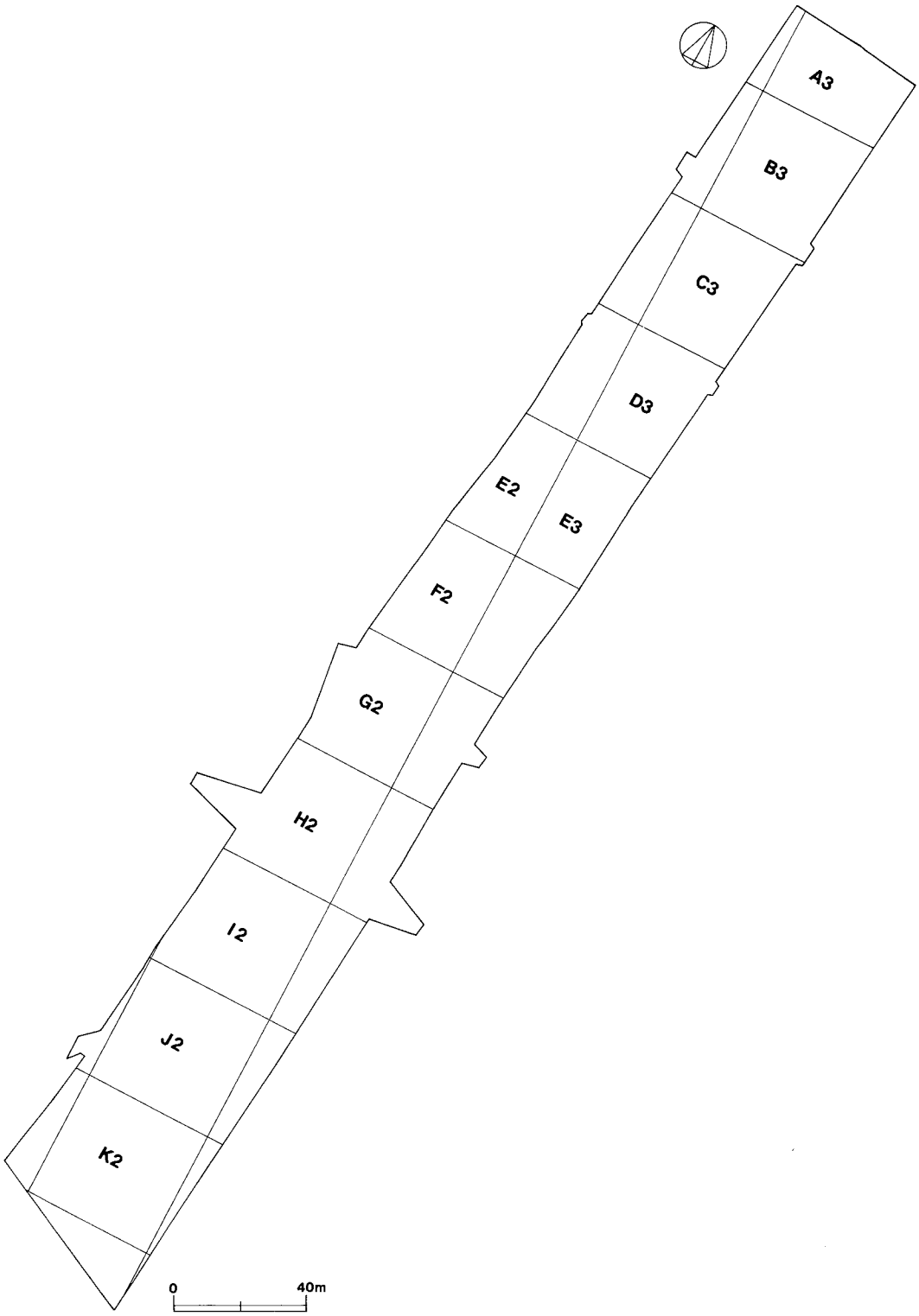
11日から8分の1グリッド発掘により遺構確認を行い，遺物の量は少ないが，部分的に土坑状の落ち込みが確認された。17日に4分の1グリッド発掘が終了，18日から遺跡南側の水田部にある溜水を流し出すため，排水溝を掘った。

22日から4分の1グリッド発掘を行った。遺跡北部のA・B区から土坑が数基確認されたので，28日からはA・B区のグリッド拡張も並行して行った。

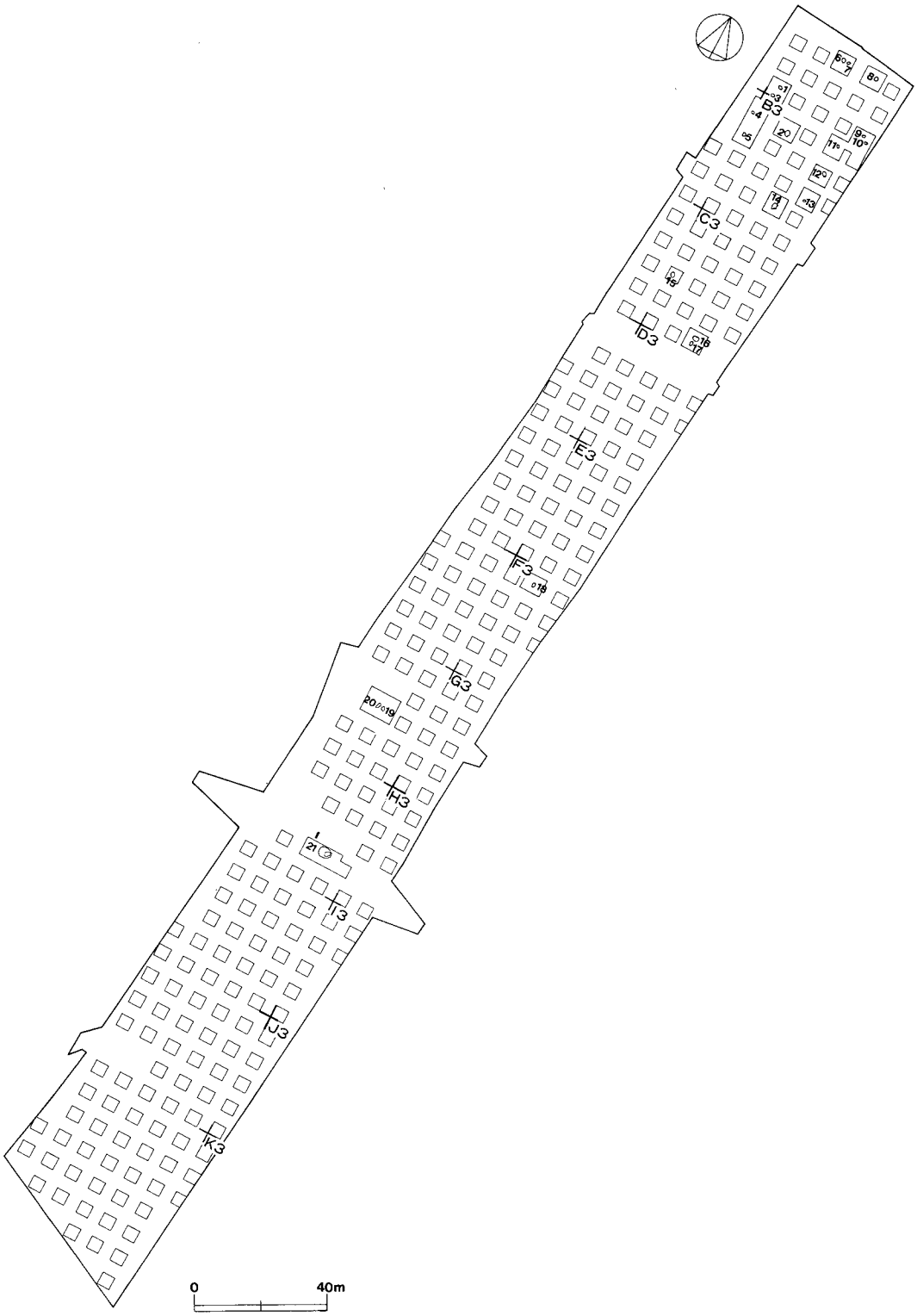
乾燥期を選んで，30日から水田部の4分の1グリッド発掘を開始した。並行して第1・2号土坑の掘り込みを行い，セクション実測，ベルト除去を終了した。



第34図　下片田遺跡地形図



第35図　下片田遺跡全体図



第36図　下片田遺跡グリッド図

8月　　引き続き水田部の4分の1グリッド発掘を行った。夏場なので雑草の伸びが目立ち，19日から再度の草刈りも行った。草刈りは27日まで続く。26日，第21号土坑の掘り込みを開始し，石器剝片が多量に出土した。29日，第21号土坑の遺物90点を取り上げた。30日，水田部の4分の1グリッド発掘も終了した。

9月　　遺跡中央のE・F・G区の4分の1グリッド発掘を行いながら，第21号土坑の掘り込みを続けた。4日，第21号土坑の平面図・完掘写真撮影をし，調査を終了した。その後，B・C・D区の4分の1グリッド発掘を終了させた。

9日から土層観察用のトレンチ掘りを水田部から開始し，10日には中央部のトレンチ発掘にかかり，同時に水田部トレンチの土層実測をした。12日に北部のトレンチを掘り，中央のトレンチの土層実測を開始した。

17日第3～20号土坑の掘り込みを開始し，18・19日にセクション実測，19日の午後から20日にかけて第1～20号土坑の完掘写真撮影・平面実測を行った。同時に北部トレンチの土層実測も終了した。

24日以降，グリッド杭ぬき，遺跡内清掃をし，全景写真を撮影した。26日からは，図面点検，台帳作成を行い，撤収の準備を進めた。

3　遺構・遺物

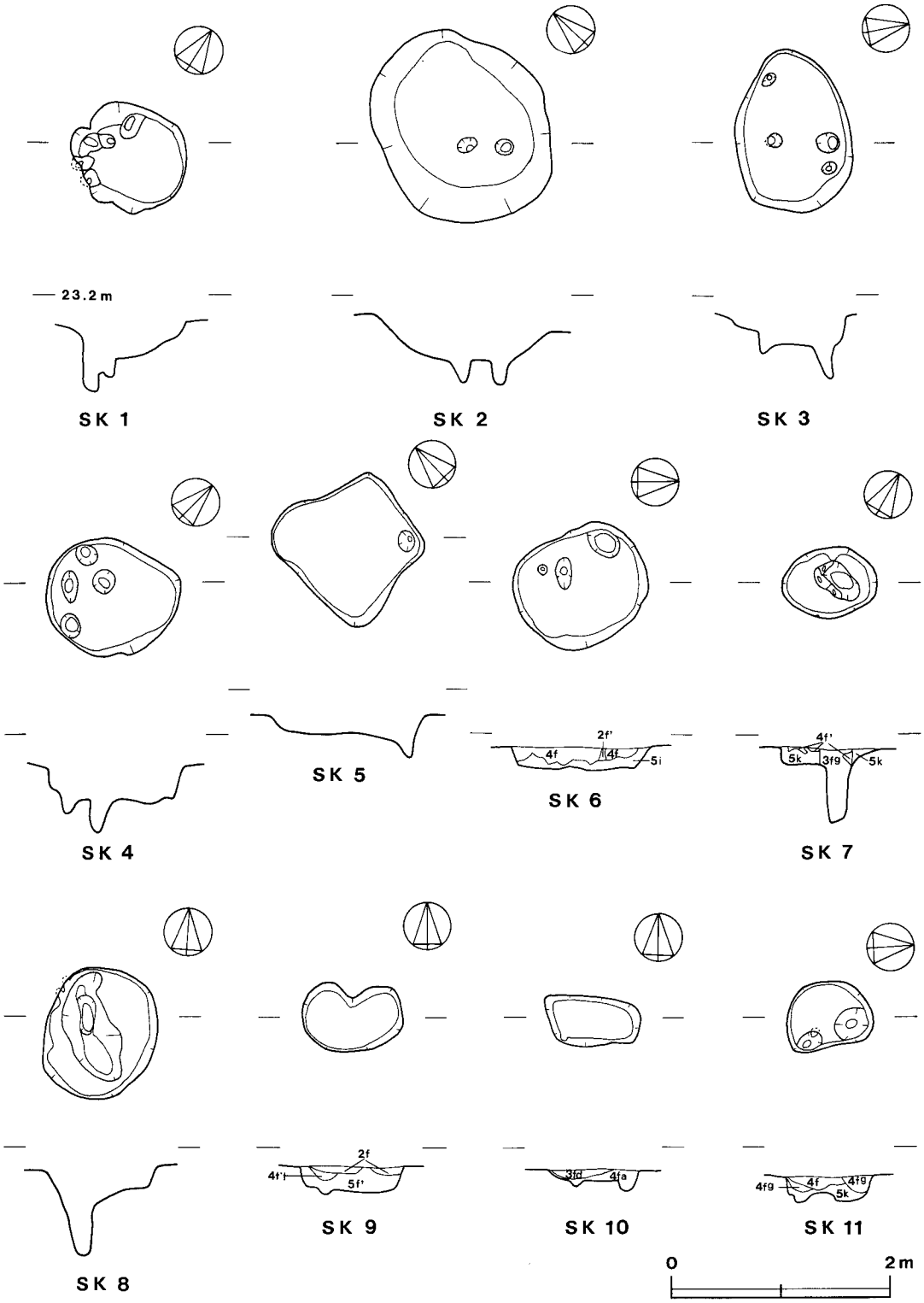
当遺跡では，土坑が21基検出された。遺物はグリッドから縄文式土器片，土師器片や陶器片が出土している。このほかに，第21号土坑からは石器と多量の剝片が出土している。

(1)　土坑（第37・38図）

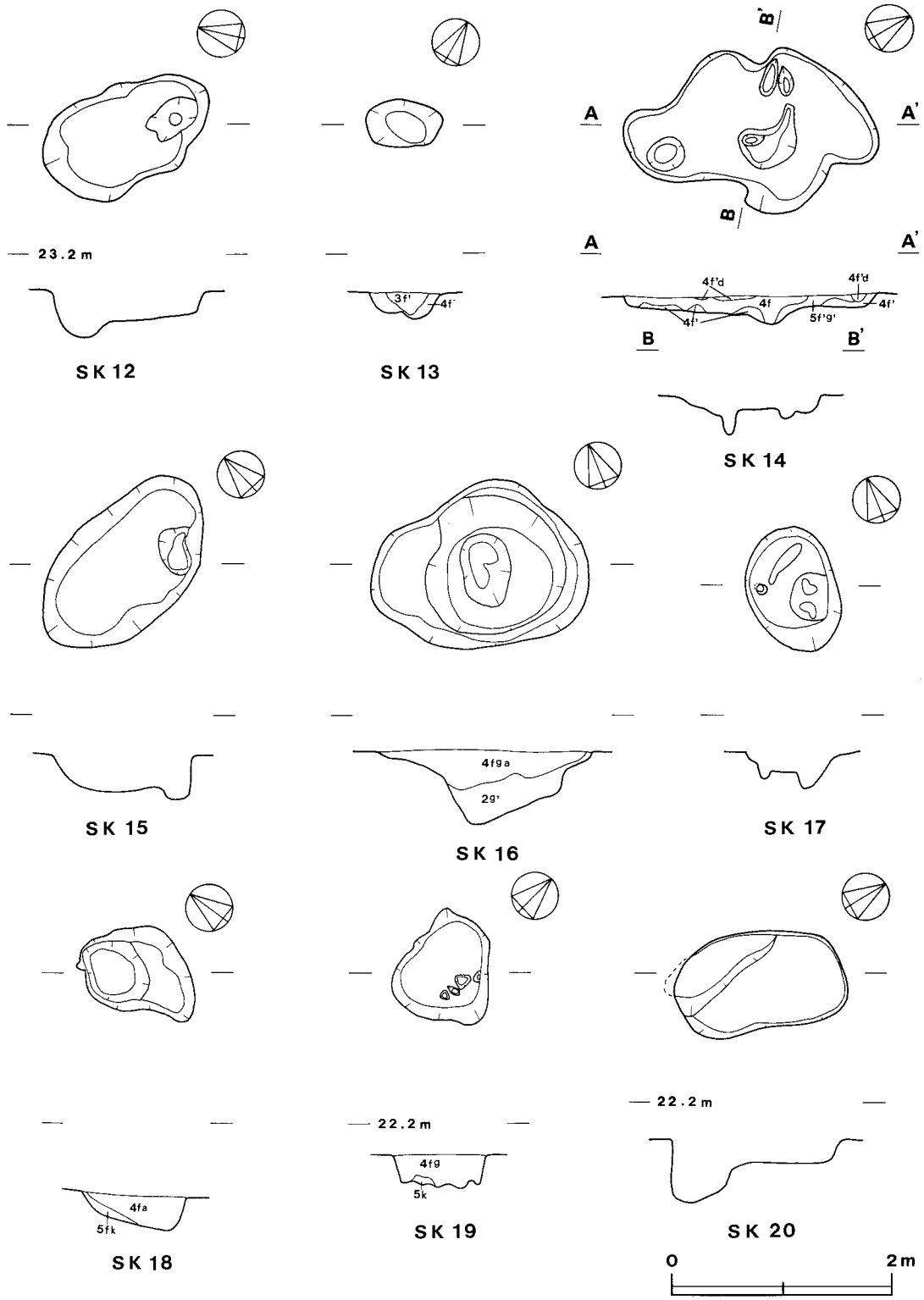
第1～20号土坑は一覧表で表し，第21号土坑は文章で記載した。

表2　土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	A3j1	N－68°－W	楕円形	1.10×0.96	64	垂直	やや傾斜	2層自然堆積		
2	B3b3	N－0°	〃	1.88×1.62	54	〃	平坦	6　〃		
3	A3j1	N－86°－W	〃	1.52×1.06	60	〃	〃	3　〃		
4	B3bo	N－32°－E	〃	1.24×1.10	62	〃	〃	2　〃		
5	B3d1	N－45°－W	不定形	1.42×1.42	40	〃	〃	3　〃		
6	A3f5	——	円形	1.22×1.20	24	〃	やや凹凸	3　〃		
7	A3f5	N－56°－E	楕円形	0.88×0.66	70	〃	有段	3　〃		


23.2m
SK 1
SK 2
SK 3
SK 4
SK 5
2f'
4f
4f
5i
SK 6
4f'
5k
3fg
5k
SK 7
SK 8
2f
4f'
5f'
SK 9
3fd
4fa
SK 10
4fg
4f
4fg
5k
SK 11
0
2m

第37図　土坑実測図(1)


23.2m
SK 12
3f'
4f'
SK 13
A
A'
B'
B
4f'd
4f
5f'g'
SK 14
SK 15
4fga
2g'
SK 16
SK 17
4fa
5fk
SK 18
22.2m
4fg
5k
SK 19
22.2m
SK 20
0
2m

第38図　土坑実測図(2)

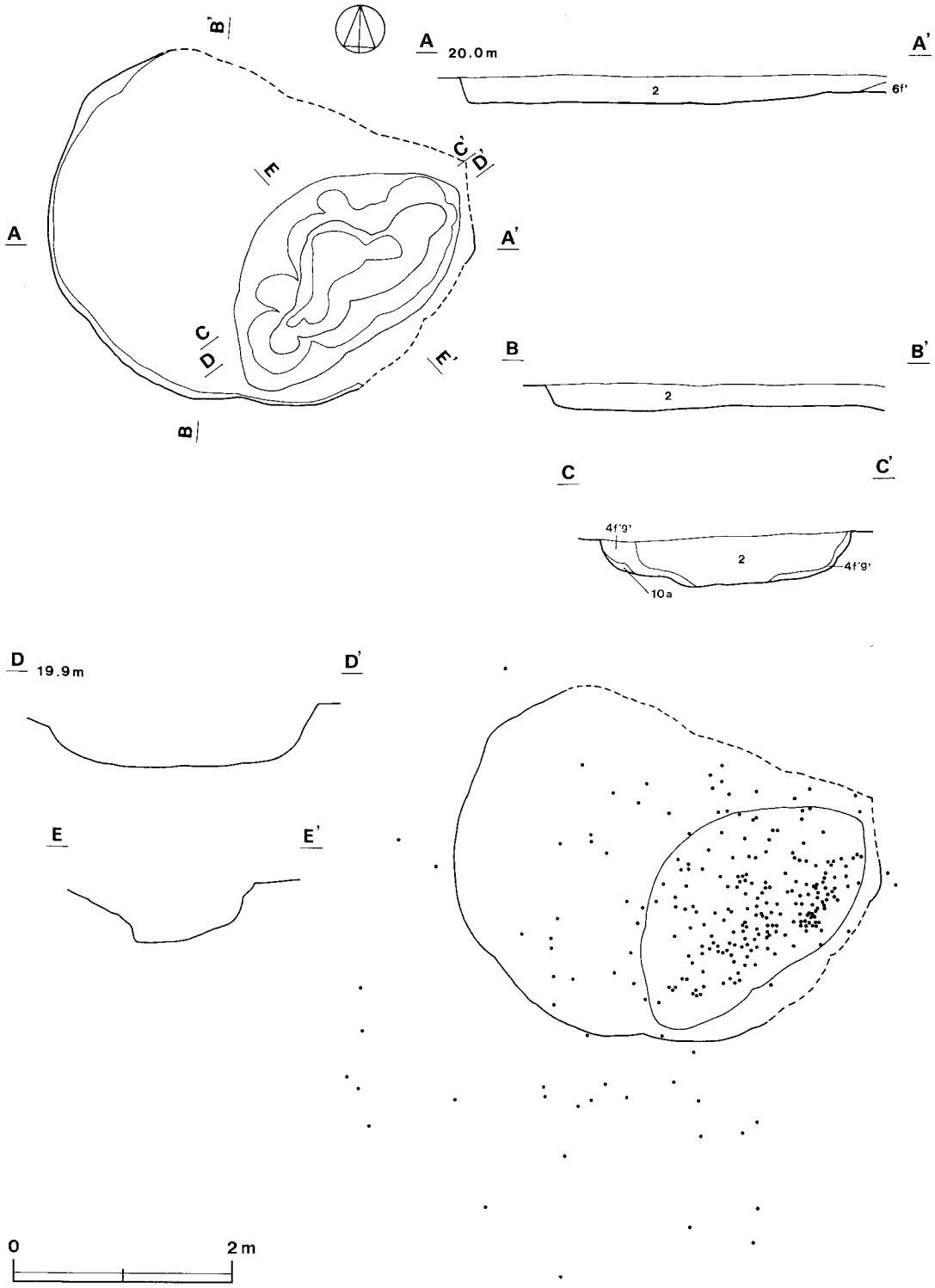
番号	位　置	長径方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆　　土	出土遺物	備　　考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
8	A3f8	N－6°－E	楕　円　形	1.22×1.00	80	垂直	凹凸	2層自然堆積		
9	A3j9	N－90°－E	不　定　形	0.94×0.62	80	〃	平坦	3　〃		
10	A3j9	N－64°－W	不整長方形	0.90×0.48	24	〃	〃	2　〃		
11	B3b7	N－36°－W	楕　円　形	0.80×0.64	34	〃	凹凸	3　〃		
12	B3d7	N－37°－W	〃	1.66×0.98	44	〃	平坦	2　〃		
13	B3f7	N－25°－W	〃	0.70×0.46	22	〃	凹凸	2　〃		
14	B3h5	N－35°－E	不　定　形	2.36×1.56	36	〃	平坦	4　〃		
15	C3f1	N－30°－W	楕　円　形	1.82×1.10	42	〃	〃	3　〃	覆土から縄文式土器片1点	
16	C3j5	N－73°－W	〃	2.04×1.56	64	〃	有段	2　〃	覆土から縄文式土器片1点	
17	C3j5	N－3°－E	〃	1.20×0.84	34	〃	凹凸	2　〃		
18	F3b3	N－4°－W	〃	1.20×0.86	40	〃	有段	2　〃		
19	G2f7	——	不整円形	1.00×0.96	36	〃	平坦	2　〃		
20	G2f7	N－29°－E	不整楕円形	1.60×0.94	60	〃	〃	3　〃		

第21号土坑（第39図）

本坑はH2g8区を中心に確認され，遺跡の南側，台地部と水田部の境に位置している。当初，遺構があるグリッド及び遺構の覆土から剝片が多量に出土していることや，遺構の規模が3.5×3mと大きいことから第1号住居跡として調査を進めたが，壁や床が黒褐色土混りのソフトロームで，住居跡の壁や床とするには軟らかく，炉・ピット（柱穴）等も検出できなかったので，第21号土坑とした。北側は農道下にあるため調査できず，東・南東側は撹乱を受けているため，プランの全容はつかめなかったが，規模・平面形は径3.7mの円形と思われる。深さは最深部で75cmである。壁はほぼ垂直ぎみに立ち上がり，暗褐色土混じりのソフトロームで，やや軟らかい壁である。壁高は18～75cmである。底面は平坦で，暗褐色土混じりのソフトロームでやや軟らかく，南東側に長径2.6m，短径1.5mの楕円形の落ち込みをもっている。この落ち込みの壁は凹凸が著しく，粘土質で締まっており，外傾して立ち上がっている。落ち込みの南側の壁は，外傾のしかたが他と比べてやや緩やかである。落ち込みの深さは53cmである。底面はわずかに凹凸があり，よく締まっていて硬い。また，調査中に落ち込みの壁や底面から湧き水があり，困難な調査であった。

覆土は6層からなり，黒色土，にぶい褐色土，暗褐色土，橙色土が堆積している。堆積状況は自然堆積である。第1層の黒色土はよく締まっていた。落ち込みの部分は水分が多く，覆土も湿っていた。

遺物は縄文式土器の細片が8点，石鏃は覆土中から1点，底面から1点の計2点が出土した。また，剝片は多量に出土している。数量は，覆土からは206点で，どの層からも平均して出土している。底面からは80点である。特に落ち込みの底面からは，投げこまれてささった状態で5点出土している。石質は283点がチャートで，3点が黒曜石である。



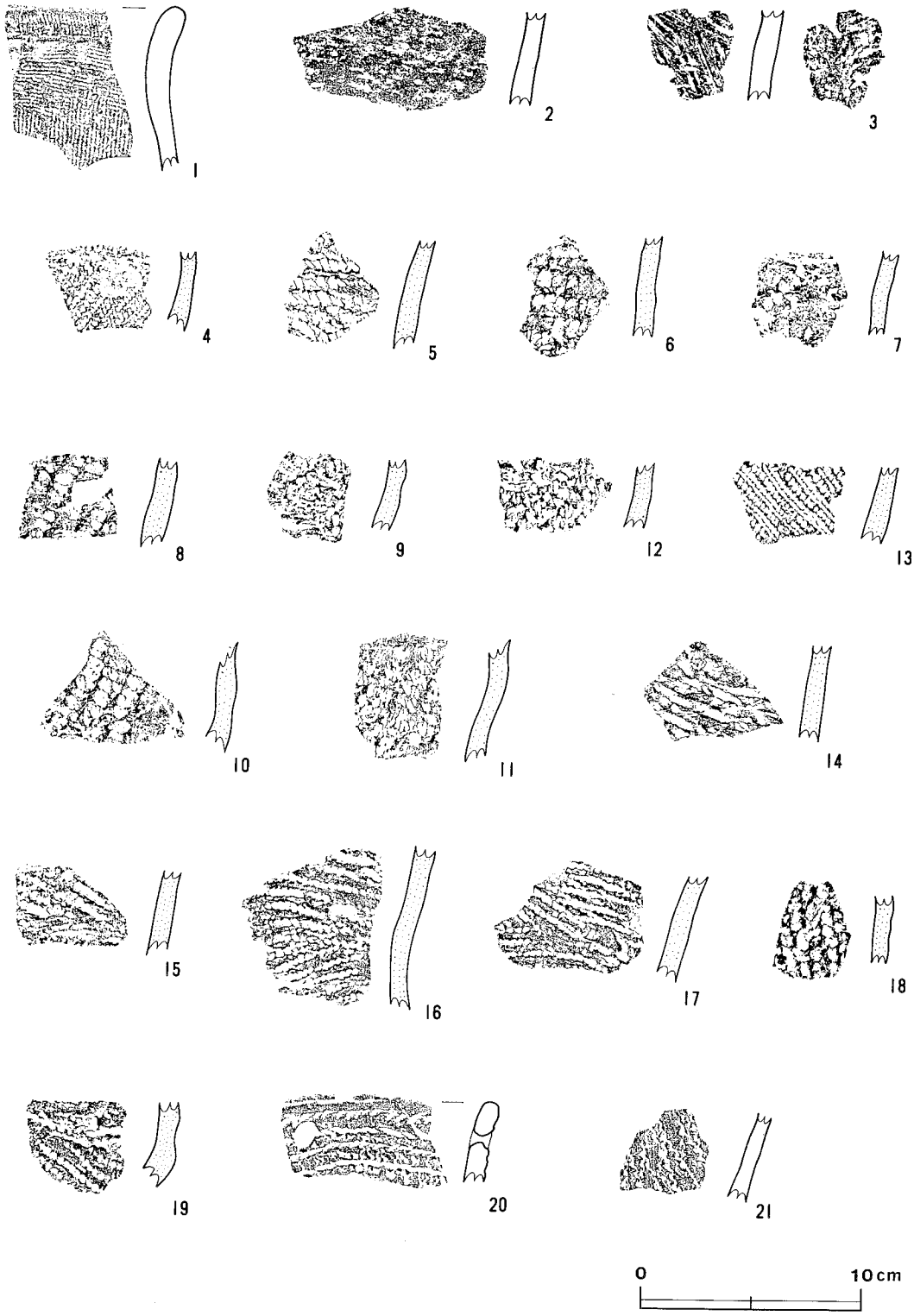
第39図　第21号土坑実測図・遺物出土位置図

(2) グリッド出土土器（第40～43図）

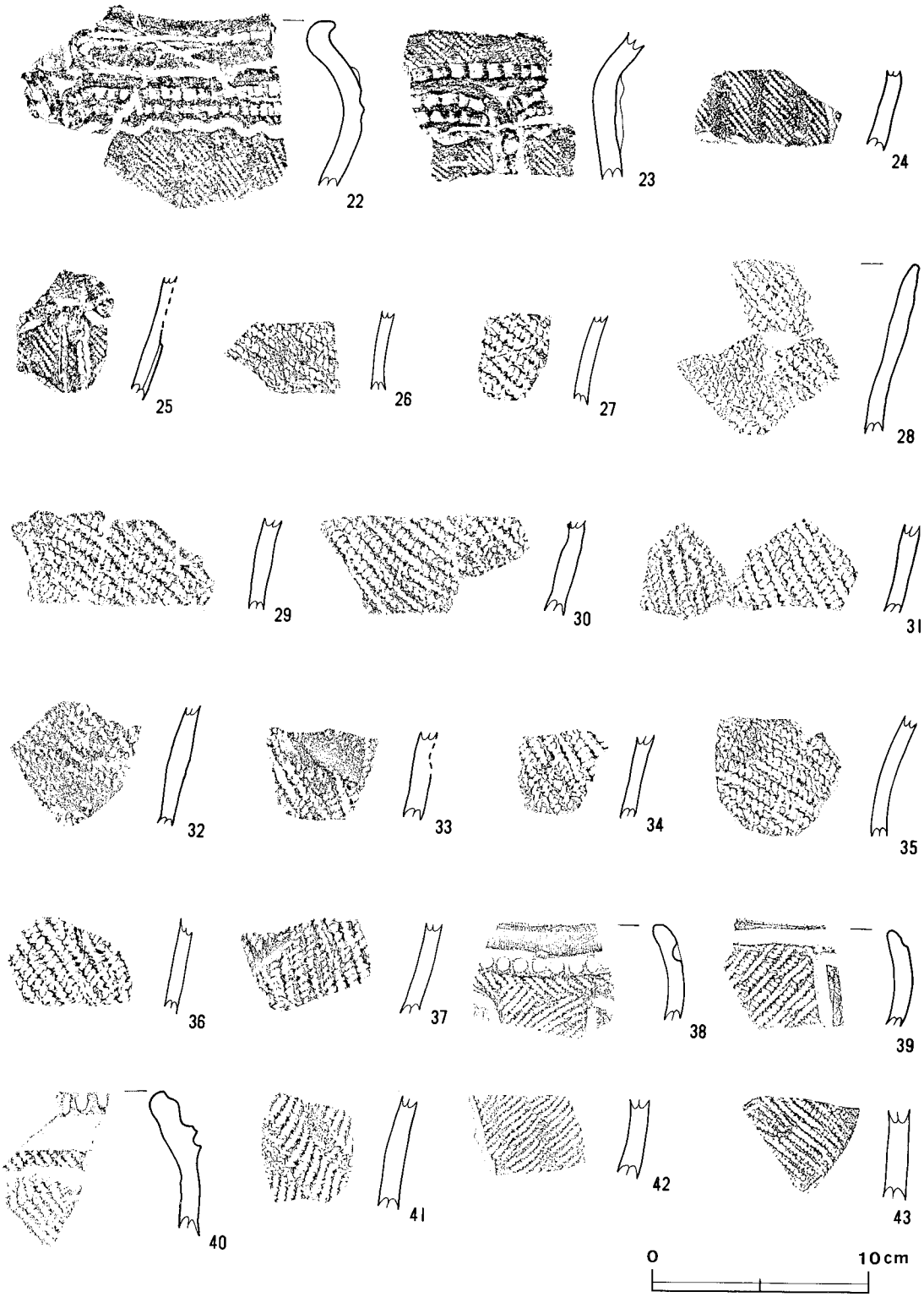
グリッド出土土器拓影図解説表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第40図	1	C3h7	深鉢・口縁部	口唇が肥厚し，外反する。口唇直下に指による連続押圧文を付け，上部は横走，下部は縦走の縄文が施されている。	井草
	2	F2f5	胴　部	横ナデが施されている。	早期無文
	3	G2b5	〃	貝殻条痕文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	茅山
	4	SK15	〃	細い縄文（LR）が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	黒浜
	5	B3d6	〃	横走する縄文(LR)が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	6	C3b3	〃	LRの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	7	C3b3	〃	LRの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	8	C3b3	〃	LRの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	9	C3b3	〃	縄文が施されているが撚りは不明である。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	10	C3f3	〃	LRの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	11	C3f3	〃	LRLの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	12	C3f3	〃	RLの縄文が横方向に施文された後，縦方向から重ねて施文している。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	13	C3f3	〃	RLの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	14	C3f5	〃	RLの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	15	C3h3	〃	RLの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	16	G3b1	〃	RLの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	17	G3b1	〃	RLの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	18	G3b1	〃	LRの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	19	G3b1	〃	RLの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
	20	K2f3	口縁部	横の連続爪形文と縦の貝殻腹縁文が付けられている。	浮島II
	21	K2f3	胴　部	縦の貝殻腹縁文が付けられている。	〃
第41図	22	G2d5	口縁部	口唇直下に縄文原体が押付けられている。貼付隆帯を付け，その下に連続角押文が施されている。胎土に金雲母・礫を含んでいる。	大木7b
	23	G2d5	胴　部	貼付隆帯の上下に連続角押文が施されている。他の部分はRLの縄文が施されている。	〃
	24	G2d5	〃	RLの縄文が施されている。TP25と同一個体と思われる。	〃
	25	G2d5	〃	縦の貼付隆帯が付けられ，両脇にRLの縄文が施されている。	〃
	26	G2f3	〃	RLの縄文が施されている。裏面は丁寧にナデられている。	前期
	27	G2f3	〃	RLの縄文が施されている。	〃
	28	I2b6	口縁部	RLの縄文が施されている。裏面は丁寧にナデられている。	〃
	29	I2b5	胴　部	RLの縄文が施されている。	〃
	30	I2b5	〃	RLの縄文が施されている。	〃
	31	I2b5	〃	磨滅しているがRLの縄文が施されている。	〃
	32	I2b5	〃	RLの縄文が施されている。	〃
	33	I2b5	〃	RLの縄文が施されている。	〃
	34	I2b5	〃	RLの縄文が施されている。裏面は丁寧にナデられている。	〃
	35	I2c5	〃	RLの縄文が施されている。	〃
	36	I2c5	〃	RLの縄文が施されている。	〃

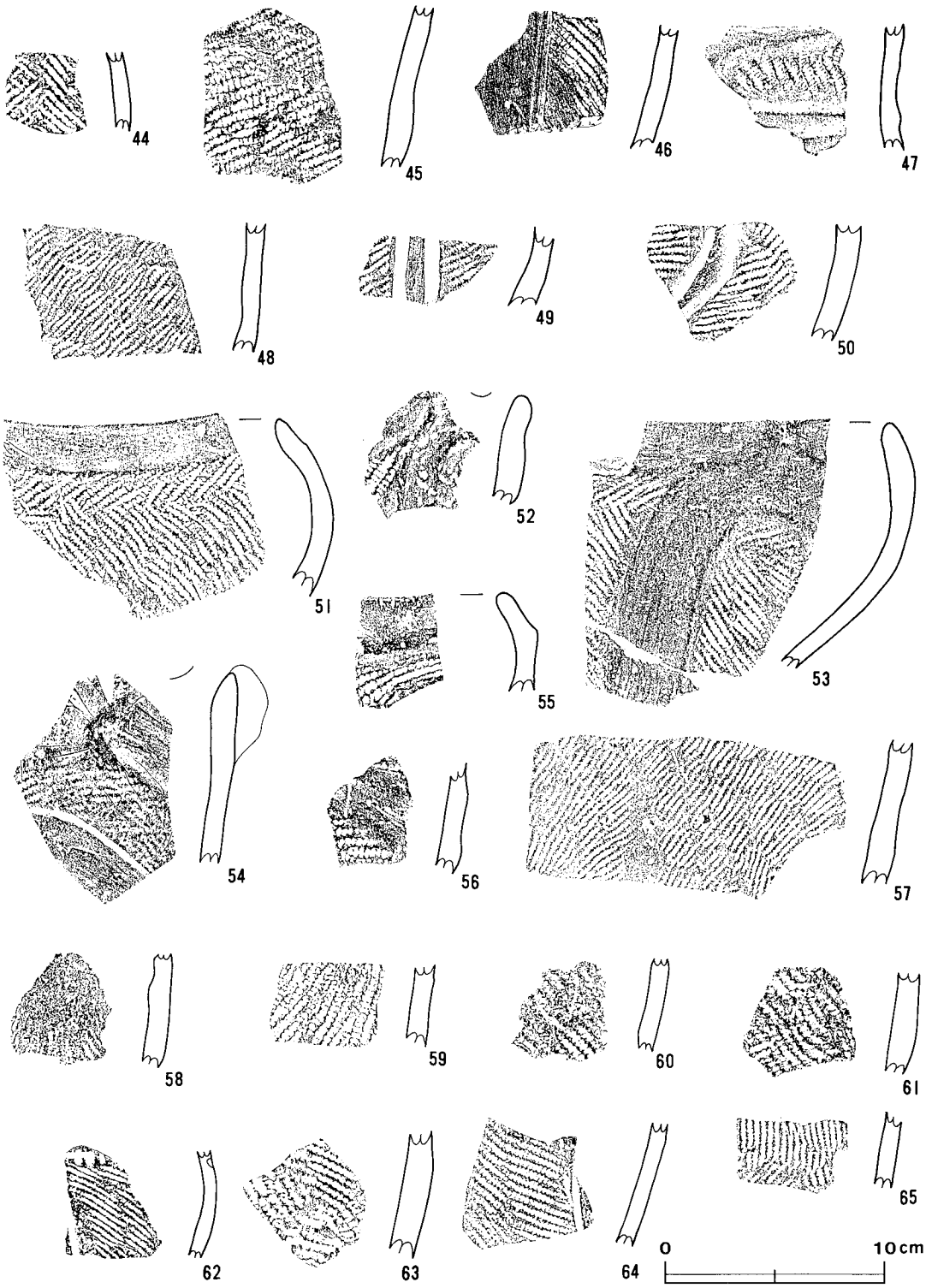
図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第41図	37	I2c5	深鉢・胴部	RLの縄文が施されている。	前期
	38	C2f9	口縁部	口唇直下に点列文が付けられ，その下に羽状縄文が施されている。	加曽利EⅢ
	39	C2f9	〃	沈線による区画文がわずかに残され，区画の中はLRの縄文が充塡されている。	〃
	40	表採	〃	口唇部にキザミによる連続文が付けられ，隆帯上と胴部にかけてRLの縄文が施されている。	〃
	41	C2f5	胴　部	LRの縄文が施されている。TP50と同一個体と思われる。	〃
	42	C2f5	〃	LRの縄文が施されている。TP49と同一個体と思われる。	〃
	43	C3a3	〃	羽状縄文が施されている。TP38と同一個体と思われる。	〃
第42図	44	C2j9	〃	RLの縄文が施されている。TP38と同一個体と思われる。	〃
	45	C3b3	〃	RLの縄文が施されている。TP50と同一個体と思われる。	〃
	46	C3b3	〃	縦の細沈線が2本付けられている。RLの縄文が施されている。	〃
	47	D3d1	〃	隆帯による楕円区画文が付けられ，区画内にRLの縄文が充塡されている。	〃
	48	表採	〃	上部に細沈線が残っている。RLの縄文が施されている。	〃
	49	表採	〃	磨消による2本の縦沈線が付けられ，LRの縄文が施されている。	〃
	50	表採	〃	隆帯による縦楕円区画文が付けられ，区画内にLRの縄文が充塡されている。	〃
	51	B3j1	口縁部	羽状縄文が施されている。	加曽利EⅣ
	52	B3j1	〃	波状口縁の一部で，縦の磨消楕円区画文が付けられ，区画内にLRの縄文が充塡されている。	〃
	53	B3j3	〃	縦の磨消楕円区画文が付けられ，区画の中は羽状縄文が充塡されている。	〃
	54	C2j9	〃	波状口縁の一部で，波状部に貼付の突帯が付けられて，突帯の下は，LRの縄文が施されている。	〃
	55	C3b3	〃	口縁部の器肉が薄く，下半はLRの縄文が施されている。	〃
	56	B3j1	胴　部	横の磨消楕円区画文が付けられ，区画の中はRLの縄文が充塡されている。	〃
	57	C3f5	〃	LRの縄文が施されている。TP55と同一個体と思われる。	〃
	58	SK16	〃	磨消無文帯の一部である。	加曽利E
	59	B3d5	〃	RLの縄文が施されている。	〃
	60	B3f1	〃	磨滅しているが，RLの縄文が残っている。	〃
	61	B3h7	〃	LRの縄文が施されている。	〃
	62	B3j3	〃	RLの縄文が施されている。	〃
	63	C2j9	〃	LRの縄文が施されている。	〃
	64	C3b3	〃	RLの縄文が施されている。縦の沈線が残り，磨消の一部が残っている。	〃
	65	C3f3	〃	LRの縄文が施されている。	〃
第43図	66	C3f5	〃	LRの縄文が施されている。	〃
	67	C3f5	〃	LRの縄文が施されている。	〃
	68	E3b5	〃	LRの縄文が施されている。	〃
	69	C3b3	底　部	磨消無文帯である。	〃
	70	H3i1	〃	磨消無文帯である。	〃
	71	SK21	胴　部	磨滅していて，器肉が薄くなっている。	中期



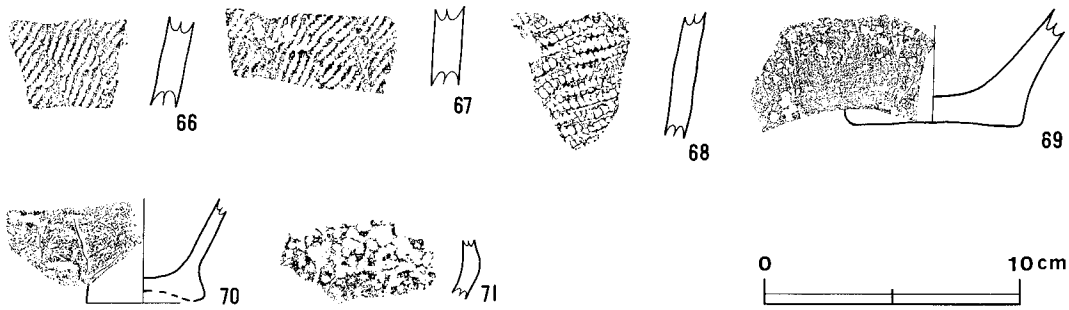
第40図　グリッド出土土器拓影図(1)



第41図　グリッド出土土器拓影図(2)



第42図　グリッド出土土器拓影図(3)



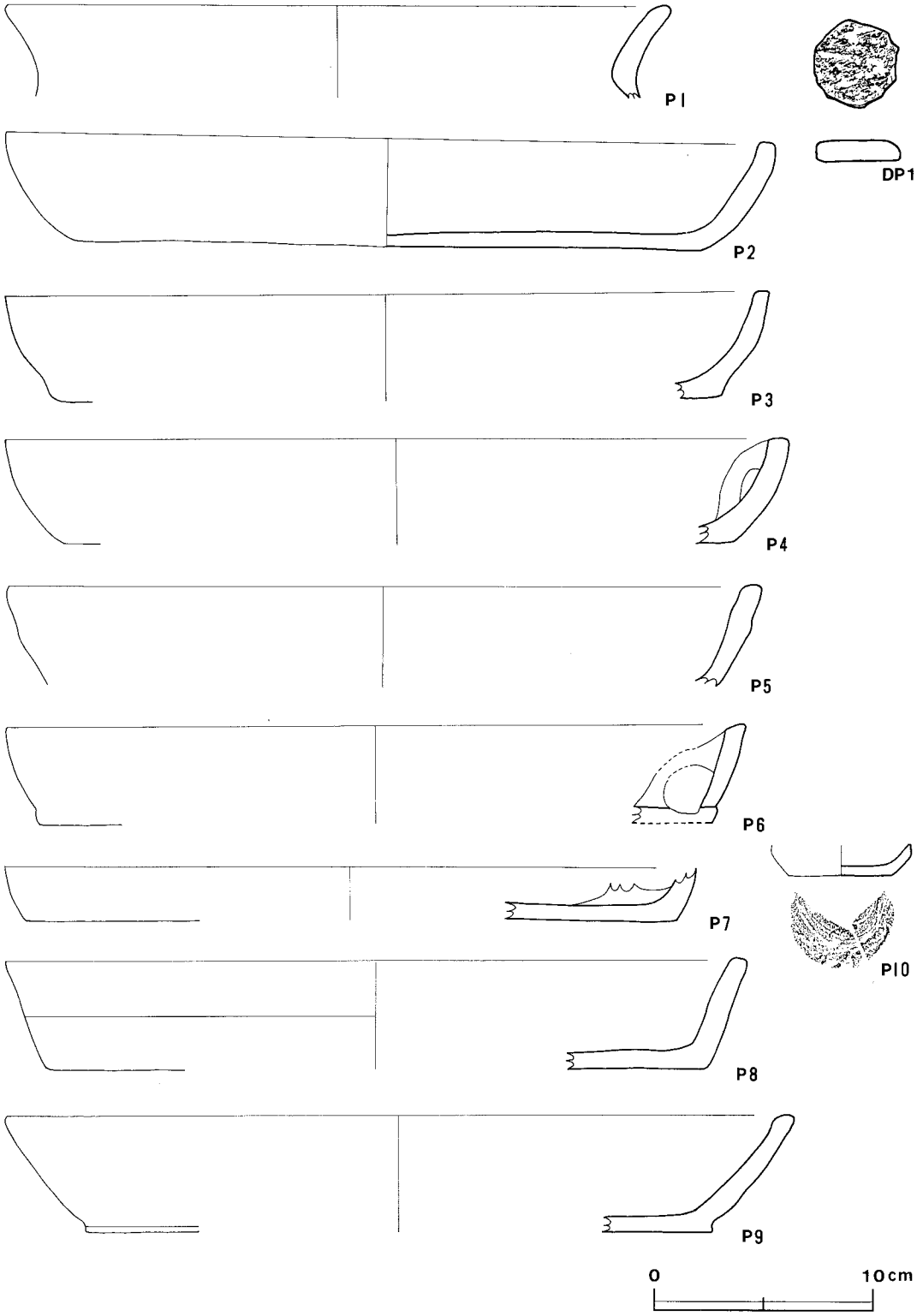
第43図　グリッド出土土器拓影図・実測図(4)

土製品（第44図ＤＰ1）

DP1はB3h7区から出土した土製円板である。径４cm，厚さ１cm，重さ0.2gである。縄文前期の土器片を丸く打ち欠いて作成したものである。穿孔や研磨のようすはみられない。

土師器・内耳土器・灯明皿（第44図Ｐ1～Ｐ10）

Ｐ1は壺の口縁部片，Ｐ２～Ｐ９は内耳土器，Ｐ10は灯明皿である。出土位置はＰ１はH2j3区，Ｐ４はK2j1区から出土した。他はすべてJ2f7区からの出土である。



第44図　グリッド出土土器実測図・土製品実測図

グリッド出土土器観察表

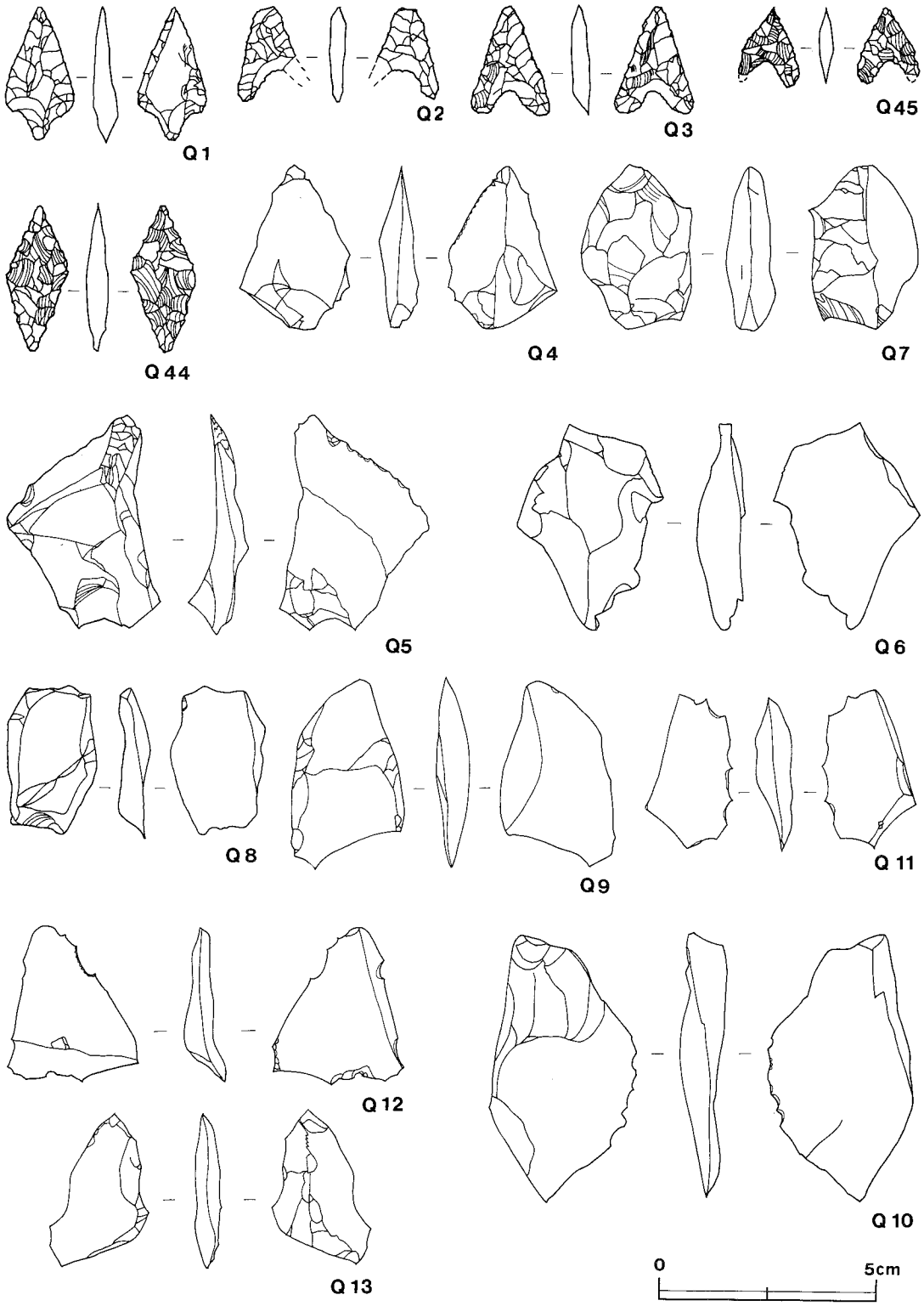
図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第44図 P 1	壺	口径　(30) 残存高 4.0	口縁部の立ち上がりは頸部からやや外反している。	外面は横ナデを施している。	胎土…パミス・砂 色調…暗褐色 焼成…良	口縁部 5%
P 2	内耳土器	口径　(37) 底径　28.6 高さ　5.4	体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面とも横ナデを施している。	胎土…砂 色調…暗褐色 焼成…良	40%
P 3	〃	口径　(35) 高さ　4.9	体部は外傾して立ち上がる。	内・外面とも横ナデを施している。	胎土…砂 色調…黒褐色 焼成…良	体部　15% 外面に鍋墨付着
P 4	〃	口径　(36) 高さ　4.8	体部は外傾して立ち上がる。	内・外面とも横ナデを施している。	胎土…砂 色調…暗褐色 焼成…良	体部 10%
P 5	〃	口径 (34.4) 高さ　(4.5)	体部は垂直に立ち上がる。	内・外面とも横ナデを施している。	胎土…パミス 色調…黒褐色 焼成…良	体部　5%
P 6	〃	口径　(34) 底径　30.5 高さ　4.5	底部直上に凹帯を旋す。体部は外傾して立ち上がる。	外面は横ナデを施している。	胎土…スコリア 色調…暗褐色 焼成…良	体部　20%
P 7	〃	口径　(35) 底径　29.5 高さ　5.0	底部直上に凹帯を施す。体部は外傾して立ち上がる。	外面は横ナデを施している。	胎土…スコリア・雲母 色調…暗褐色 焼成…良	10%
P 8	〃	口径　(34) 底径　30.4 高さ　5.0	体部は垂直に立ち上がる。	内・外面とも横ナデを施している。	胎土…スコリア 色調…橙色 焼成…良	10%
P 9	〃	底径　(30) 残存高 2.5	体部は垂直に立ち上がる。	内・外面とも横ナデを施している。	胎土…スコリア 色調…褐色 焼成…良	底部　20%
P10	灯明皿	底径　4.8 残存高(1.4)	体部は底部から外傾して立ち上がる。	内・外面とも横ナデを施している。底部に回転糸切り痕を残す。	胎土…砂 色調…褐色 焼成…良	50%

石器（第45～48図）

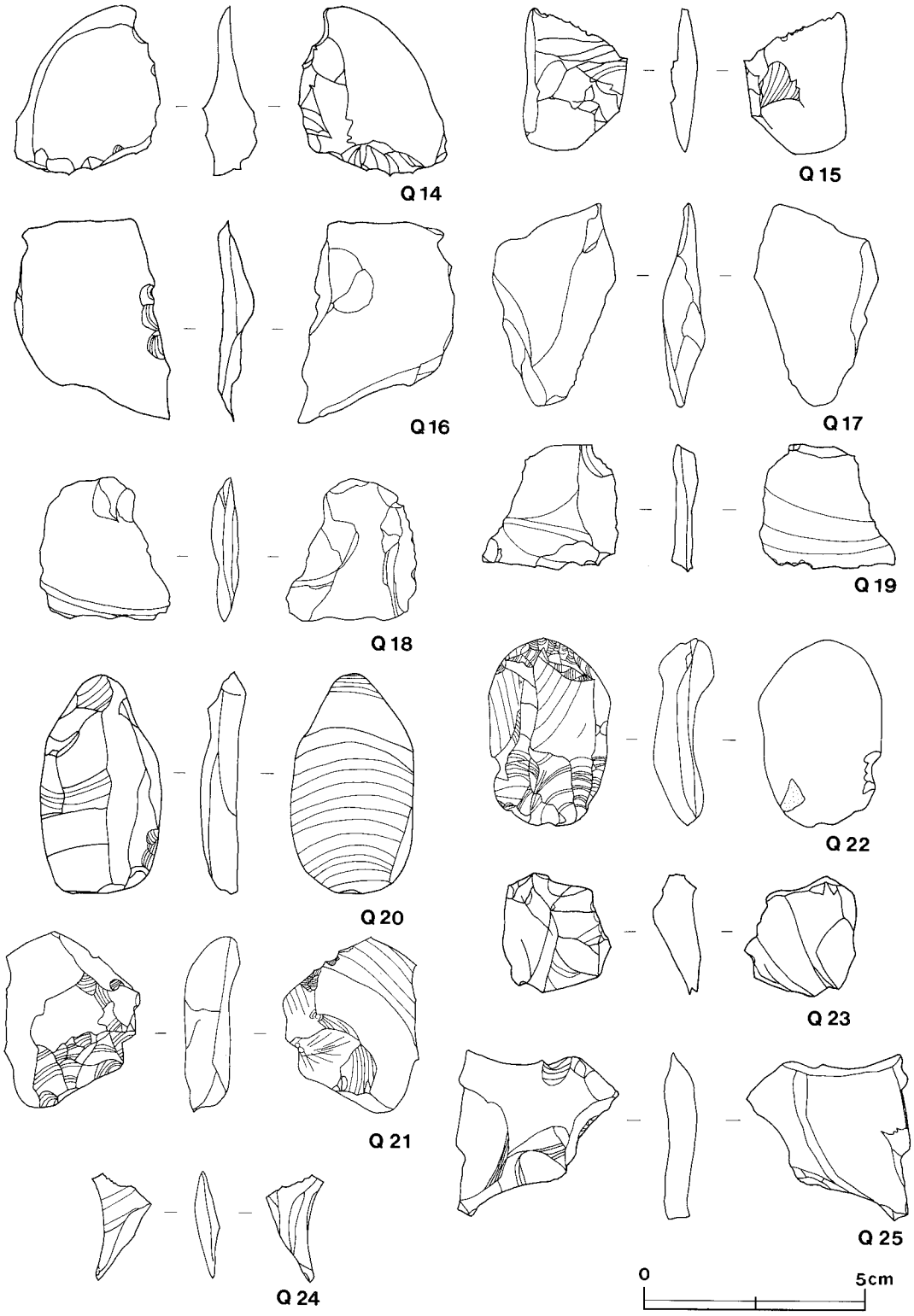
当遺跡から出土した石器は，次のとおりである。Q 1～3の石鏃はグリッドから，他のスクレーパーは大部分が第21号土坑及びその位置するグリッドから出土している。

出土石器観察表

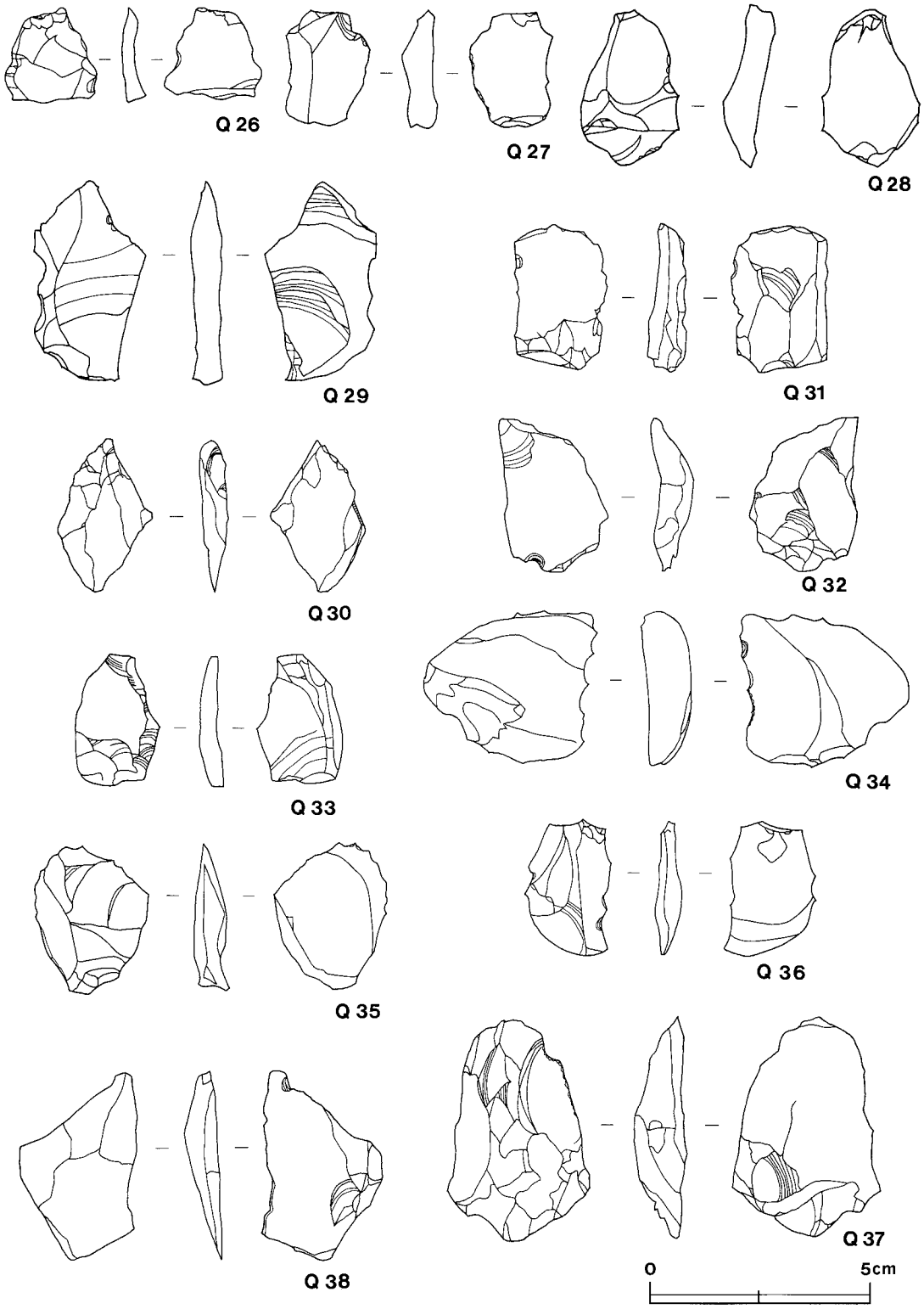
図版番号	器　種	出土位置	石　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　　考
第45図 1	石　鏃	B3d1	チャート	3.2	1.6	0.6	1.6	右側を剝離調整
2	〃	I2f7	頁　岩	2.2	1.4	0.4	0.1	右側基部欠損 左右両面を剝離調整
3	〃	G3d3	チャート	2.5	1.8	0.4	1.0	左右両面を剝離調整
4	スクレーパー	SK21№5	〃	3.8	2.5	1.2	5.7	右側上部を剝離調整
5	〃	〃　16	〃	5.0	3.5	1.6	9.3	右側上部を剝離調整
6	〃	〃　97	〃　(黒)	4.8	3.5	1.4	10.6	下側を剝離調整



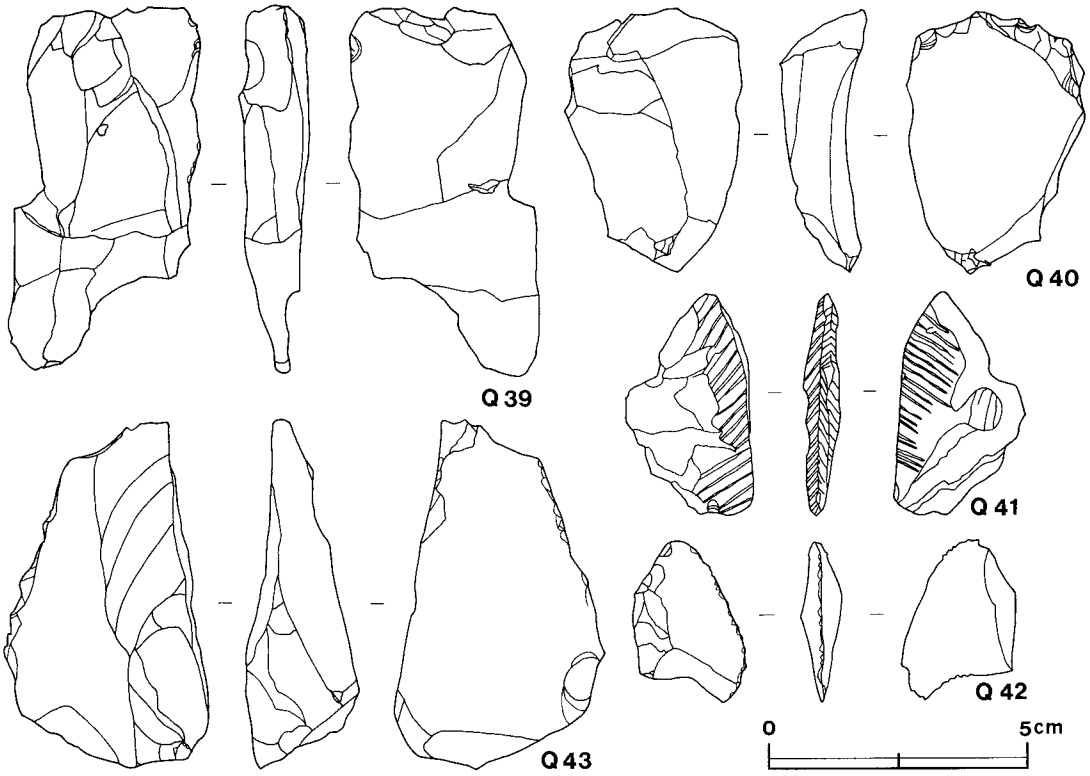
第45図　出土石器実測図(1)



第46図　出土石器実測図(2)



第47図　出土石器実測図(3)



第48図　出土石器実測図(4)

出土石器観察表

図版番号	器　種	出土位置	石　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　　考
第45図 7	スクレーパー	SK21No.111	チャート	3.8	2.6	1.2	9.7	右側上部を剝離調整
8	〃	〃　118	〃	3.5	2.2	0.9	4.9	右側を剝離調整
9	〃	〃　122	〃	4.4	2.6	0.8	6.9	右側を剝離調整
10	〃	〃　131	〃	6.3	3.4	0.9	16.6	右側下部を剝離調整
11	〃	〃　132	〃	3.6	2.1	0.8	3.4	右側下部を剝離調整
12	〃	〃　134	〃	3.6	3.0	1.0	5.1	右側上部を剝離調整
13	〃	〃　164	〃　(赤)	3.6	2.3	0.6	4.4	左側を剝離調整
第46図14	〃	〃　173	〃　(赤)	3.9	3.4	1.2	9.0	右側上部を剝離調整
15	〃	〃　182	〃　(黒)	3.3	2.4	0.6	4.4	右側上部を剝離調整
16	〃	〃　204	〃　(黒)	4.7	3.0	0.9	9.3	右側を剝離調整
17	〃	〃　211	チャート	4.8	2.9	1.0	10.2	右側下部を剝離調整
18	〃	〃　210	〃　(赤)	3.3	3.0	0.6	5.2	左側を剝離調整
19	〃	〃　214	チャート	2.9	3.1	0.8	3.7	左側下部を剝離調整
20	〃	〃　216	黒曜石	5.1	2.8	1.0	12.6	右側下部を剝離調整
21	〃	〃　217	〃	4.1	3.1	1.3	12.4	右側上部を剝離調整
22	〃	〃　218	〃	4.3	2.8	1.3	12.4	右側中程を除いて全面を剝離調整

図版番号	器　種	出土位置	石　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　　考
23	〃	〃　228	チャート	2.6	2.8	1.1	5.0	右側を剝離調整
24	〃	〃　250	〃　(黒)	2.6	1.3	0.6	0.8	右側上部を剝離調整
25	〃	H2h8	チャート	3.8	3.8	0.8	10.6	右側上部を剝離調整
第47図26	〃	〃	〃	2.3	2.3	0.5	2.5	左側上部を剝離調整
27	〃	〃	〃	2.7	1.9	0.9	3.9	右側上部を剝離調整
28	〃	〃	〃	3.7	2.3	1.2	5.9	右側を剝離調整
29	スクレーパー	H2h9	〃　(黒)	4.7	2.6	0.8	6.9	左側下部，右側上部を剝離調整
30	〃	H2h8	〃　(白)	3.5	2.2	0.6	3.0	左側を剝離調整
31	〃	〃	チャート	3.4	2.2	0.9	6.5	右側を剝離調整
32	〃	〃	〃	3.6	2.6	1.1	5.9	左側下部を剝離調整
33	〃	〃	〃	3.0	2.0	0.5	3.2	右側を剝離調整
34	〃	〃	〃　(赤)	4.0	3.5	1.3	14.8	右側を剝離調整
35	〃	H2h9	〃　(赤)	3.4	2.6	0.9	6.9	左側を剝離調整
36	〃	〃	〃　(赤)	3.2	2.1	0.6	3.8	右側下部を剝離調整
37	〃	〃	〃　(黒)	5.2	3.3	1.3	19.1	右側上部を剝離調整
38	〃	〃	〃　(黒)	4.4	2.7	1.0	7.9	左側上部を剝離調整
第48図39	〃	〃	〃　(黒)	7.2	3.9	1.2	27.8	右側上部を剝離調整
40	〃	〃	チャート	4.2	3.6	1.8	19.1	右側を剝離調整
41	不　明	B3d6	滑　石	4.4	2.6	0.7	9.9	右側表裏に連続したキザミをつけている。
42	スクレーパー	E3j3	頁　岩	3.2	2.3	0.8	3.6	右側を剝離調整
43	〃	G3f3	硬質砂岩	7.9	4.1	2.3	42.2	左側を剝離調整
第45図44	石　鏃	SK21№261	黒曜石	3.4	1.5	0.5	1.5	左右両面を剝離調整
45	〃	〃	〃	1.8	1.6	0.4	0.6	全面を剝離調整

4　まとめ

当遺跡からは調査の結果，土坑21基が検出され，縄文式土器片・土師器片・内耳土器片・土製品・石器・剝片が遺物収納箱に８箱出土した。

土坑21基は，遺跡の台地部に存在し，低地部には検出されなかった。大調査区A3区に７基，B3区に７基，C3区に３基，F2区に１基，G2区に２基，H2区に１基で，A3･B3区に集中している。規模は長径２m未満が18基，２～2.9mのものが２基，３m以上が１基である。形状は楕円形が14基，円形が３基，長方形が１基，不定形が３基である。深さは22～49cmのものが11基，50～75cmが10基である。壁は第21号土坑を除いて硬く，すべて垂直な立ち上がりをしている。底面は平坦なものが13基，凹凸があるものが８基である。覆土は２～４層が主で，自然堆積である。第１～20号土坑は，時期決定の遺物が出土していないので，時期等は不明である。

第21号土坑は，台地部と低地部の境に確認された。径３mの円形で，当遺跡の中では最大の土坑であり，剝片を多量に出土したことで注目される。深さは約20cmであるが，南東側でさらに一段低い落ちこみをもっている。また，床面近くから縄文時代中期の土器片が出土し，21基の中で唯一の時期決定がなされている土坑である。出土土器片から判断すると，第21号土坑の時期は縄文時代中期と考えられる。

遺物は遺物収納箱に８箱出土したが，最も多いのは土師器片である。器形をうかがえるものはなく，ほとんどが胴部片である。実測可能なものはＰ１だけで，器形・手法の特徴から古墳時代後期の鬼高式の壺と考えられる。縄文式土器片は，縄文時代早期の井草式から茅山下層式，前期の黒浜式，浮島式，大木７b式，中期の加曽利Ｅ式に比定されるものが出土した。数が多いものは前期黒浜式と中期加曽利ＥⅢ・Ⅳ式である。Ｐ２～９は内耳土器である。Ｐ４を除いて７片が$J2_{f7}$区から出土している。一か所から集中的に出土していることから，同時に捨てられたものと考えられる。Ｐ10は灯明皿であるが，内耳土器と一緒に出土しているところから，同時期のものと考えられる。このほかに，陶器片が若干出土している。

石鏃は第21号土坑から２点，他のグリッドから３点の計５点出土している。石質はチャートが２点，黒曜石が２点，頁岩が１点である。頁岩のものを除いて丁寧な剝離調整が施されている。スクレーパーは第21号土坑から21点，土坑が位置するグリッド（$H2_{h8}$・$H2_{h9}$区）から16点，他のグリッドから２点出土している。石質はチャートが34点，黒曜石が３点，頁岩が１点，砂岩が１点である。石鏃と違い，剝離調整は部分的である。

剝片は293点出土した。このうち７点は，他のグリッドから出土しているが，残りの286点は第21号土坑の覆土，床面，南東側落ち込みの覆土，落ち込みの床面，$H2_{h8}$区，$H2_{h9}$区から一様に出土している。286点のうち，南側の覆土から出土した№17・18の２点は接合できたが，他の大部分の剝片は相互に接合できず，完形品も少ないので，石器製作途中の未製品が第21号土坑の埋設過程で埋まったものと考えられる。

当遺跡は，遺物等から判断して，縄文時代前期から中期にかけての生活圏の一部として使用されていたと思われる。当遺跡の近くには縄文時代の遺跡は認められていないが，石鏃，スクレーパー等の石器や多量の剝片が出土したことから，当時の人々の生活舞台であったと考えられる。

また，グリッドから古墳時代後期（鬼高式）を中心に甕・壺の胴部片が多量に出土しているので，縄文時代と同様に古墳時代後期にも生活舞台の一部になったと考えられる。

第6節　中新田A遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町大字下片田中道花847-2ほかに所在する。三和町の北西部で県道結城・境線と県道下館・三和線の上和田の交差点を古河方面に向うと，新4号バイパスと交差する。その交点より，ほぼ南方向0.2kmに位置している。現況は山林で，面積は7,891m²である。栃木県小山市から南流する大川と，三和町の西端を南へ流れる大川の支流によって挟まれた南北方向に延びる細長い台地の北部に立地している。遺跡は，平坦な台地のほぼ中央部にあり，標高は22.3mで，約300m南西方向にある水田との比高は2.6～2.9mである。南方約350mに下片田遺跡，北方約450mに中新田B遺跡が同じ新4号バイパス計画線上に所在している。当遺跡からは，少量の縄文式土器片と石器2点が出土しただけである。

2　調査経過

〈昭和62年度〉

11月前半　調査のための諸準備を進め，9日より調査区域の山林の伐開を開始した。

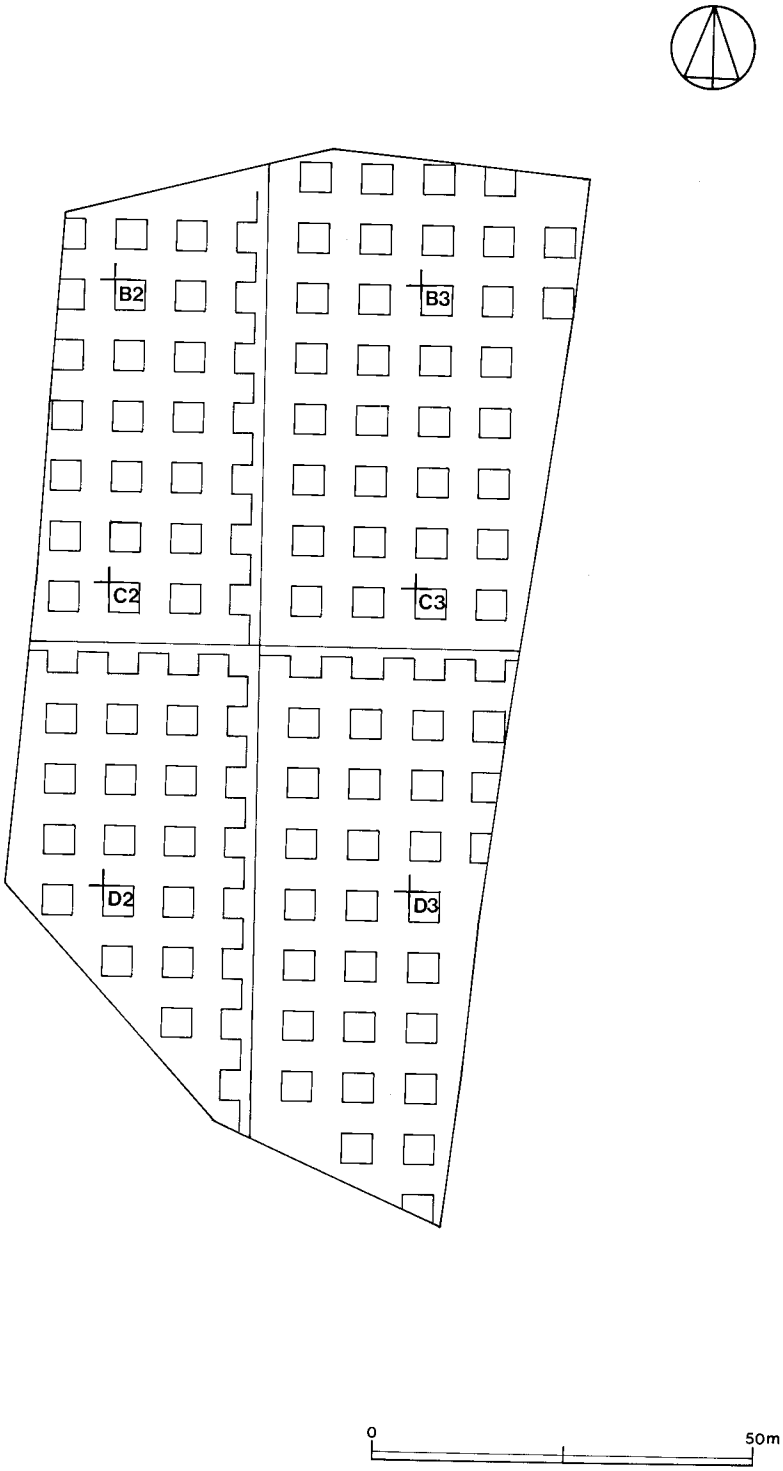
11月後半　17日より伐開後の清掃及び雑木の焼却をした。30日に発掘前の全景写真を撮影し，その後，X軸＋23，420m，Y軸－3,000mの交点を基準に方眼杭打ちを行い，調査区を決定した。

12月前半　2日から，調査面積の8分の1の割合で，遺跡の南側D2区から北に向かってグリッド発掘を実施した。B1g9区の表土中から，縄文式土器片が投棄された状態で多数出土したが，他グリッドからの出土遺物は極めて少なく，遺構も確認できなかった。

12月後半　続いて，調査面積の4分の1グリッド発掘により遺構確認を行ったが，遺物は極めて少なく，遺構も確認できなかった。24日に4分の1グリッド発掘終了後の全景写真を撮影し，その後，東西，南北に土層観察用のトレンチを設定し，発掘を行った。

1月前半　6日から，トレンチの土層実測を実施し，12日には調査区域内の全ての調査を完了した。

第49図　中新田Ａ遺跡地形図



第50図　中新田Ａ遺跡全体図

3　遺構・遺物

当遺跡からは，遺構は検出できなかったが，遺物は4分の1グリッド発掘中にわずかだが縄文式土器片と石器2点が出土している。

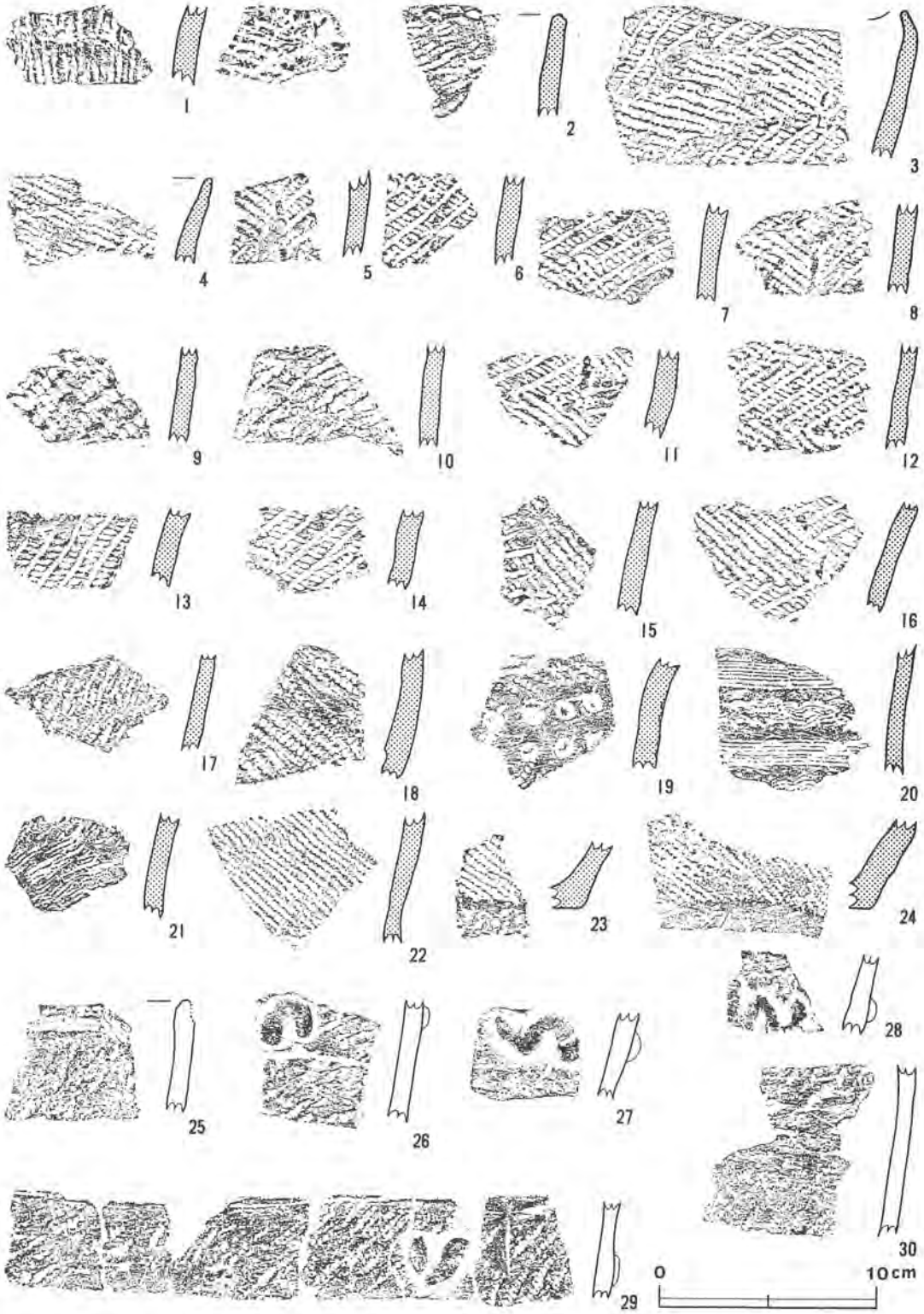
(1)　グリッド出土土器（第51・52図）

当遺跡から出土した縄文式土器片は，次のとおりである。

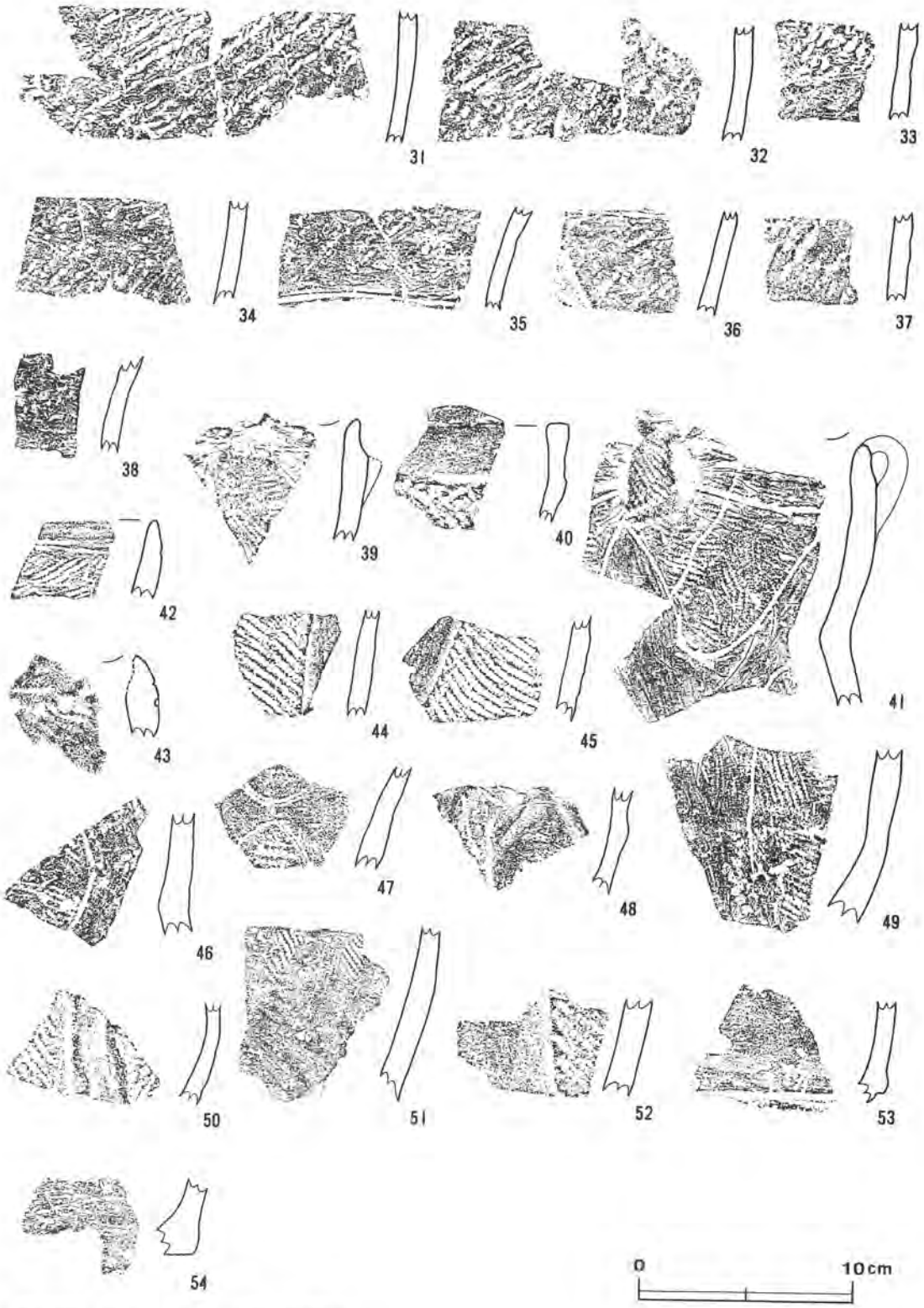
グリッド出土土器拓影図解説表

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第51図1	TP52	B2c3	胴部	貝殻条痕文が，表裏に施されている。磨滅している。胎土に繊維を含んでいる。	茅山式
2	〃51	C2c5	口縁部	ＬＲの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	黒浜式
3	〃1	B1g9	〃	波状口縁部片で，附加条縄文とＲＬの縄文とが交互に施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
4	〃7	〃	〃	ＲＬの縄文が施されている。裏面は丁寧にナデられている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
5	〃2	〃	胴部	附加条縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
6	〃3	〃	〃	附加条縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
7	〃10	〃	〃	附加条縄文とＲＬの縄文とが交互に施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
8	〃4	〃	〃	ＲＬの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
9	〃8	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。磨滅している。胎土に繊維を含んでいる。	〃
10	〃6	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
11	〃5	〃	〃	附加条縄文とＲＬの縄文が交互に施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
12	〃9	〃	〃	附加条縄文とＲＬの縄文とが文互に施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
13	〃11	〃	〃	附加条縄文が施されている。裏面は丁寧にナデられている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
14	〃12	〃	〃	附加条縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
15	〃13	B1g9	〃	附加条縄文とＲＬの縄文とが施されている。裏面は丁寧にナデられている。胎土に繊維が含まれている。	〃
16	〃15	〃	〃	附加条縄文とＲＬの縄文とが交互に施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
17	〃14	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
18	〃17	C2c3	〃	ＲＬの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
19	〃16	〃	〃	2列の竹管文を横位に施し，以下に縄文がわずかに認められる。磨滅している。胎土に繊維を含んでいる。	〃
20	〃19	C2e3	〃	横位に，7本単位の櫛歯状条線が直線と波状とで交互に施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
21	〃18	〃	〃	無節Ｌの縄文がまばらに施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
22	〃20	〃	〃	ＲＬの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃
23	〃49	B1g9	底部	ＲＬの縄文が施されている。胎土に繊維を含んでいる。	〃

図版番号	遺物番号	出土地点	器種・部位	表面・裏面の特徴	備　考
第51図24	TP50	B1g9	底部	ＲＬの縄文が施されている。23と同一個体と思われる。胎土に繊維を含んでいる。	黒浜式
25	〃26	〃	口縁部	ＬＲの縄文が施されている。口唇直下が剝離している。礫を含んでいる。	大木５式
26	〃28	〃	〃	口唇部を欠損した口縁部で，ＬＲの縄文を地文に，太い粘土紐を鋸歯状に貼り付けている。礫を含んでいる。	〃
27	〃36	〃	〃	口唇部を欠損した口縁部で，ＬＲの縄文を地文に，太い粘土紐を鋸歯状に貼り付けている。礫を含んでいる。	〃
28	〃30	〃	〃	口唇部を欠損した口縁部で，ＬＲの縄文を地文に，太い粘土紐を鋸歯状に貼り付けている。礫を含んでいる。	〃
29	〃29	〃	〃	口唇部を欠損した口縁部である。口唇直下を細い沈線で区画し，以下にＬＲの縄文を施し，更に太い粘土紐を鋸歯状に貼り付けている。礫を含んでいる。	〃
30	〃31	〃	胴部	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
第52図31	〃24	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
32	〃44	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。裏面に炭化物が付着している。礫を含んでいる。	〃
33	〃45	B1g9	〃	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
34	〃41	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
35	〃42	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
36	〃46	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
37	〃47	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
38	〃40	〃	〃	ＬＲの縄文が施されている。礫を含んでいる。	〃
39	〃25	〃	口縁部	波状口縁で，橋状把手がわずかに残っている。磨滅している。	加曽利EIV式
40	〃23	〃	〃	口縁部無文帯下にＲＬの縄文が施されている。	〃
41	〃21	〃	〃	波状口縁で，口縁部無文帯をまたぐように橋状把手が付されている。無文帯下に沈線でＵ字状に区画し，区画内にＲＬの縄文が施されている。	〃
42	〃22	〃	〃	口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下にＬＲの縄文が施されている。	〃
43	〃38	〃	〃	波状口縁で，竹管文が付けられ，以下に縄文が施されている。磨滅している。	〃
44	〃34	〃	胴部	磨消帯とＲＬの縄文が施されている。	〃
45	〃37	〃	〃	磨消帯とＲＬの縄文が施されている。	〃
46	〃39	〃	〃	沈線で区画し，区画内を縄文で充塡している。	〃
47	〃32	〃	〃	沈線でU字状に区画し，区画内を縄文で充塡している。磨滅している。	〃
48	〃35	〃	〃	隆線で曲線的に区画し，区画内は無文で，区画間には縄文が施されている。	〃
49	〃27	〃	〃	縦位の細い沈線で区画し，区画内は縄文を施し，区画外を磨り消している。	〃
50	〃33	〃	〃	垂下する２本の隆線によって無文帯と縄文施文帯とに区画している。	〃
51	〃43	〃	〃	ＲＬの縄文が施されているが，下位には磨り消しがみられる。	〃
52	〃53	D2c5	〃	垂下する隆線により無文帯と縄文施文帯とに区画している。磨滅している。	〃
53	〃54	D2a5	〃	隆帯直下に沈線を巡らしている。磨滅している。	〃
54	〃48	B1g9	底部	横位にナデられている。胎土には，スコリアを含んでいる。	〃



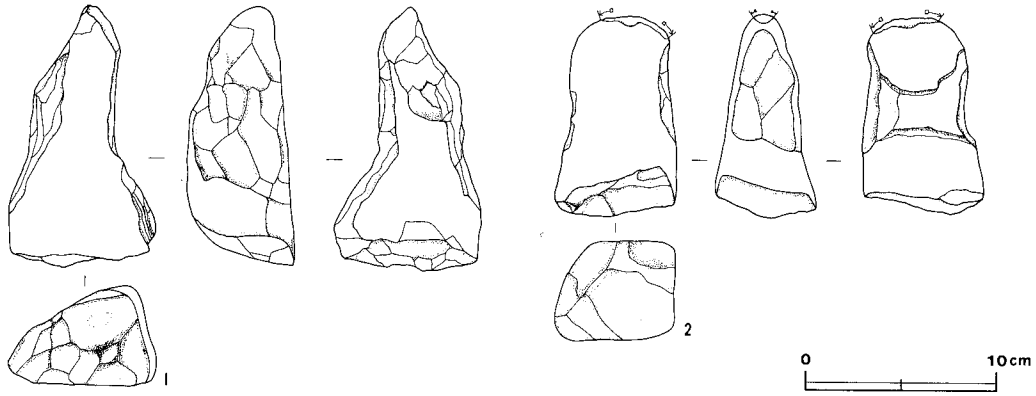
第51図　グリッド出土土器拓影図(1)



第52図　グリッド出土土器拓影図(2)

(2) **石器**（第53図）

Q１・２はスタンプ形石器である。棒状で粗粒の河床礫の一端を直接加撃して分割している。左右両側縁を敲打によって抉入状に加工し，片手で握り易くしている。底面の平坦部に，使用痕は観察されない。いずれも完形品である。個々の石器の法量・石質・出土位置等については，次の表のとおりである。



第53図　石器実測図

表３　石器観察表

図版番号	固有番号	器　種	出土位置	石　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
第53図１	Q１	スタンプ形石器	D2a5	流紋岩	13.8	7.8	5.3	566.7	側縁稜部を敲打によってつぶしている。
〃　２	Q２	スタンプ形石器	D2g7	流紋岩	10.4	6.4	5.2	426.7	頭部に敲打痕が認められる。

4　まとめ

当遺跡は，調査の結果遺構は検出されず，前表のごとく表土層から少量の縄文式土器片と石器2点が出土しただけであった。縄文式土器片は274点で，大半は小破片で磨滅している。器形を窺えるものはなく，ほとんどが胴部片である。時期は，縄文時代早期の茅山式，前期の黒浜式，大木5式，中期の加曽利E式に比定される。数が多いものは前期黒浜式と中期の加曽利EⅣ式である。出土土器の約71%は，B1g9区からのものである。B1g9区及び周辺の調査区を調査したが，遺構は確認できず，表土中の一か所から集中的に縄文時代の前期，中期の土器片が混じり合って出土していることから，同時期に捨てられたものと考えられる。このように，遺構を確認することができず，また，遺物も少ないことから，当遺跡の時期や性格について述べることは困難である。

当遺跡の近くには，縄文時代の遺跡は確認されていないが，出土遺物等から判断して，縄文時代前期から中期にかけて当時の人々が生活を営んでいた生活圏の一部であったことも考えられる。

第７節　中新田Ｂ遺跡

１　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町上片田字天ノ川805ほかに所在し，調査対象面積は，6,200㎡である。現況は畑または，陸田になっている。遺跡は，三和町の北西端にあたり，県道新宿・新田・総和線の北側で，三和町役場から北西3.8㎞に位置している。猿島台地の北端部の中央からやや東にあり，宮戸川と大川の間の標高約23mの台地平坦部にある。当遺跡の北約500mに昨年度調査した中新田Ａ遺跡がある。遺跡の東側の大川流域にある沖積低地は，水田として利用されている。水田との比高は0.2～0.5mほどである。

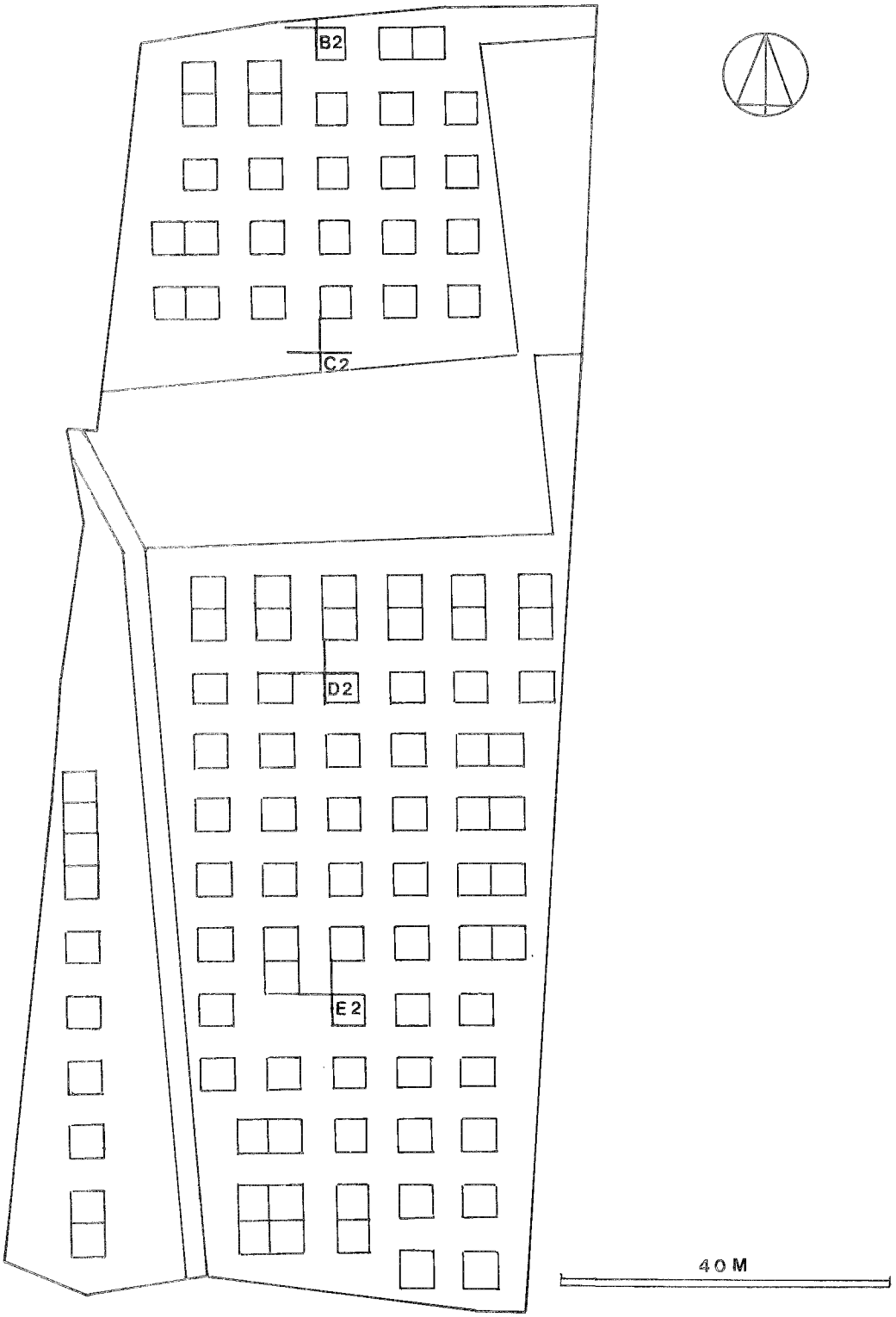
２　調査経過

〈昭和63年度〉

７月上旬　　１日に上片田Ｂ遺跡の遺構調査と並行して，中新田Ｂ遺跡の調査を開始した。草刈り作業を行った後，調査前の遺跡全景写真撮影を実施した。日本平面直角座標第Ⅸ系Ｘ軸＋24,000m，Ｙ軸－2,920mの交点を基準として方眼杭打ちを行い調査区を設定した。引き続き４分の１の割合で遺構確認作業を実施した。遺構確認面までの深さは，地表から0.6～1.3mとかなり深く，湧水が0.3～0.6mの所で出てきた。そのため遺構確認作業は，0.5mまで重機で掘り，ポンプを導入し，人力で確認面まで下げて行った。

７月中旬　　グリッド発掘を引き続いて実施したが，遺構は確認できず，また遺物も出土しなかった。その後土層観察用のトレンチを入れ実測した。

７月下旬　　25日に調査後の遺跡全景写真撮影を行い，調査区域内の全ての調査を完了した。

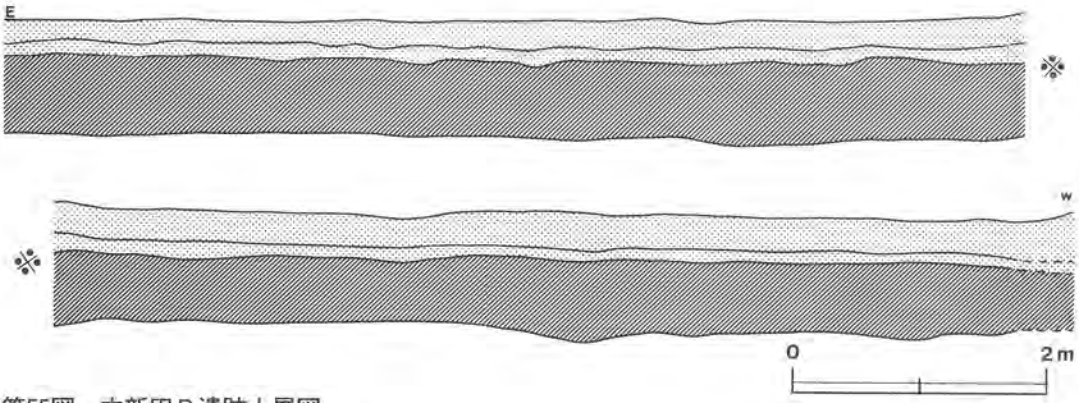


第54図　中新田Ｂ遺跡全体図

3　遺構・遺物

当遺跡では遺構・遺物は検出されなかった。なお遺構確認調査後，土層を観察した結果は以下の通りである。

遺跡内の土層は大きく3層に分けられる。上・中層は，陸田の耕作土として利用されている黒色土で，厚さ約40～90cmである。確認面は粘土層で明褐灰色土であり，各土層からは，遺物が出土しなかった。



第55図　中新田Ｂ遺跡土層図

4　まとめ

中新田Ｂ遺跡は，遺構確認調査を調査面積の4分の1の割合まで実施した。しかし，遺構・遺物が検出されなかったため，遺跡の性格や時期を明確にすることはできなかった。

第8節　中新田C遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町上片田字新田前838-1ほかに所在し，当遺跡の北側約600mに上片田A遺跡がある。調査対象面積は，8,400m²で，現況は陸田になっている。当遺跡は，三和町の北西端にあたり，県道新宿・新田・総和線の北側で，三和町役場の北西約4.0kmに位置している。猿島台地の北端部で，宮戸川と大川の間の標高約23mの台地平坦部にあり，大川流域に広がる水田との比高は約3mほどである。当遺跡から溝3条が確認され，遺物は，溝の覆土上層から土師器片・砥石・鉄滓・香炉各1点が出土し，表土から少量の土器類が出土している。

2　調査経過

〈昭和62年度〉

1月前半　11日に上片田C遺跡の遺構確認調査と並行して，中新田C遺跡の調査前の遺跡全景写真撮影を実施した。

1月後半　湧水があるため，試掘調査前にエリア内の外側に幅1m，深さ1.5mの排水溝を重機で掘削した。その溝を利用して，東西南北の土層を観察し実測した。

2月前半　上片田C遺跡の遺構確認調査が終了したので，10日に当遺跡の遺構確認調査を開始した。日本平面直角座標第Ⅸ系X軸＋24,160m，Y軸－2,920mの交点を基準にして，方眼杭打ちを行い調査区を設定した。4分の1の割合で遺跡の南側B2区から遺構確認作業を実施した。確認面の20cm手前まで重機で掘削し，その後人力で確認面まで下げた。

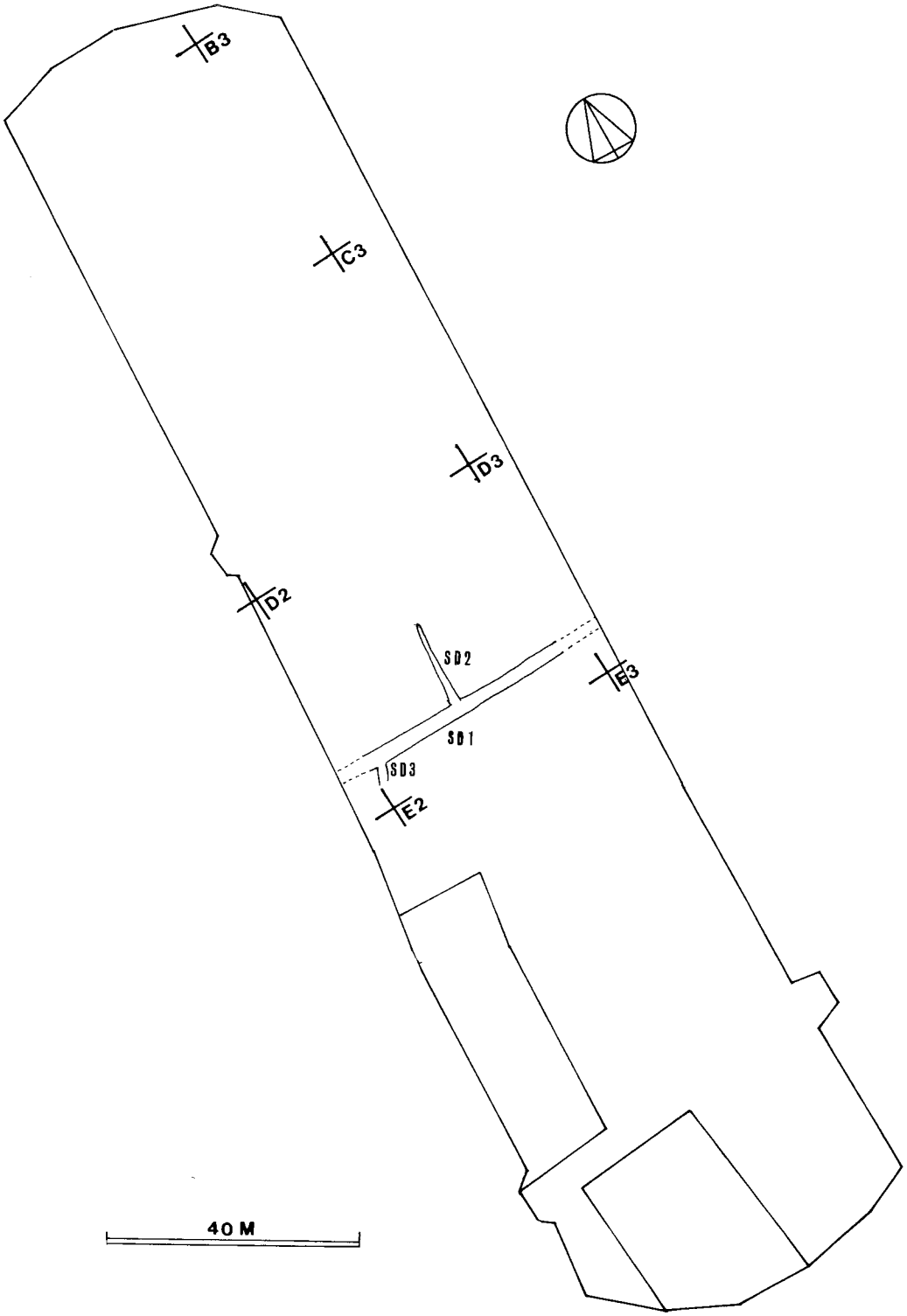
2月後半　遺構確認調査を引き続き調査面積の4分の1の割合で実施した。その結果，溝3条が確認された。遺構調査は，来年度当初に実施することになったので，25日に遺構確認状況の写真撮影後，調査を一時中止し，上片田C遺跡を重機で表土除去することとした。

〈昭和63年度〉

4月前半　12日から当遺跡の調査を開始した。溝3条の調査であったが，湧水がひどく困難な調査であった。

4月後半　25日に遺構の完掘写真を撮影した。26日から埋め戻しを行い，30日に終了した。

第56図　中新田B・C遺跡地形図



第57図　中新田Ｃ遺跡全体略図

3　遺構・遺物

当遺跡からは，溝３条が確認された。

(1)　溝

第１号溝（第58図）

本跡は，遺跡の中央部にあたる大調査区D2・D3区に確認され，ほぼ東から西へ真っすぐに遺跡を横断して調査区域外に延びている。溝の規模は，上幅170～250cm，下幅160～220cm，深さ６～24cm，全長約26mで西端で二股に分かれている。断面形は「⌒」を呈している。壁は，南壁が北壁にくらべ緩やかに立ち上がっている。底面は，ほぼ平坦である。高低差はほとんどない。

覆土は１層で，陸田の耕作土として使用された黒色土が堆積している。

遺物は，わずかに土師器と陶器の小片が１点ずつで，いずれも覆土から出土しており，流れ込みと考えられる。

第３号溝（第58図）

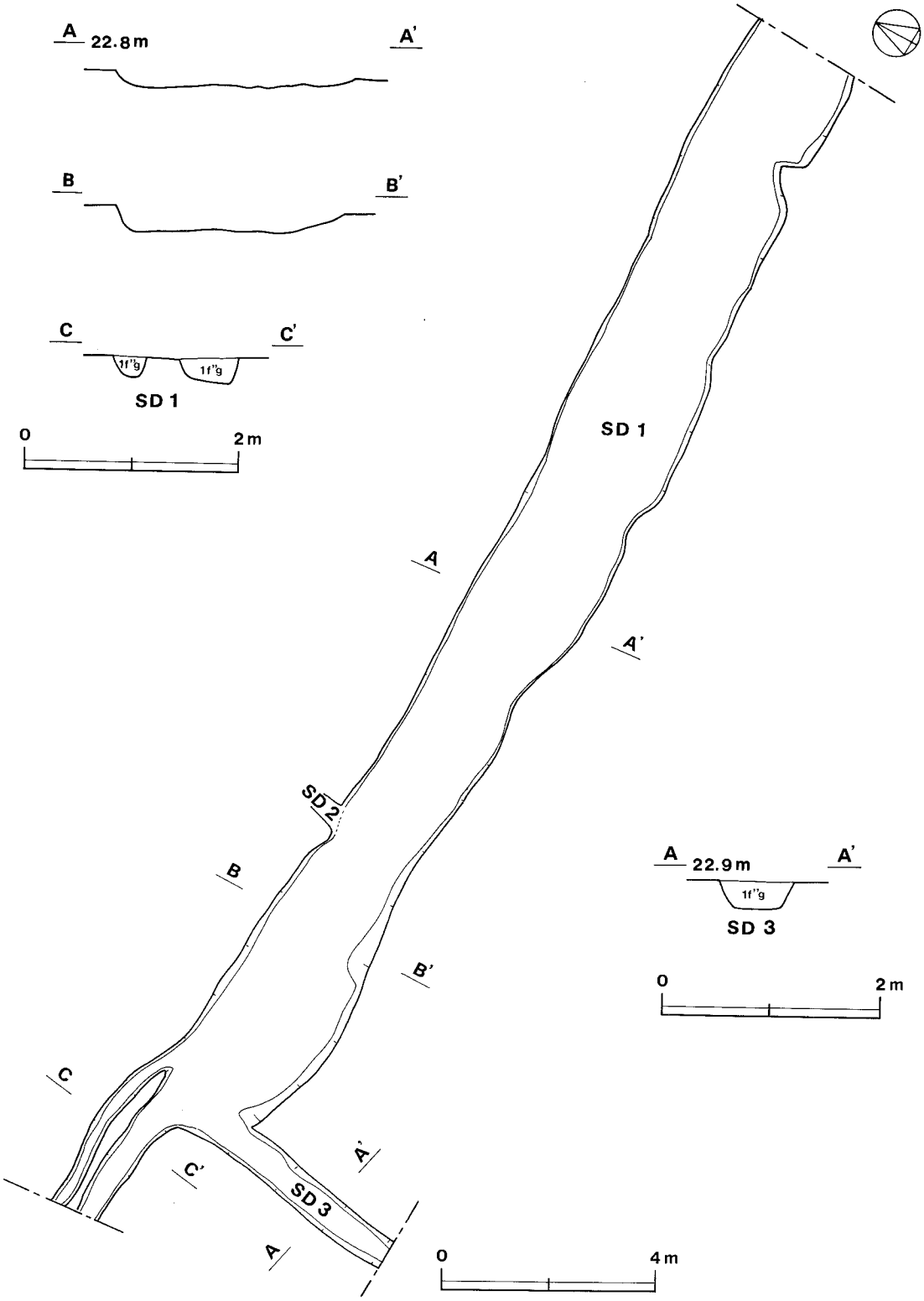
本跡は，遺跡の中央部にあたる大調査区D2区に確認され，第１号溝の西端から枝状に南西側に調査区域外に延びている。溝の規模は，上幅55～66cm，下幅28～56cm，深さ26cm，全長約５mである。本跡の北端D2i1区で，第１号溝に接続している。断面形は「⌐」を呈する。壁は，外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土は，陸田の耕作土の黒色土が堆積している。

遺物は，香炉の底部片と鉄滓が出土している。

表４　溝一覧表

番号	位置	主軸方向	断面	規模				壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
SD１	D2・D3	N－86°－W	⌒	26.0	170～250	160～220	６～24	外傾	平坦	－	土師器片１点 陶器片　１点	
SD２	D2	N－10°－E	⌐	17.0	40～50	26～33	20～26	垂直	平坦	－	砥石　１点	SD１と接続
SD３	D2	N－10°－E	⌐	5.0	55～66	28～56	26	外傾	平坦	－	香炉（底部） 鉄滓	SD１と接続



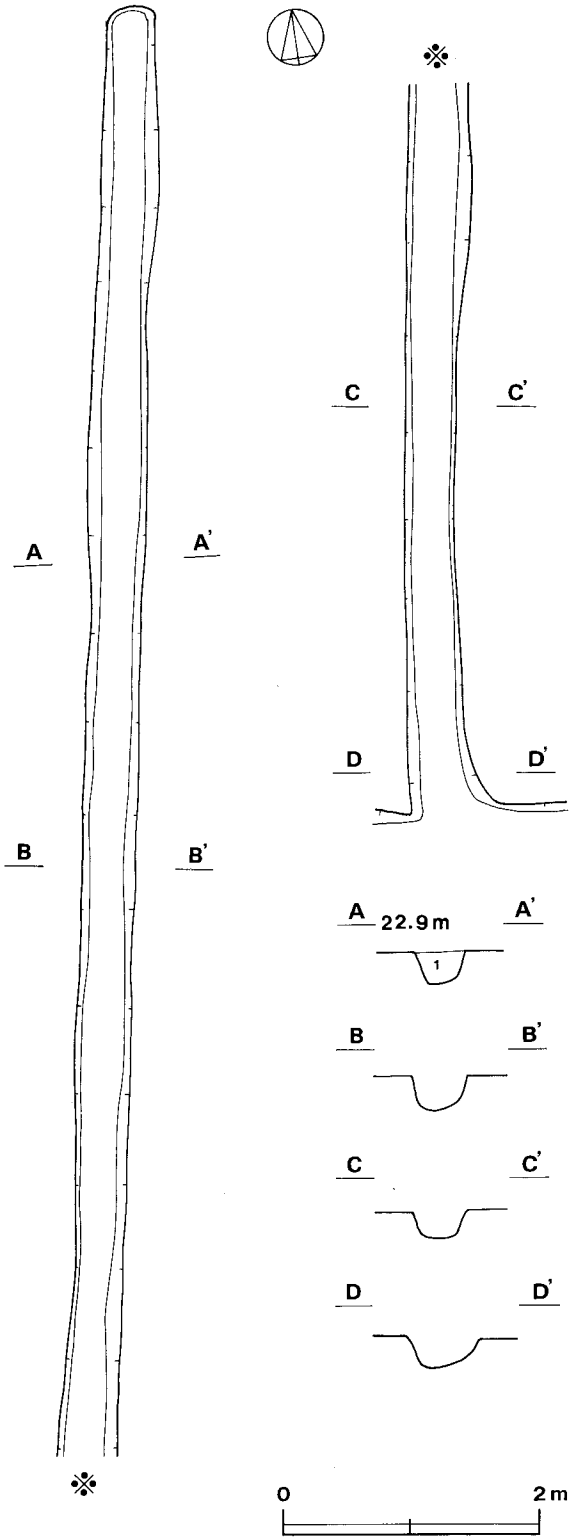
第58図　第１・３号溝実測図

第２号溝（第59図）

本跡は，遺跡の中央部にあたる大調査区D2区に確認され，第１号溝の中央部北側から，枝状にほぼ南北に延びている。溝の規模は，上幅40～50cm，下幅26～33cm，深さ20～26cm，全長約17mである。本跡は，北端はD2d6区で消滅し，南端D2h3区で第１号溝に接続している。断面形は「└┘」を呈しており，壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，底面はほぼ平坦である。

覆土は，陸田の耕作土の黒色土が堆積している。

遺物は，砥石が１点出土しただけである。



第59図　第２号溝実測図

(2) 出土遺物

当遺跡から黒浜式土器片1片と，すり鉢の底部片1片，砥石3点，内耳土器1点，器形が不明の鉄製品1点，赤茶色の近世以降の素焼土器片9片，土師器片(口縁部片1片，胴部片4片)，陶器片2片，磁器片3片，石14点が出土している。

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	すり鉢	B〔5.0〕 C (23.4)	底部は，平底で，体部は，ほぼ外傾して立ち上がる。	横ナデ。 筋は7本で1組。	砂粒・礫 暗赤褐色 普通	5% P－1 D2j2
2	内耳土器	A (26.8) B〔3.7〕	底部は，平底で，体部は，内彎気味に開いて立ち上がる。口唇部は丸味をもち，耳は欠損しているが痕跡は残る。	内・外面横位のナデ。耳接合。	砂粒 明赤褐色 普通	5% P－2 表採
3	香炉	B〔2.5〕 C (10.1) E 0.9	底部は，平底で，体部は，ほぼ垂直に立ち上がる。三足。	水挽き成形。回転ヘラ切り後，三足を底部下端に貼り付ける。内外とも施釉。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P－3 SD3

表5　石器観察表

図版番号	器種	出土地点	法量				石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第60図 5	砥石	D2j3X	(5.8)	3.7	1.4	(39.6)	安山岩	一部欠損
6	砥石	SD2	(2.8)	2.8	2.4	(28.7)	安山岩	一部欠損
7	砥石	B2g9	(5.0)	3.5	1.1	(23.3)	安山岩	一部欠損

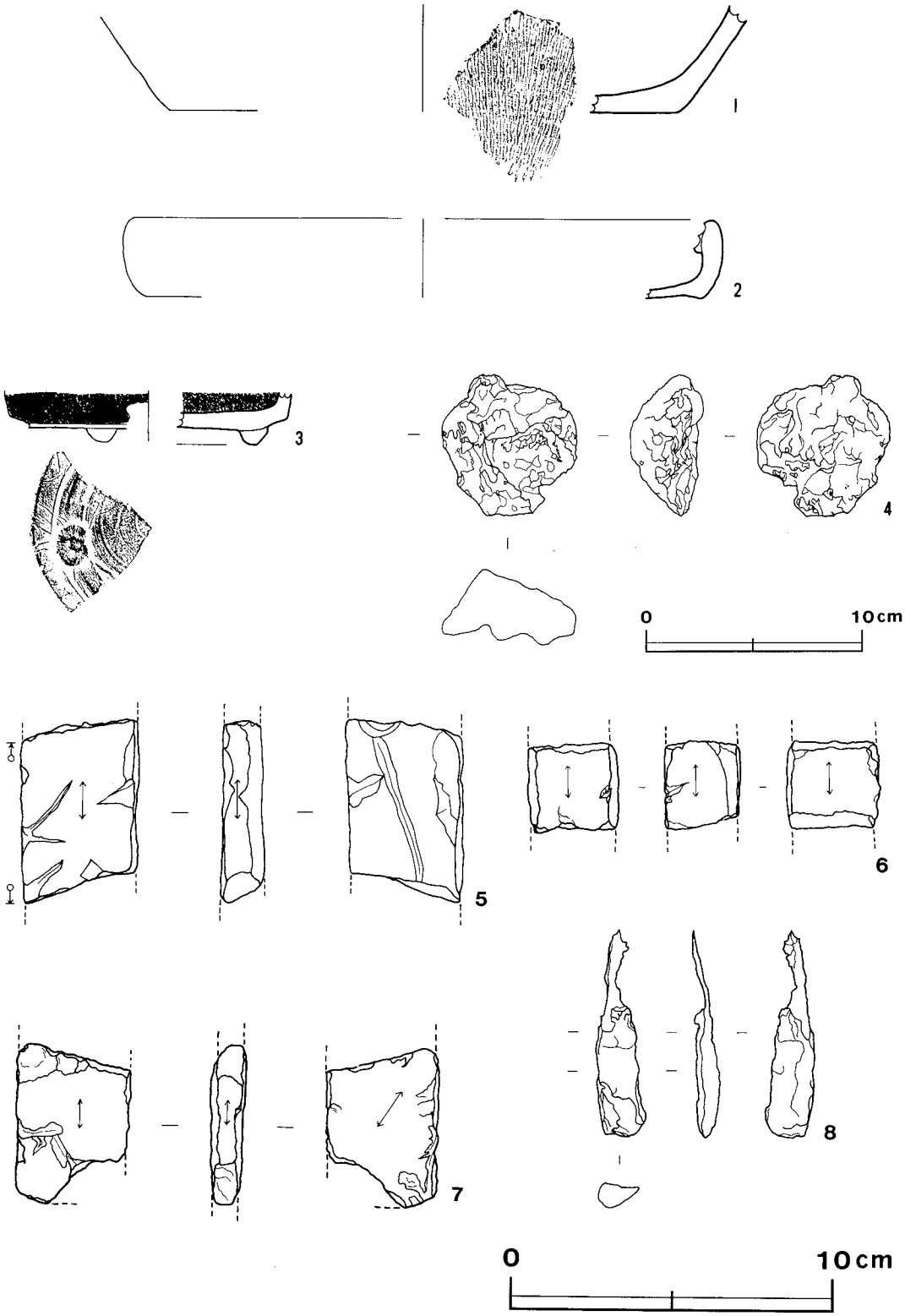
表6　鉄製品観察表

図版番号	器種	出土地点	法量				備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第60図 4	鉄滓	SD3	6.6	6.2	3.4	124.1	
8	鉄滓	B2i9	6.5	1.6	0.8	8.7	

4　まとめ

当遺跡から，溝3条が検出され，第2・3号溝は，第1号溝に接続していることから，3条の溝とも同一時期に掘られたものと考えられる。

遺物は，第1号溝から土師器片・陶器片，第2号溝から砥石，第3号溝から陶器と鉄滓がいずれも覆土上層から出土しているが，流れ込みであると思われる。したがって，3条の溝は形態・覆土から近世以降の排水溝と考えられるが，明確に性格や時期を推定することは，困難である。また，グリッド出土の遺物もごくわずかで，当遺跡の性格を論ずる資料としては不十分である。



第60図　出土遺物実測図・拓影図・石器実測図・鉄製品実測図

第9節　上片田A遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町上片田字弁天内前838-1ほかに所在し，調査対象面積は，10,200m²である。現況は大半が陸田で，一部が畑である。三和町の北西端にあたり，県道新宿・新田・総和線の北側で，三和町役場から北西約4.3kmに位置している。猿島台地の北端部の中央からやや東にあり，宮戸川と大川の間の標高約25mの台地平坦部にある。当遺跡の北約500mに上片田B遺跡が所在し，南約300mに中新田C遺跡が所在する。

2　調査経過

〈昭和63年度〉

8月下旬　22日から諸準備を進め，上片田C遺跡の調査と並行して，当遺跡の調査を開始した。草刈り後，発掘前の遺跡全景の写真撮影を実施した。日本平面直角座標第Ⅸ系X軸＋24,600m，Y軸－2,880mの交点を基準にして，方眼杭打ちを行い調査区を設定した。4分の1の割合で遺跡の中央部B3区から北に向って遺構確認調査を実施した。

9月上旬　引き続き4分の1の割合で遺構確認作業を実施したが，湧水があり，粘土質で確認面まで70～110cmと深く，作業もあまり進まなかった。そこで，重機を導入して60cmぐらいまで掘削し，遺構確認面までの20cmの土は人力で掘削した。遺構・遺物ともに検出できなかったので，東西南北に土層観察用トレンチを設定し，記録をとった。

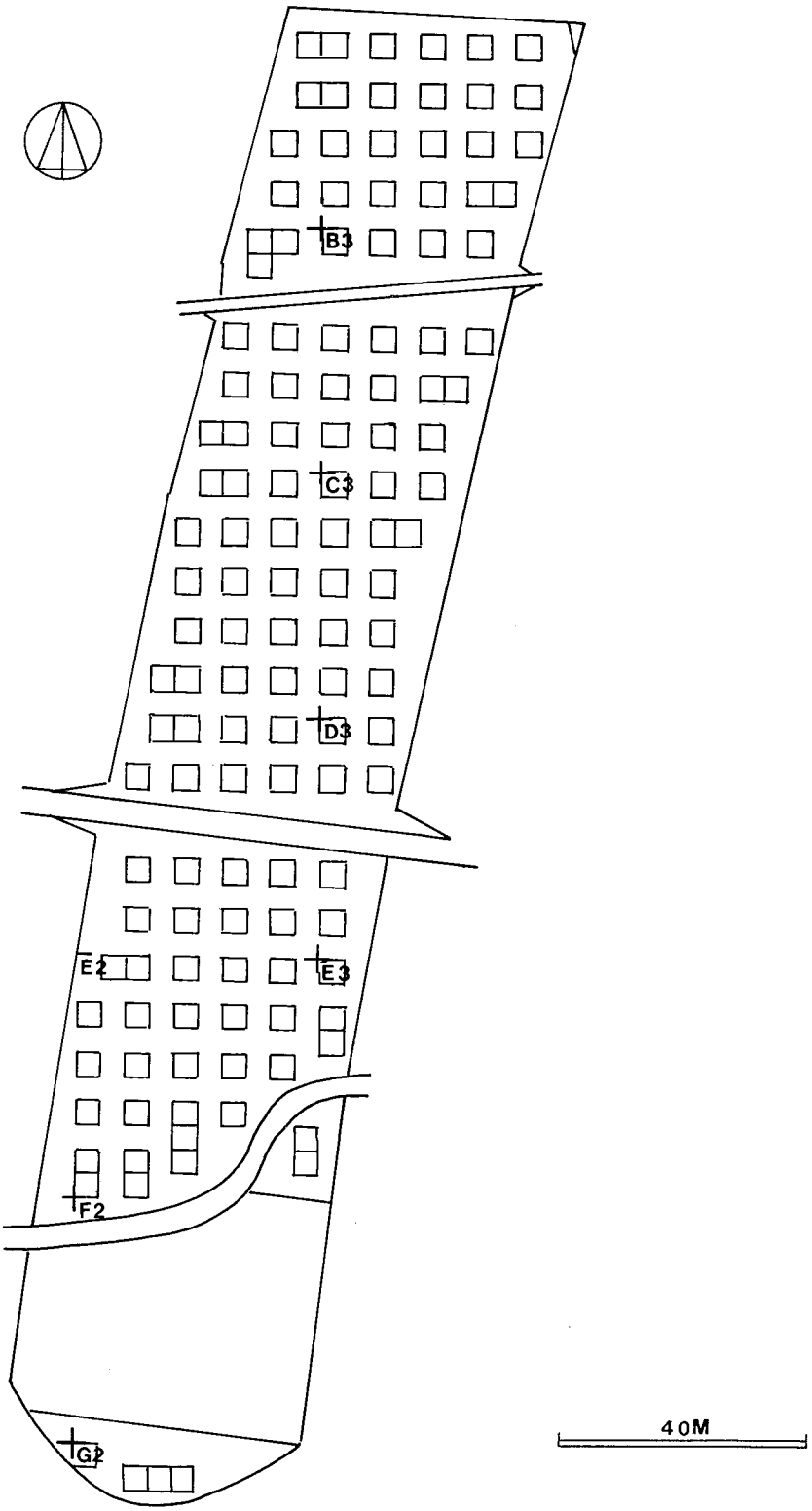
9月中旬　13日に試掘終了時全景写真撮影を行い調査を終了した。

3　遺構・遺物

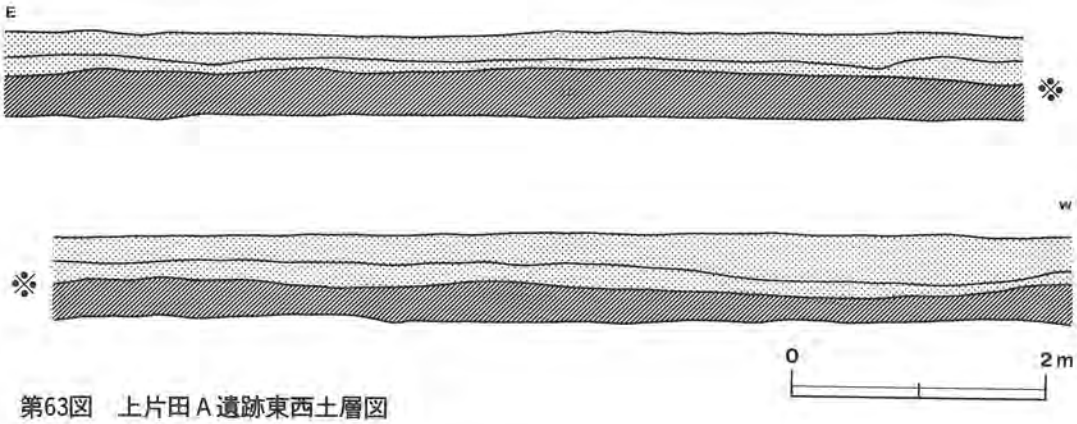
当遺跡より遺構・遺物は検出されなかった。なお確認調査後，土層を観察した結果は以下の通りである。

遺跡内の土層は，陸田の耕作土として利用されている黒色土で，ローム粒子を極少量含み，硬く締りがある層と軟らかい層とに分けられる。硬い層は，厚さ約30～40cm，軟らかい層は，厚さ約8～20cmである。確認面は，粘土層で明褐色土であり，北側の一部はローム層である。(第63図)

第61図　上片田Ａ遺跡地形図



第62図　上片田Ａ遺跡全体図



第63図　上片田Ａ遺跡東西土層図

4　まとめ

上片田Ａ遺跡は，試掘調査を調査面積の４分の１の割合まで実施したが，遺構・遺物は検出されなかったため，遺跡の性格や時期を明確にすることはできなかった。

第10節　上片田B遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町上片田字香取前583ほかに所在し，北東側約100mに上片田C遺跡が所在している。調査対象面積は，6,200㎡で，現況は畑である。遺跡は，三和町の北西端で，三和町役場から北北西約4.8kmに位置している。当遺跡から約200m側は栃木県との県境である。猿島台地の北端部で，宮戸川と大川の間の標高約27mの台地平坦部にあり，大川流域に広がる水田との比高は約2～3mである。当遺跡からは土坑1基，溝3条が検出されている。遺物は，溝から縄文式土器片・土師器片・須恵器片・石鏃等が少量出土し，表土からスタンプ形石器・古銭・鉄製品が出土している。

2　調査経過

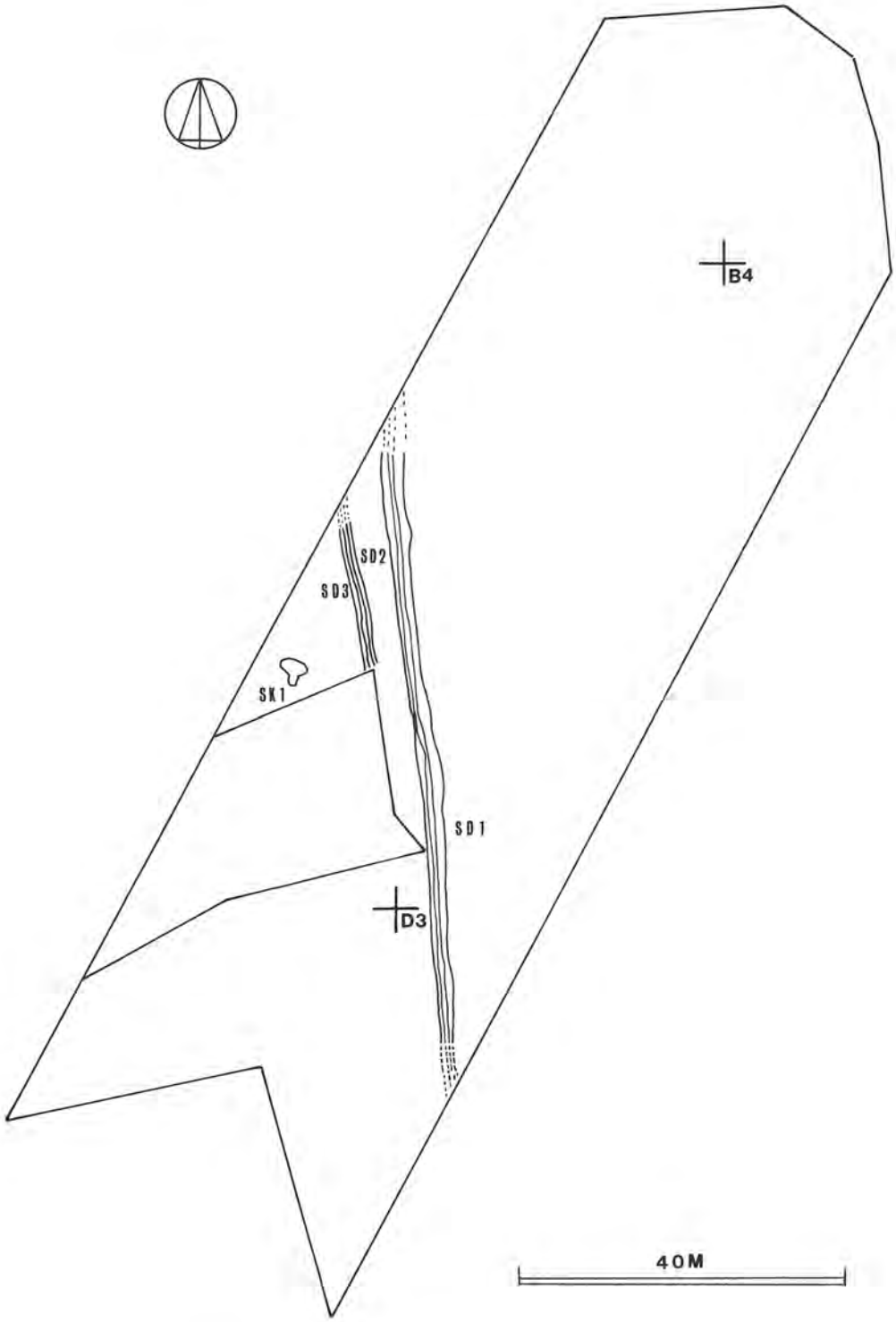
〈昭和63年度〉

5月前半　中新田C遺跡の調査が4月30日に終了し，2日より当遺跡の調査を開始した。上物を除去し草刈りを行った後，発掘前の遺跡全景写真撮影を実施した。日本平面直角座標第IX系X軸＋25,200m，Y軸－2,680mの交点を基準に方眼杭打ちを行い調査区を設定した。遺跡の北側A4区から南にむかって16分の1の割合で遺構確認作業を実施した。

5月後半　引き続き，8分の1，4分の1の割合で遺構確認作業を実施した。B3区のグリッドからC2区にかけて溝状の落ち込みを確認した。遺構確認作業終了時の写真撮影を行い，26日からグリッドを拡張し，西側に溝状の落ち込み2条と，さらに西側から土坑状の落ち込みを確認した。

6月前半　7日から第1号溝掘り込みを開始し，覆土上層より石鏃1点が出土した。9日，覆土中層から石鏃・鉄滓が出土し，13日，覆土中層からさらに石鏃が出土した。第2・3号溝も14日から調査を開始した。15日から土坑の調査を開始し，1mぐらい掘ると湧水があるのでポンプを導入して排水した。

6月後半　20日，土坑は湧水が多くポンプ2台で排水しながら掘り込んだが，作業はどうしても遅くなった。23日土坑，第2・3号溝の調査を終了した。24日に第1号溝のベルト土層セクションを実測し，写真撮影を実施した。ベルト除去後，平面実測を実施した。24日～28日まで雨天日が続く。29日排水作業をしながら，第1号



第64図　上片田Ｂ遺跡全体図

溝の平面実測を実施した。

7月前半　引き続き，排水作業をしながら平面実測をし，5日に完掘写真撮影を実施し調査を終了した。

3　遺構・遺物

当遺跡からは，土坑1基，溝3条が検出された。

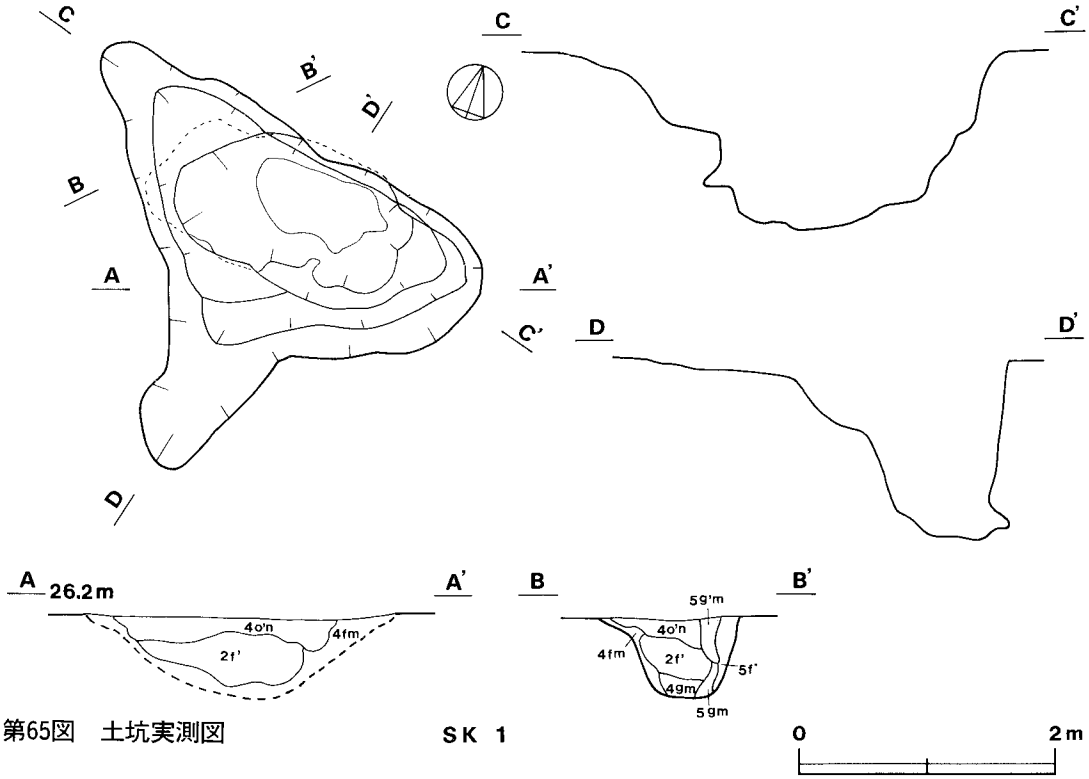
(1)　土坑

第1号土坑（第65図）

本跡は，調査区中央部の西端C2c7区を中心に確認され，平面形は不定形を呈していて，長径3.49m，短径2.74m，深さ10～139cmである。長径方向はN－71°－Wを指している。東は，底面より緩いカーブを描いて立ち上がり，北・南壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側の壁の一部にオーバーハング状の掘り込みが確認されている。

覆土は，大きく3層に分かれ，すべての層にロームブロックを含んでいる。上層は砂を極少量含んだ暗褐色土，中層は硬い黒褐色土であり，下層は粒子を少量含む暗褐色土で，底部に近づく程粘性があった。ブロック状に堆積している。

遺物は，出土していない。



第65図　土坑実測図　SK 1

(2) 溝

第1号溝（第66図）

本跡は，C3・D3区に確認され，規模は，上幅180～300cm，下幅15～60cm，深さ75～94cm，全長73mでほぼ南北に延びている。壁はロームで硬く，断面形は，北側で「⌐⌐」，南側で「⌐V」を呈している。北側の断面形は底部から約40cmまではほぼ垂直で，その上部は外傾して立ち上がっている。南側の断面形は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は一部撹乱されているが，ほぼ平坦で北から南へ緩く傾斜している。

覆土は，ローム粒子を含む，暗褐色土・黒褐色土・褐色土がレンズ状に自然堆積している。

遺物は，覆土上層に土師器の坏形土器，須恵器の坏形土器，石鏃3点，鉄滓5点が出土しているが，流れ込みと考えられる。

第2号溝（第67図）

本跡は，B2・C2区に確認され，西側へ0.5m離れて第3号溝がほぼ南北に並行している。規模は，上幅40～90cm，下幅10～35cm，深さ13～27cm，全長約16.50mである。断面形は「⌐V」を呈している。壁は，凸凹があり緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凸凹を呈し南から北にかけて緩やかに傾斜している。

覆土は，ローム粒子を含む，褐色土・黒褐色土が堆積している。

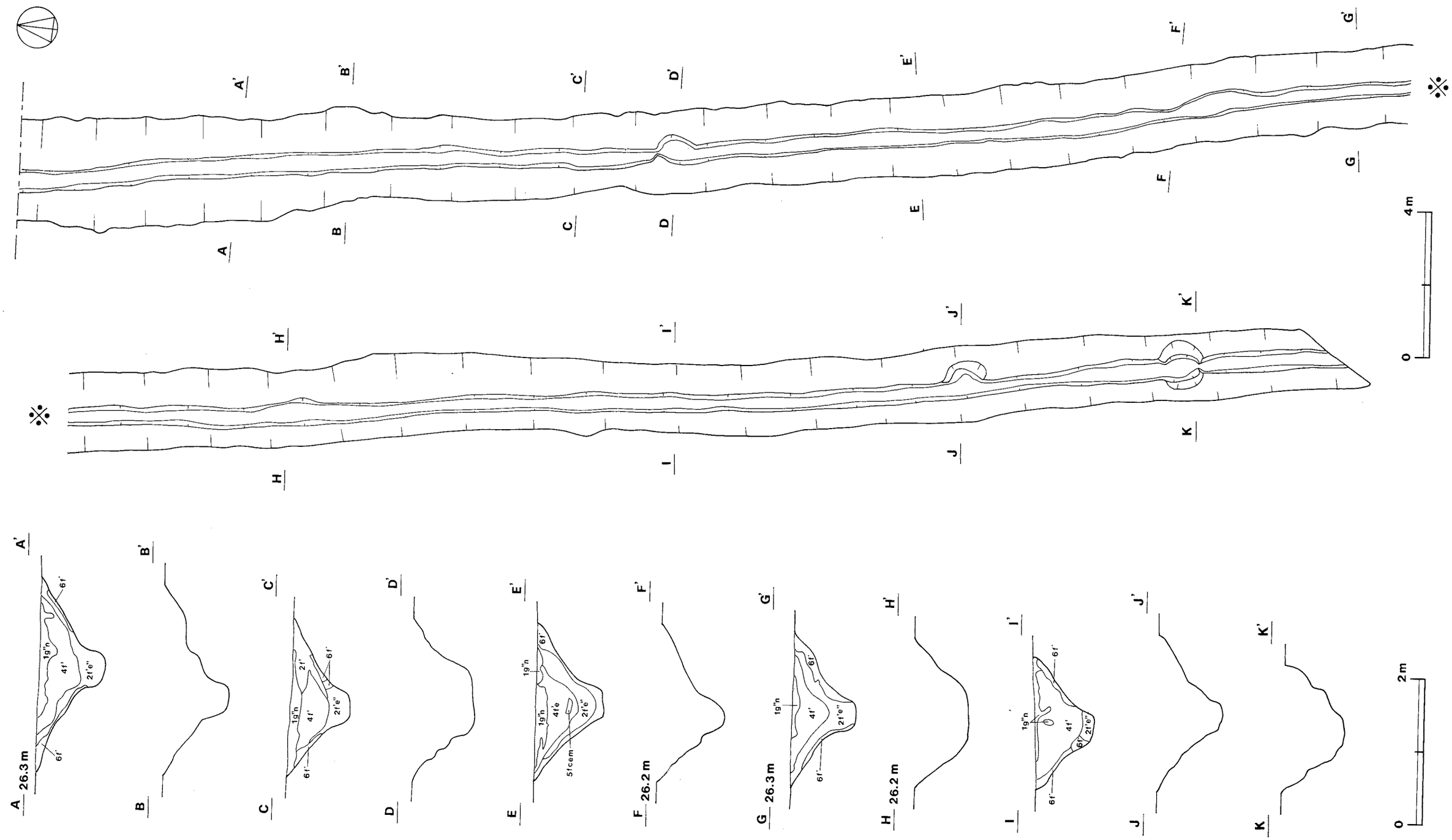
遺物は，陶器の香炉が出土しただけである。

第3号溝（第67図）

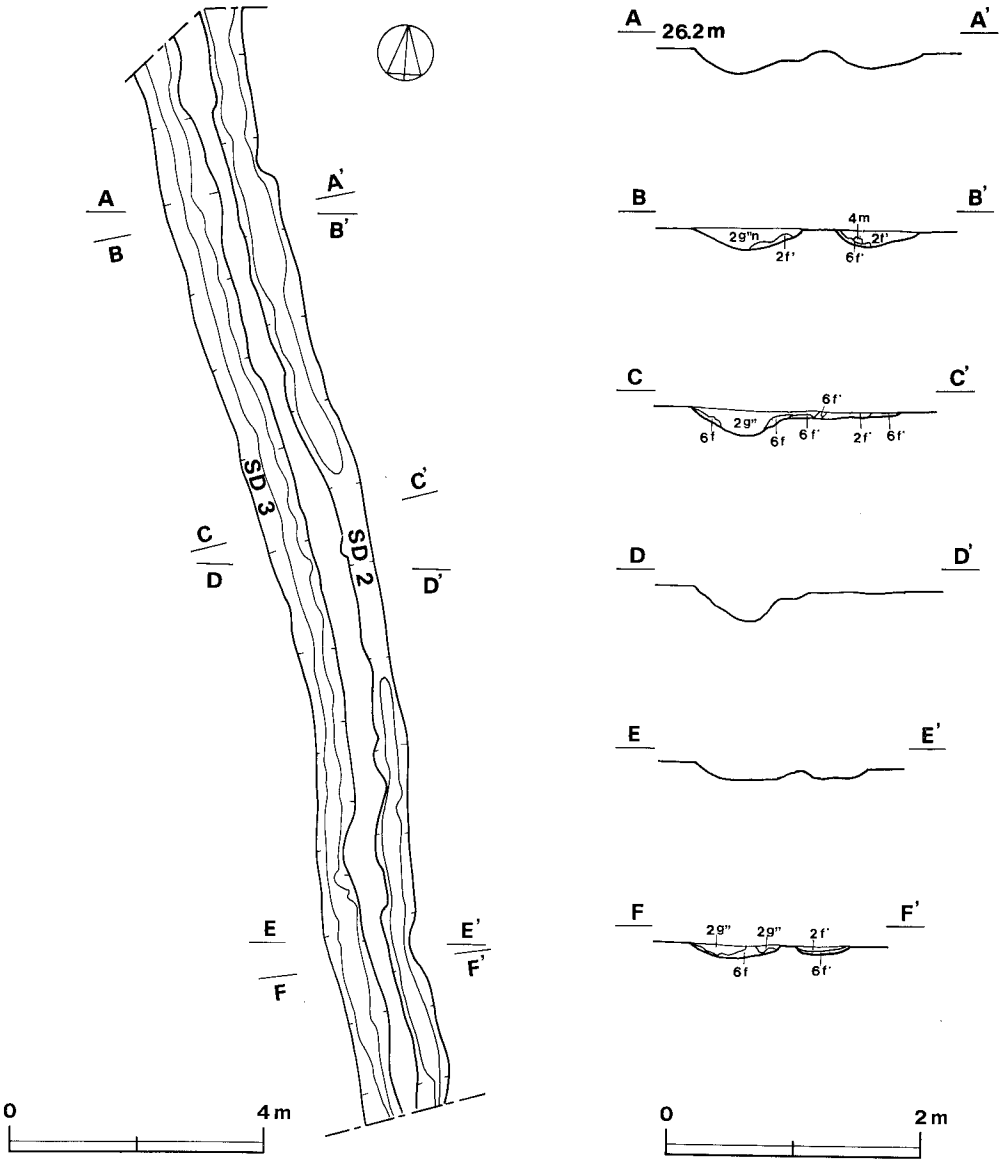
本跡は，B2・C2区に確認され，東へ約0.5m離れて第2号溝が確認されている。規模は，上幅47～82cm，下幅7～52cm，深さ13～50cm，全長約17.20mである。断面形は「⌐⌐」を呈する。壁は凸凹で緩やかに外傾して立ち上がる。底面は溝中央部より南側で浅くなり，凸凹を呈している。

覆土は，褐色土・黒褐色土が堆積している。

遺物は，出土していない。



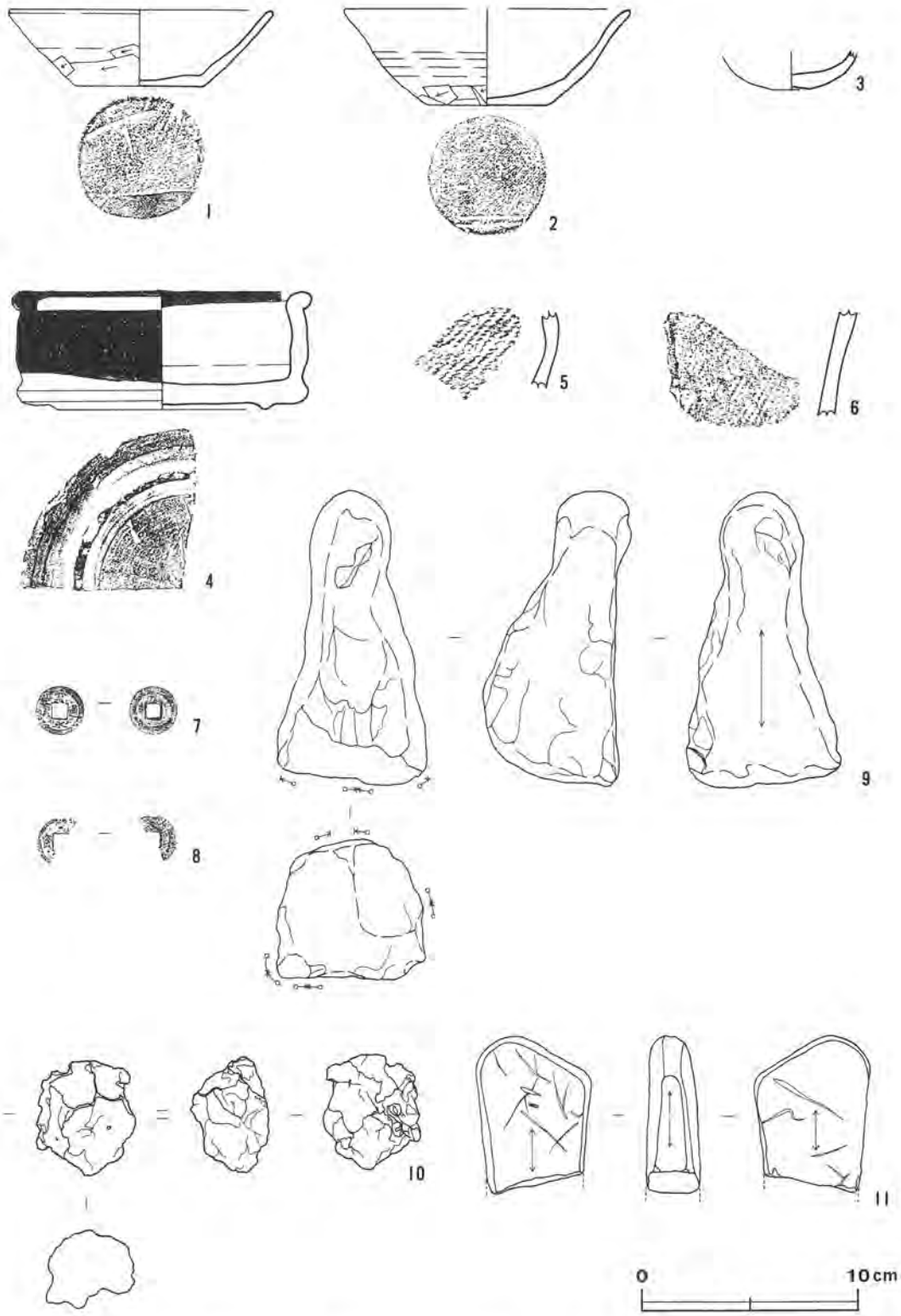
第66図　第１号溝実測図



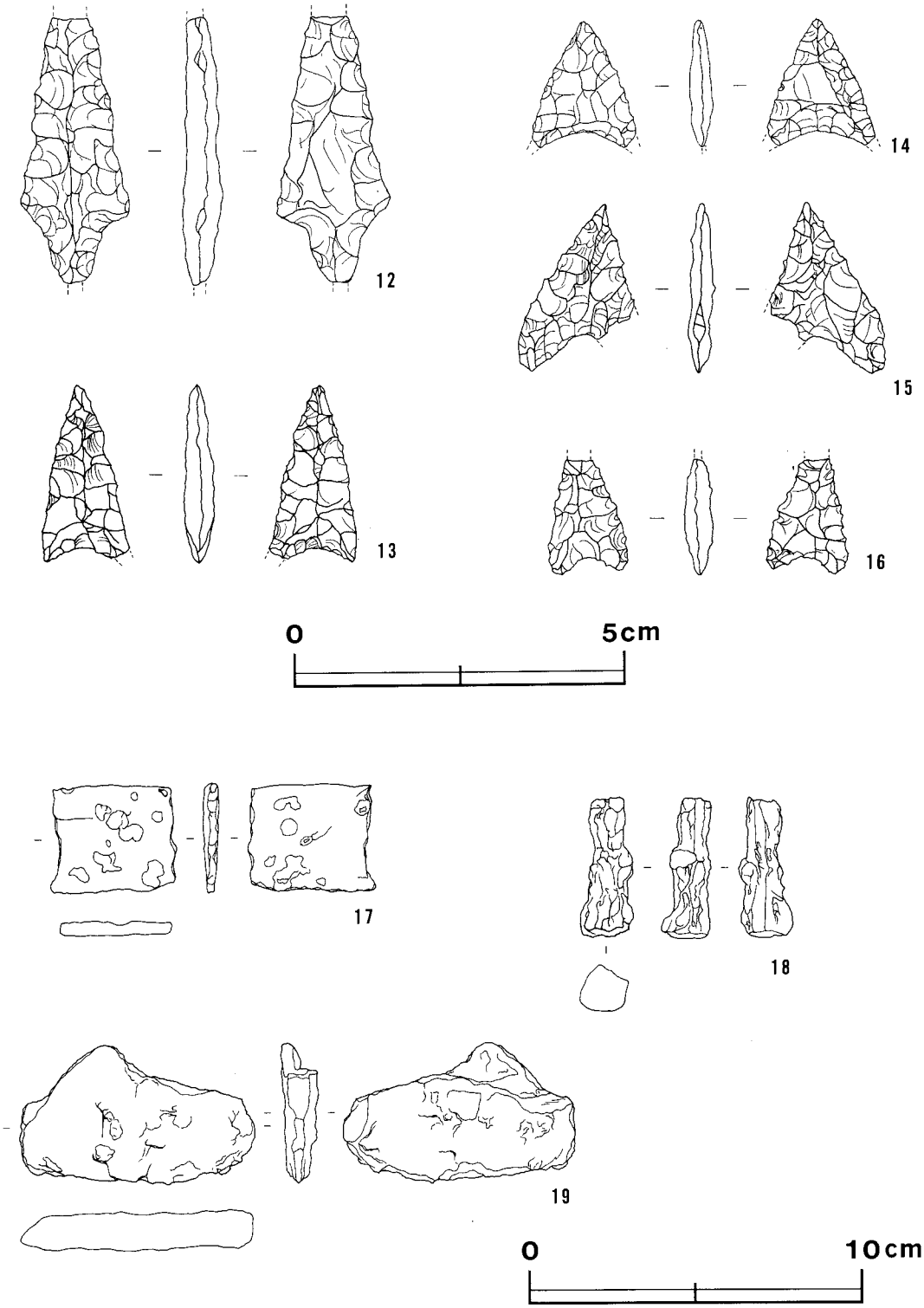
第67図　第２・３号溝実測図

表７　溝一覧表

番号	位置	主軸方向	断面	規模 長さ(m)	規模 上幅(cm)	規模 下幅(cm)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
SD 1	C3・D3	N－6°－W		73	180～300	15 ～60	75～ 94	外傾	平坦	自然	坏形土器（土師器・須恵器）・石鏃3点・鉄滓5点	
SD 2	B2・C2	N－13°－W		16.50	40～ 90	10～ 35	13～ 27	外傾	凸凹		陶器(香炉)	
SD 3	B2・C2	N－12°－W		17.20	47～ 82	7～ 52	13～ 50	外傾	凸凹			



第68図　出土遺物実測図・拓影図・石器実測図・鉄製品実測図(1)



第69図　石器実測図・鉄製品実測図(2)

(3) 出土遺物

当遺跡3条の溝から土師器・須恵器・陶器等が極少量出土し，グリッドから縄文式土器片2片・土師器片54片・須恵器片12片・陶磁器片11片が出土している。石器類は，石鏃5点，スタンプ形石器1点が出土している。その他の出土遺物は，古銭2枚と鉄滓が出土した。本項では石器（溝から出土した石鏃を含む）・古銭に若干の解説を加え，個々の遺物の出土位置，法量については観察表にして掲載した。

石鏃（第69図）

石鏃は5点出土し，5点を図示した。完存品は2点で，他の3点は基部の一部や先端部が欠損している。石質はチャートが4点，頁岩が1点である。有茎石鏃が1点，無茎石鏃が4点で抉りの深いものが2点，浅いものが2点である。

スタンプ形石器（第68図）

スタンプ形石器は，1点完存して出土している。自然礫の上・下端と側面を打ち欠き，片手で握りやすいように整形している。上端は，丸く加工され，下端の平坦部は主な使用面と思われる。側面の一面と上端をすっている。石質は花崗岩である。

古銭（第68図）

古銭は，寛永通寶が2点で，ともにB2・B3区から出土している。いずれも新寛永通寶で，江戸時代に鋳造されたものである。8は一部欠損している。

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	坏形土器 （須恵器）	A (12.1) B 3.6 C 6.0	底部で，体部は外傾して立ち上がる。	巻き上げ水挽き成形，底部ヘラケズリ，体部下端はヘラケズリ。	砂粒・礫 灰白色 普通	60% P1 SD1
2	坏形土器 （土師器）	A (13.2) B 4.5 C 5.6	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。底部内面は剥離している。	水挽き成形，底部はヘラケズリ，体部下端はヘラナデ。	砂粒・小礫・雲母 にぶい橙色	50% P3 SD1
3	坩 （土師器）	B (1.8) C (1.8)	底部片。丸底で内彎しながら立ち上がる。	内・外面ナデ整形。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色	3% SD1
4	香炉 （陶器）	A (13.3) B 5.5 C (0.98) E 0.3	底部は平底で，体部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁部は外傾する。口唇部は丸くなっている。	水挽き成形，底部回転ヘラ切り後，ケズリ出しにより高台をつくる。体部外面は施釉。	(胎土)淡黄色 (釉) 黒褐色	25% SD2

表 8　石器観察表

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第68図 9	スタンプ形石器	B2	13.7	7.1	6.8	630.4	花崗岩	完形
11	砥石	B2j9	(7.3)	5.4	2.6	(138.8)	硬質砂岩	一部欠損
第69図 12	石鏃（有茎）	SD1	(4.0)	1.7	0.6	(2.5)	頁岩	先端部欠損
13	石鏃（無茎）	SD1	2.6	1.3	0.5	1.1	チャート	完形
14	石鏃（無茎）	SD1	1.9	1.6	0.4	0.7	チャート	完形
15	石鏃（無茎）	D2e7	2.6	1.8	0.4	1.1	チャート	基部欠損
16	石鏃（無茎）	D2i5	(1.7)	1.3	0.4	(0.7)	チャート	先端部欠損

表 9　鉄製品観察表

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第68図 10	鉄滓	SD1	5.4	4.7	3.7	95.2	
第69図 17	鉄製品	C2c9	3.3	3.9	0.5	7.1	
18	鉄製品	C2c9	4.3	1.6	1.5	9.5	
19	鉄製品	B2i9	4.2	7.1	1.2	60.1	

表10　古銭観察表

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第68図 7	寛永通寶	B2i0	2.2	0.10	0.10	2.2	完形
8	寛永通寶	B3g1	2.3	0.15	0.15	1.4	一部欠損

4　まとめ

当遺跡からは土坑１基，溝３条が検出され，遺物は縄文式土器片・土師器片・須恵器片・陶器片・石鏃・スタンプ形石器・鉄製品・古銭等が遺物収納箱に１箱出土している。

第１号土坑は，遺物が出土していないことから時期や用途は不明である。

第１号溝は，覆土上層から土師器と須恵器の坏形土器，石鏃等が出土し，いずれも流れ込んだものと思われる。時期については，伝承で調査区の南側に池があったということから，灌漑用の溝とも考えられる。第２・３号溝については，ローム面への掘り込みが浅いことや，現在の耕作者の分筆とも一致することから，根切り溝の可能性が考えられる。

第11節　上片田C遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡三和町上片田字北浦564-1ほかに所在し，南西約600mに上片田B遺跡が所在している。調査面積は5,400m²で，現況は畑である。遺跡は，三和町の北西端で，三和町役場から北北西5kmの位置にあり，新4号国道路線上の栃木県境に所在する。猿島台地の北西部にあり，東側0.2kmには大川が流れている。標高は，24～26mで北東側に緩く傾斜しており，大川流域に広がる水田との比高は1～4mである。当遺跡から縄文時代の住居跡2軒のほか，土坑19基，溝10条，井戸1基が検出された。遺物は，住居跡から，縄文時代前期と比定される土器が3,000点余り出土しており，復元できる土器も数点ある。土坑，溝からの出土遺物は，少量の土器片であり，性格や時期は不明である。グリッドからも縄文式土器片・石器・鉄滓が出土している。

2　調査経過

〈昭和62年度〉

1月前半　12日より上片田C遺跡の調査を開始した。草刈り後に，発掘前の遺跡全景の写真撮影を実施した。日本平面直角座標第IX系X軸＋25,400m，Y軸－2,560mの交点を基準にして方眼杭打ちを行い調査区を設定した。8分の1の割合で遺跡の北側から遺構確認調査を開始した。

1月後半　引き続き遺構確認調査を実施する。さらに4分の1の割合で遺構確認調査を実施した。

2月前半　3日に遺構確認調査終了全景写真撮影を実施する。B2・B3区の黒色の落ち込みを確認したが，遺構としての判断がつかず，東西南北の土層を観察するためトレンチ発掘を実施する。土層を観察すると，確認面では淡黄色の粘土層で，遺物もないことから自然堆積の谷津であると判断した。8日に南側C1区にテストピットを掘り土層を観察した。10日に遺構確認作業を終了したので，中新田C遺跡の遺構確認調査を実施した。

2月後半　21日より遺構の濃厚なB2・C2区を中心として表土除去を実施した後，遺構確認調査を中新田C遺跡と並行して実施した。遺構確認調査の結果，住居跡2軒，土坑19基，溝10条，井戸1基を確認し，遺構調査は来年度にすることになった。

〈昭和63年度〉

7月後半　18日諸準備をととのえ草刈りをした後，C2区から遺構調査を開始し，住居跡1軒，土坑7基，溝5条の調査を実施した。住居跡から縄文時代黒浜式期に属する土器片が出土した。

8月前半　先月に引き続きC1・C2区，B2区の遺構調査を進めた。住居跡2軒，土坑19基，井戸1基の調査を実施した。第1号住居跡から縄文時代黒浜式期の土器を主体とする2,500点余りの土器片が出土した。

8月後半　上片田C遺跡に図面関係の作業員6名を残して，他は上片田A遺跡の遺構確認作業を進めた。31日に遺跡の完掘写真撮影をした。

9月前半　8日に航空写真を実施し，上片田C遺跡の調査を終了した。

3　遺構・遺物

当遺跡からは，竪穴住居跡2軒，土坑19基，溝10条，井戸1基が検出されている。

住居跡は，遺跡中央部は谷津であるため，北側B2区と南側C2区から1軒ずつ検出されている。

土坑・溝は，遺跡の北側A区と南側D区から検出されている。土坑・溝については，時期を決定づける遺物は出土しておらず，性格も不明である。

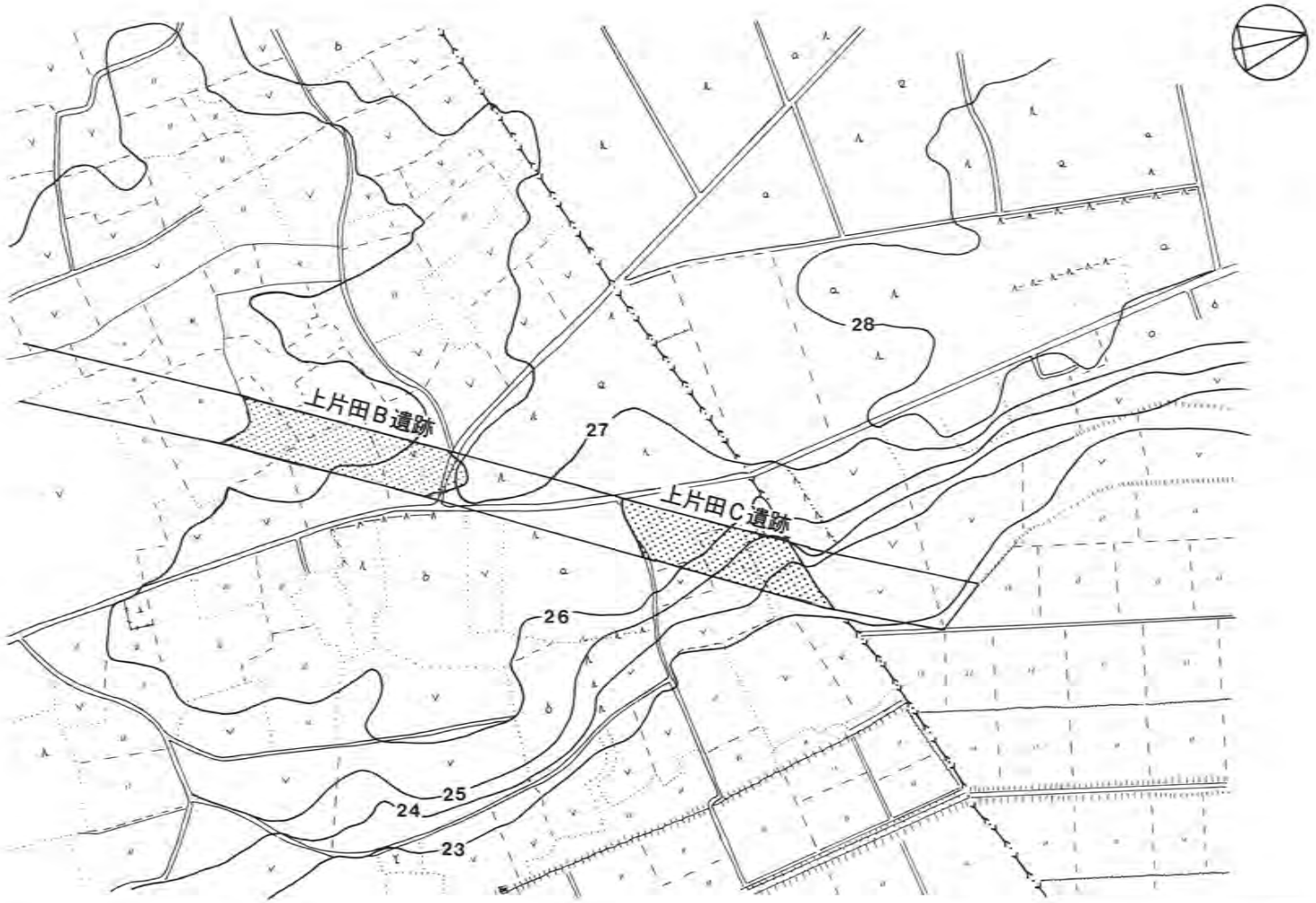
遺物は，ほとんどが縄文式土器片と石器である。縄文式土器は，縄文時代前期中葉黒浜式期に比定される土器片で，総数6,000点余り出土している。黒浜式土器片以外では，若干の浮島式土器片と縄文時代中期に比定できる阿玉台式土器片が出土している。石器は，85点余り出土している。

(1)　住居跡

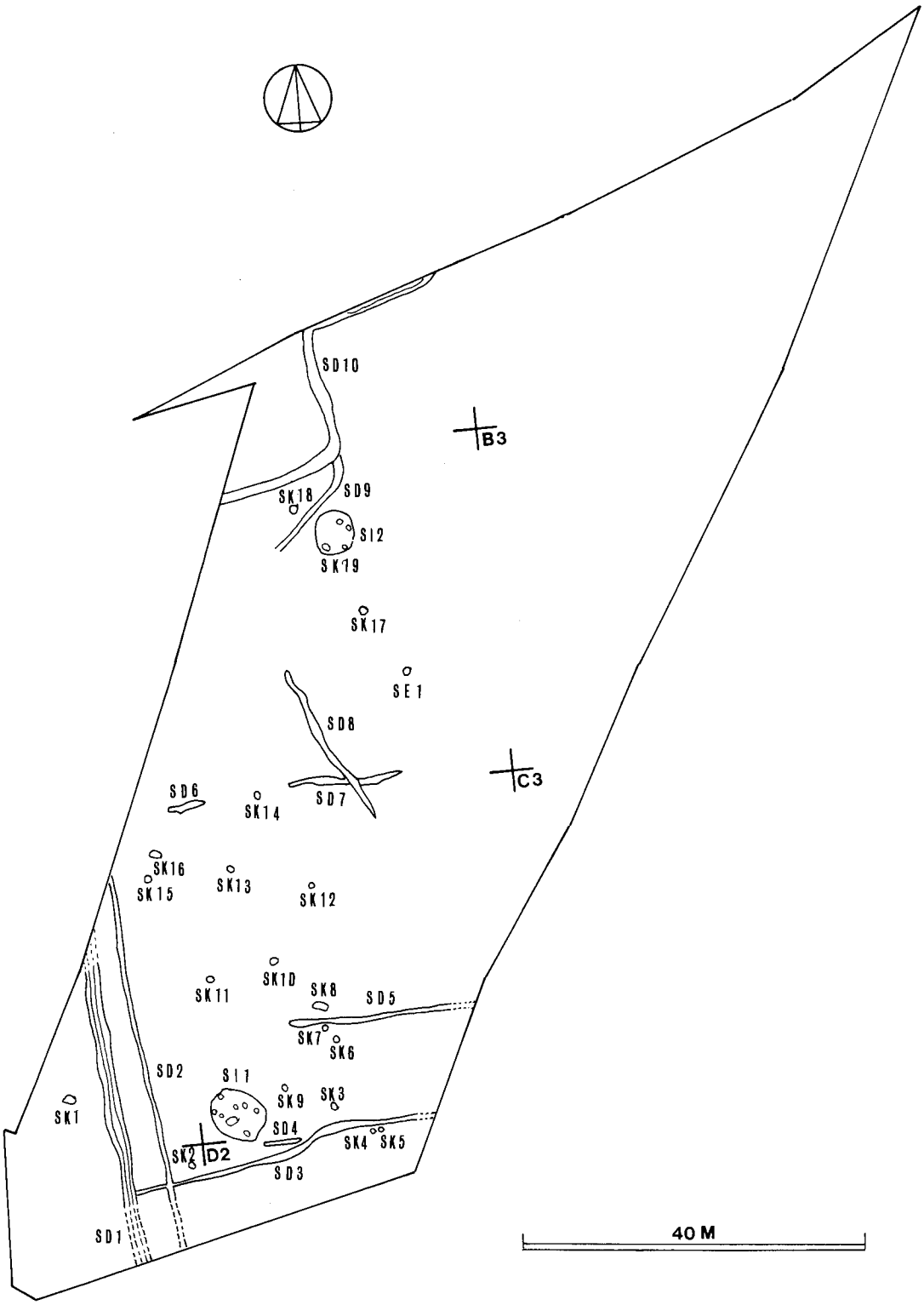
第1号住居跡（第72図）

本跡は，遺跡南側のC2j2区を中心として確認された。規模は，長径6.66m，短径5.41mの楕円形を呈し，長径方向はN－56°－Wである。壁高は28～41cmで，壁はやや外傾して立ち上がり，南西壁付近だけが段状を呈して緩やかに立ち上がるため出入り口部と考えられる。床の中央部が凹凸で，他はほぼ平坦である。炉は，床中央部から北西よりに2か所検出され，炉Aは100cm×48cmほどの不定形を呈し，皿状に6cm程掘り込まれている。炉内には，焼土粒子中量，焼土小ブロックを含む褐色土が充満し，炉床はかなり硬く焼けた状態を示している。炉Bは，60cm×38cmほどの不定形を呈し，皿状に14cm程掘り込まれていた。炉床は余り硬く焼けていなかった。ピットは8か所検出され，直径23～68cm，深さ34～48cm程である。主柱穴と考えられるのは，P_1～P_6の6本で，P_1～P_3とP_4～P_6が直線的に配置されている。P_5は，P_2と対応する位置にあるため主柱穴の可能性があると判断した。P_3は，完掘写真撮影後検出した。

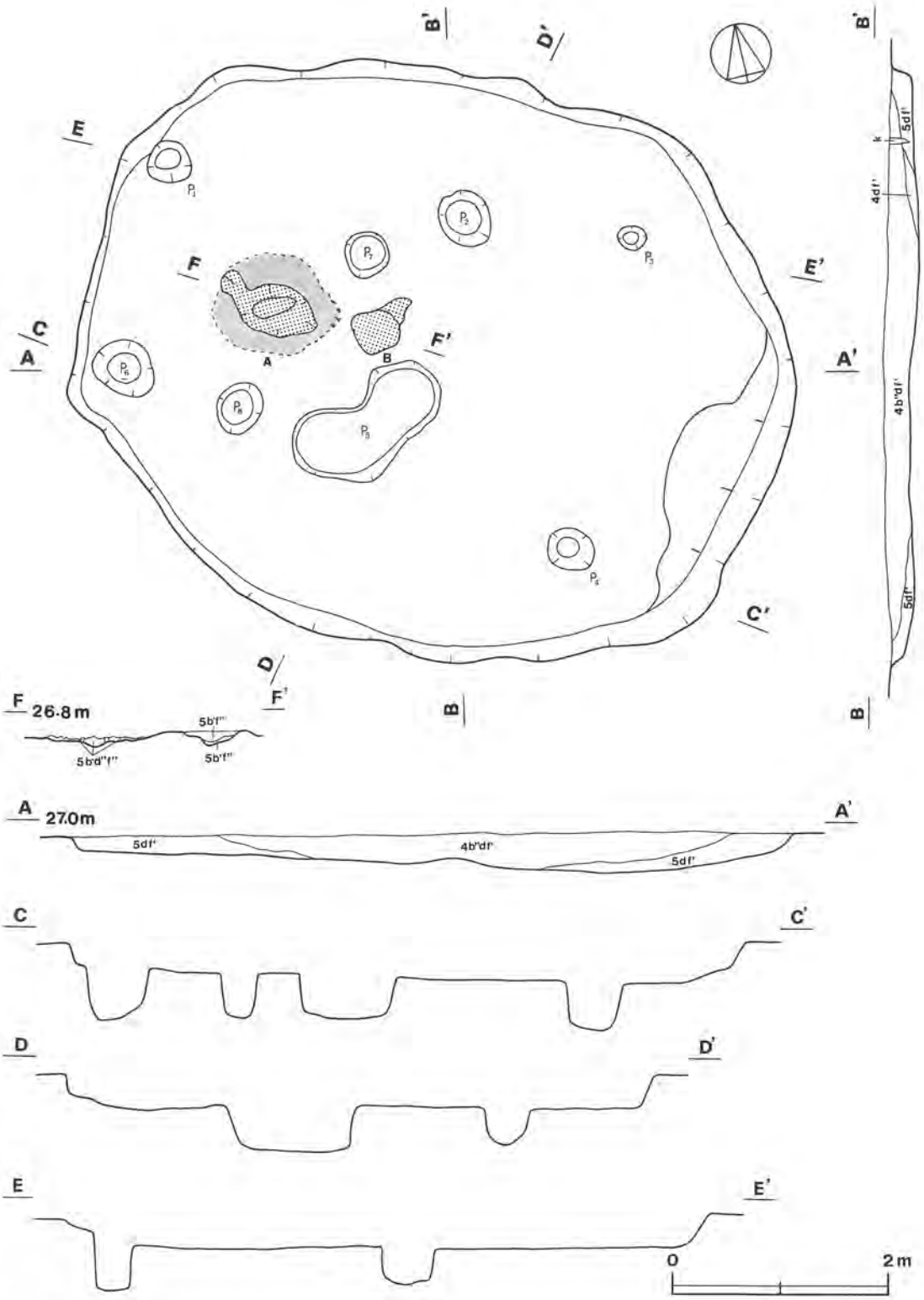
覆土は，2層から成り，主にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んだ暗褐色土・褐色土が自



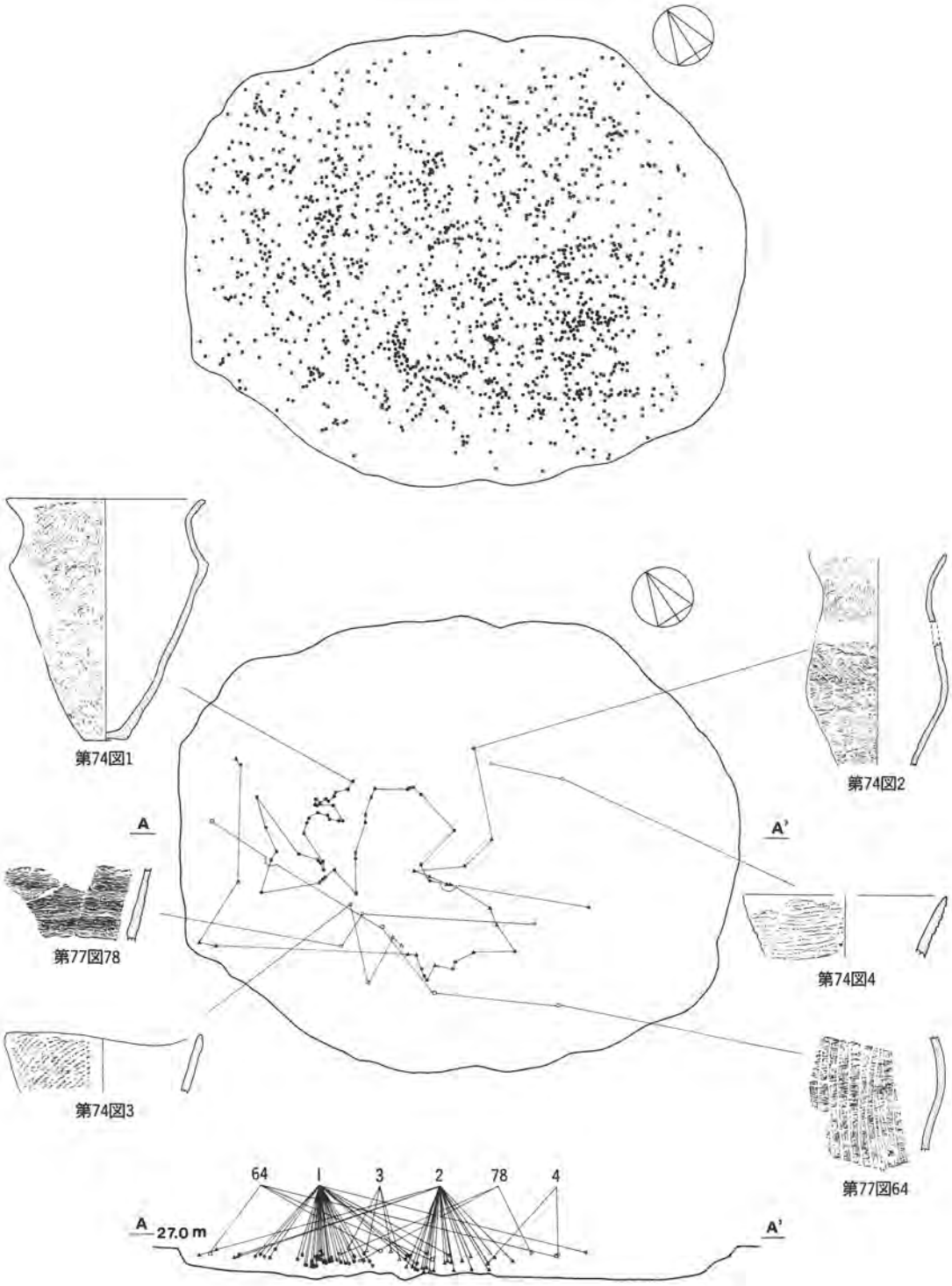
第70図　上片田B・C遺跡地形図



第71図　上片田Ｃ遺跡全体図



第72図　第１号住居跡実測図



第73図　第１号住居跡遺物出土位置図

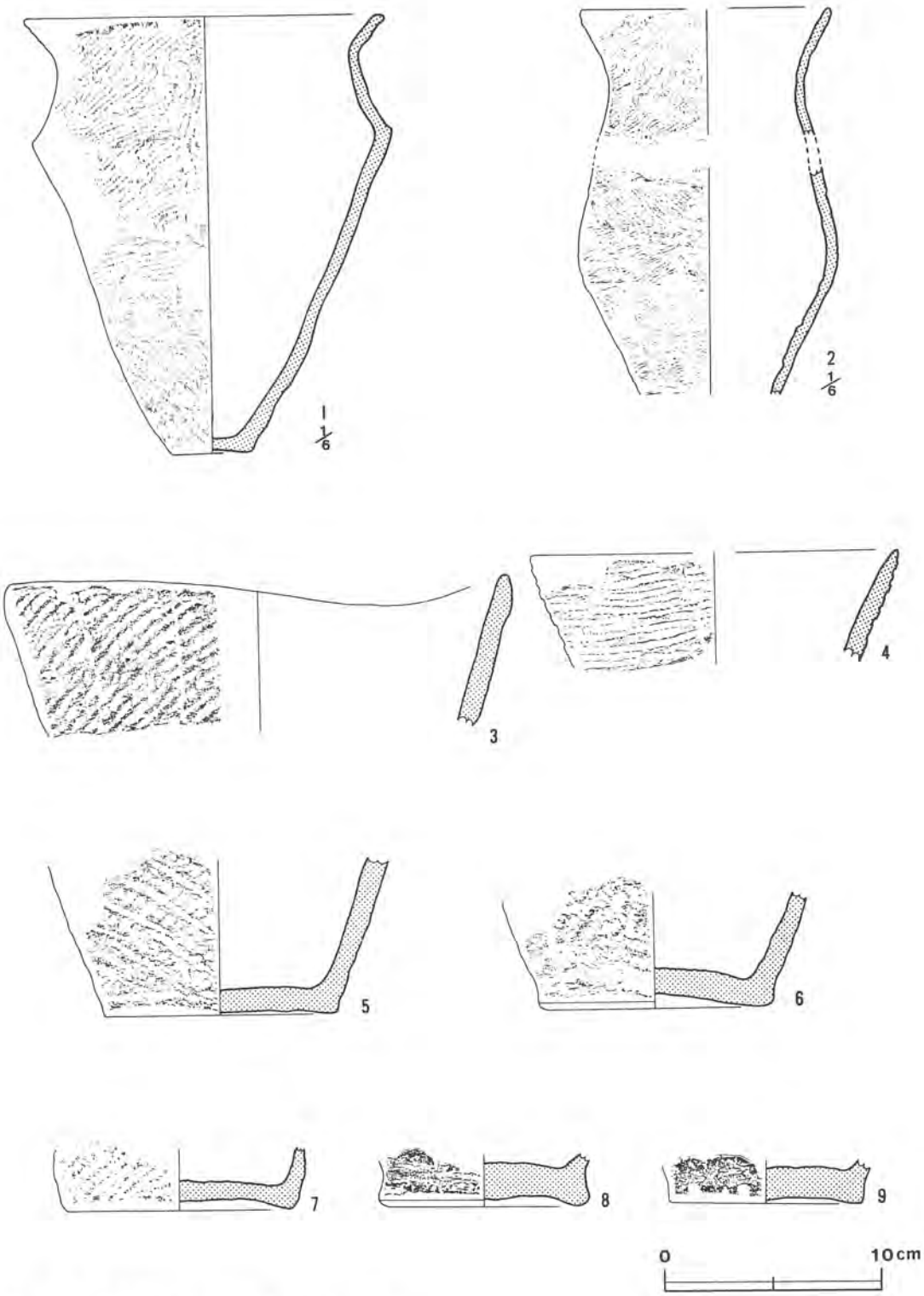
然堆積している。

遺物は，炉跡周辺の床面直上から縄文時代前期の黒浜式の深鉢形土器（第74図）1が破片の状態で出土し，同じく黒浜式の土器片が住居内覆土全面から2,423片と多量に出土している。そのほか石鏃や石皿等の石器が28点，小さな河原石が覆土全体から出土している。

第1号住居跡出土土器（第74～79図）

住居跡内から出土した遺物は，縄文式土器と石器に大別され，縄文式土器は，縄文時代前期中葉の黒浜式土器片が主体で，浮島式期の土器片も極少量出土している。器形が底部から口縁部まで復元できたのは2個体であった。土器の文様は，単節，無節，撚糸文，ループ文，沈線文が多い。又，単節縄文と無節縄文で羽状を構成している一群もある。第75図1～第77図61までは口縁部片である。1･2は，口縁上部に円形刺突文が施文されている。地文に縄文RLが横位に施され，同一個体と思われる。3は，棒状工具で押引き状刺突文が施文されている。口唇部にキザミを有する。4は，沈線文が斜位に施文されている。5は沈線文が横位に，6は波状口縁で口唇部に小突起をもち，斜位に半截竹管による沈線文で小突起を中心に菱形文が構成されている。7は，断面三角形の隆起線の渦巻文を中心に渦巻文に沿って半截竹管で刺突文が施されている。8～12は，櫛歯状の施文具で，支点をずらして小波状文と平行線が交互に施されている。9･11は4条1単位で10は3条1単位である。13は，附加条縄文で単節LRにℓが条と同じ方向に施文されている。14～20は，2本1対の単軸絡条体による撚糸文で回転施文されている。21は，無節Lが施文されているが器面が荒れてみにくい。22は無文である。23は単節LRを地文にもち，口唇部に同原体が施されている。24は波状口縁で広い無文帯を持ち，口唇部に丸頭状施文具で口縁部と直角に圧痕をつけている。単節RLが施されている。25は無文帯を持ち，無節Rが施されている。26は，狭い無文帯を持ち，無節Rにループ文4段をともなう。28はループ文で単節LRが施文されている。29は4段のループ文をもち単節LRが施文されている。30も同様なループ文で3段まで確認できる。31はループ文が施文されている。32は狭い無文帯をもちループ1段をもつ単節LRが施文されている。33は小波状口縁で狭い無文帯をもち，地文にループ4段と無節Rが施されて，中央部に隆帯を残す。これは，粘土の柔らかい時に施文された為に膨れ上がり，文様とは別である。34は口縁部に無文帯をもち単節LRが施されている。35は単節LRとRLが粗く施文されている。器面は荒れている。内面は研磨されている。36も器面が荒れているが，無節Rが横位に施されている。37は無文帯をもち無節Lが横位に施文される。隆帯が残る。38～41までは無節Rの原体が横位に施されている。43は粗い無節Lが施され，口唇部にキザミを有する。44～51までは無節Lを地文にもつ。51は口唇部に地文の原体を施している。52は単節LRと無節Rが施文されている。53～55は単節RLが施文されている。55は器面が荒れているが内面は研磨されている。56・57は単節LRとRLが施され，

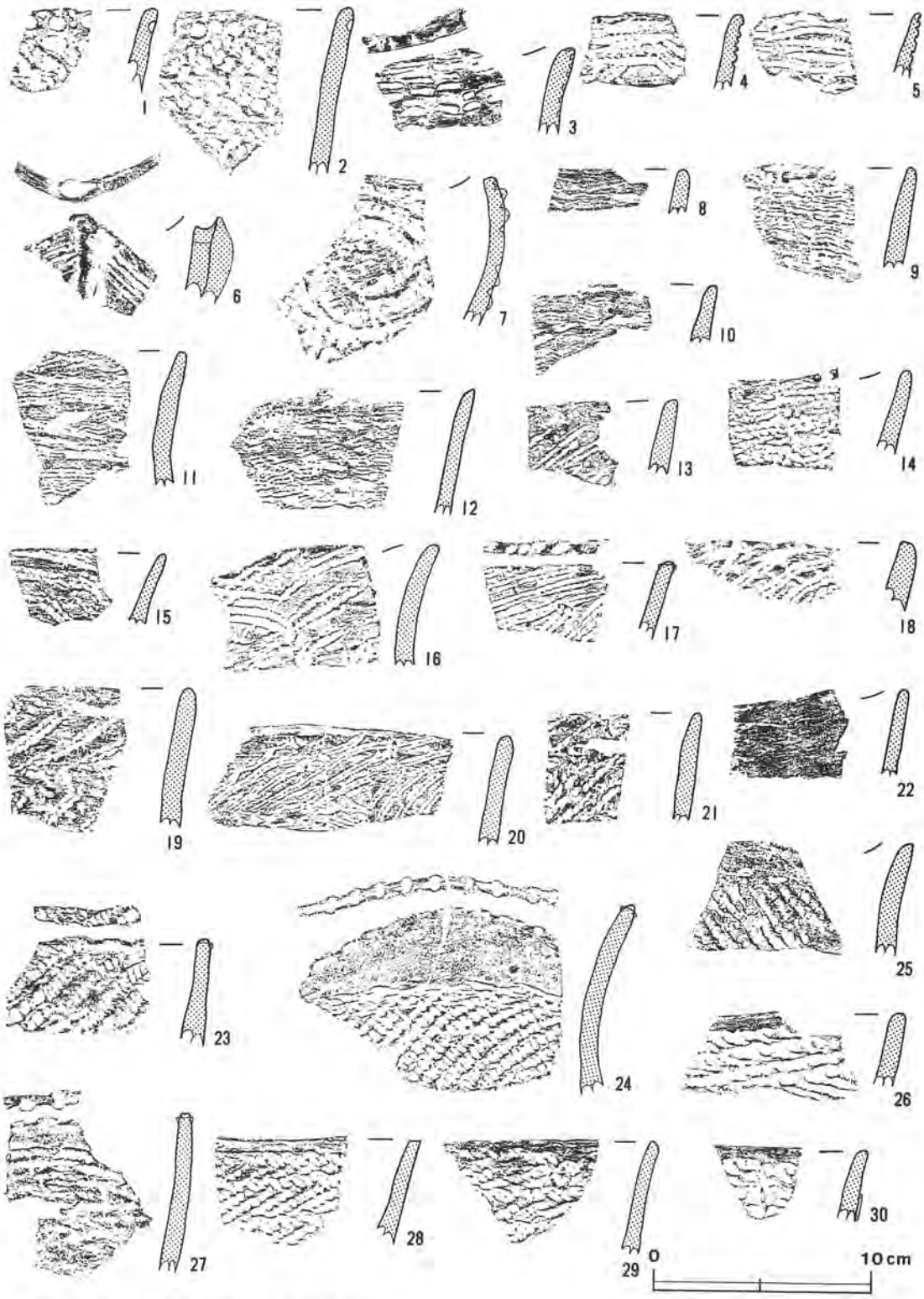
菱形構成になっている。56は隆帯がある。58はLRで施されている。59・60は器面が荒れているが，単節LRとRLで羽状を構成している。61は単節RLが地文に，口唇部に刻目を有する第77図62～第79図136までは，胴部片である。62～66までは沈線文で，64～66は竹管により縦位に粗く施文されている。63は円形文を中心に沈線が斜位に施文されている。67～70は櫛歯状施文具により，支点をずらして小波状文が施文されている。72～74は，棒状施文具による刺突文が施文されている。75・76は波状文が横位に施文されている。77・78は有節平行線文である。79～101までは撚糸文の一群で，79～87まで2本1対の単軸絡条体の撚糸文が縦位，横位に回転施文されている。88は3本1対の撚糸文である。89～92までは木目状撚糸文が施文されている。97は3本1対で施文されている。100は連鎖状撚糸文である。101は太い撚糸で雑に施されている。102～107までは単節LR，RLが斜位又は横位に施文されている。102～105は単節LRを横位に施され，105・107は単節RLとLRが旋されている。108～119は，無節L又はRの縄文が施されている。110は隆帯がある。108～112までは無節Rで施文され，113～118までは無節Lである。119は無節Lを横位に，単節LRが横位に施されている。120～125は単節RL，LRで羽状を構成している。124は，中央に結節がある。126～131までは附加条縄文で，127は単節RLと条と同じ方向にℓが施されている。128は沈線文が縦位に施されている。132～136は，ループ文である。132は2段のループで，133は3段のループをもち，無節Rが施されている。134は5段のループをもっている。135は無節Rの間にループ1段をもっている。137～140はいずれも底部片で，やや上げ底を呈する。140は粗い無節Rが施されている。141・142は浮島式土器で，141は口縁部に半截竹管による刻目をつけている。爪形文である。142は2本描きの沈線文に，刻目をつけている。



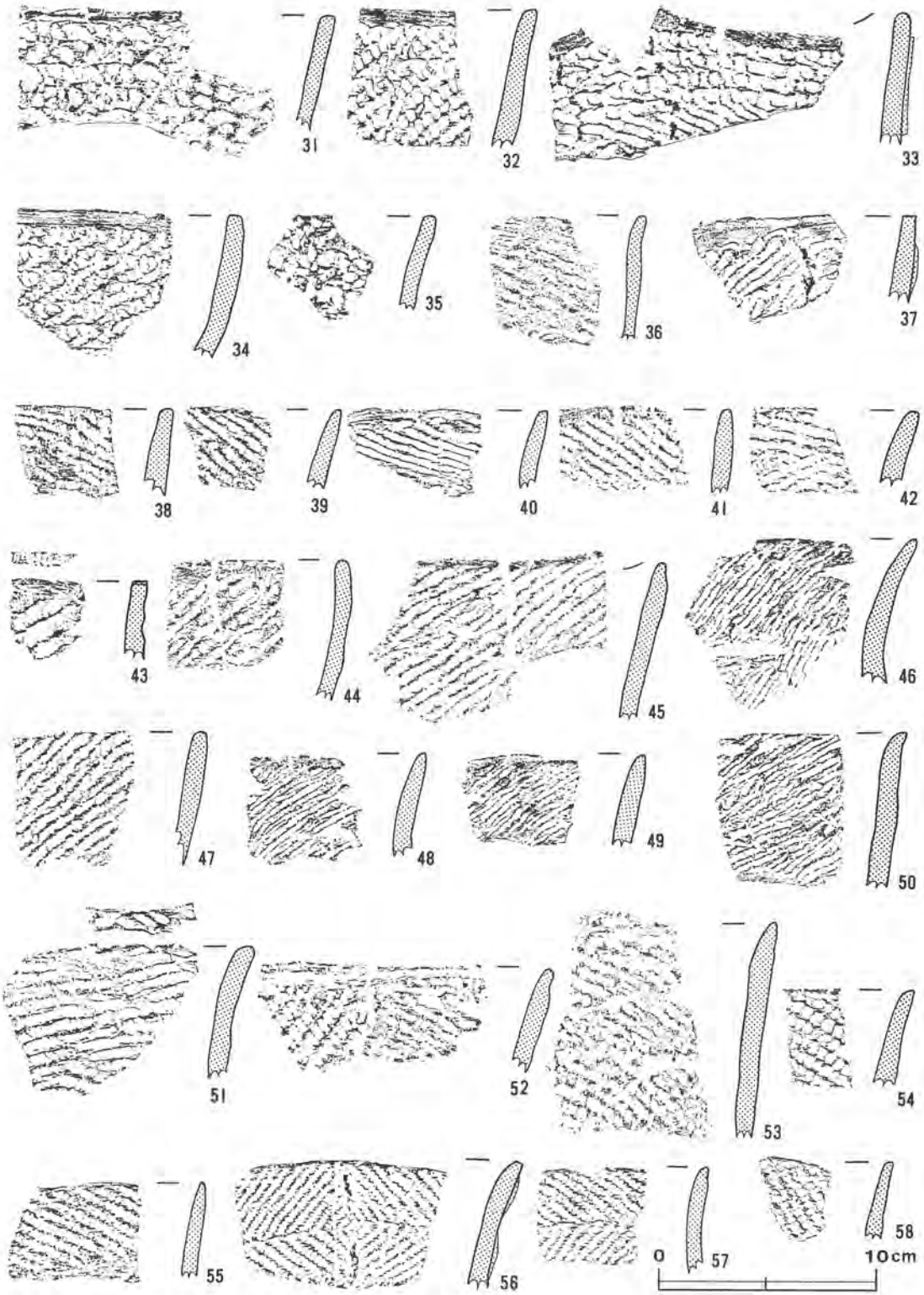
第74図　第１号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表

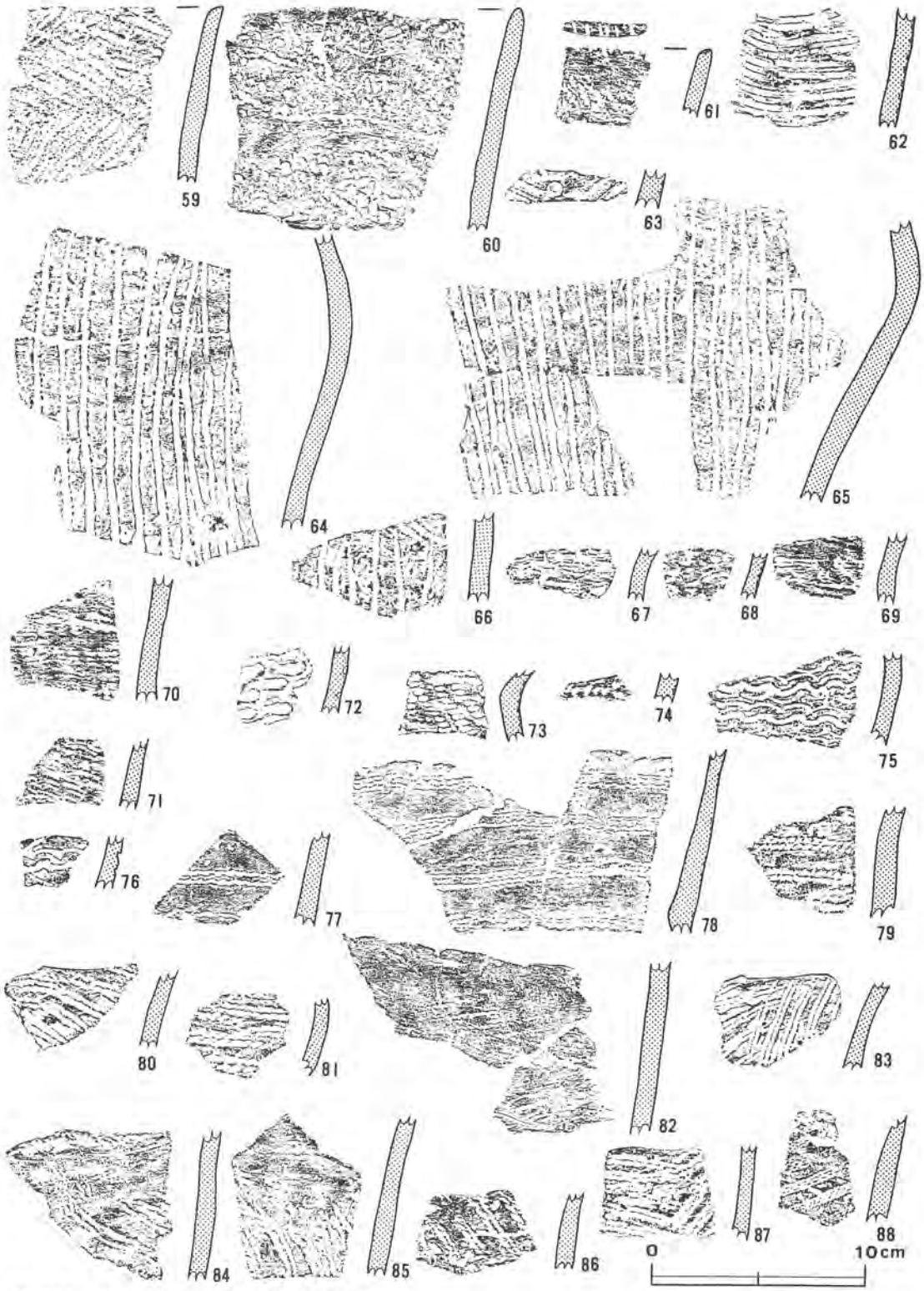
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	深鉢	A 31.6 B 41.0 C 7.95	底部は，やや上げ底状を呈していて，やや外傾しながら立ち上がり，胴部上半でくの字状に膨らみ，頸部が括れ，頸部から口縁にかけて開いている。文様構成は，無節RとLが交互に施文され，羽状を構成している。体部下半から単節RLが施文されている。	砂粒・繊維を含む 赤褐色 普通	65% P－3 SI 1
2	深鉢	A (25.1) B 〔32.2〕	底部欠損。体部は，やや外傾しながら立ち上がり，胴部中央でくの字状に膨らみ，頸部が括れ，頸部から口縁にかけて開いている。文様構成は，無節LとRが交互に施文され，羽状を構成している。	砂粒・繊維を含む にぶい褐色 普通	50% P—1 SI 1
3	深鉢	A (23.0) B 〔 7.0〕	口縁部片，やや小波状口縁であり，やや外傾する。文様構成は，単節LRが施文されている。	繊維を含む 褐灰色・橙色 普通	10% P—14 SI 1
4	深鉢	A (17.0) B 〔 5.2〕	口縁部片，平縁で外傾する。文様構成は，太い1本描きの集合沈線が横位に施されている。	繊維を含む にぶい褐色・灰褐色 普通	10% P—13 SI 1
5	深鉢 (底部片)	B 〔 7.2〕 C (10.8)	底部は，やや上げ底状で，胴部は，外傾して立ち上がり，附加縄条文が施されている。単節RLに条と反対方向でℓが施されている。	繊維を含む 橙色 不良	20% P—10 SI 1
6	深鉢 (底部片)	B 〔 5.3〕 C (10.0)	底部は，上げ底状で，胴部は，外傾して立ち上がり，単節LRが施されている。	繊維を含む 橙色 普通	15% P—11 SI 1
7	深鉢 (底部片)	B 〔 2.8〕 C (10.3)	底部は，やや上げ底状で，胴部は，外傾して立ち上がる。単節LRが施されている。	繊維を含む にぶい橙色 普通	20% P—12 SI 1
8	深鉢 (底部片)	B 〔 2.4〕 C (9.0)	底部は，やや上げ底状で，胴部は，外傾して立ち上がる。粗い縄文が施されている。	繊維を含む 橙色 普通	10% P－5 SI 1
9	深鉢 (底部片)	B 〔 2.0〕 C (8.7)	底部は，やや上げ底状で，胴部は外傾して立ち上がる。	繊維を含む 橙色 普通	10% P－6 SI 1



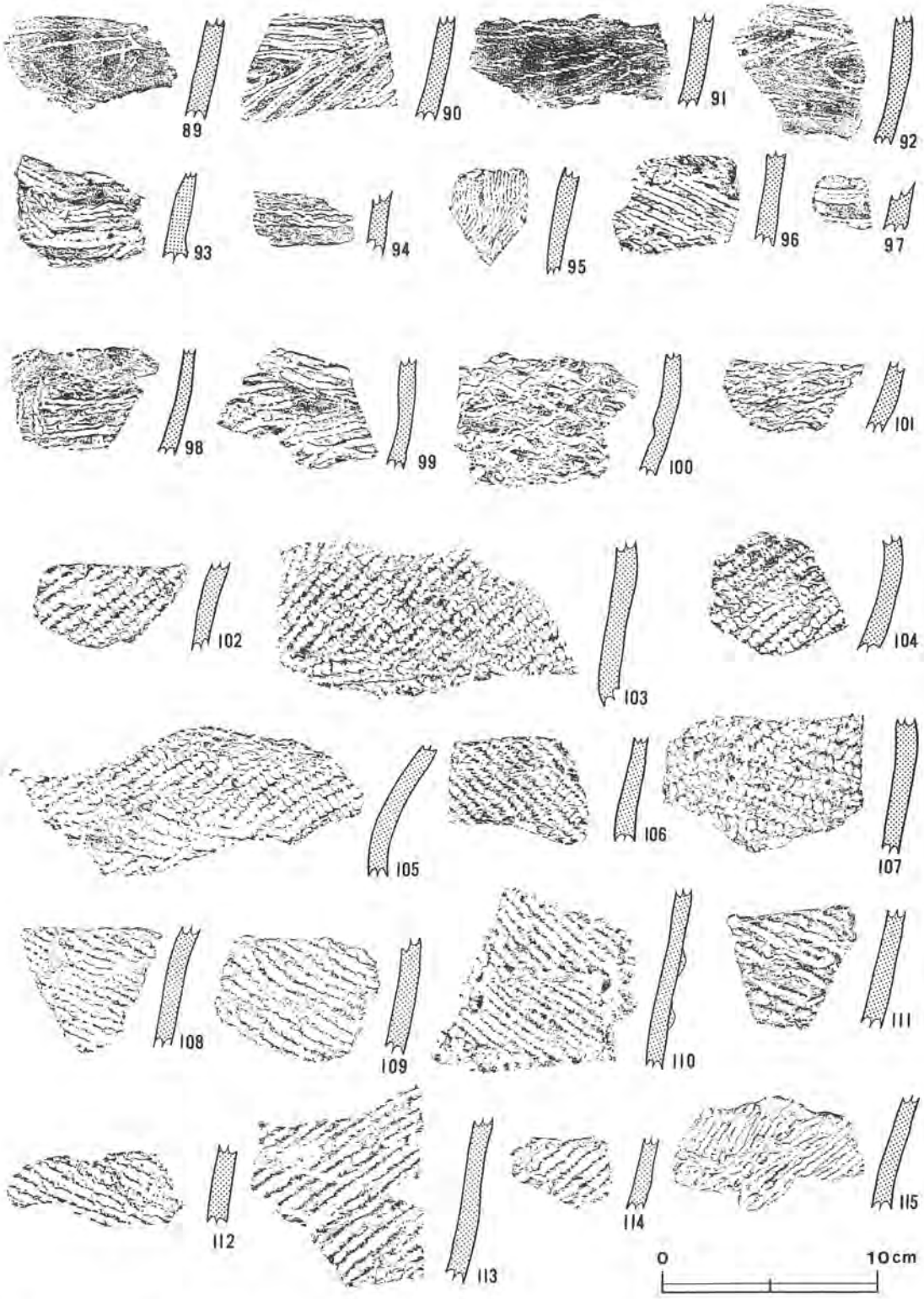
第75図　第１号住居跡出土遺物拓影図(1)



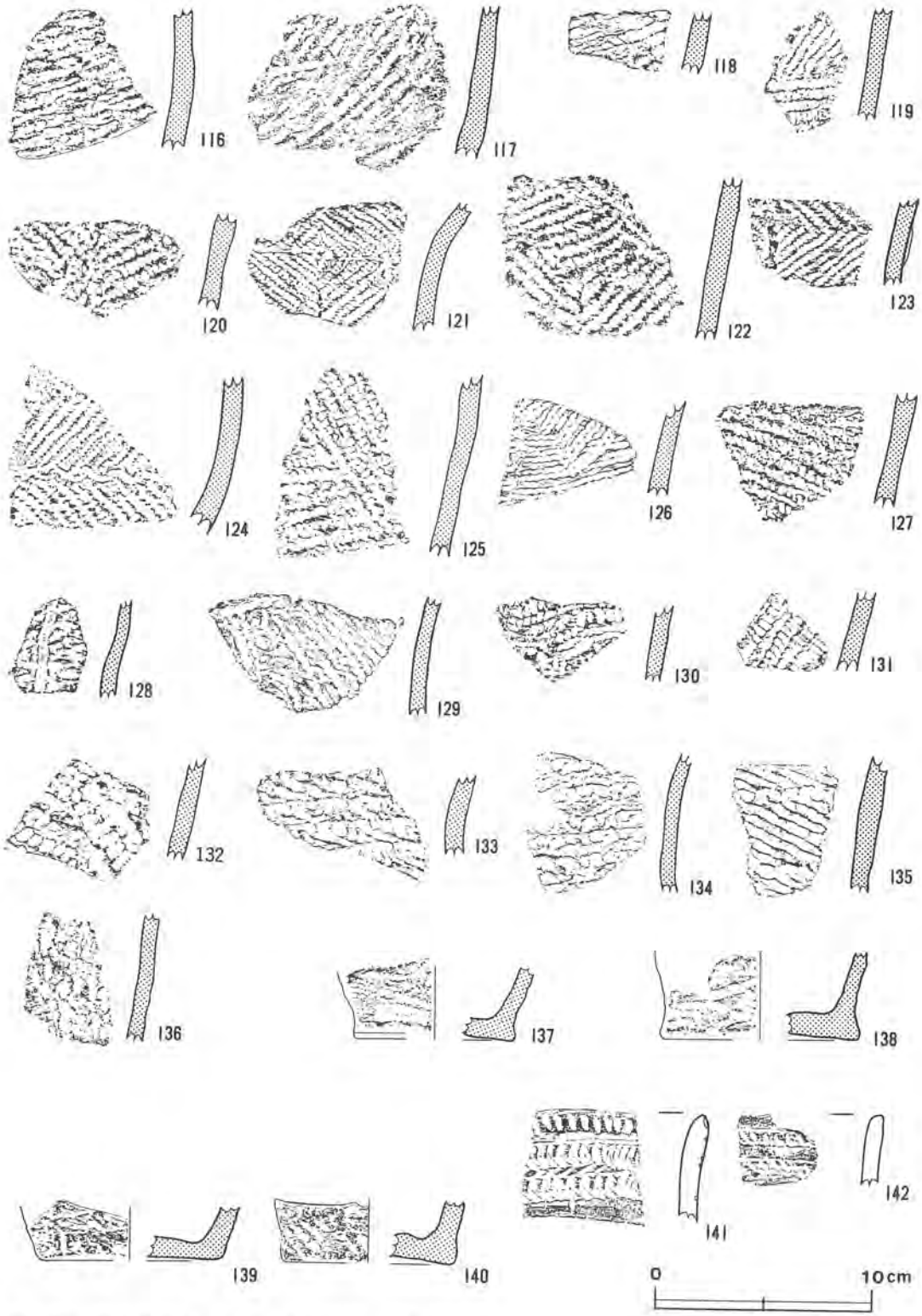
第76図　第１号住居跡出土遺物拓影図(2)



第77図　第１号住居跡出土遺物拓影図(3)



第78図　第１号住居跡出土遺物拓影図(4)



第79図　第１号住居跡出土遺物実測図・拓影図(5)

第２号住居跡（第80図）

本跡は，遺跡北側のB2c6区を中心として確認され，第19号土坑と重複している。規模は，長径5.16m，短径4.47mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－3°－Eである。壁高は20～31cm程で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床は，ほぼ平坦であり全体的に硬く締っている。炉は検出されなかった。ピットは５か所検出され，直径17～69cm，深さ20～77cm程である。そのうち主柱穴と考えられるのは，P1～P3である。P3は段状に掘り込まれている。中央にあるP5が支柱穴で，P4は性格不明のピットである。

覆土は，２層から成り，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む，暗褐色土・褐色土が自然堆積している。

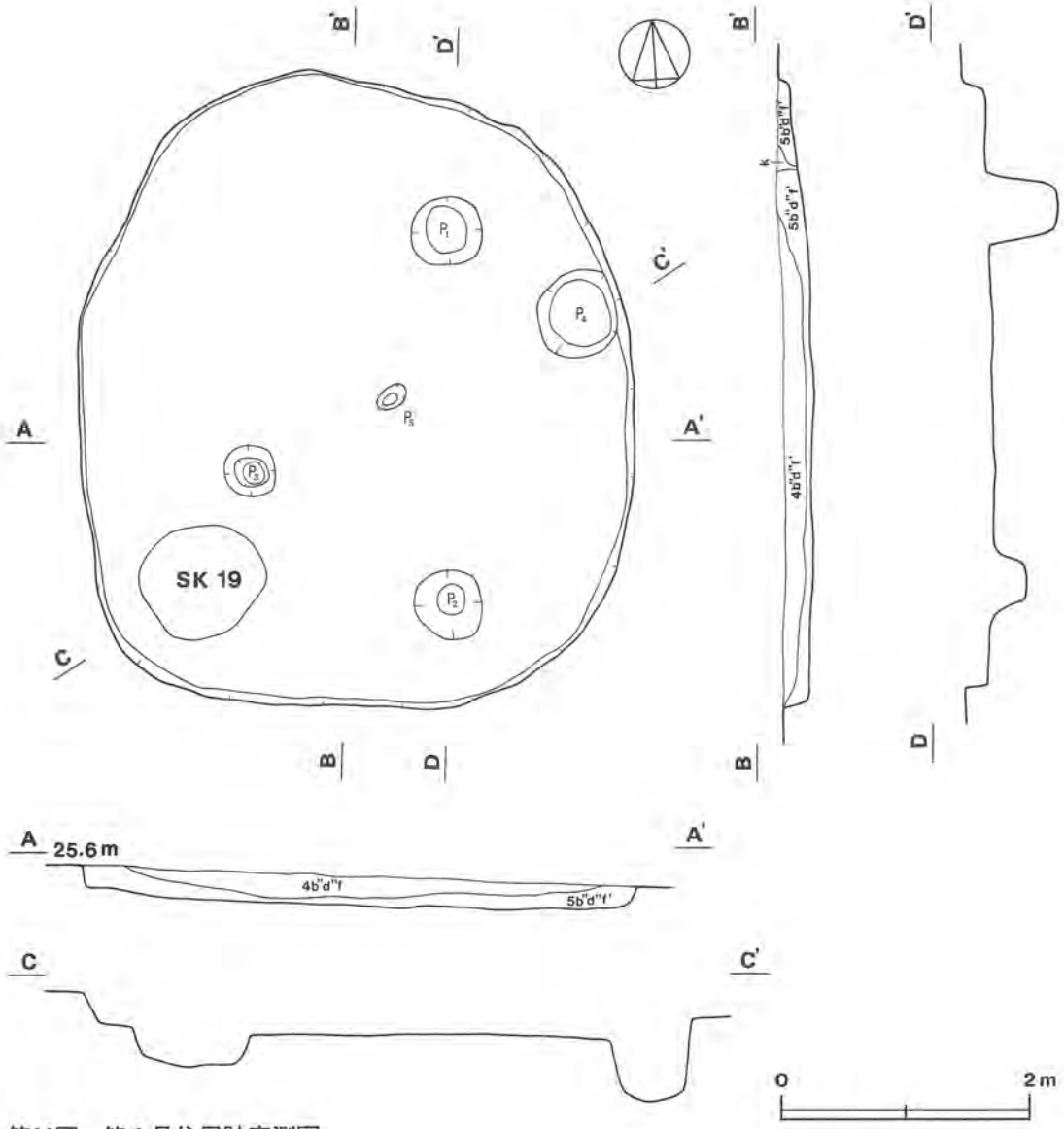
遺物は，住居跡の中央部付近から多く出土し，住居北側の床面より若干浮いた状態で黒浜式期の深鉢形土器の底部が出土している。なお，住居跡の覆土中央部から，同じ黒浜式期の土器片274片と石器２点，河原石15点が出土している。

第１号住居跡柱穴計測値

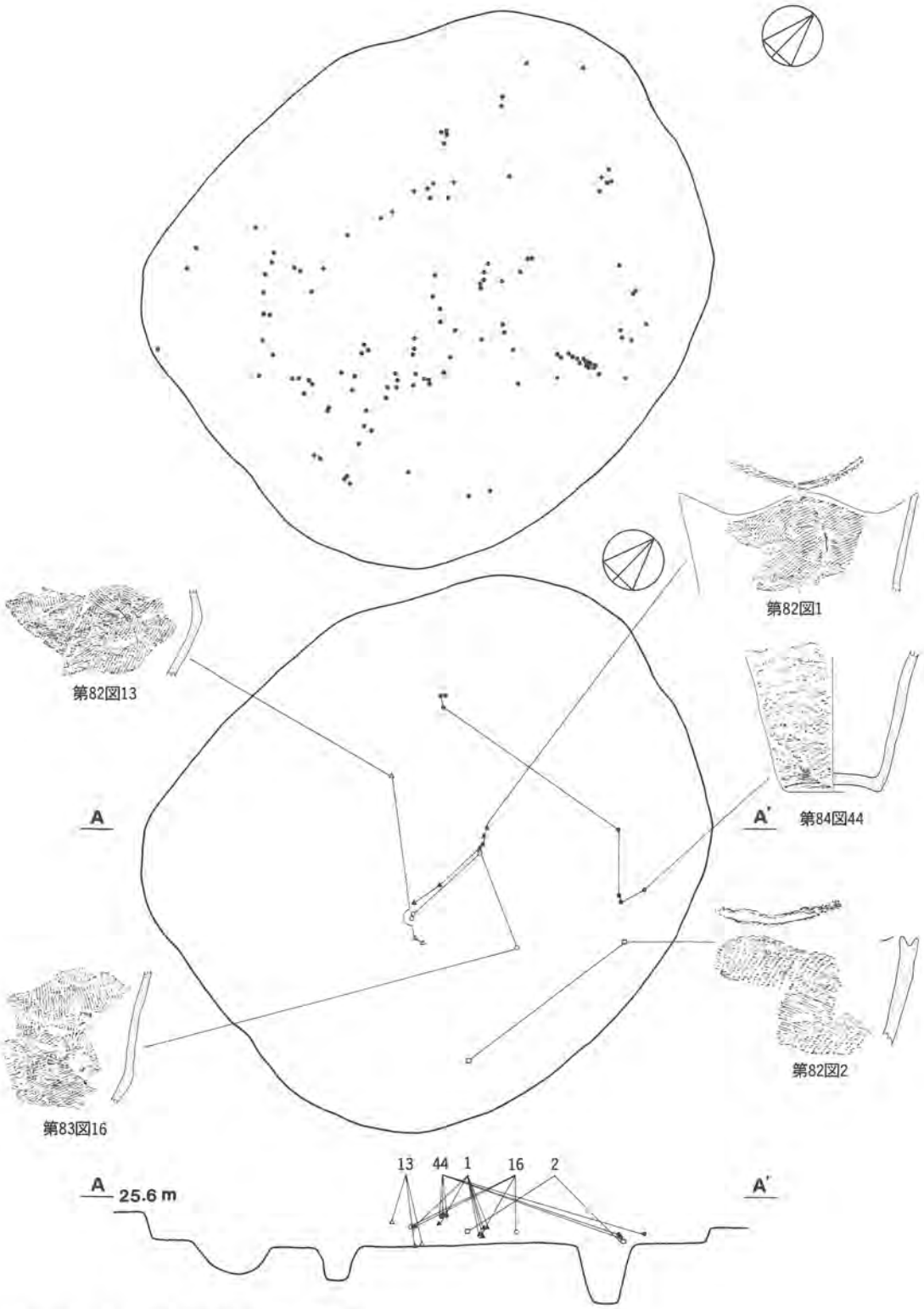
柱穴番号	長径×短径(cm)	床面からの深さ(cm)	柱穴番号	長径×短径(cm)	床面からの深さ(cm)
P 1	40×39	46	P 2	56×47	34
P 3	28×23	38	P 4	47×39	45
P 5	(68)×64	43	P 6	61×48	48
P 7	44×44	44	P 8	49×47	40

第２号住居跡柱穴計測値

柱穴番号	長径×短径(cm)	床面からの深さ(cm)	柱穴番号	長径×短径(cm)	床面からの深さ(cm)
P 1	59×58	77	P 2	60×54	53
P 3	45×41	62	P 4	69×64	67
P 5	26×17	20			



第80図　第２号住居跡実測図



第81図　第２号住居跡遺物出土位置図

第２号住居跡出土土器（第82～84図）

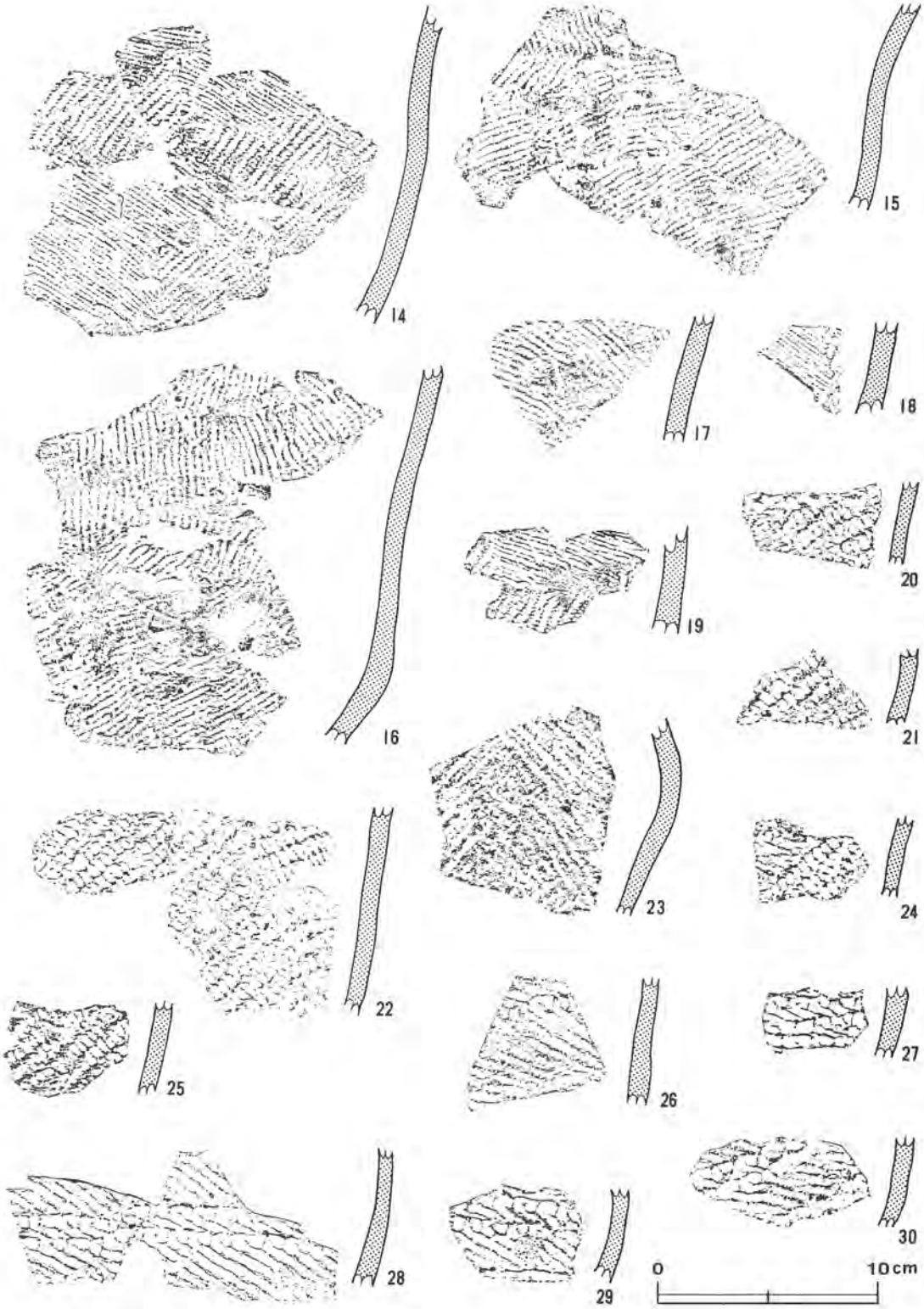
住居跡内から出土した遺物は，縄文式土器片と石器に大別される。縄文式土器は，すべて黒浜式期に比定できる土器片で，274片出土している。すべての土器に繊維を含んでいる。

第82図１～10は口縁部片である。１は４単位の波状口縁で口唇部直下から無節ＬとＲの縄文が一部羽状に施文されている。推定口径は，31.6cmを測る。２は，波状口縁で波頂部頂上が大きく抉れ，口唇部は断面Ｖ字形を呈するように整形され，地文に単節ＬＲと無節Ｒが羽状に施文されている。３は，口唇部が整形方法により凹線状を呈し，地文を無節Ｒと単節ＬＲで羽状に施文されている。４は，狭い無文帯をもち，２段以上のループ文が施文されている。５は，粗い単節ＲＬが施文され，口唇部に棒状の施文具で圧痕を残している。６と８は無節Ｌが横位に施文されている。７は無節Ｒが横位に施文されている。９は単軸絡条体で網目文が施文されている。10は無節Ｌが横位に，口唇部に同じ原体が施文されている。第82図11～第84図43まで胴部片である。11～13は無節で，12は菱形に施文されている。11は，無節ＬとＲが横位に施文されている。13は無節ＲとＬで羽状に施文されている。14は無節Ｒを横位に単節ＬＲを横位に施文し菱形を構成している。15～17は無節Ｌが施文され，同一個体であろうと思われる。18は無節Ｒに単節ＬＲが横位に施文されている。19は無節Ｒに単節ＬＲが横位に施文されている。20・21・22・24・25は粗い単節ＬＲが横位に施文されている。23は単節ＬＲ，ＲＬが羽状に施文されている。26～31までループ文がともなう。地文に無節Ｒが施文されている。26はループ文１段，28～31はループ文２段の原体である。32・33・35は，附加条縄文が施されている。32・33・35は０段３条と０段２条の１段の縄を撚り合わせた２段の縄の可能性がある。36～41が撚糸文で，38～40は，２本１対の撚糸が施文され，36・37はくずれた格子目状である。41は格子目が施文されている。42は丸棒状施文具で，器面と直角に刺突している。43は集合沈線文が横位に施文されている。44・45は底部片で，44は体部下半部に単節ＲＬが施文されている。45は単節ＬＲが横位に施文されている。底部片は，すべて上げ底である。

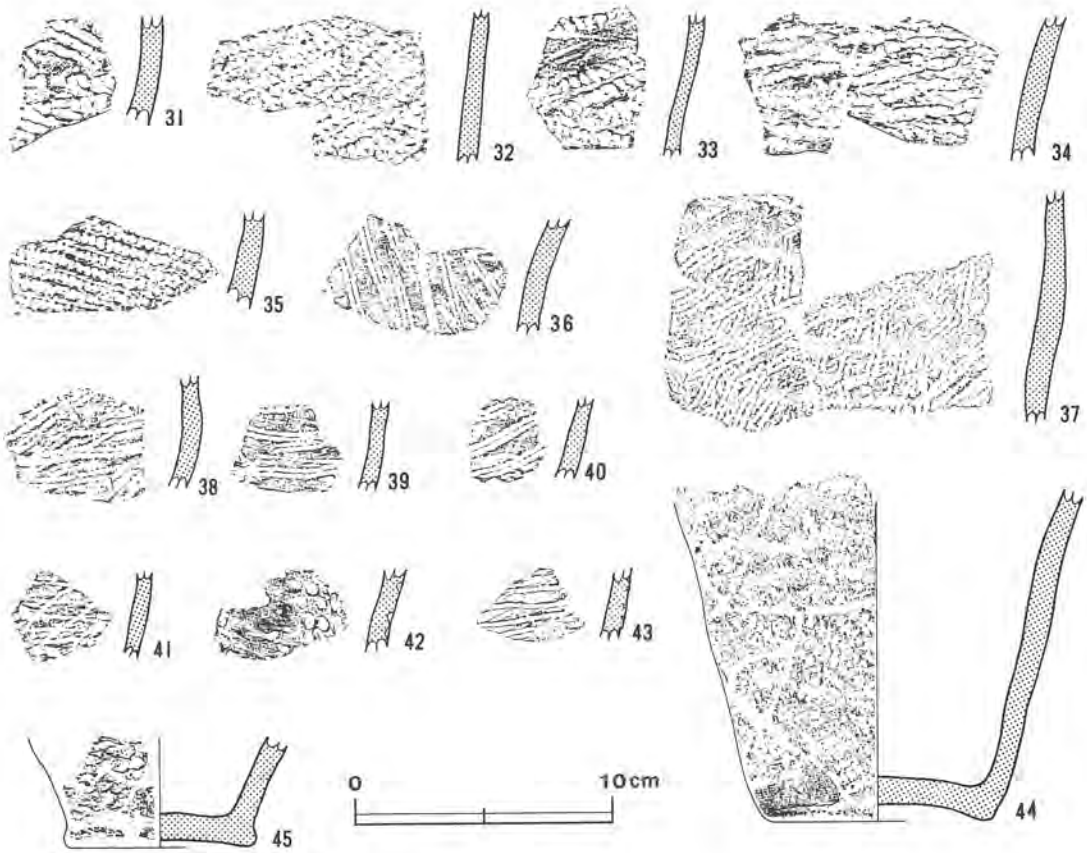
表11　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)							
SI 1	C2j2	N－56°－W	楕円形	6.66×5.41	28～41	平坦	8	炉－2 北西寄り	自然	深鉢形土器 土器片2,423片・石器28点	黒浜式期	
SI 2	B2c6	N－3°－E	不整楕円形	5.16×4.47	20～31	平坦	5	無	自然	黒浜式土器片274片 石器２点	黒浜式期	SK19重複

第82図　第２号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)



第83図　第２号住居跡出土遺物拓影図(2)



第84図　第２号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)

(2)　土坑

当遺跡において検出された土坑は，19基である。これらの土坑の多くは，中央の谷津をはさんで，北側の B2区と南側の C1・C2区から検出されている。

当初22基の土坑を確認して調査したが，第21・22号土坑については，木根などによる撹乱が多く遺構と判断できなかったので欠番とした。なお，第20号土坑は，調査中に井戸と判断したため，第１号井戸とした。

第１号土坑（第85図）

本跡は，調査区の南側 C1i7区に確認され，第１号溝の西側約４ m に位置している。

平面形は，長径1.56m，短径1.09m の不整円形を呈している。壁はロームで外傾して立ち上がり，深さは30～41cmである。底面は，平坦で硬く締ったロームで，北東側に長径42cm，短径38cm，深さ10cmの窪みと，東側に長径28cm，短径４cmほどの楕円形をした窪みがある。

覆土は，２層から成り，ローム粒子を含む，暗褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，覆土上層から黒浜式土器片６片出土しているが，流れ込みと思われる。

第２号土坑（第85図）

本跡は，調査区の南側D1a$_0$区に確認され，第２・３号溝の交差している所から北東約３ｍに位置している。

平面形は，長径0.92m，短径0.70mの楕円形で，長径方向はN－65°－Wである。壁は，ロームで外傾して立ち上がり，深さは18～21cmである。底面は，北西壁下を除いて，ほぼ平坦である。

覆土は，２層から成り，ローム粒子を含む，暗褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，覆土上層から黒浜式土器片２片が出土しているが，流れ込みと思われる。

第３号土坑（第85図）

本跡は，調査区の南側C2j$_4$区に確認され，第１号住居跡のほぼ東側約８ｍに位置している。

平面形は，長径1.32m，短径1.22mの不整円形を呈している。壁は，ロームで外傾して立ち上がり，底面は，皿状で硬く締りがある。深さは22～24cmである。

覆土は，２層から成り，ローム粒子・炭化粒子を含んだ暗褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，覆土上層から黒浜式土器片２片が出土しているが，流れ込みと思われる。

第４号土坑（第85図）

本跡は，調査区の南側D2a$_5$区に確認され，第３号溝の南約２ｍに位置している。

平面形は，長径0.94m，短径0.92mのほぼ円形を呈している。北壁は，ロームでほぼ垂直に立ち上がり，南壁と北西壁は，オーバーハング状に掘り込まれている。深さは32cmである。底面は，ほぼ平坦で硬く締っている。

覆土は，ロームブロック・炭化物を含む黒褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第５号土坑（第85図）

本跡は，調査区の南側D2a$_6$区に確認され，第４号土坑の東側に隣接して位置している。

平面形は，長径0.80m，短径0.76mのほぼ円形を呈している。壁は，ロームで緩やかにやや外傾して立ち上がる。深さは11～20cmである。底面は，凹凸している。

覆土は，２層に分かれ，ローム粒子を含む，暗褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第6号土坑（第85図）

本跡は，調査区の南側C2h_5区に確認され，第3号土坑のほぼ北側約7.5mに位置している。

平面形は，長径1.06m，短径0.69mの不整卵形で，長径方向はN－87°－Wである。東壁は，垂直に立ち上がり，西壁は，段状に立ち上がる。深さは29～106cmである。底面は，西から東へ急に傾斜している。東壁下には，1mほどのピット状の窪みがある。

覆土は，ローム粒子を含む，暗褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は，出土していない。

第7号土坑（第85図）

本跡は，遺跡の南側C2g_4区に確認され，第5号溝の南約10cmに位置している。

平面形は，長径0.78m，短径0.69mの不整円形を呈している。壁は，南壁に段差があり，他はほぼ垂直に立ち上がる。深さは13～38cmである。底面は，ほぼ平坦である。

覆土は，ローム粒子を含む，暗褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，黒浜式土器片2片が出土している。

第8号土坑（第85図）

本跡は，調査区の南側C2g_4区から確認され，第5号溝の北約1.2mに位置している。

平面形は，長径2.00m，短径0.99mの不整長楕円形で，長径方向はN－79°－Wである。北壁は緩やかで，他の壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，硬く締っている。深さは約30～40cmである。底面は，多少凹凸状で西から東にごく緩やかに傾斜している。

覆土は，3層に分かれ，ロームブロック・ローム粒子を含む，黒褐色土・暗褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，黒浜式土器片3片が出土している。

第9号土坑（第85図）

本跡は，遺跡の南側C2i_3区に確認され，第1号住居跡の北東約3mに位置している。

平面形は，長径0.81m，短径0.74mでほぼ不整円形を呈している。壁は，ほぼ外傾して立ち上がる。底面は，西から東へ緩く傾斜している。深さは27cmである。

覆土は，3層に分かれ，ローム粒子・炭化物を含む，暗赤褐色土・にぶい赤褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第10号土坑（第86図）

本跡は，調査区の中央部やや南寄り C2e3区から確認され，第11号土坑の東約7.5m に位置している。

平面形は，長径1.09m，短径1.06m のほぼ円形を呈している。壁は，ロームでほぼ垂直に立ち上がり，深さは34cmである。底面は，平坦で皿状である。

覆土は，ローム粒子を含む，黒褐色土・褐色土・暗褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第11号土坑（第86図）

本跡は，調査区の中央部 C2f1区に確認され，第 2 号溝の東側約 8 m に位置している。

平面形は，長径1.11m，短径0.77m でほぼ楕円形を呈し，長径方向はN－64°－Wである。壁は，緩やかに外傾して立ち上がり，深さは10～24cmである。底面は，中央部が深くなっている。

覆土は，ローム粒子を含んだ灰褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第12号土坑（第86図）

本跡は，調査区のほぼ中央部の C2c4区に確認され，第10号土坑から北東約 9 m に位置している。

平面形は，長径0.74m，短径0.68m の不整円形を呈している。壁は，ロームでほぼ垂直に立ち上がり，深さは42cmほどである。底面は平坦である。

覆土は，ローム粒子・炭化物を含んだ褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第13号土坑（第86図）

本跡は，調査区の中央やや西寄り C2c2区に確認され，第12号土坑の西約 8 m に位置している。

平面形は，長径0.88m，短径0.70m のほぼ不整卵形で，長径方向はN－32°－Eである。壁は，ロームで外傾して立ち上がり，深さは16cmである。底面は，凹凸していて北壁下が深くなっている。

覆土は，2 層に分けられ，ローム粒子を含む，黒褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第14号土坑（第86図）

本跡は，調査区の中央やや西寄り B2j_3区に確認され，第13号土坑の北約8 mに位置している。

平面形は，長径1.11m，短径0.91mの不整楕円形で，長径方向はN－44°－Eである。壁は，ロームでほぼ緩やかに外傾して立ち上がる。深さは約55cmである。底面は，ほぼ平坦である。

覆土は，2層に分かれ，ローム粒子を含む，灰褐色土・にぶい褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，覆土中から黒浜式土器片1片が出土している。

第15号土坑（第86図）

本跡は，調査区の中央やや西寄り C1c_0区に確認され，第2号溝北端の東約2 mに位置している。

平面形は，長径1.00m，短径0.72mの不整楕円形を呈し，長径方向はN－49°－Wである。壁は，ロームでほぼ緩やかに立ち上がり，外傾する。深さは約19cmである。底面は，凹凸している。

覆土は，ローム粒子を含む，暗褐色土・にぶい褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，覆土中から黒浜式土器片1片が出土している。

第16号土坑（第86図）

本跡は，遺跡中央部の西端 C1b_0区に確認され，第2号溝北端の東約3 mに位置している。

平面形は，長径1.63m，短径1.12mの不整楕円形で，長径方向はN－71°－Wである。壁は，ロームで南壁はほぼ垂直で，北壁は緩やかに立ち上がる。深さは24～44cmで，底面は，中央部と西壁際にピットが検出され，他は平坦で硬い。

覆土は，ローム粒子を含む褐色土で，下層には焼土を含む層がある。人為堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第17号土坑（第86図）

本跡は，遺跡の北側 B2e_7区に確認され，第2号住居跡の南側約6.5mに位置している。

平面形は，長径1.39m，短径1.35mでほぼ円形を呈している。壁は，ロームでほぼ垂直に立ち上がり，深さは30cmほどである。底面はほぼ平坦で，径10cm，深さ3cmほどの浅いピットが10個検出されている。

覆土は，ロームブロック・ローム粒子を含む，黒色土・黒褐色土である。

遺物は，出土していない。

第18号土坑（第87図）

本跡は，遺跡の北側 B2b5 区に確認され，第 9 号溝と第10号溝の間に位置している。

平面形は，長径1.23m，短径1.09m の楕円形を呈し，長径方向はN－11°－Eである。壁はロームで，南側はなだらかにカーブを描き，他はほぼ垂直に立ち上がり，上端で外傾する。深さは40cmである。底面は，中央部が深く凹凸している。

覆土は，上層が焼土粒子・ローム粒子を含む黒褐色土，下層がローム粒子を含む暗褐色土で自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

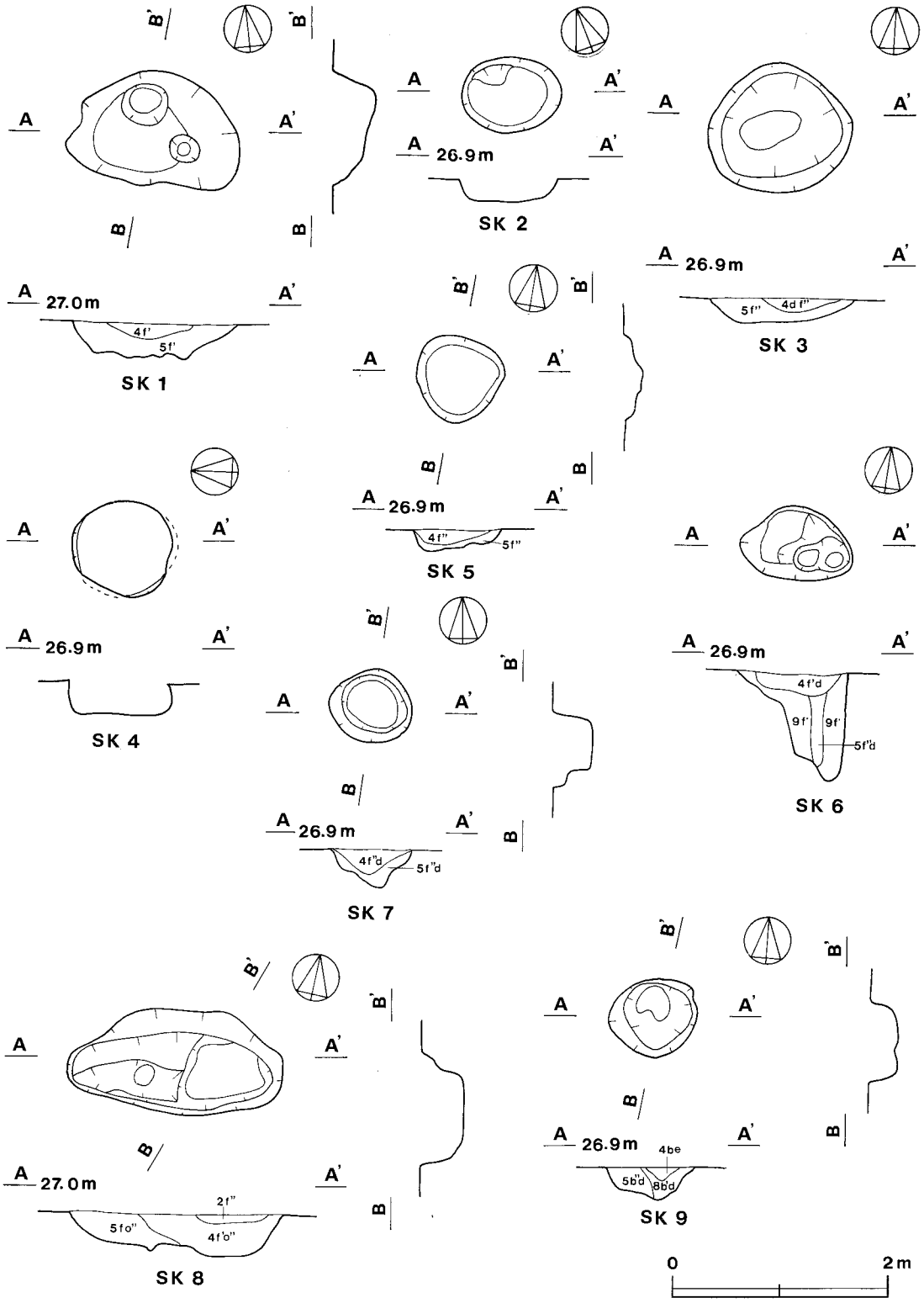
第19号土坑（第87図）

本跡は，第 2 号住居跡の南壁際に確認されている。

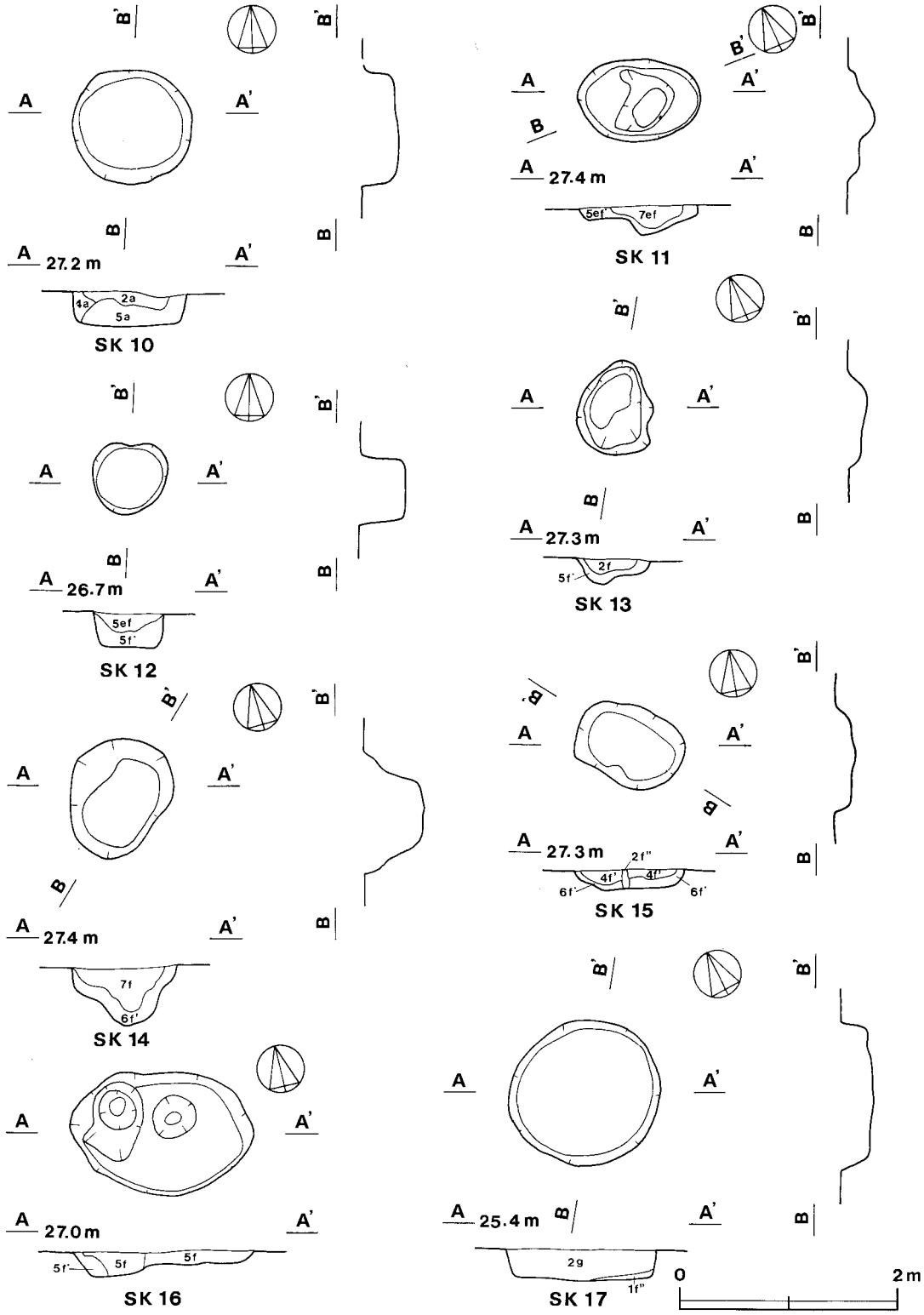
平面形は，長径0.96m，短径0.93m の円形を呈している。壁はロームで，西壁は外傾し，東壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは28～37cmである。底面は平坦である。

覆土は，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

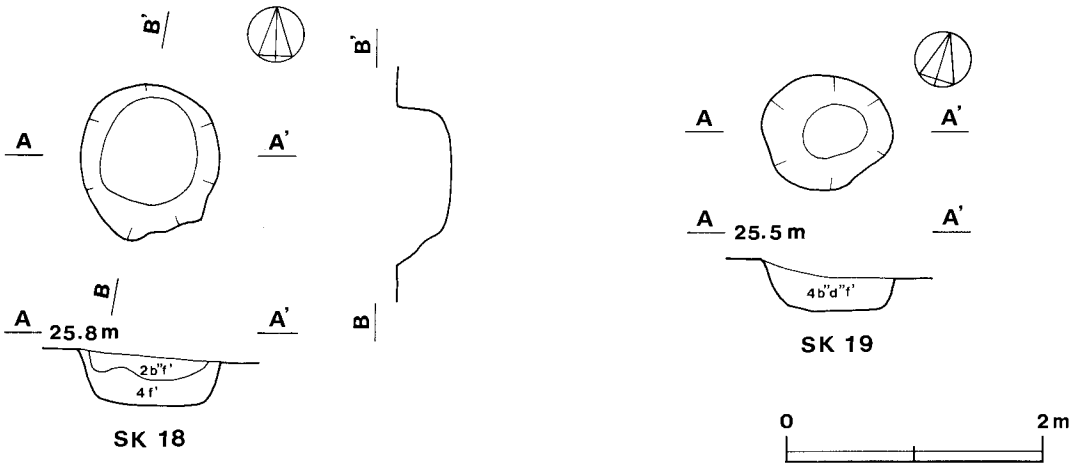
遺物は，覆土上層から剝片 1 点が出土している。


SK 1
27.0m
4f'
5f'
SK 2
26.9m
SK 3
26.9m
5f''
4d f''
SK 4
26.9m
SK 5
26.9m
4f''
5f''
SK 6
26.9m
4f'd
9f'
9f'
5f'd
SK 7
26.9m
4f''d
5f''d
SK 8
27.0m
2f''
5fo''
4f'o''
SK 9
26.9m
4be
5b'd
8b'd
0
2m

第85図　土坑実測図(1)


A
A'
B
B'
A 27.2 m
4a
2a
5a
SK 10
A 27.4 m
5ef'
7ef
SK 11
A 26.7m
5ef
5f'
SK 12
A 27.3m
2f
5f'
SK 13
A 27.4 m
7f
6f'
SK 14
A 27.3 m
2f"
4f'
4f'
6f'
6f'
SK 15
A 27.0m
5f'
5f
5f
SK 16
A 25.4 m
2g
1f"
SK 17
0
2m

第86図　土坑実測図(2)



第87図　土坑実測図(3)

表12　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
1	C1i7	――	不整円形	1.56×1.09	30～41	外傾	平坦	自然	黒浜式6片	
2	D1a0	N－65°－W	楕円形	0.92×0.70	18～21	外傾	平坦	自然	黒浜式2片	
3	C2j4	――	不整円形	1.32×1.22	22～24	外傾	皿状	自然	黒浜式2片	
4	D2a5	――	円形	0.94×0.92	32	オーバーハング垂直	平坦	自然		
5	D2a6	――	円形	0.80×0.76	11～20	外傾	凹凸	自然		
6	C2h5	N－87°－W	不整卵形	1.06×0.69	29～106	垂直段状	皿状			
7	C2g4	――	不整円形	0.78×0.69	13～38	外傾	平坦	自然	黒浜式2片	
8	C2g4	N－79°－W	不整長楕円形	2.00×0.99	30～40	垂直	凹凸	自然	黒浜式3片	
9	C2i3	――	不整円形	0.81×0.74	27	外傾	ゆるい起状	自然		
10	C2e3	――	円形	1.09×1.06	34	垂直	平坦	自然		
11	C2f1	N－64°－W	楕円形	1.11×0.77	10～24	外傾	凹凸	自然		
12	C2c4	――	不整円形	0.74×0.68	42	垂直	平坦	自然		
13	C2c2	N－32°－E	不整卵形	0.88×0.70	16	外傾	凹凸	自然		
14	B2j3	N－44°－E	不整楕円形	1.11×0.91	55	外傾	平坦	自然	黒浜式1片	
15	C1c0	N－49°－W	不整楕円形	1.00×0.72	19	外傾	凹凸	自然	黒浜式1片	
16	C1b0	N－71°－W	不整楕円形	1.63×1.12	24～44	外傾	ゆるい起状	人為		
17	B2e7	――	円形	1.39×1.35	30	垂直	平坦	撹乱		
18	B2b5	N－11°－E	楕円形	1.23×1.09	40	外傾	凹凸	自然		
19	B2d6	――	円形	0.96×0.93	28～37	外傾	平坦		剝片－1	

(3) 溝

当遺跡の調査区から検出された溝は，10条である。いずれも覆土に締りがなく，ローム面への掘り込みは，第1号・10号を除き浅いことが特徴である。時期を決定づける遺物は出土しておらず，性格も不明であるが，近年掘り込まれた根切溝や排水溝と思われる。以下，それぞれの溝の状況について記述する。

第1号溝（第88図）

本跡は，遺跡の西端C1・D1区に確認された。南北方向に調査区域外の畑まで延びている。溝の長さは約29m である。断面形は「⌐⌐」を呈しており，上幅120～180cm，下幅15～29cmである。

遺溝確認面から溝底面までの深さは114～124cmで，南から北へ緩く傾斜している。底面は平坦でハードロームで硬く，外傾して立ち上がる。

覆土は，大きく3層に分けられ，全層にロームブロックやローム粒子を含む，黒褐色土・暗褐色土・灰褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，覆土中から黒浜式土器片が15片，鉄滓が1点出土しているが，流れ込みと思われる。

第2号溝（第89図）

本跡は，遺跡の西側よりのC1・D1区に確認された。第1号溝の東側約5 mに位置している。第1号溝と平行する様に南北方向に調査区域外まで延びている。

溝の長さは約37m であり，南端D1b9で第3号溝と交差している。断面形は「⌐⌐」状を呈しており，上幅30～60cm，下幅7～19cmである。遺構確認面から溝底面までの深さは32～54cmである。底面はほぼ平坦で，壁もロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は，大きく2層に分けられ，上層はローム粒子を含む黒褐色土で，下層はロームブロックを多量に含む褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，覆土上層から黒浜式土器片が8片，鉄滓が1点出土しており，流れ込みと思われる。

第3号溝（第89図）

本跡は，D1区に確認された。西端は第1号溝と接続し，さらに，第2号溝とD1b9区で交差し，東端は調査区域外に延びている。新旧関係は，第2号溝が本跡を切っているため，本跡が古いと考えられる。

溝の長さは，約33m である。断面形は「⌒」を呈しており，上幅40～110cm，下幅12～53cmである。遺構確認面から溝底面までの深さは約20～40cmで，西端が浅く，中央部になると深く，西から東へ緩い傾きがある。壁は，ほぼ垂直で，ハードロームで硬く，やや外傾して立ち上がる。

底面は，爪状に掘った根痕が残っている。本跡の中央部は撹乱されている。

覆土は，大きく3層に分けられ，ローム粒子を含み，暗褐色土・褐色土・黒褐色土が，堆積している。

遺物は，覆土上層から黒浜式土器片6片出土しているが，流れ込みと思われる。

第4号溝（第90図）

本跡は，D2区に確認された。南側約2 mに第3号溝が位置する。

溝の長さは約4.2mである。断面形は「⌐⌐」を呈しており，上幅50～60cm，下幅42～45cmである。遺構確認面から溝底面までの深さは約25cmである。壁はハードロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，底面は，ほぼ平坦である。

覆土は，大きく2層に分かれ，いずれもローム粒子を含む，黒褐色土・暗褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第5号溝（第90図）

本跡は，遺跡の南側やや中央よりのC2区に確認された。ほぼ東西方向に延びていて，東側は調査区域外まで延びている。

溝の長さは約17mである。断面形は「⌐⌐」を呈しており，上幅30～60cm，下幅11～53cmである。遺構確認面から溝底面までの深さは10cmほどで，全体的に浅く，底面は多少凹凸していて，大変硬い。壁は西側でほぼ垂直，東側の北壁はやや緩やかで，南壁はほぼ垂直である。東側にごく緩やかに傾斜している。

覆土は，2層に分けられ，暗褐色土・褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第6号溝（第91図）

本跡は，遺跡の中央部より西端のB2･C2区に確認された。ほぼ東西方向に延びている全長約5 mほどの短い溝である。断面形は「⌐◡⌐」を呈しており，上幅20～120cm，下幅10～105cmである。確認面から溝底面までの深さは10～31cmほどである。底面は，ほぼ平坦であるが，溝の西端と中央部南寄りに円形ピットがあり，径20～22cm，深さ33～35cmである。西から東へごく緩やかに傾斜している。

覆土は，ローム粒子を含む褐色土が堆積している。

遺物は，黒浜式土器片3片出土しているが，流れ込みと思われる。

第7号溝（第91図）

本跡は，遺跡のほぼ中央部のB2区に確認された。本跡のほぼ中央部B2j_6区で第8号溝と交差している。新旧関係は，本跡を第8号溝が切っているので，本跡が古いと考えられる。

溝の長さは約13mで，ほぼ東西方向に延びている。断面形は「⌒」状を呈しており，上幅40～90cm，下幅9～36cmである。遺構確認面から溝底面までの深さは18～25cmで，西から東へ緩く傾斜している。壁もハードロームで硬く，外傾して立ち上がる。底面は中央部で多少凹凸がみられるが，ほぼ平坦である。

覆土は，ロームブロックを含む，黒褐色土・暗褐色土，又は，褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，上層から黒浜式土器片2片出土しているが，流れ込みと思われる。

第8号溝（第92図）

本跡は，遺跡のほぼ中央部のB2・C2区に確認された。本跡の南側B2j_6区で第7号溝と交差している。

溝は，北端B2g_4区から南端C2b_6区まで全長約20mで蛇行して掘られている。断面形は「⌒」状を呈しており，上幅30～70cm，下幅9～31cmである。遺構確認面から溝底面までの深さは，17～33cmである。底面は凹凸で，壁は，特に東側が緩やかに立ち上がり，やや外傾する。

覆土は，大きく分けると3層に分かれ，ローム粒子を含む，暗褐色土・にぶい褐色土・砂が混じっている灰褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，出土していない。

第9号溝（第93図）

本跡は，遺跡の北側B2区から確認された。南西方向から北東方向に延びている。

溝の長さは約13mである。断面形は「⌒」状を呈しており，上幅30～100cm，下幅9～34cmである。遺構確認面から溝底面までの深さは，17～21cmで，本跡の北端B2a_6区で第10号溝に接続している。底面は，中央部で凹凸しており，他は平坦である。壁はハードロームで硬く，外傾して立ち上がる。南西から北東に緩い傾斜がある。

覆土は，大きく2層に分けられ，覆土上層はローム粒子を含む，暗褐色土・黒褐色土，下層は，暗褐色土が自然堆積の状況を示している。

遺物は，黒浜式土器片1片が出土しているが，流れ込みと思われる。

第10号溝（第94図）

本跡は，遺跡の北側 B2・A2・A3区にかけて確認され，本跡の西端 B2b3区から東へ直線的に延びて，調査区 B2a6区の位置で北に方向を変え，さらに調査区 A2a6区の位置で東に方向を変え，調査区外に延びている。

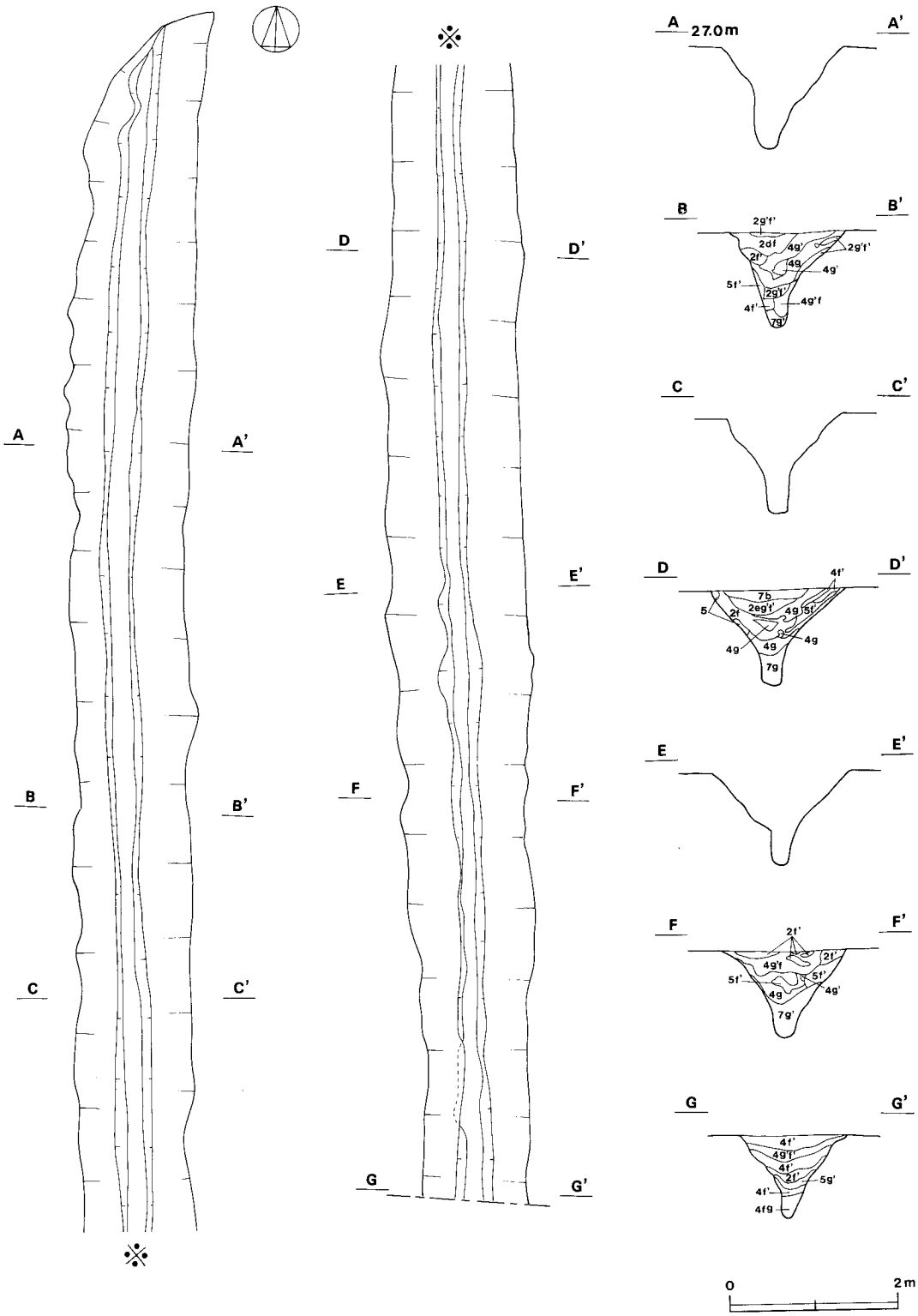
溝の長さは45.7m である。断面形は「⌒」を呈し，東側では細く「⌐⌐」を呈する。規模は，上幅50～140cm，下幅17～77cm，遺構確認面から溝底面までの深さは45～53cmである。壁はハードロームで硬く，外傾して立ち上がる。第９号溝との新旧関係は，第９号溝を第10号溝が掘り込んでいるので，第10号溝が新しく，西から東へ傾斜している。

覆土は，大きく２層に分けられ，ともにローム粒子・ローム小ブロックを含む，暗褐色土・黒褐色土が自然堆積の状況を示している。

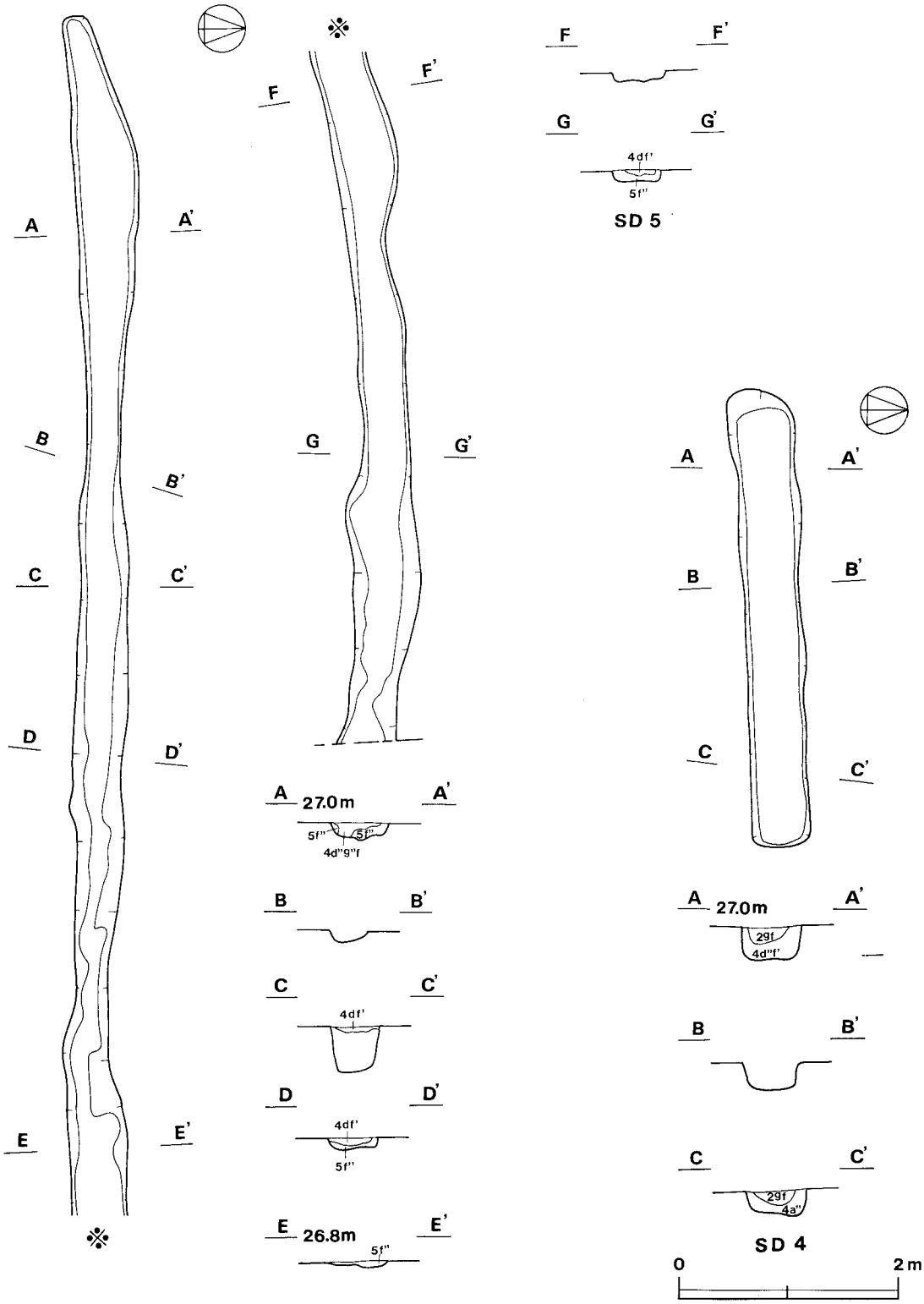
遺物は，鉄滓が13点と黒浜式土器片が３片出土しているが，流れ込みと思われる。

表13　溝一覧表

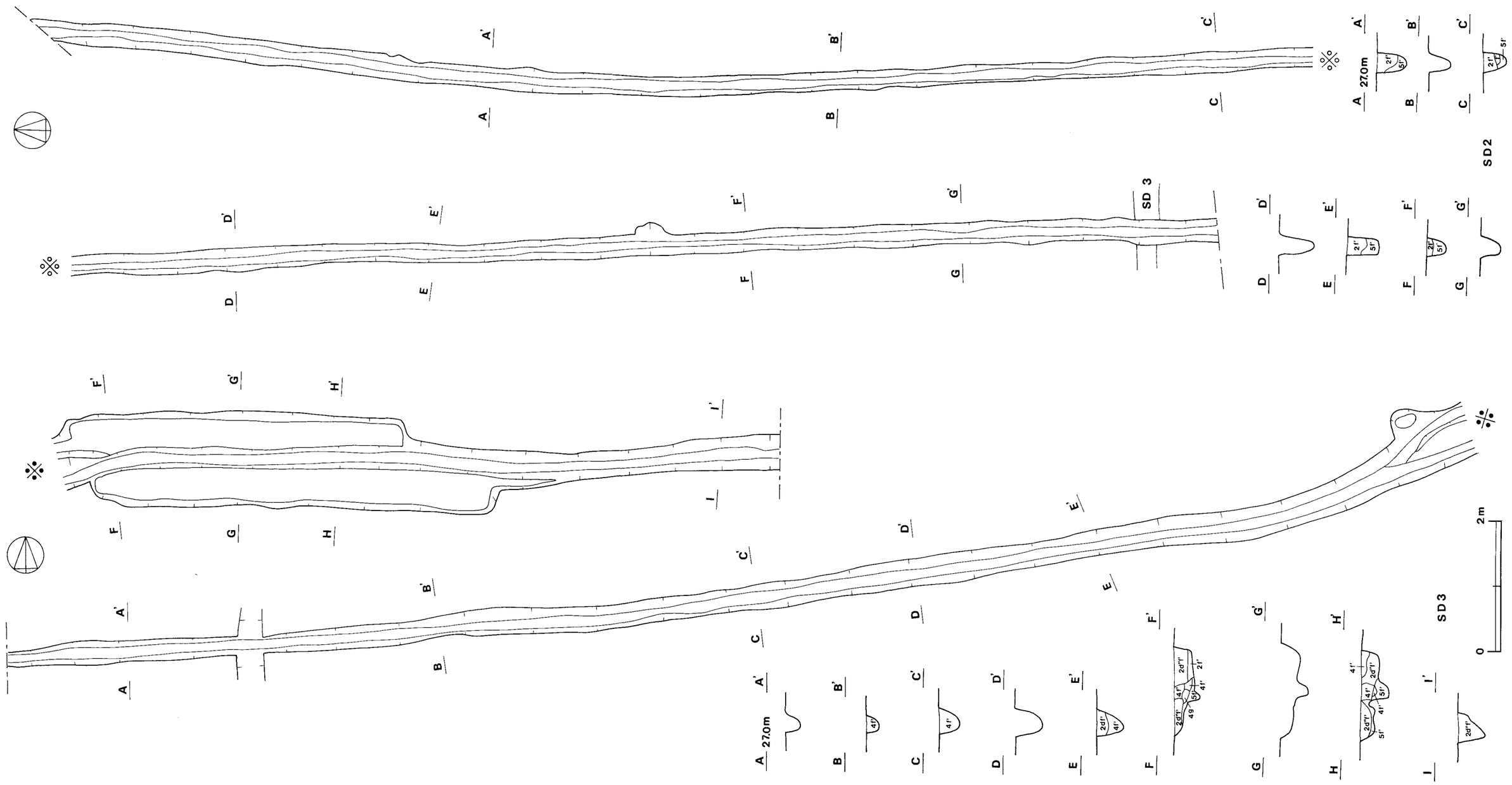
番号	位　置	主軸方向	断面	規模				壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備　　考
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
ＳＤ１	C1・D1	N－3°－W	⌐⌐	29.0	120～180	15～ 29	114～124	外傾	平坦	自然	鉄滓1点 黒浜式15片	
ＳＤ２	C1・D1	N－5°－W	⌐⌐	37.0	30～ 60	7～ 19	32～ 54	垂直	平坦	自然	黒浜式8片 鉄滓1点	
ＳＤ３	D1	N－83°－E	⌒	33.0	40～110	12～ 53	20～ 40	垂直	爪状	撹乱	黒浜式6片	
ＳＤ４	D2	N－87°－E	⌐⌐	4.2	50～ 60	42～ 45	25	垂直	平坦	自然		
ＳＤ５	C2	N－86°－E	⌐⌐	17.0	30～ 60	11～ 53	10	垂直	凹凸	自然		
ＳＤ６	B2・C2	N－74°－E	⌒	5.0	20～120	10～105	10～ 31	外傾	平坦	自然	黒浜式3片	
ＳＤ７	B2	N－77°－E	⌒	13.0	40～ 90	9～ 36	18～ 25	外傾	凹凸	自然	黒浜式2片	ＳＤ８と重複
ＳＤ８	B2・C2	N－22°－W	⌐⌐	20.0	30～ 70	9～ 31	17～ 33	外傾	凹凸	自然		ＳＤ７と重複
ＳＤ９	B2	N－48°－E	⌐⌐	13.0	30～100	9～ 34	17～ 21	外傾	平坦	自然	黒浜式1片	ＳＤ10と重複
ＳＤ10	B2・A2・A3	N－13°－W N－74°－E N－68°－E	⌒ ⌐⌐	45.7	50～140	17～ 77	45～ 53	外傾	平坦	自然	鉄滓13点 黒浜式3片	ＳＤ９と重複



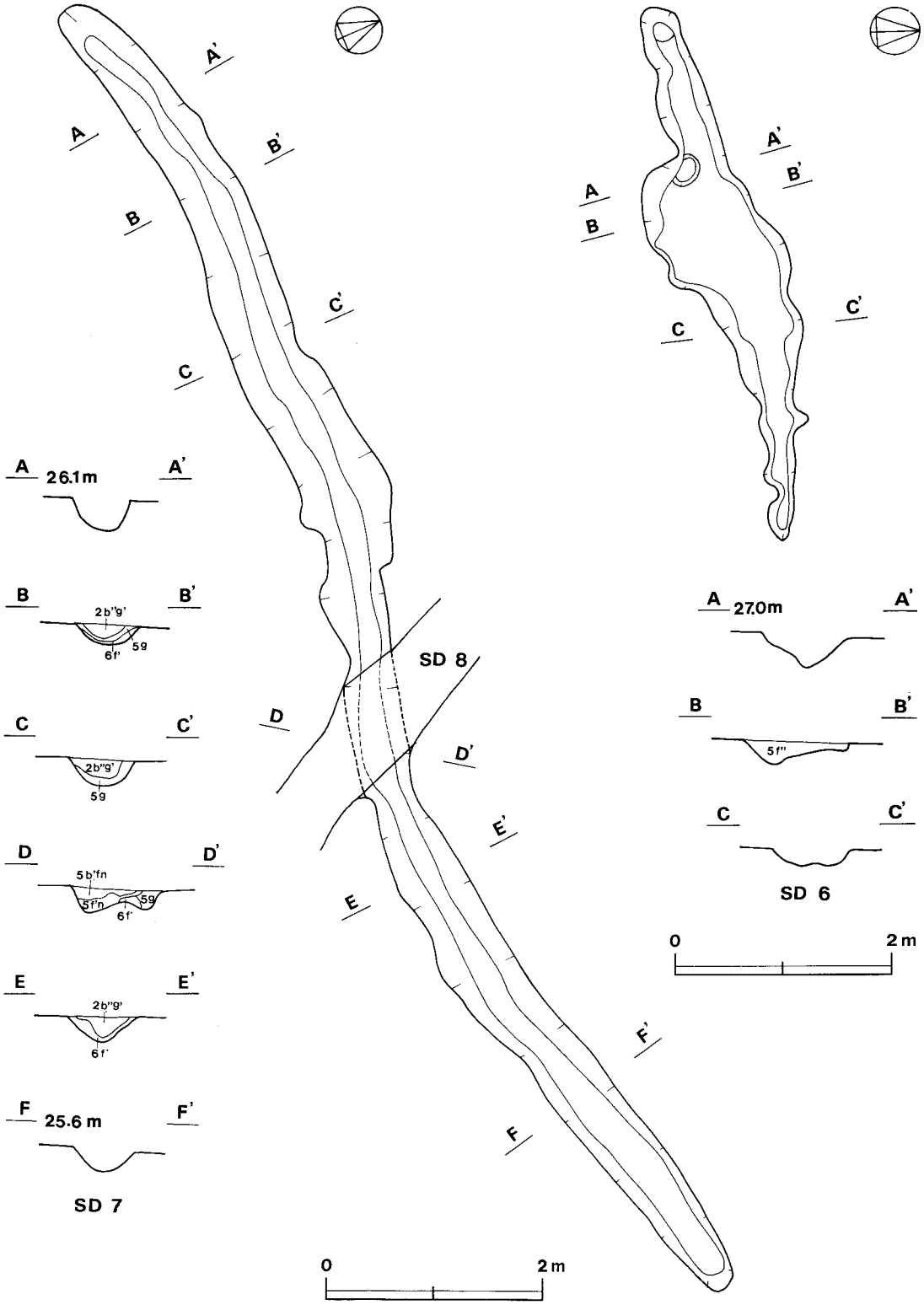
第88図　第１号溝実測図



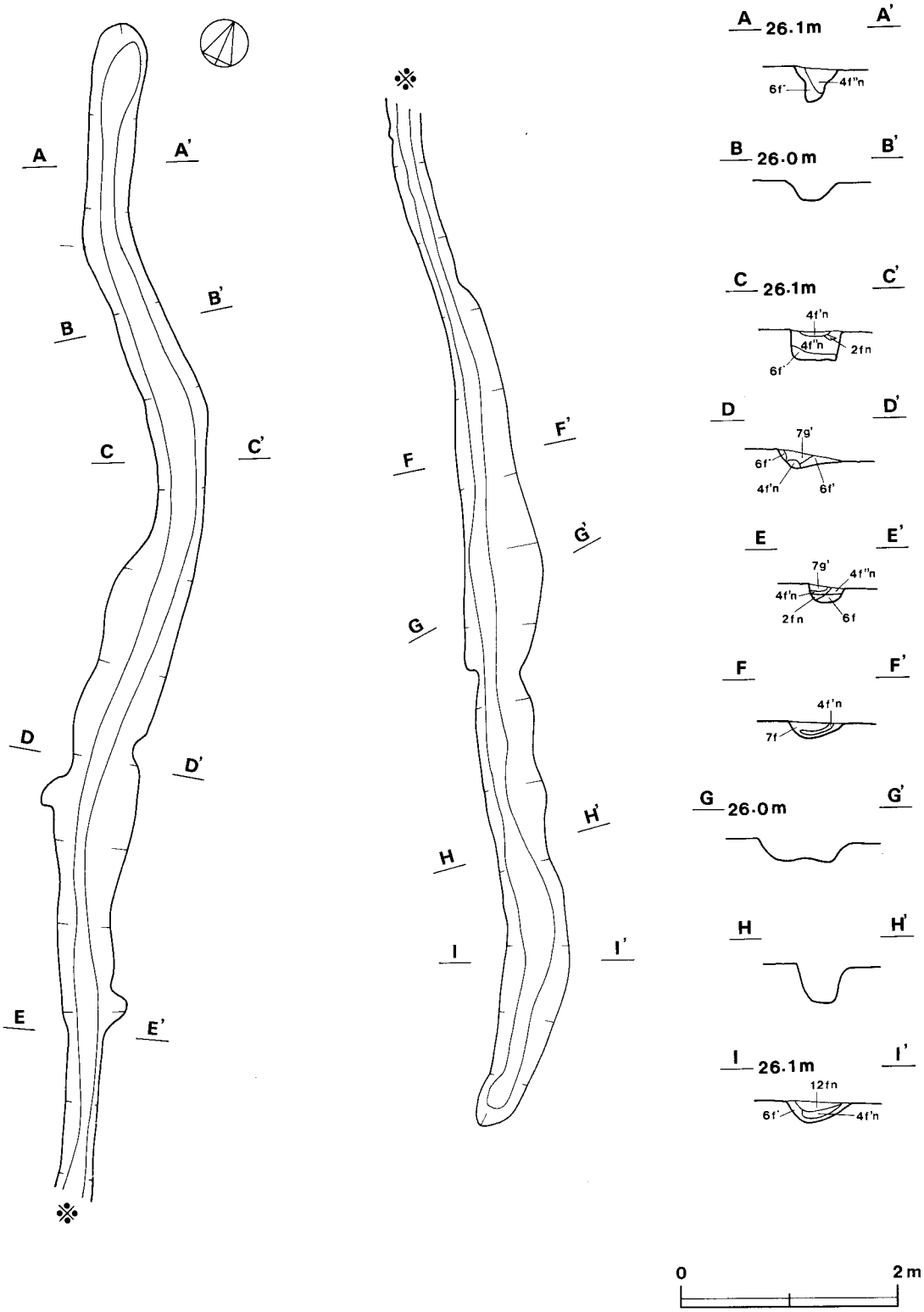
第89図　第４・５号溝実測図



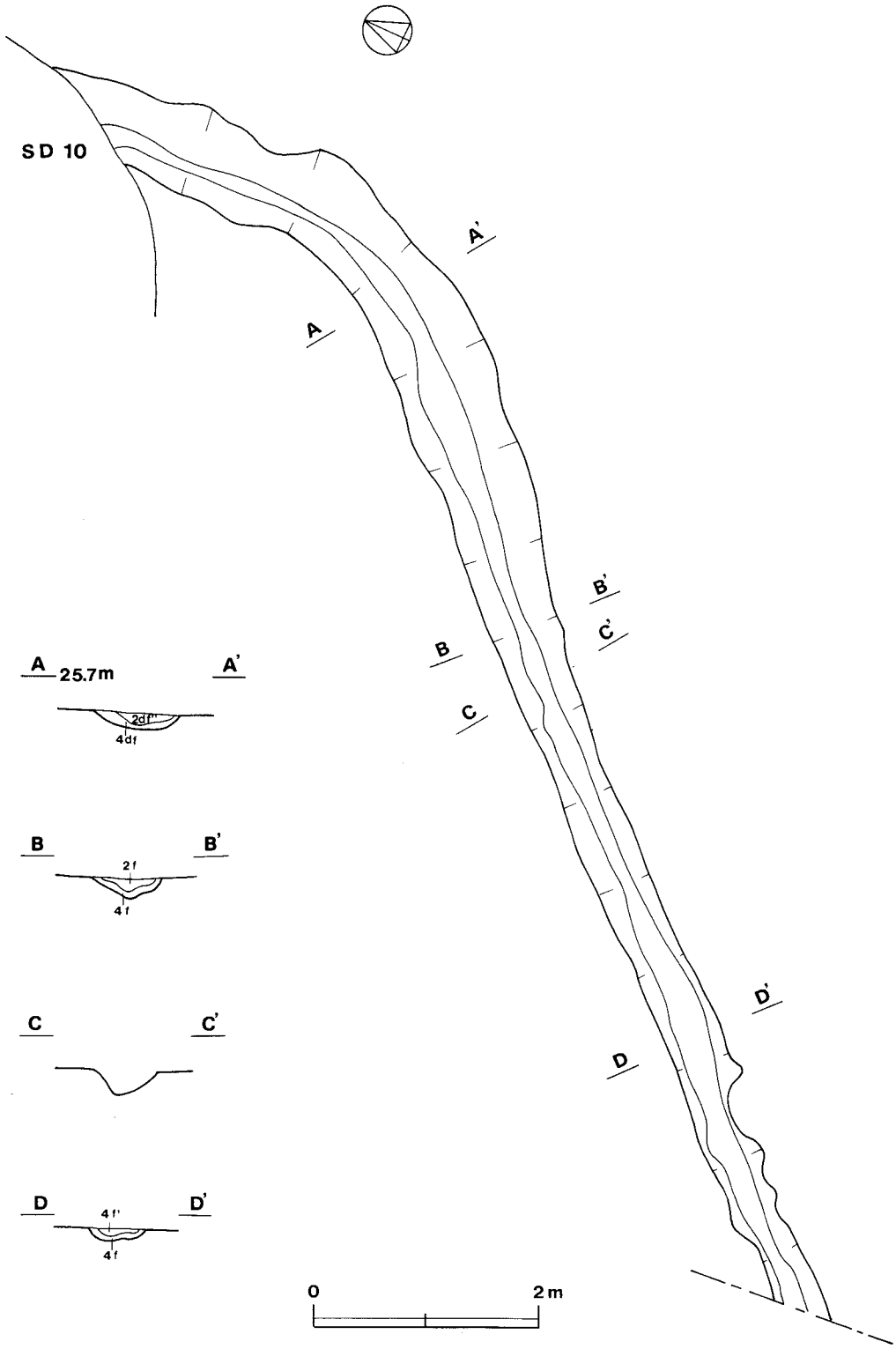
第90図　第２・３号溝実測図



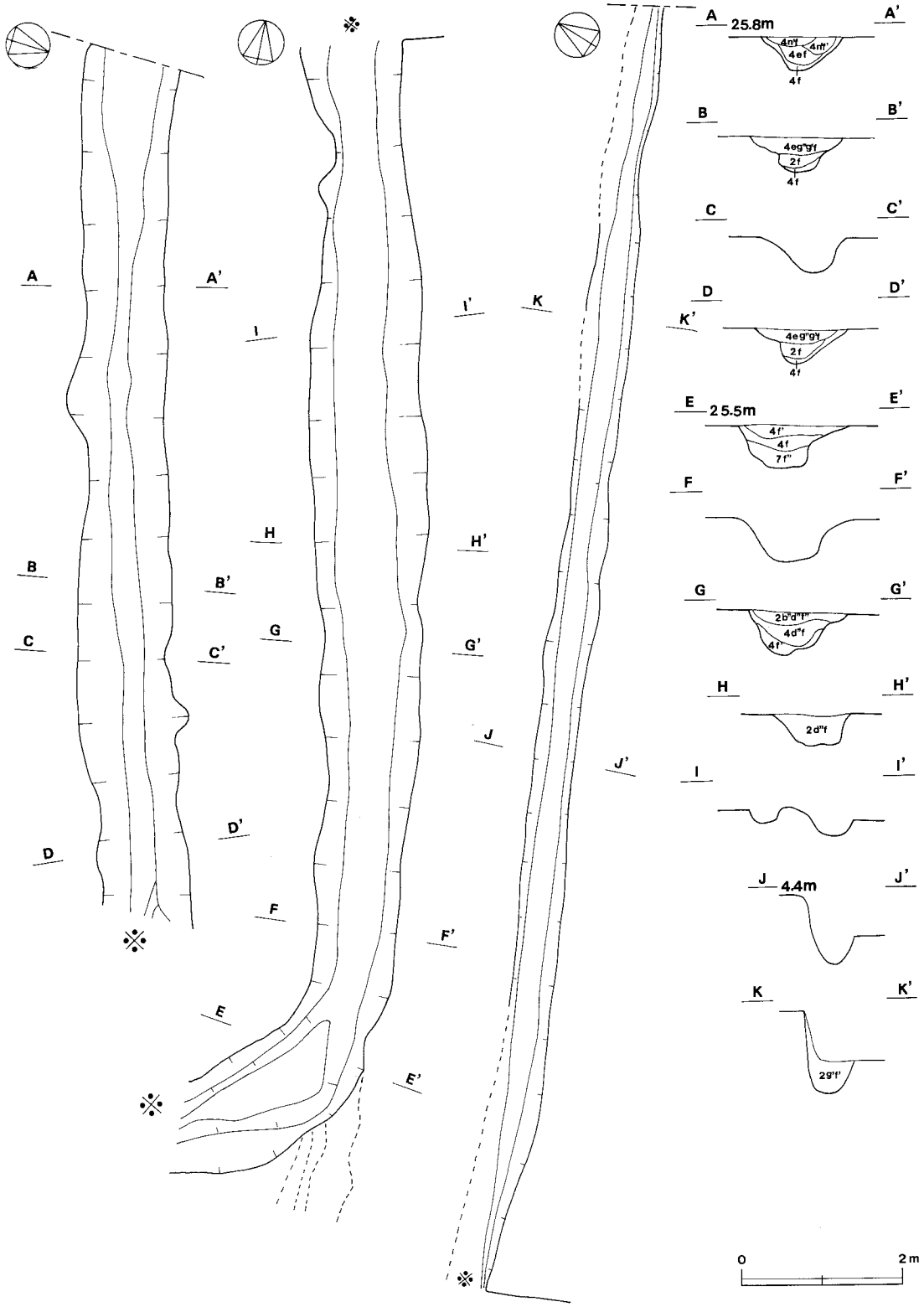
第91図　第６・７号溝実測図



第92図　第 8 号溝実測図



第93図　第９号溝実測図



第94図　第10号溝実測図

(4) 井戸状遺構

第1号井戸（第95図）

本跡は，遺跡の中央部やや北寄り B2g8区を中心に確認されている。第17号土坑より南へ約7 mに位置している。

平面形は，長径1.01m，短径0.92mのほぼ円形状を呈している。壁の断面は「〕〔」を呈しているが，本来の壁は垂直に立ち上がり，円筒状を呈していたと考えられるが，自然崩落により現状のように中膨れになったと推測される。湧水がひどく排水作業中に土層観察用ベルトが崩落してしまい，土層セクション実測が不可能になってしまった。深さは197cm以上である。

覆土は，黒色土が主体で，上層に粘土を含む層があり，水分を多量に含んでいる。

遺物は，覆土下層から自然木が4片，器面が荒れた須恵器の浅鉢と黒浜式土器片4片，自然石が26個出土している。

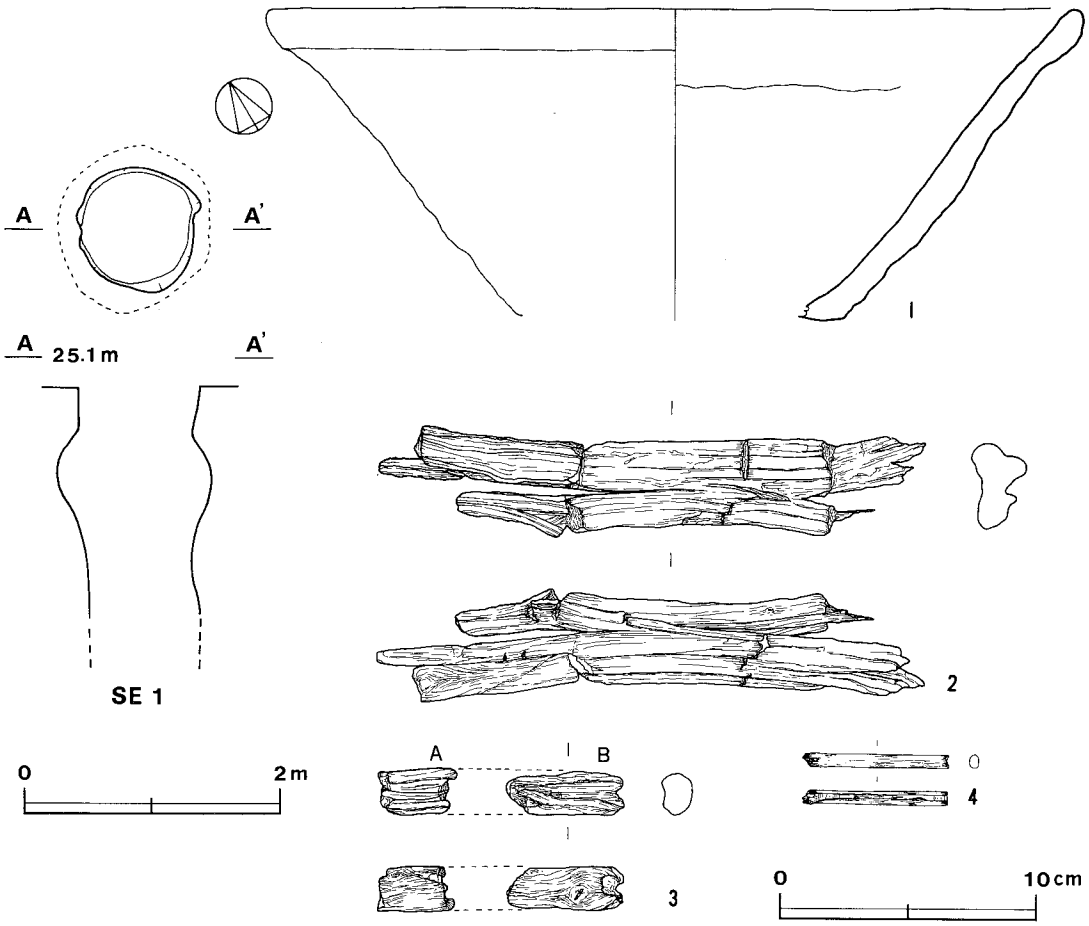
第1号井戸出土樹木（第95図）

2，は全体の形がやや弓なりに残存している。表面の腐触が進行し，亀裂が無数に観察される。木片は自然木で使用痕，加工痕はみられない。長さ21.4cm，幅4.4cm，厚さ3.2cmで木質はクリであり，用途は不明である。

3，は同一木片で，表面の腐触が進行している。断面形は「⌓」状を呈している。全体的に黒褐色をしている。木片は自然木で使用痕，加工痕はみられない。Aは，長さ3.1cm，幅1.9cm，厚さ1.2cmで，Bは，長さ4.6cm，幅1.7cm，厚さ1.2cmで木質はカキであり，用途は不明である。

4，は竹で，断面形は「⌓」を呈している。全体的に表面の腐触が進行し，亀裂が無数に観察される。長さ5.4cm，幅0.6cm，厚さ0.3cmで木質は竹で，使用痕，加工痕はみられない。用途は不明である。

(1) 2～4の樹種同定は，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究員，光谷拓実氏の御指導によった。



第95図　第１号井戸状遺構実測図・出土遺物実測図

出土土器観察表

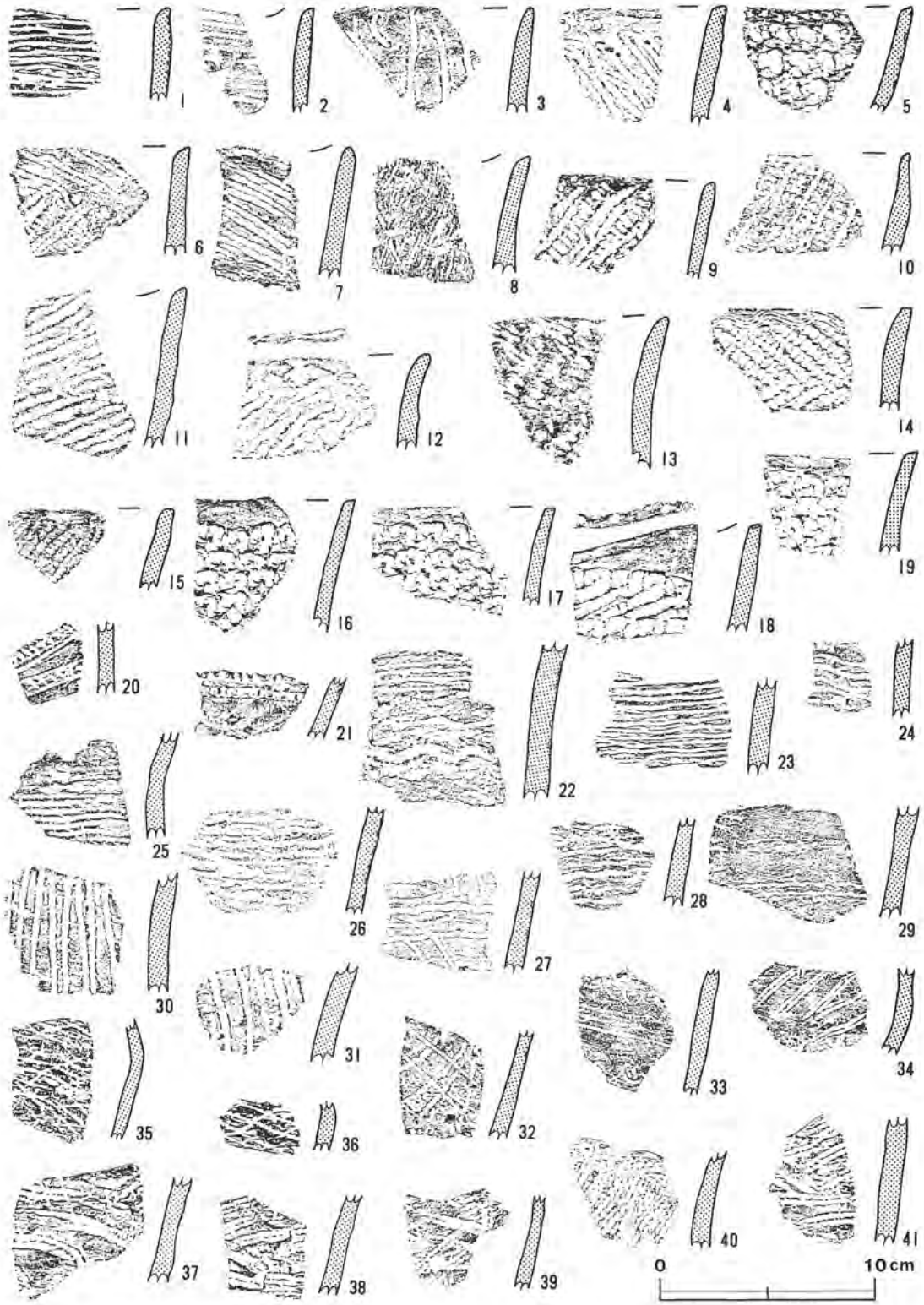
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第95図 1	浅　鉢 （須恵器）	A 31.75 B 12.3	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	粘土ヒモ巻き上げ，器形の内外面とも磨滅・剝離しているため調整痕不明。	砂粒 灰白色 不良	60% P18 SE1

(5) その他の遺物

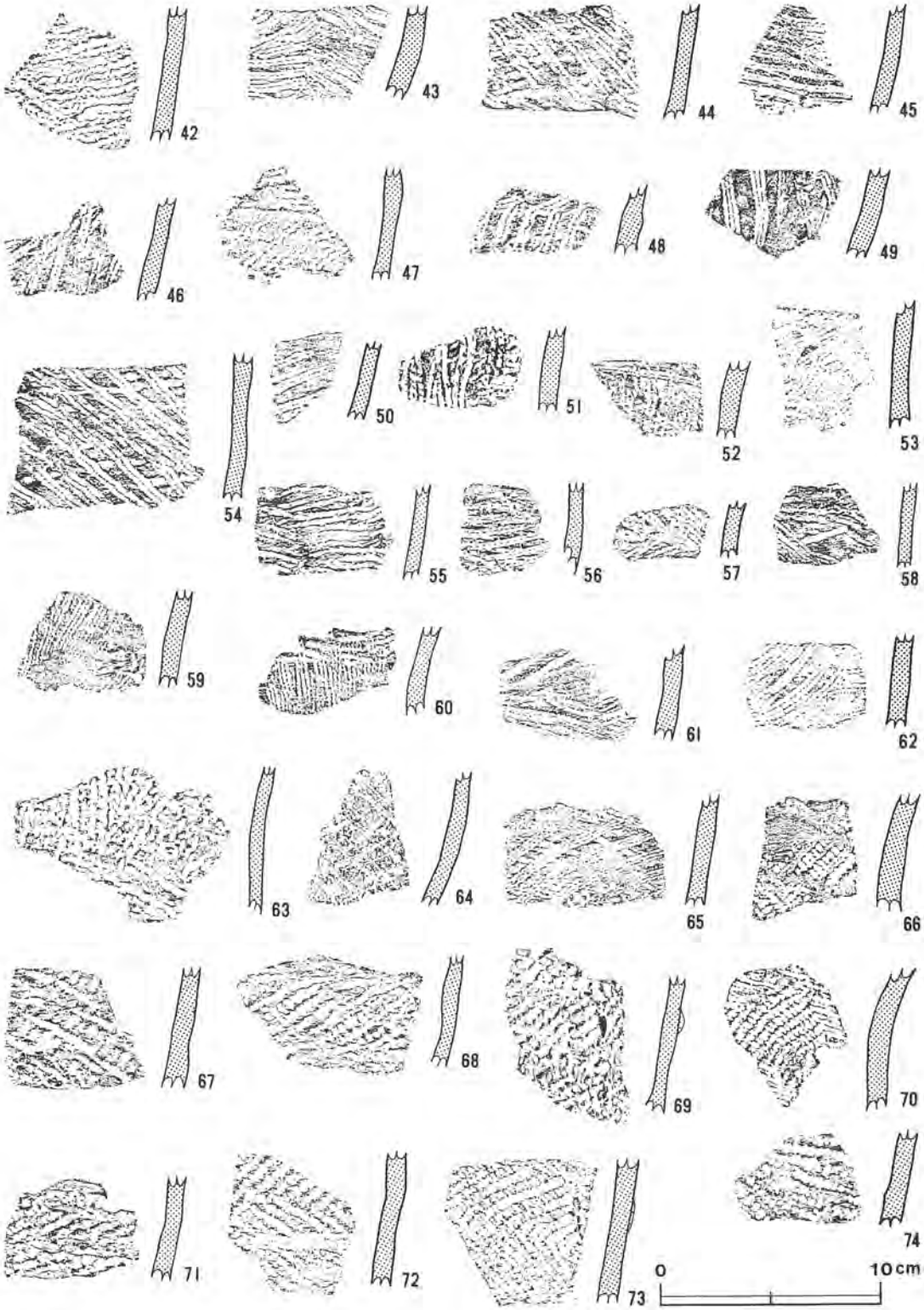
①グリッド出土土器について（第96～98図）

グリッドから出土した遺物は，縄文式土器片2,743片が出土した。縄文式土器は，主体が前期中葉の黒浜式土器で，浮島式土器と中期の阿玉台式土器片が若干出土している。

第96図１～19は，口縁部片である。１～４は沈線文で，１・２は横位に，３は１本描きを縦位に，４は１本描きの集合沈線文で口縁部に丸棒状工具による刺突文を伴う。５は口縁部に円形刺突文が施され，６～８は２本１対の単軸絡条体による撚糸文である。６は撚糸文が横位と縦位に施され，羽状を構成している。９・10は附加条の縄文である。９は単節ＬＲにℓが条と同じ方向に施文され，10は９と同種原体を使い粗く施文されている。11・12は無節Ｌが施されている。13は粗くＬＲを施され，14は口縁直下に４本１対の波状文が施され，単節ＲＬとＬＲが羽状に施文されている。15は単節ＬＲである。16～19はループ文で，16は４段以上のループ文，17は３段のループ文で，18は２段のループ文で，19は３段のループ文が施文されている。20・21は半截竹管により，爪形文をつけている。22は２本描きの沈線文により，やや太い波状文が施されている。23～33は沈線文が施され，22～24・27～29は有節平行条線文である。30・31は沈線文が縦位に，32は格子目状に施されている。34～65は，２本１対や，３本１対の単軸絡条体による撚糸文が施されている。34～48・50は，２本１対の単位で施され，49・59は３本で，63は太い撚糸を施し，64は撚糸で格子目文が施されている。66～68は附加条縄文が施されている。19～76までは単節ＬＲ，ＲＬで施され，69～71はＬＲ，72・75・76はＬＲが施され，73は羽状に施文されて隆帯をもつ。77・79はＬが施され，78・81～84はＲが施文されている。81は単節ＲＬ同士の結束が見られる。85～90はループ文が施されている。91・92は上げ底の底部片で，93～97は浮島式に比定できる土器で，93は沈線文が２本描きで施され，94は口唇部に刻目をもち，２本描きの幅の広い沈線文で区画内に刻目をつけている。95は異方向に施文されている。96～98は，口縁直下に粗い刻目をもつ。98・99は加曽利Ｂ式に比定できる土器で，100～103は縄文時代中期阿玉台式に比定できる土器で，ヘラ状施文具で沈線が羽状に施文されている。100・101は，口縁直下に無文帯をもち，刺突をヘラ状施文具でつけている。102は隆帯をもつ。103は口縁に無文帯を持つ断面「く」の字状の浅鉢である。



第96図　グリッド出土遺物拓影図(1)



第97図　グリッド出土遺物拓影図(2)

第98図　グリッド出土遺物実測図・拓影図(3)

②石器・石製品について（第99～107図）

当遺跡からは，石鏃・剝片・磨石・敲石・石皿・砥石・凹石・磨製石斧・軽石等の石器と石製品が出土している。本項では若干の解説を加え，個々の石器・石製品の出土位置，法量等については一覧表にして掲載した。

石鏃（第99図）

石鏃は，５点出土し，すべて図示した。完形品は３点で，他の２点は基部の一部や先端部が欠損している。石質はチャートが４点，黒曜石が１点である。無茎石鏃が５点，抉りの深いものは１点，浅いものは４点である。

磨製石斧（第100図）

磨製石斧は，２点出土している。いずれも両側縁及び基部は研磨されている。２点とも扁平で剝離痕がみられる。石質は６は流紋岩，７は緑泥片岩である。

磨石（第100～102図）

磨石は，24点出土し，そのうち18点を図示した。磨石としての単一機能だけが認められるものや凹石や敲石として使用された痕跡をもつものもある。平面形状は，整った長方形，楕円形，円形に近いもの，不定形のものがある。石質は，安山岩13点，硬質砂岩３点，流紋岩２点である。

敲石（第102図）

敲石は，８点出土し，そのうち３点図示した。自然礫の下端部・周縁に敲打痕が認められるものである。石質は，安山岩２点，流紋岩１点である。

石皿（第102～104図）

石皿は，10点出土している。完形品は１点である。欠損品は４点で，小さな破片もある。皿部の使用痕をみると，表・裏両面が使われているものと，片面だけのものがみられる。33は，両面が使われており，断面をみると，中央部に向けて磨滅し薄くなっている。34は，片面だけに使用痕が残されている。

29～33・36は凹を有し，凹石と兼用して使用したと思われる。

凹石（第104図）

凹石は，４点出土している。小破片で表・裏面に凹穴を２～３か所ずつ有する。石質は安山岩

で，41は硬質砂岩である。

剝片（第105～107図）

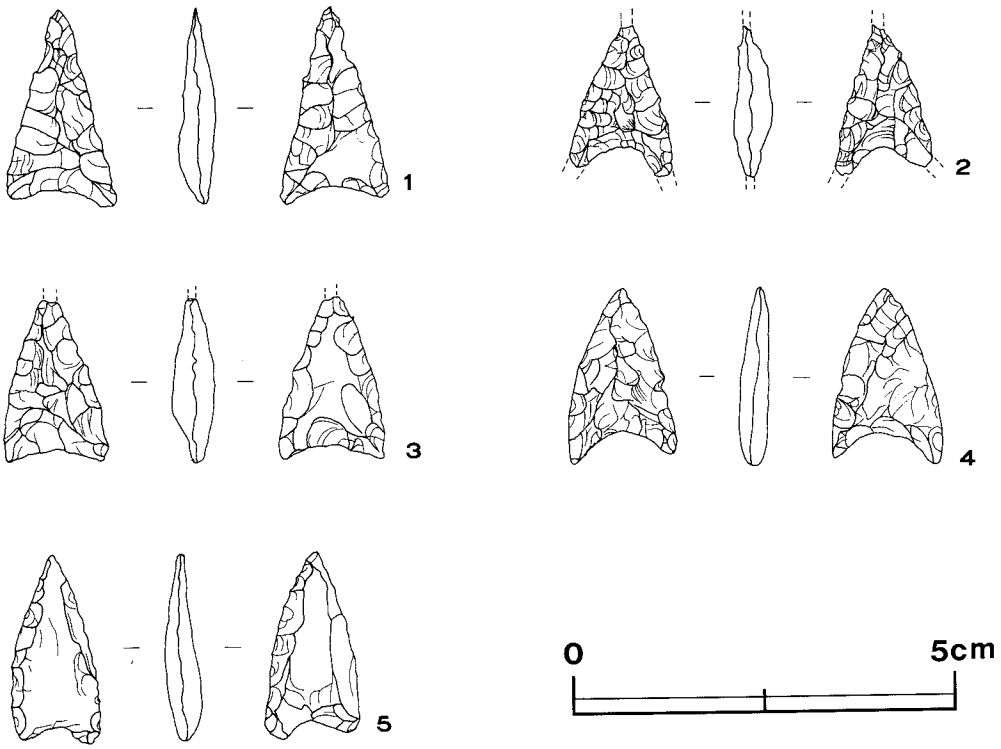
剝片は，23点出土している。そのうち18点を図示した。石質は，チャート，黒曜石，頁岩である。47・54・55はチャート・黒曜石の剝片の側縁に押圧剝離による調整が認められる。

軽石（第104図）

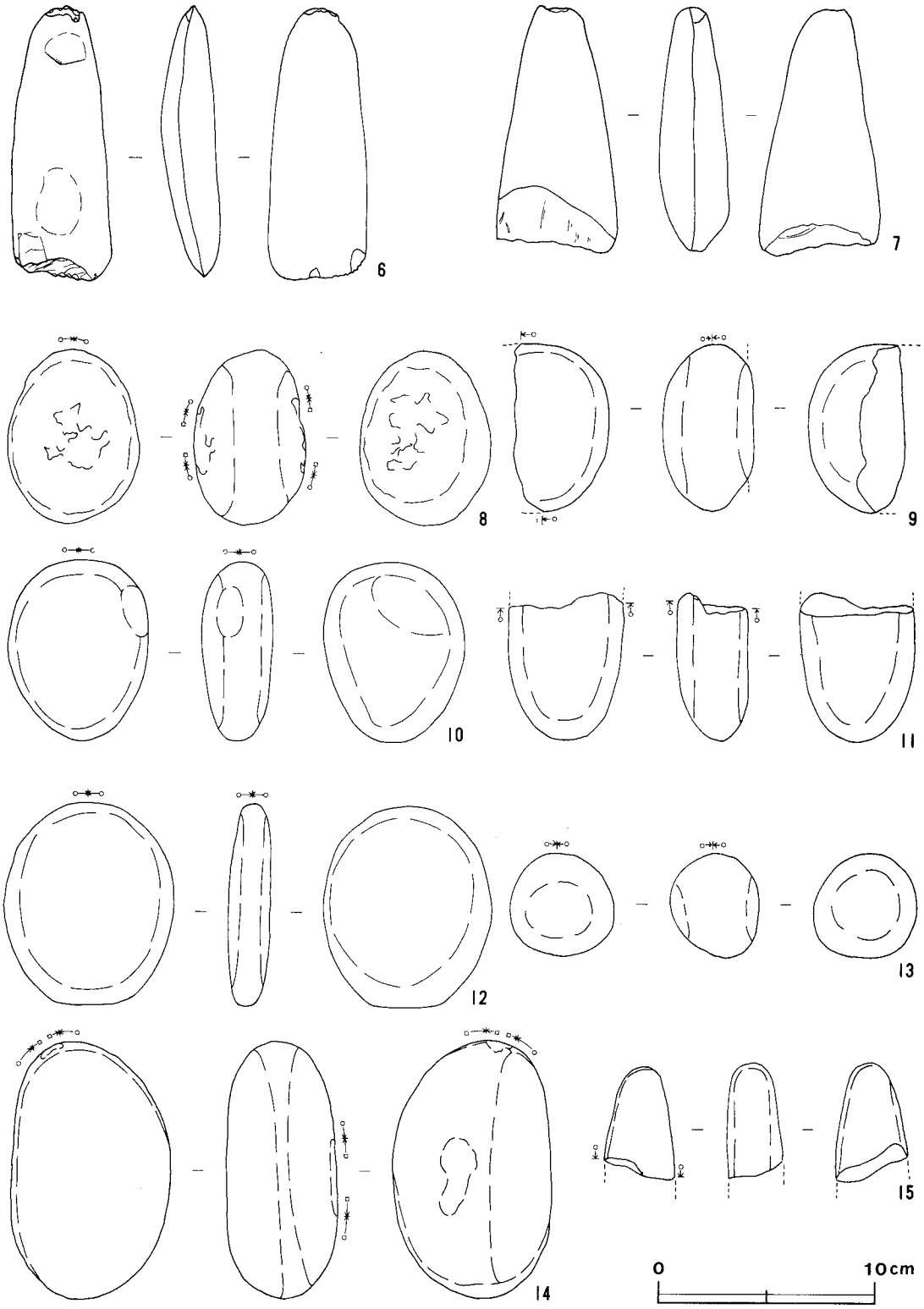
軽石は，４点出土し，そのうち３点図示した。

礫石（第104図）

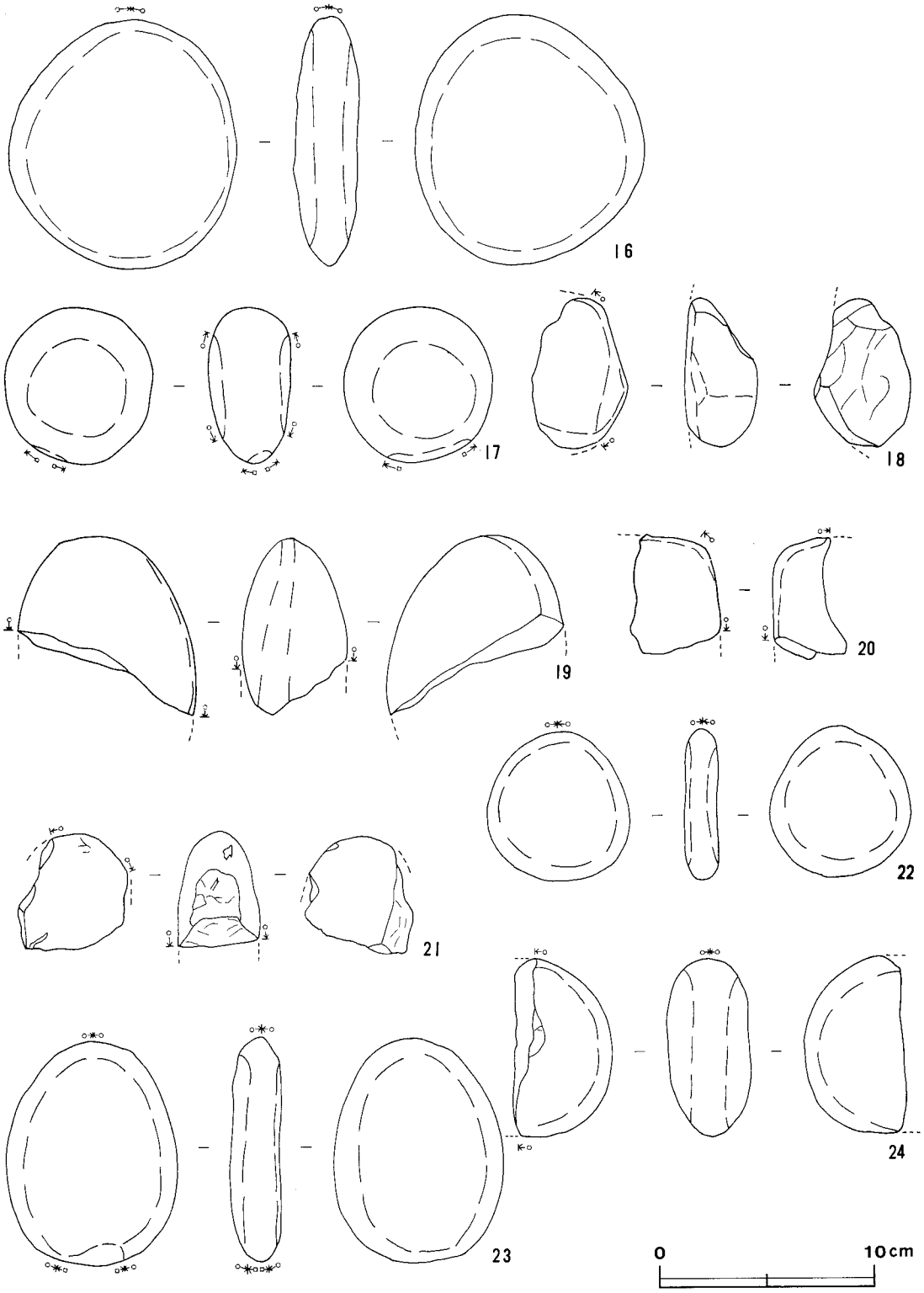
礫石は，１点出土している。45は，長楕円形と思われる自然礫に打撃を加え，粗い調整により刃部が作り出されている。両端が欠損している。石質は，硬質砂岩である。



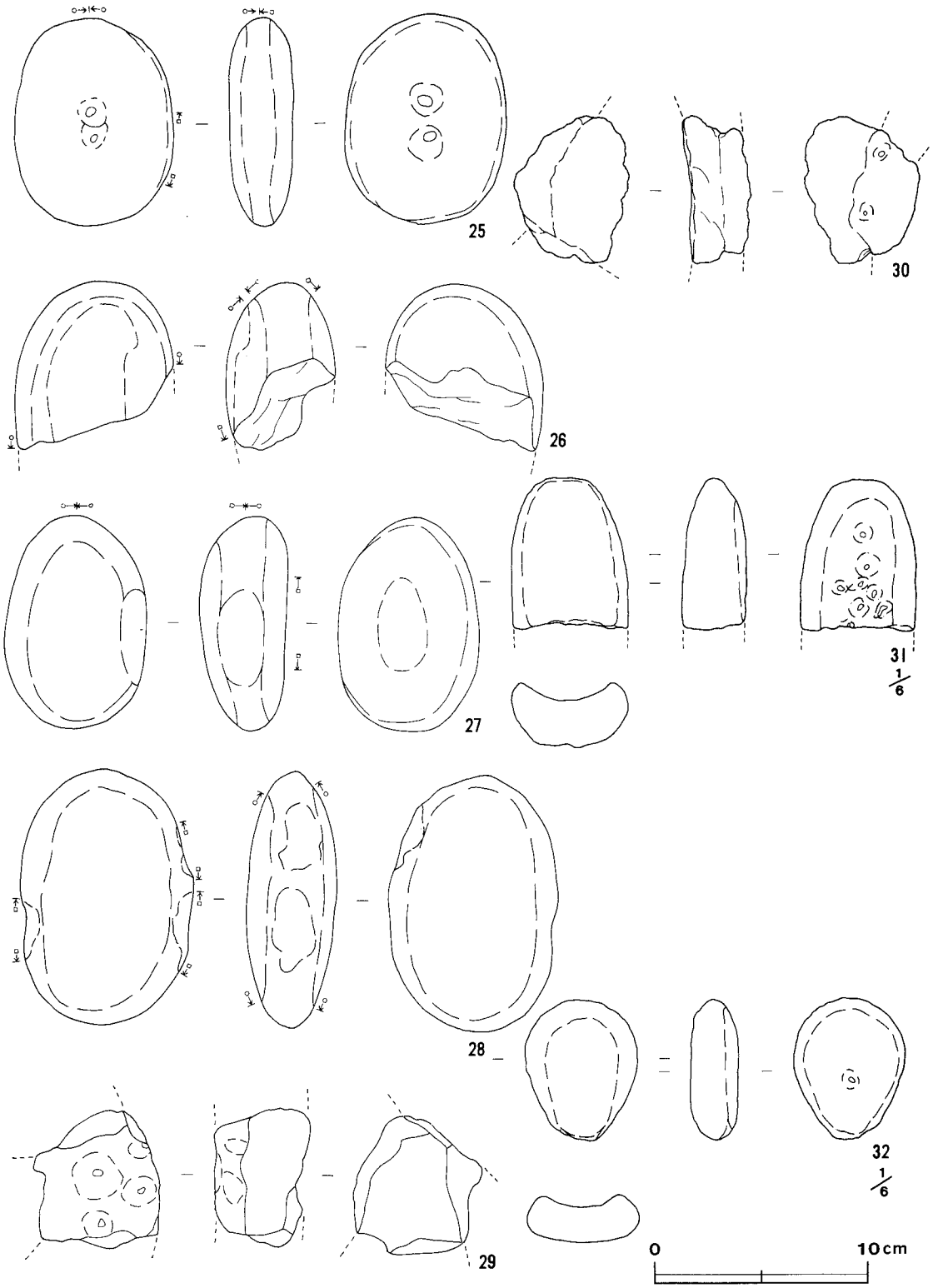
第99図　石器実測図(1)



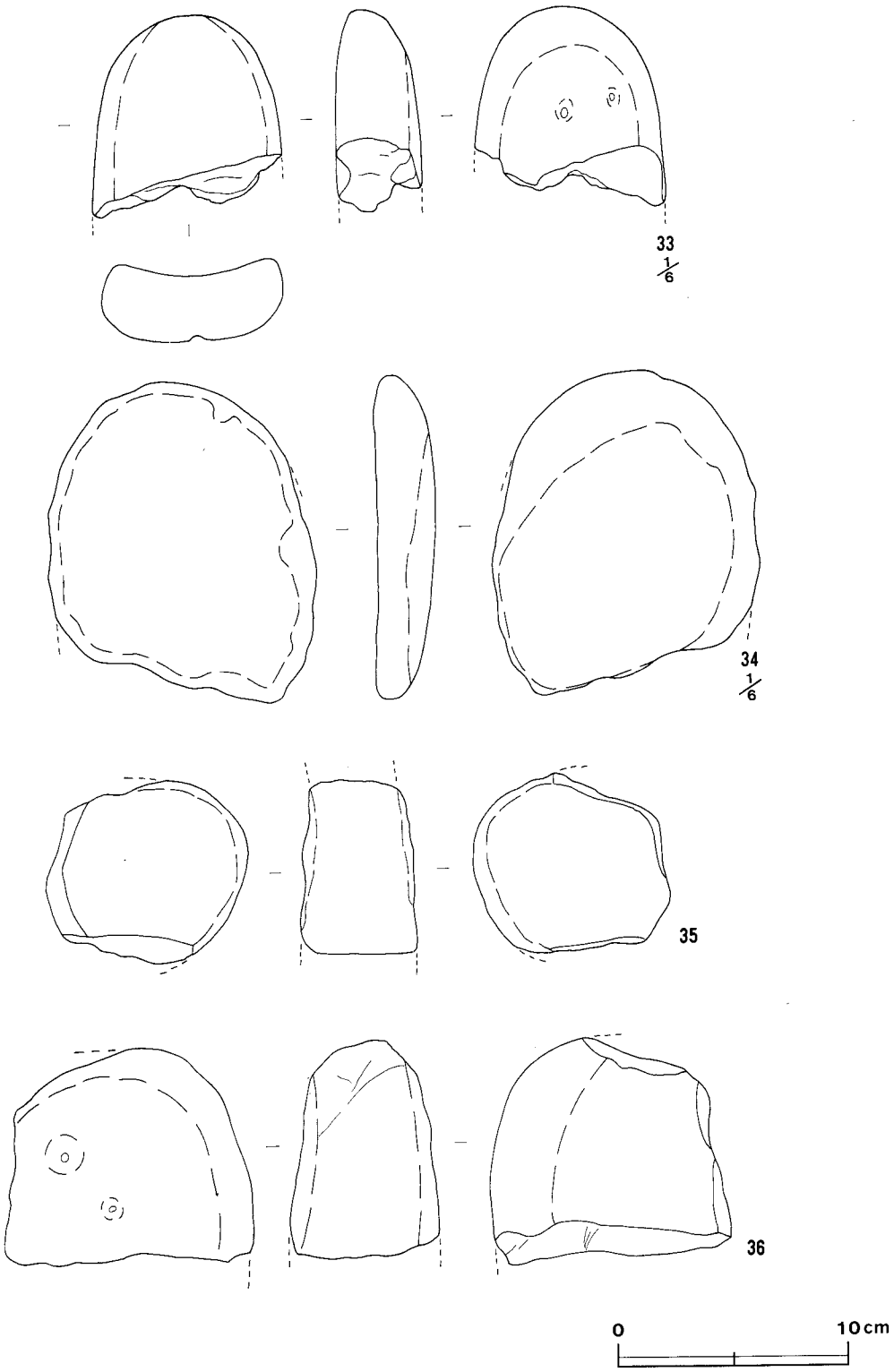
第100図　石器実測図(2)



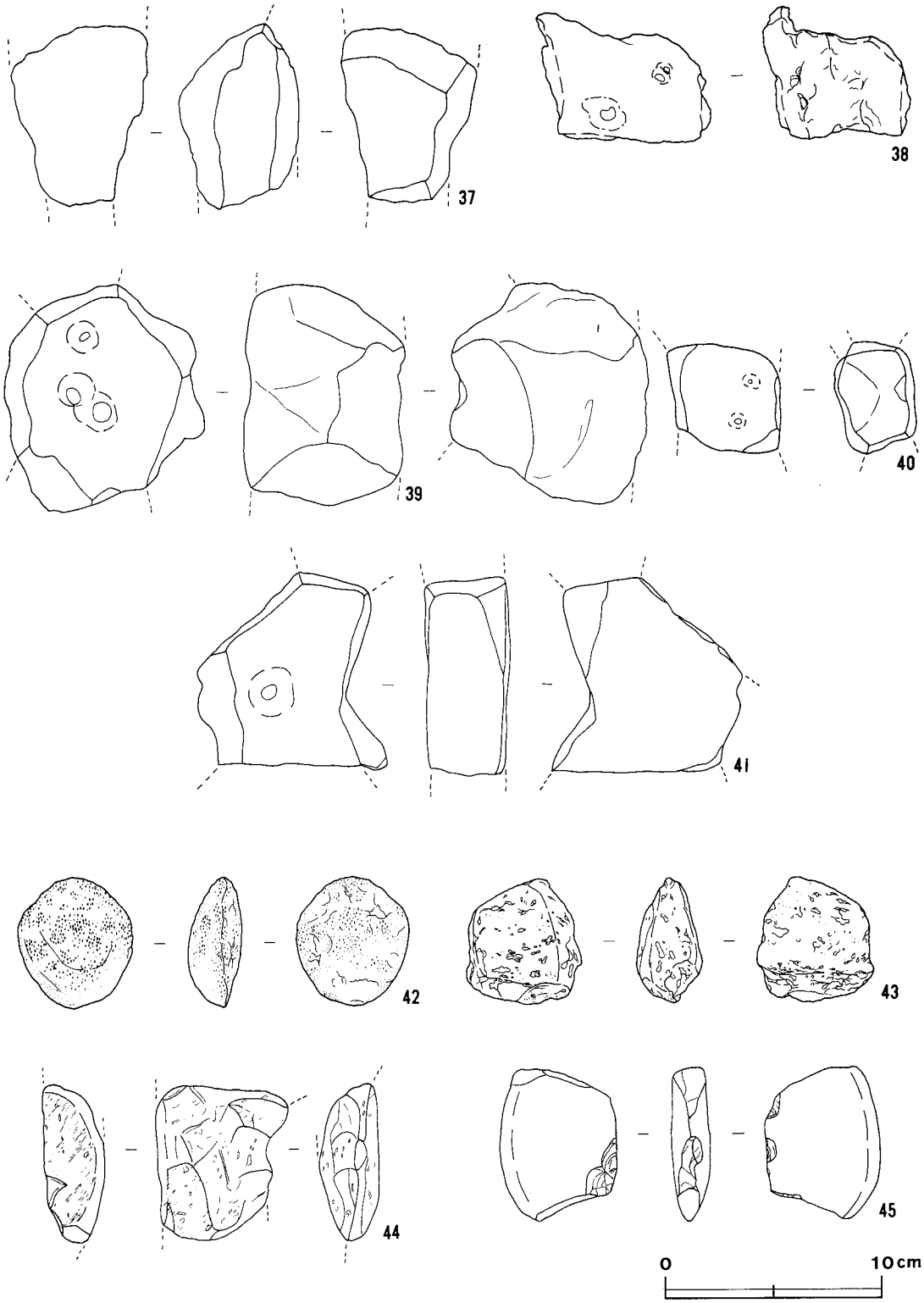
第101図　石器実測図(3)



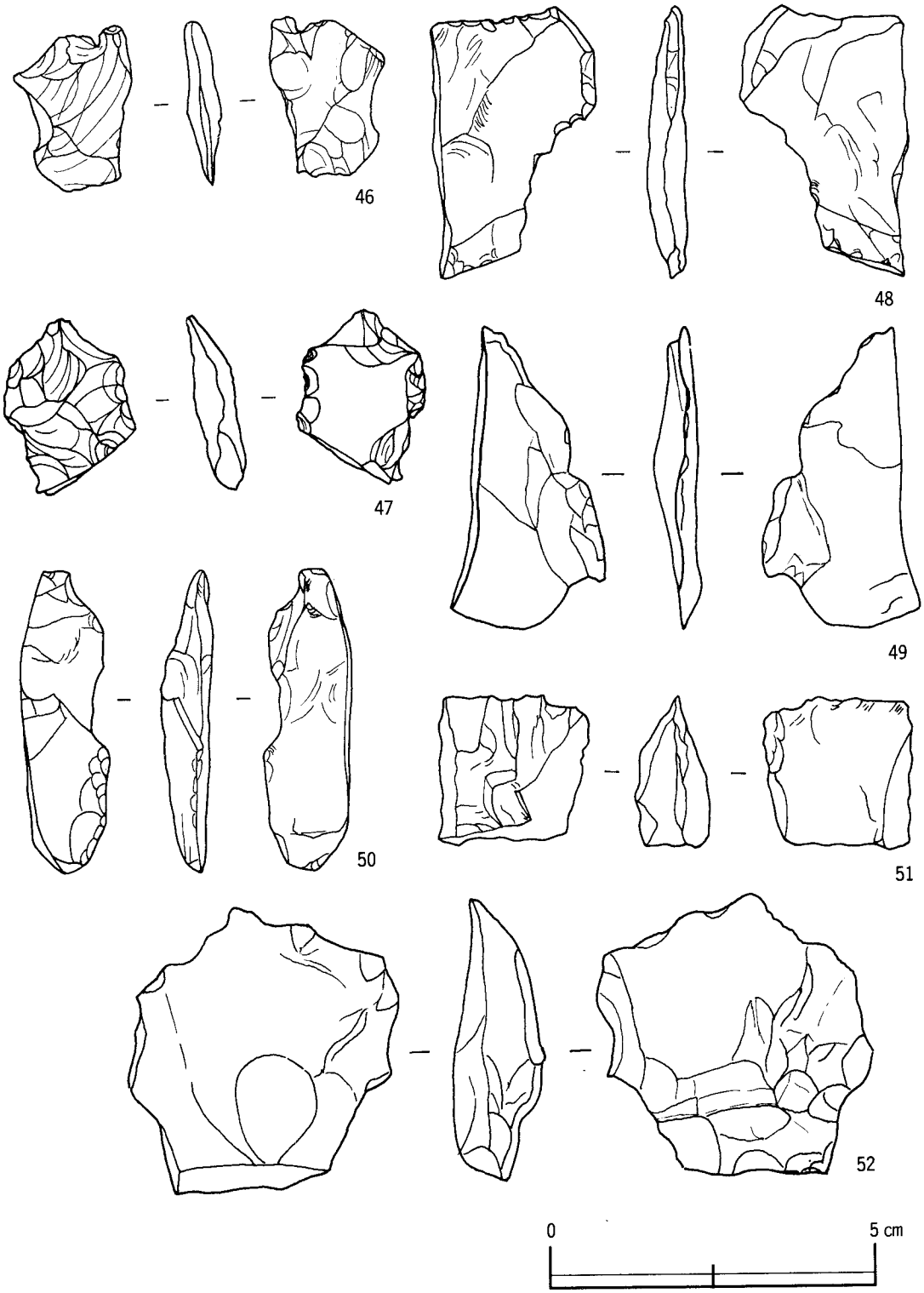
第102図　石器実測図(4)



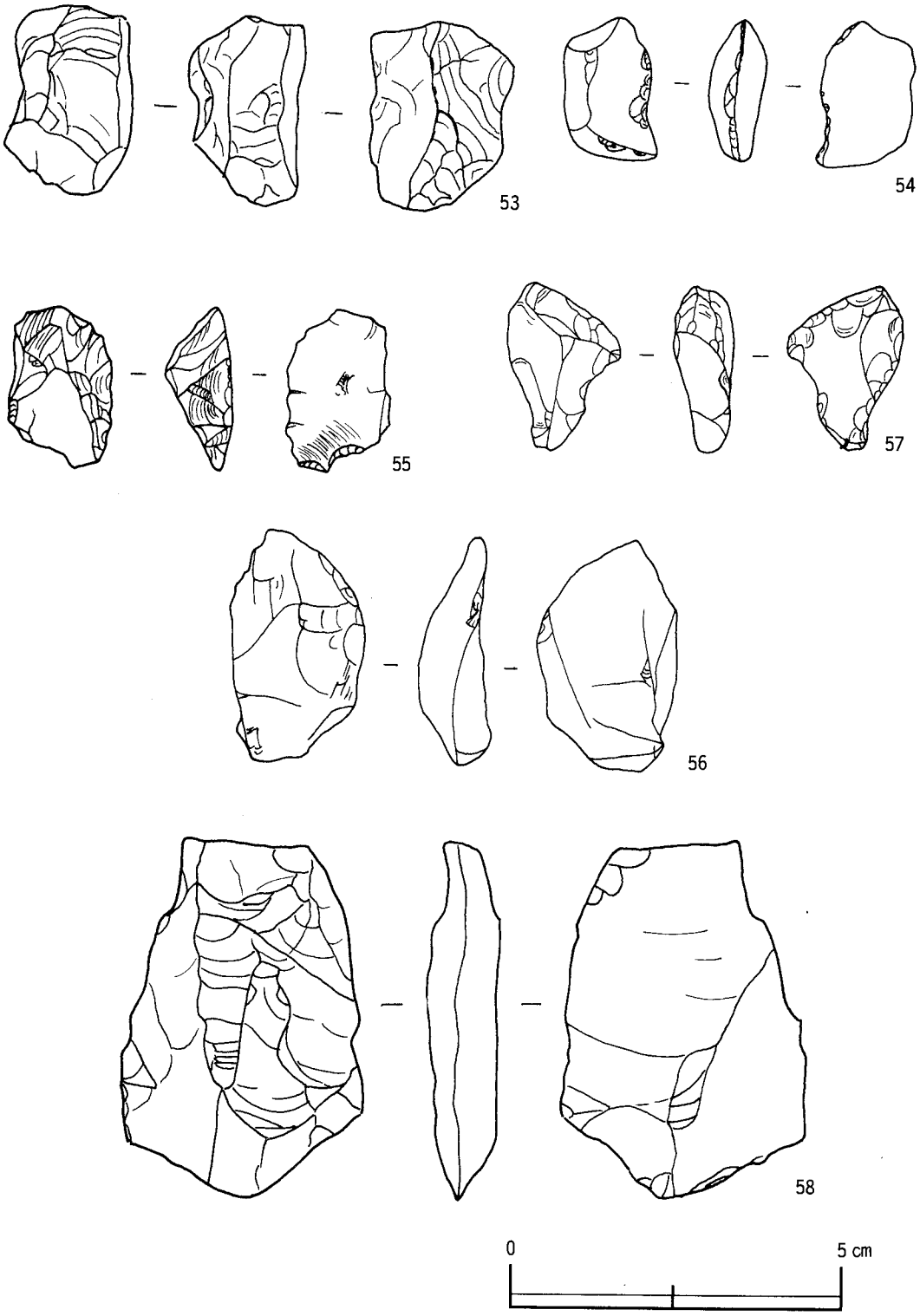
第103図　石器実測図(5)



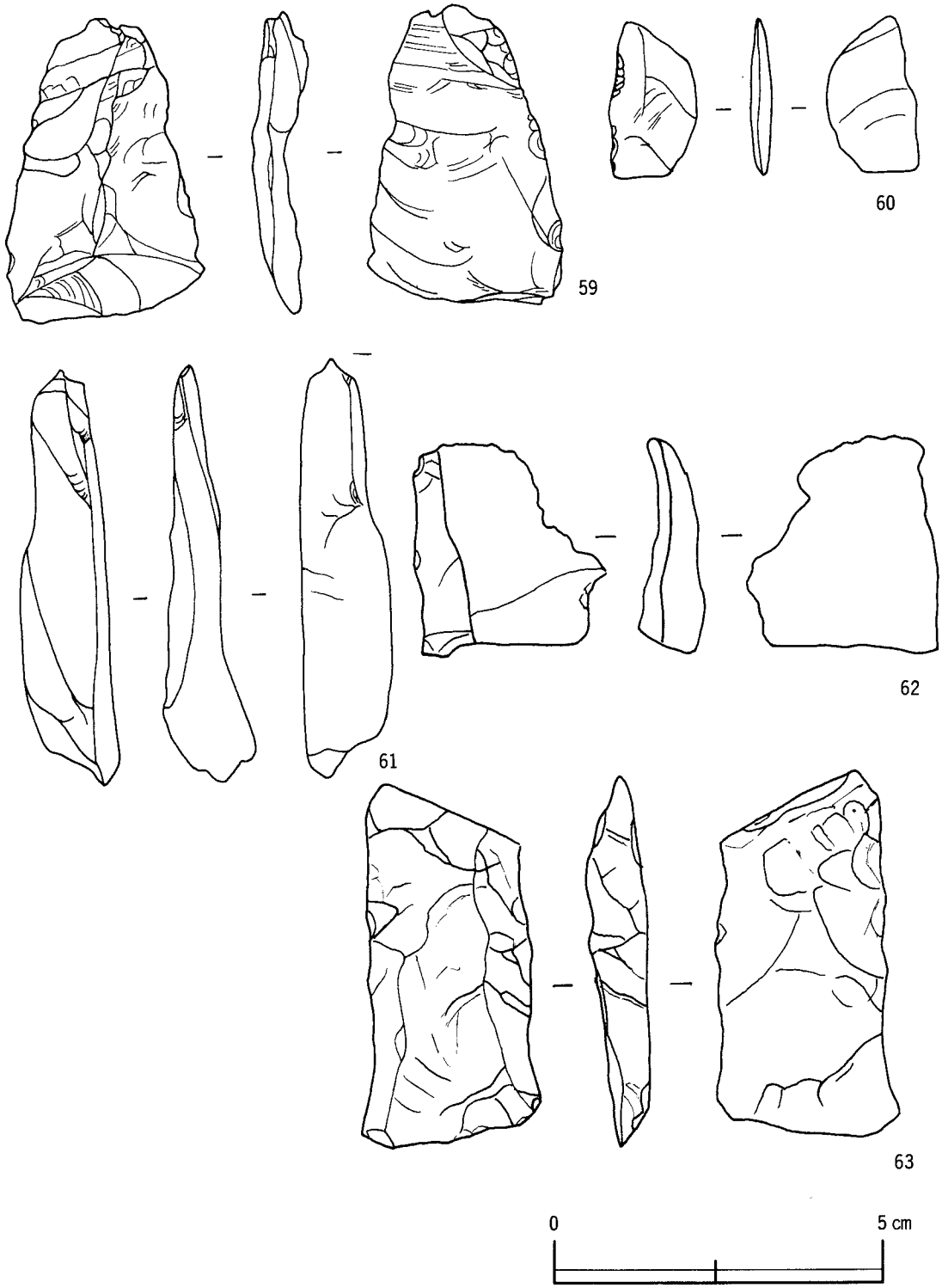
第104図　石器実測図(6)



第105図　石器実測図(7)



第106図　石器実測図(8)



第107図　石器実測図(9)

表14　石器観察表

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第99図 1	石鏃（無茎）	SI1	2.6	1.5	0.5	1.1	チャート	完形
2	石鏃（無茎）	SI1	(2.0)	1.3	0.5	(0.8)	黒曜石	一部欠損
3	石鏃（無茎）	C1ca	(2.1)	1.4	0.6	(1.2)	チャート	一部欠損
4	石鏃（無茎）	C2j2	2.3	1.5	0.4	1.0	チャート	完形
5	石鏃（無茎）	C1	2.4	1.2	0.5	1.0	チャート	完形
第100図 6	磨製石斧	C2g1	12.8	4.6	2.7	233.6	流紋岩	完形
7	磨製石斧	C2h5	11.5	5.5	3.3	287.7	緑泥片岩	完形
8	磨石	SI1	8.2	6.1	5.2	303.2	安山岩	完形
9	磨石	SI1	7.8	(4.4)	4.2	(166.8)	安山岩	一部欠損
10	磨石	SI1	8.4	6.5	3.3	231.8	硬質砂岩	完形
11	磨石	SI1	6.9	5.3	3.4	(163.8)	安山岩	一部欠損
12	磨石	SI1	9.4	7.8	2.0	169.3	安山岩	完形
13	磨石	C1j8	4.9	4.9	4.1	123.8	安山岩	完形
14	磨石	SI2	12.0	7.4	5.2	623.6	安山岩	完形
15	磨石	C1	(5.4)	3.3	2.5	(63.8)	安山岩	一部欠損
第101図 16	磨石	SE1	11.75	10.65	3.2	515.6	安山岩	完形
17	磨石	SE1	7.4	6.95	3.85	254.5	安山岩	完形
18	磨石	C1g7	(7.0)	(4.5)	(3.5)	(93.0)	硬質砂岩	破片
19	磨石	C3a1	(8.5)	8.0	4.8	(341.6)	流紋岩	一部欠損
20	磨石	C2j1	(5.6)	(4.2)	(3.5)	(85.3)	硬質砂岩	破片
21	磨石	C2i7	(5.6)	(5.2)	3.9	(122.8)	安山岩	一部欠損
22	磨石	B2c5	7.0	6.7	1.6	121.2	安山岩	完形
23	磨石	C3a1	10.5	8.0	2.4	269.7	安山岩	完形
24	磨石	C1j8	8.3	(4.7)	3.9	(150.2)	安山岩	一部欠損
第102図 25	磨石	C1c1	9.8	7.5	3.0	310.0	流紋岩	完形
	磨石	SI1	(7.9)	6.4	3.6	(254.6)	流紋岩	一部欠損
	磨石	SI1	(6.5)	(4.0)	5.0	(145.7)	花崗岩	一部欠損
	磨石	SI1	(4.0)	(5.0)	(1.7)	(31.4)	緑泥片岩	破片
	磨石	C1	(6.0)	(5.0)	1.8	(73.0)	硬質砂岩	一部欠損

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
	磨石	C2b2	(4.6)	5.1	2.8	(88.3)	花崗岩	一部欠損
	磨石	D2a3	(5.3)	(3.2)	2.0	(33.8)	硬質砂岩	破片
第102図 26	敲石	SI1	(8.0)	7.4	5.1	(318.7)	流紋岩	一部欠損
27	敲石	SI1	10.2	6.7	4.1	361.2	安山岩	完形
28	敲石	SE1	12.2	8.1	4.35	481.0	安山岩	完形
	敲石	SI1	(9.5)	5.8	3.7	(247.7)	流紋岩	一部欠損
	敲石	SI1	(7.6)	5.0	3.4	(180.7)	安山岩	一部欠損
	敲石	SI1	(6.4)	5.2	6.6	(260.1)	砂岩	一部欠損
	敲石	SI1	(7.6)	(4.8)	5.6	(181.8)	安山岩	破片
	敲石	SI1	(3.45)	4.95	2.9	(37.3)	安山岩	破片
第102図 29	石皿	D1a7	(6.5)	(6.0)	(5.0)	(156.7)	安山岩	破片
30	石皿	SI1	(7.0)	(5.3)	(3.2)	(58.9)	安山岩	破片
31	石皿	B2g7	(14.2)	10.8	6.3	(804.7)	安山岩	一部欠損
32	石皿	D2a3	13.3	10.5	4.5	649.3	安山岩	完形
第103図 33	石皿	SI1	(17.5)	16.4	7.4	(2461.0)	安山岩	一部欠損
34	石皿	C1c0	(28.3)	(23.3)	6.0	(4590.2)	流紋岩	一部欠損
35	石皿	C2i7	(8.0)	(9.0)	5.1	(283.3)	安山岩	破片
36	石皿	D1a9	(9.5)	(11.0)	6.7	(836.6)	花崗岩	一部欠損
第104図 37	石皿	C2i6	(8.3)	(6.4)	(5.4)	(220.1)	安山岩	破片
	石皿	C2h5	(9.3)	5.6	(2.2)	(69.0)	安山岩	破片
第104図 38	凹石	SI1	(6.2)	(7.9)	(6.7)	(194.3)	安山岩	破片
39	凹石	C1	(10.5)	(9.0)	(7.5)	(554.0)	安山岩	一部欠損
40	凹石	C2g1	(5.0)	(5.3)	(3.8)	(71.0)	安山岩	破片
41	凹石	D2b4	(9.0)	(8.8)	(4.0)	(391.8)	硬質砂岩	一部欠損
42	軽石	SI1	6.05	5.3	2.5	33.9	軽石	
43	軽石	SI1	5.8	5.3	3.0	12.5	軽石	
44	軽石	C2g5	(7.5)	(3.0)	(6.2)	(64.0)	軽石	一部欠損
	軽石	SI1	(4.8)	(3.4)	(2.8)	(24.3)	軽石	破片
45	礫石	C2i2	(7.1)	5.4	1.8	(80.5)	硬質砂岩	一部欠損
第105図 46	剝片	SI1	2.5	1.8	0.5	1.7	チャート	

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
47	剝片	SI1	2.7	2.1	0.8	3.0	チャート	
48	剝片	SI1	4.3	2.6	0.6	5.5	頁岩	
49	剝片	SI1	4.7	2.4	0.8	5.9	流紋岩	
50	剝片	SI1	4.7	1.4	0.8	4.3	チャート	
51	剝片	SI1	2.4	2.3	1.2	6.2	安山岩	
52	剝片	SI2	4.4	4.3	1.5	20.5	頁岩	
第106図53	剝片	B3i_1	2.9	1.9	1.7	9.9	黒曜石	
54	剝片	C2h_1	2.2	1.5	0.8	1.7	黒曜石	
55	剝片	B2d_7	2.5	1.6	1.0	2.7	黒曜石	
56	剝片	C2i_5	3.5	2.1	1.1	5.3	頁岩	
57	剝片	B3e_5	2.5	1.8	0.9	3.1	チャート	
58	剝片	C1i_0	5.5	3.7	1.2	18.9	チャート	
第107図59	剝片	C1b_0	4.6	3.0	0.9	7.5	チャート	
60	剝片	C2e_4	2.4	1.3	0.3	0.6	頁岩	
61	剝片	C1i_0	6.4	1.5	1.4	6.4	チャート	
62	剝片	C2d_3	3.3	3.0	1.2	4.7	頁岩	
63	剝片	C2c_2	5.6	2.8	0.9	14.5	頁岩	
	剝片	C1	4.3	4.0	2.7	46.9	頁岩	
	剝片	C1e_8	2.7	2.5	0.4	1.7	安山岩	
	剝片	C1f_9	2.6	1.5	0.4	1.1	硬質砂岩	
	剝片	C2c_2	4.4	2.8	0.7	6.7	安山岩	
	剝片	C2g_6	4.1	2.7	0.7	4.3	安山岩	
	原石	SE1	(13.3)	(7.7)	6.1	(532.3)	安山岩	
	原石	SE1	(11.0)	8.0	6.6	(809.2)	流紋岩	
	原石	SE1	(10.0)	6.3	5.5	(412.2)	安山岩	
	原石	D1a_9	4.8	1.8	0.7	5.2	流紋岩	

4 まとめ

当遺跡において検出された遺構は，竪穴住居跡２軒，土坑19基，溝10条，井戸１基である。２軒の竪穴住居跡は，縄文時代前期中葉黒浜式期に比定される。土坑は，黒浜式土器が数点伴うものもあったが，いずれも小破片であるため，時期を決定できなかった。ただし，第１・３・７・19号土坑は位置・覆土等から縄文時代のものと思われる。

遺物は，縄文時代前期中葉の黒浜式土器が主体で，若干量の浮島式土器，同中期の阿玉台式土器が出土している。黒浜式土器は，すべて胎土に繊維を含んでいる。その他，石器，石製品等が出土している。

次に，調査によって明らかになったことについて述べることにする。

(1) 遺物について

① 黒浜式土器について

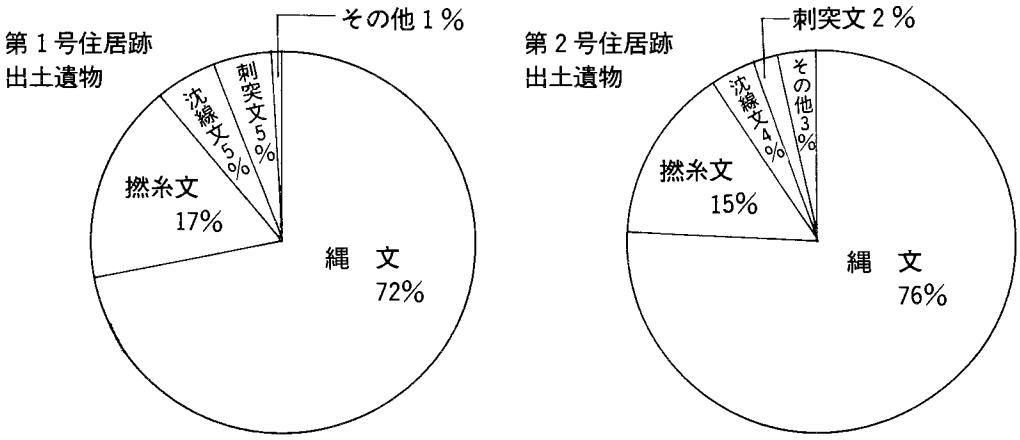
上片田Ｃ遺跡から出土した土器片の大半は縄文時代前期中葉の黒浜式土器である。特に第１号住居跡から2,423片が出土している。これは後述の第２号住居跡と比較して，ほぼ10倍である。文様組成をみると縄文が72%，次いで撚糸文が17%，沈線文５%，刺突文５%，その他１%である。縄文は，単節縄文（羽状も含む）49%，無節縄文（羽状も含む）28%，ループ文17%，複節縄文６%である。撚糸文は，単軸絡条体が85%，附加条縄文が15%である。沈線文は，半截竹管による縦位の沈線文が多い。刺突文は，棒状・ヘラ状・竹管状・櫛歯状施文具によるものがある。これらの遺物は大部分が口縁部・胴部片で，底部片は極めて少なく10点だけである。

第75図の６・７は，中部地方有尾系の影響を受けていると考えられる土器であり，第75図の８～12は櫛歯状施文具による刺突文であり，植房式土器に類似している土器である。撚糸文は，東北系（大木 2a 式）の土器であり，茨城県西部地方は，地理的に東北地方の影響を受けやすいものと考えられる。ループ文は，関山II式の要素が残っていると考えられ第75図17～20の土器がある。関山式期直後の土器であると思われる。

第２号住居跡から出土した土器は，274片で，第１号住居跡と比較して約10分の１と少ない。文様組成は，縄文が76%，次いで撚糸文が15%，沈線文４%，刺突文２%，その他３%である。縄文の施文原体は，無節縄文（羽状も含む）50%，単節縄文（羽状も含む）44%，ループ文４%，複節縄文２%である。撚糸文は，単軸絡条体が82%，附加条縄文が18%である。

黒浜式土器に関しては，新井和之氏[(1)]が５段階細分を提示されており，その細分案は，Ⅰ・II段階が，関山式土器からの移行期であり，III段階がコンパス文多用の土器を指標にし，IV段階が，肋骨文・木葉文の発生期で，Ⅴ段階が，諸磯ａ式土器への移行期として示されている。この細分

案にあてはめると，当遺跡出土の土器群は，関山式土器からの移行期の要素が窺えるため黒浜式期の第Ⅰ段階に比定されるものと思われる。又類似の土器群を構成する遺跡として，茨城県那珂湊市富士ノ上遺跡[2]，埼玉県蓮田市宿上貝塚[3]，千葉県流山市若葉台遺跡[4]を挙げることができる。



第108図　第１・２号住居跡出土土器文様組成比

② 石器について

当遺跡から出土した石器・石製品は，８種類で総数58点（剝片を除く）である。第１号住居跡から23点，第２号住居跡から１点（磨石）が出土している。第１号住居跡は，出土土器の量からも判断できるように，長期間に渡って生活していたことが考えられる。石器の種類・石質については表に示したとおりではあるが，磨石９点，敲石７点などが主なもので，石鏃２点，軽石３点，石皿２点，凹石１点である。

遺構外から出土した石器・石製品は，34点である。磨石15点，石皿８点などが主なもので，石鏃３点，凹石３点，磨製石斧２点，敲石・軽石・礫石各１点である。

石器の石質をみると多種にわたっており，その中で安山岩が最も多く，次いで硬質砂岩，流紋岩の順である。また石器の用途に応じて適切な石質を選択していることがわかる。石鏃には，チャートや黒曜石のように硬く緻密な石質で，磨石・敲石には石質が緻密でない砂岩等が，用途に応じて利用されている。

また，岩石の産地については，東方を流れる鬼怒川水系が供給地であったと思われる。しかし，黒曜石については，近辺から産出されないことから，他地域から運ばれたものと考えられる。

これらの石器の用途として，狩猟用具と考えられる石鏃や，調理用具としての磨石・敲石・石皿が出土していることは，当時の生業のあり方をある程度反映しているのではないかと思われる。

遺構内出土石器と石質

種類＼個数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	(個) 10
磨石	安山岩				硬質砂岩	流紋岩	花崗岩	緑泥片岩		
敲石	安山岩			流紋岩		砂岩				
軽石	軽石									
石皿	安山岩									
石鏃	チャート	黒曜石								
凹石	安山岩									

遺構外出土石器と石質

種類＼個数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	(個) 15
磨石	安山岩								硬質砂岩			流紋岩		花崗岩	
石皿	安山岩					流紋岩	花崗岩								
石鏃	チャート														
凹石	安山岩	硬質砂岩													
磨製石斧	流紋石	緑泥片岩													
敲石	安山岩														
軽石	軽石														
礫石	硬質砂岩														

(2) 遺構について

竪穴住居跡（楕円形プランについて）

当遺跡からは，縄文時代前期中葉の黒浜式期に比定できる住居跡が2軒検出され，いずれも，平面形が長楕円形及び楕円形を呈していることが特徴である。宮本長二郎氏[5]は，当該期の住居跡について「平面形は円形・不整形が少なく，方形が主流となり，関山期からの系統で台形も残存する。」と述べている。又，当該期を含めて縄文時代前期の住居跡について，詳細な分析を試みた笹森健一氏[6]は，主柱穴をもたずに平面形が不整円形で小形を呈するタイプ(小円形無柱穴タイプ)が少数ながら存在していることを指摘している。塚本師也氏[7]も当該期の不整形住居跡をとり上げている。このような研究の中で，筆者[8]も円形（楕円形）住居跡の存在することを問題としてとり上げた。

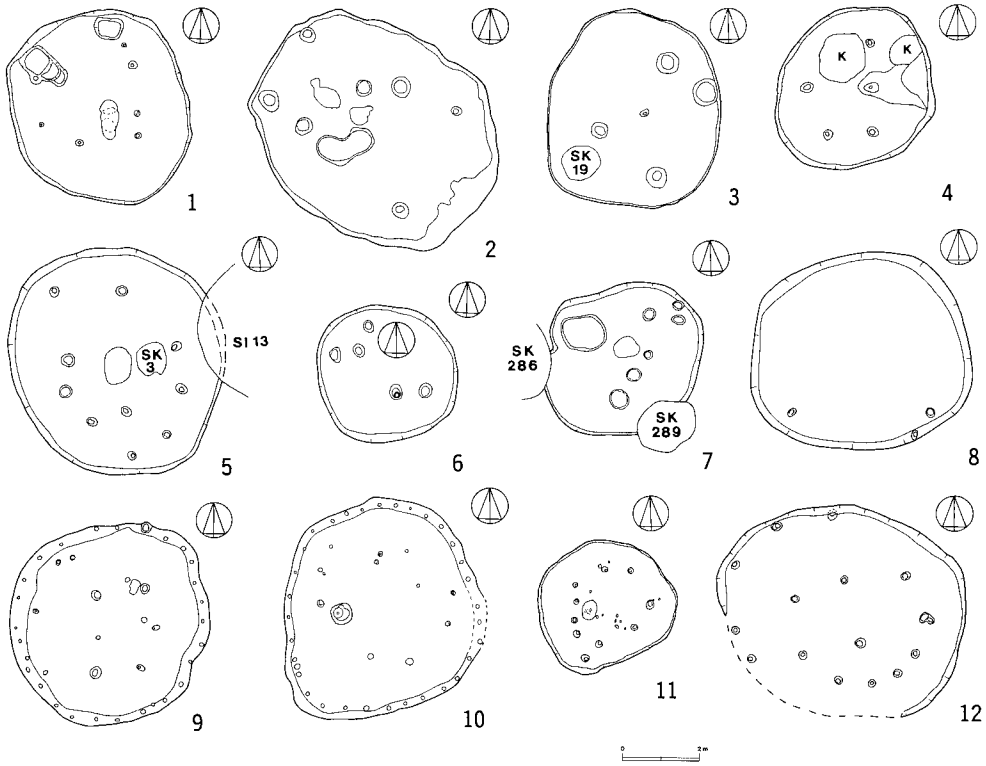
当遺跡のような楕円形プランの住居跡は，当茨城県教育財団の調査例として，茨城県水海道市[9]大生郷遺跡（桜井1981年），石岡市外山遺跡[10]（山本1982年），石岡市新池台遺跡[11]（和田1982年）つくば市大境遺跡[12]（川井1985年），つくば市境松遺跡[13]（久野1987年）等に類例がある。これらの住居跡の主柱穴は3本，4本，6本，8本で配置は，規則性があるものと，ないものがある。又，地床炉をもつ住居跡と，もたない住居跡がある。当遺跡の住居跡は，笹森氏の小円形無柱穴タイプに対比される一群と考えられるが，主柱穴をもつことや，平面形がやや大きいという点で笹森氏の定義の範疇からはずれ，問題が残る。

その他本県では，黒浜式期より古い関山式期の住居跡2軒が守谷町に所在する郷州原遺跡[14]から報告されている。住居跡の2軒とも平面形は楕円形である。茨城県の関山II式期から黒浜式期の円形系統住居跡を時期ごとに表にしてみると次のようになる。なお時間軸として新井和之氏の黒浜式土器の5段階細分を基にした。

表15　円形系統住居跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	遺構名	平面形	規模 長径×短径(m)	ピット(主柱穴)	炉	時期	備考
1	郷州原	茨城県 北相馬郡守谷町	SI23	不整楕円形	5.10×4.44	7（4）	中央 中央やや北 中央やや南	関山II	
2	上片田C	茨城県 猿島郡三和町	SI1	楕円形	6.66×5.41	14（6）	2 北西寄り	黒浜	新井細分第I段階
3	上片田C	茨城県 猿島郡三和町	SI2	不整楕円形	5.16×4.47	4（3）	——	黒浜	〃
4	大境	茨城県 つくば市豊里	SI2	楕円形	4.70×4.00	4（4）	——	黒浜	新井細分第II段階
5	境松	茨城県 つくば市谷田部	SI3	ほぼ円形	6.80×6.00	10（8）	中央	黒浜	〃
6	境松	茨城県 つくば市谷田部	SI49	円形	3.80×3.60	5（4）	——	黒浜	〃
7	境松	茨城県 つくば市谷田部	SI76	不整円形	4.60×4.20	6（3）	やや北側	黒浜	〃
8	大生郷	茨城県 水海道市	SI1	楕円形	5.60×5.10	3	——	黒浜	新井細分第III段階
9	大生郷	茨城県 水海道市	SI5	楕円形	6.30×5.60	5（3）	北側	黒浜	新井細分第III～IV段階
10	大生郷	茨城県 水海道市	SI6	不整楕円形	5.80×5.30	13	——	黒浜	〃
11	外山	茨城県 石岡市	SI27	楕円形	3.60×3.20	10(不明)	西側	黒浜	新井細分第IV段階？
12	新池台	茨城県 石岡市	SI10	楕円形	6.52×5.48	15	——	黒浜	新井細分第IV～V段階

茨城県では，黒浜式期第I・II段階に楕円形住居跡が数多く存在し，III段階を境にしてIV・V段階になると減少している。少なくとも，楕円形住居跡は，関山II式期から黒浜式期までは継続して存在しているものと考えられ，諸磯・浮島式期の住居跡の平面形への系統を追えるのではないかと思われる。しかし，調査例も少なく，一部の地域での分析にすぎないことから，今後の資料の増加を待ち，改めて検討して行く必要がある。



第109図　楕円形系統住居跡一覧

引用・参考文献

(1)　新井　和　之「黒浜式土器」縄文文化の研究　1982

(2)　那珂川の先史遺跡刊行会「那珂川の先史遺跡第１集」　1972

(3)　埼玉県教育委員会「宿上貝塚・御林遺跡」(『埼玉県埋蔵文化財調査報告第16集』) 1987

(4)　千葉県文化財センター「常磐自動車埋蔵文化財報告書Ｖ」　1986

(5)　宮本　長二郎「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」「文化財論叢」同明社　1983

(6)　笹森　健　一「縄文時代前期の住居と集落（Ⅰ～Ⅲ)」「土曜考古」第３～５号　1981・1982

(7)　栃木県教育委員会「稲荷塚・大野原」(『栃木県埋蔵文化財調査報告第84集』) 1987

(8)　茨城県教育財団「黒浜式期における壁柱穴を有する住居跡についての一考察」年報8 1988

(9)　茨城県教育財団「大生郷遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅻ』)　1981

(10)　茨城県教育財団「外山遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告XIII』)　1982

(11)　茨城県教育財団「新池台遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告第17集』)　1983

(12)　茨城県教育財団「大境遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告第34集』)　1985

(13)　茨城県教育財団「境松遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告第41集』)　1985

(14)　守谷町教育委員会　郷州原遺跡発掘調査会「郷州原遺跡」　1981

終章　むすび

新4号国道建設に伴う，茨城県のルート内に所在する27遺跡の発掘調査は，昭和57年度から始まり昭和63年9月末日をもって終了した。今回，昭和59・60・62・63年度にかけて調査を実施した三和町に所在する二十五里寺A遺跡ほか10遺跡の報告書が刊行される運びとなった。これら調査遺跡は，遺跡の中心から離れ，必ずしも十分な遺構・遺物の調査とはならなかった。しかし，その中で上片田C遺跡は大きな調査成果を得ることができた。

上片田C遺跡の2軒の住居跡からは，縄文時代前期黒浜式土器が多量に出土し，黒浜式期の古い段階での住居跡としても貴重であり，調査例の少ないこの地域での土器型式や住居形態の変遷をたどる上で，良い資料となるものと思われる。しかし，道路敷地内という限定された範囲の調査のため，集落としてとらえるまでには至らなかった。

このほかの遺跡は，遺構・遺物が少なく十分な成果が得られなかったが，少ないながらも縄文時代から中・近世にわたるもので，当時の生活の一端をうかがえる貴重な調査例となった。しかし，まだ研究の余地も多く残っており，今後，これらの課題に，十分に検討を加えていきたいと考えている。

末筆ではあるが，本報告書をまとめるにあたって，御指導・御協力をいただいた関係各位に，心から感謝の意を表したい。

写　　真

二十五里寺A遺跡

二十五里寺B遺跡

二十五里寺C遺跡

溜原A遺跡

下片田遺跡

中新田A遺跡

中新田B遺跡

中新田C遺跡

上片田A遺跡

上片田B遺跡

上片田C遺跡

調査前全景

調査後全景

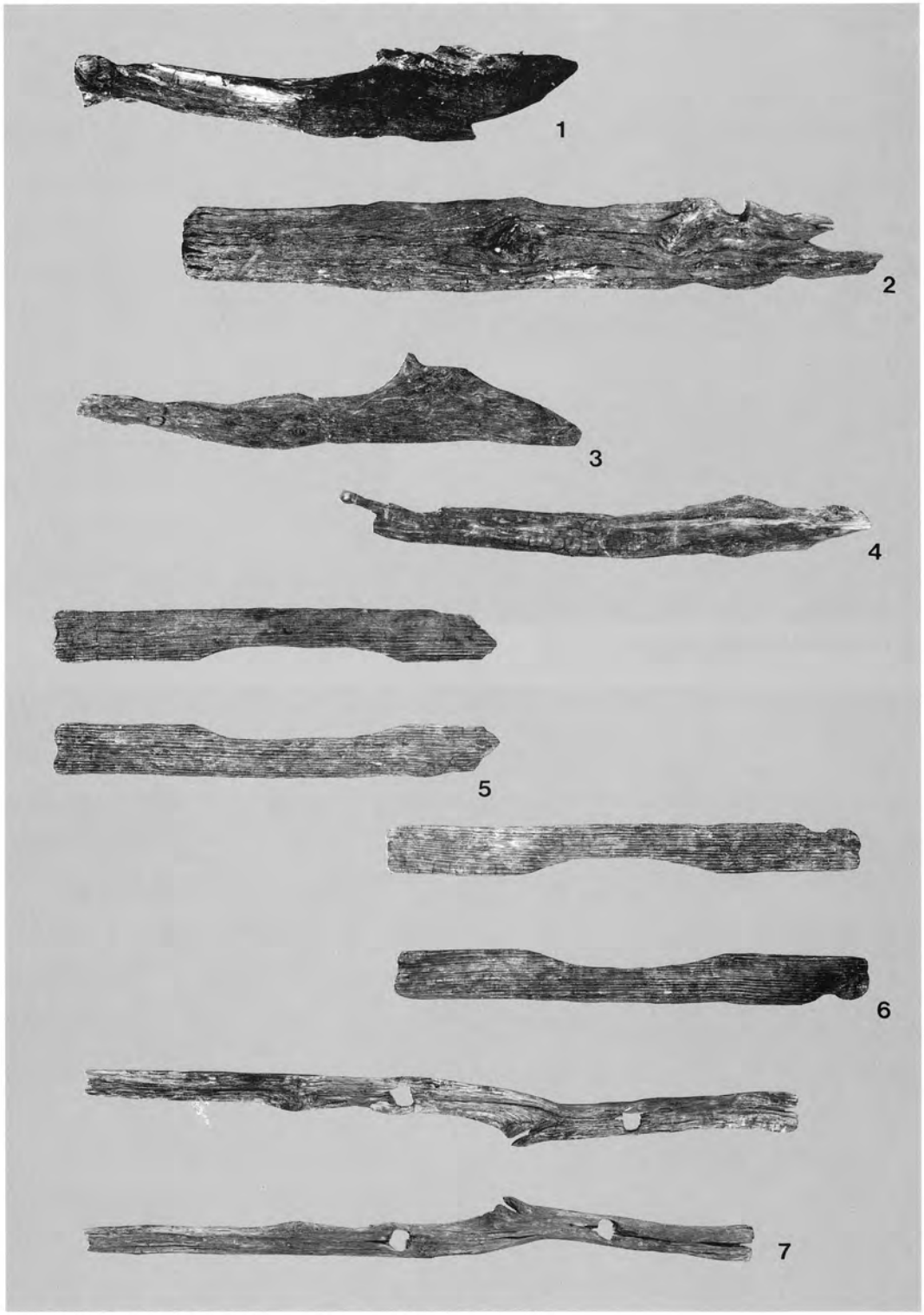
二十五里寺A遺跡

土層観察用トレンチ

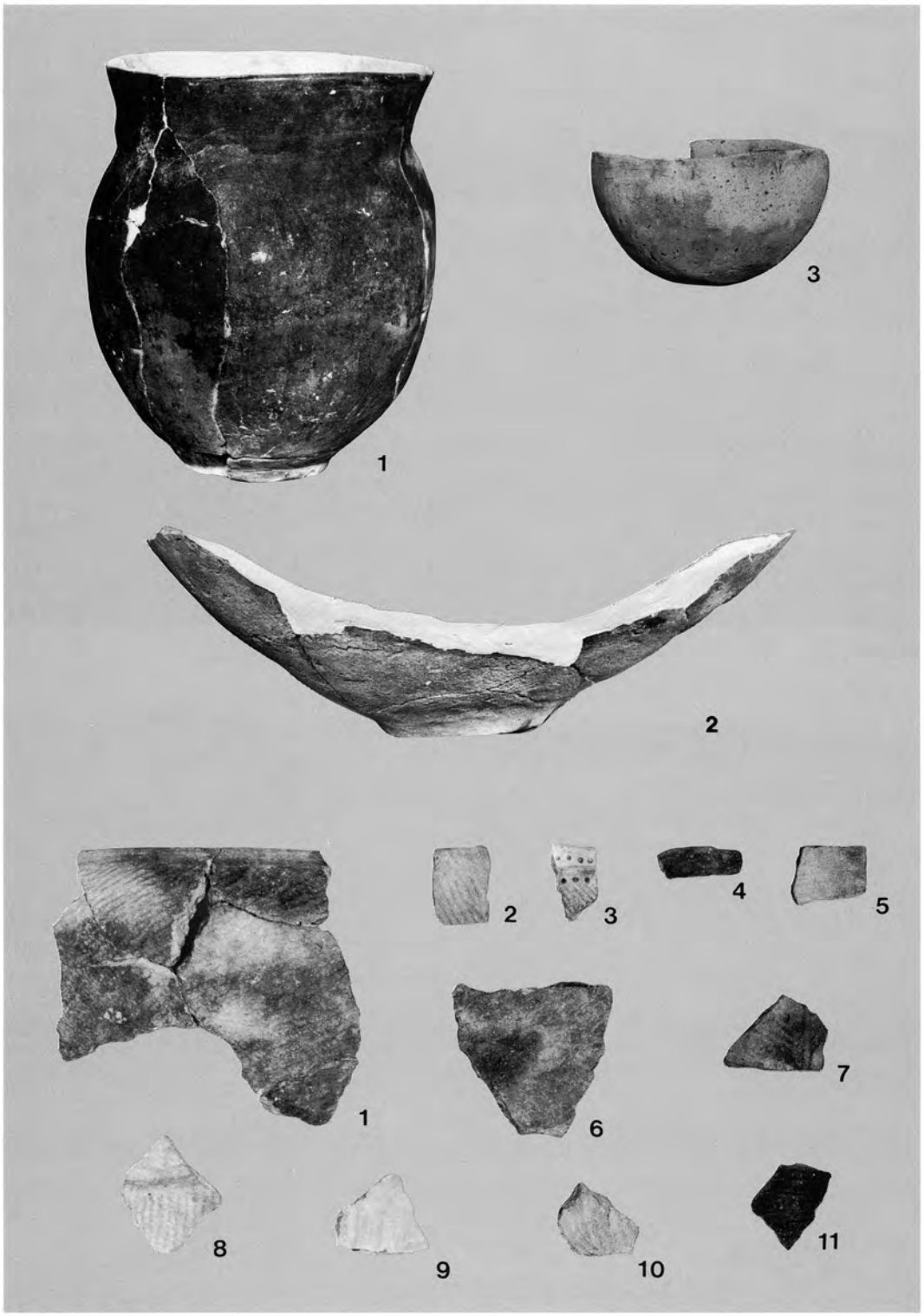
第1号溝

第1号井戸状遺構遺物出土状況

第1号井戸状遺構



第1号井戸状遺構出土木片　1～6　S＝1/6，7　S＝1/15



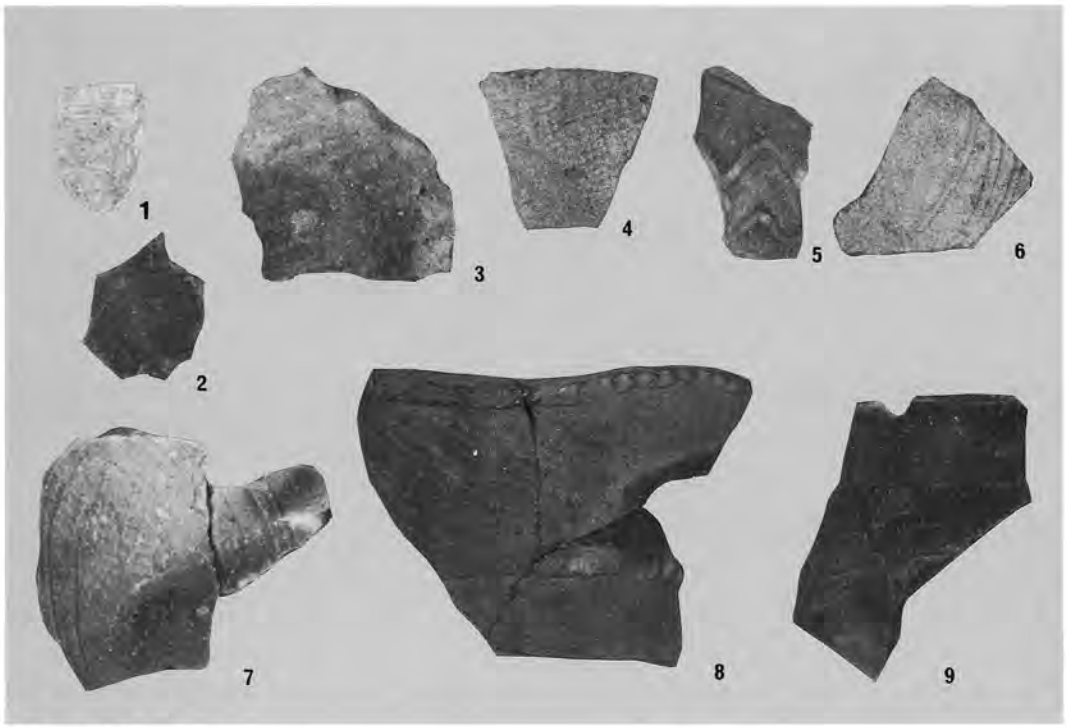
グリッド出土土器

二十五里寺B遺跡

調査前全景

調査後全景

土層観察用トレンチ



グリッド出土土器

二十五里寺C遺跡

調査前全景（山林部）

調査前全景

グリッド発掘による確認調査

山林部作業風景

二十五里寺C遺跡

調査後全景

第1号住居跡

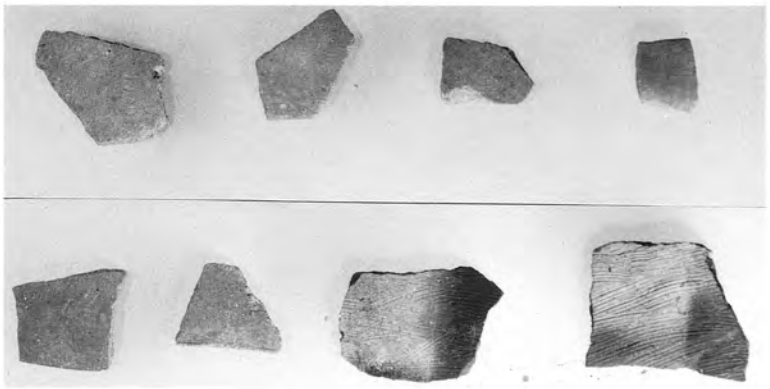
第2号住居跡

第1号溝土層セクション

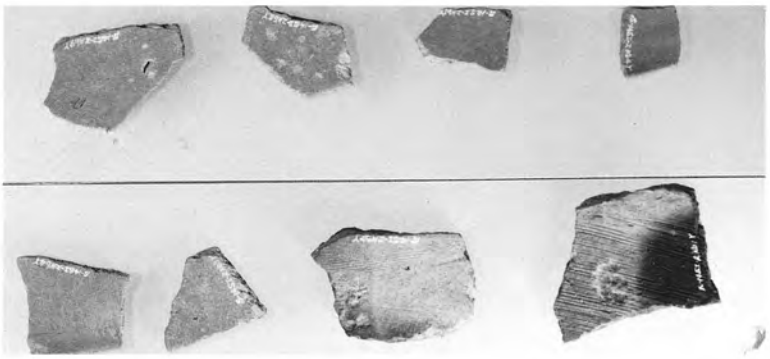
第2号溝

第3号溝土層セクション

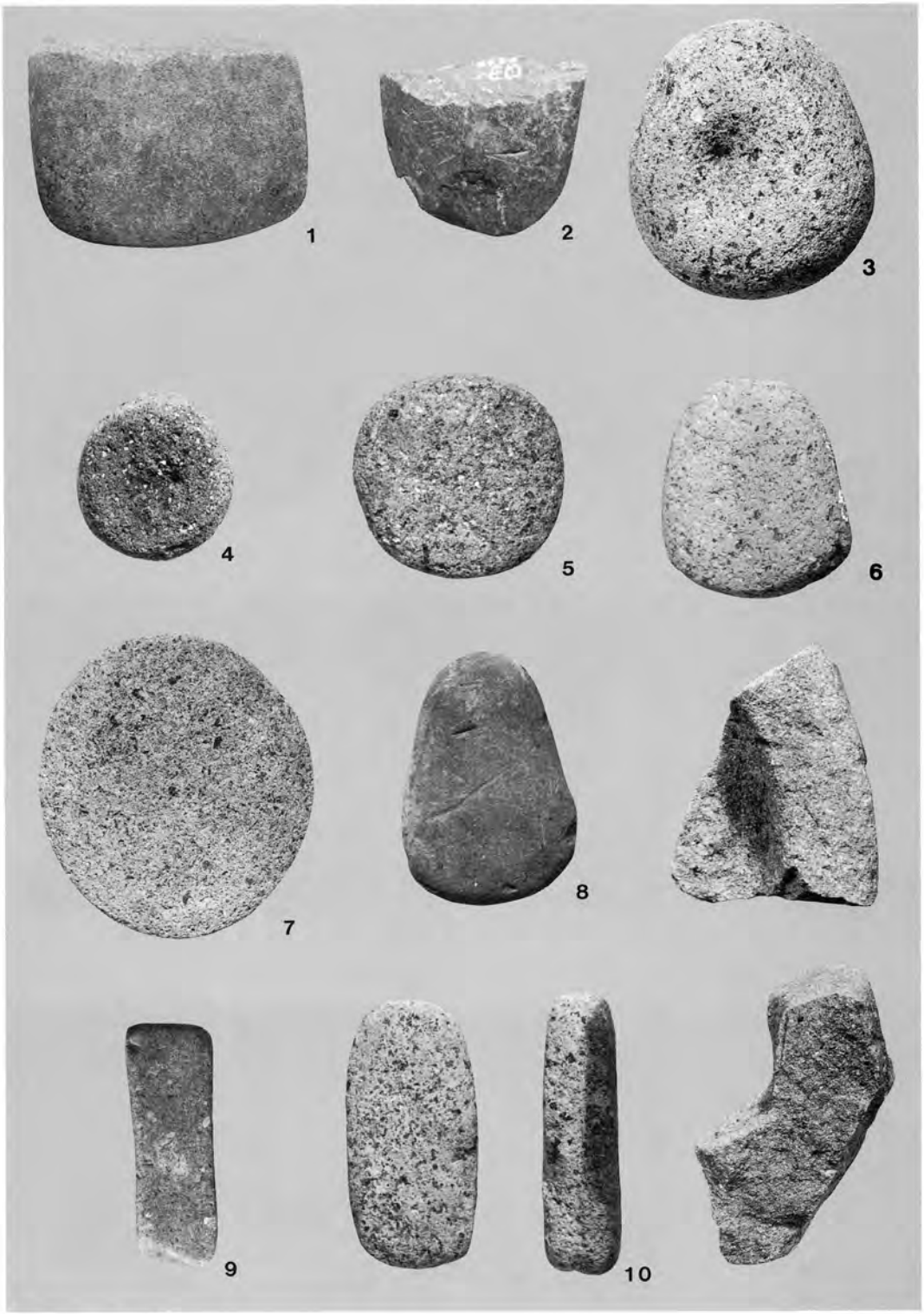
第1号住居跡
出土土器



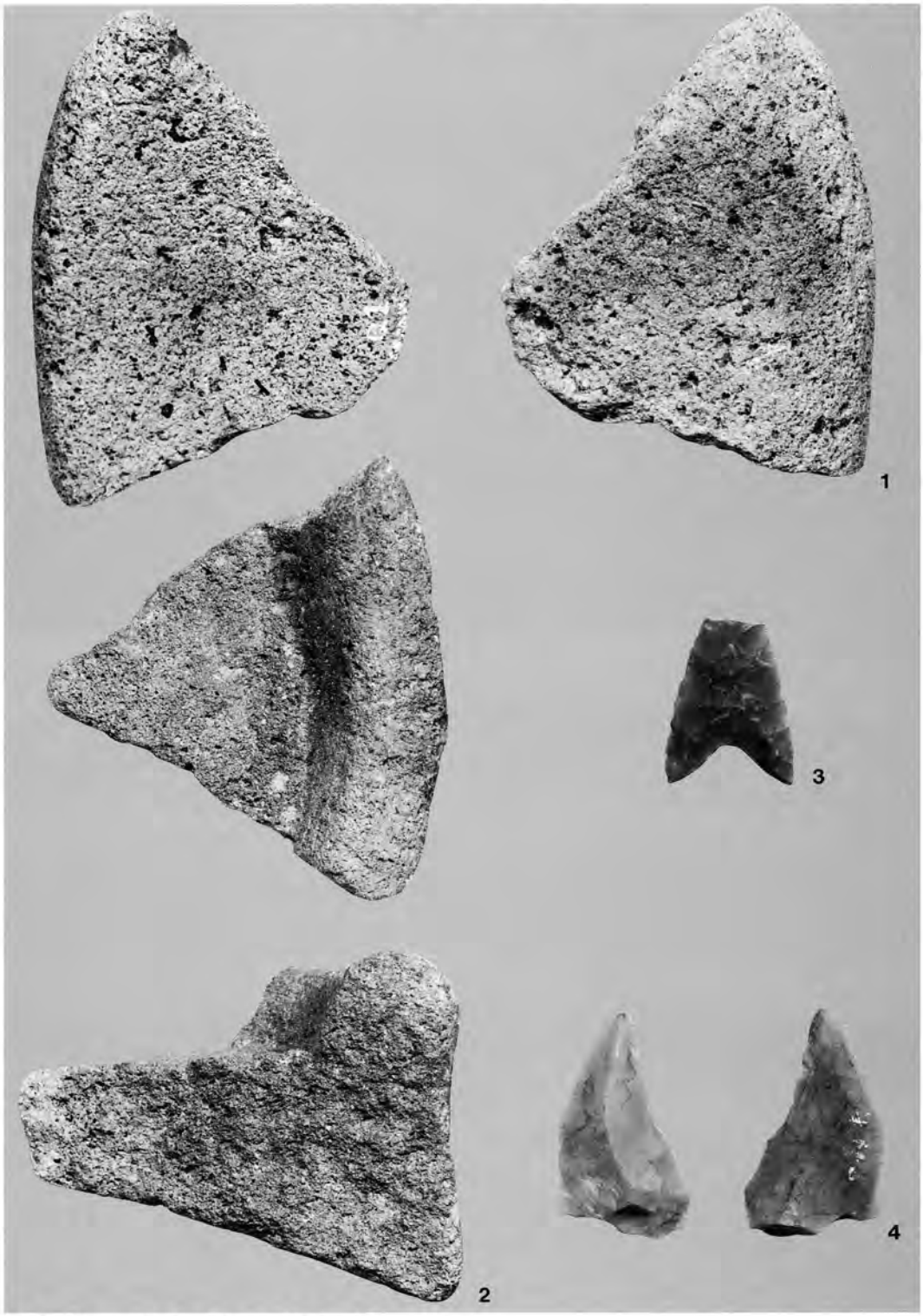
第2号住居跡
出土土器（表）



第2号住居跡
出土土器（裏）



石器 (1)　S＝1/2



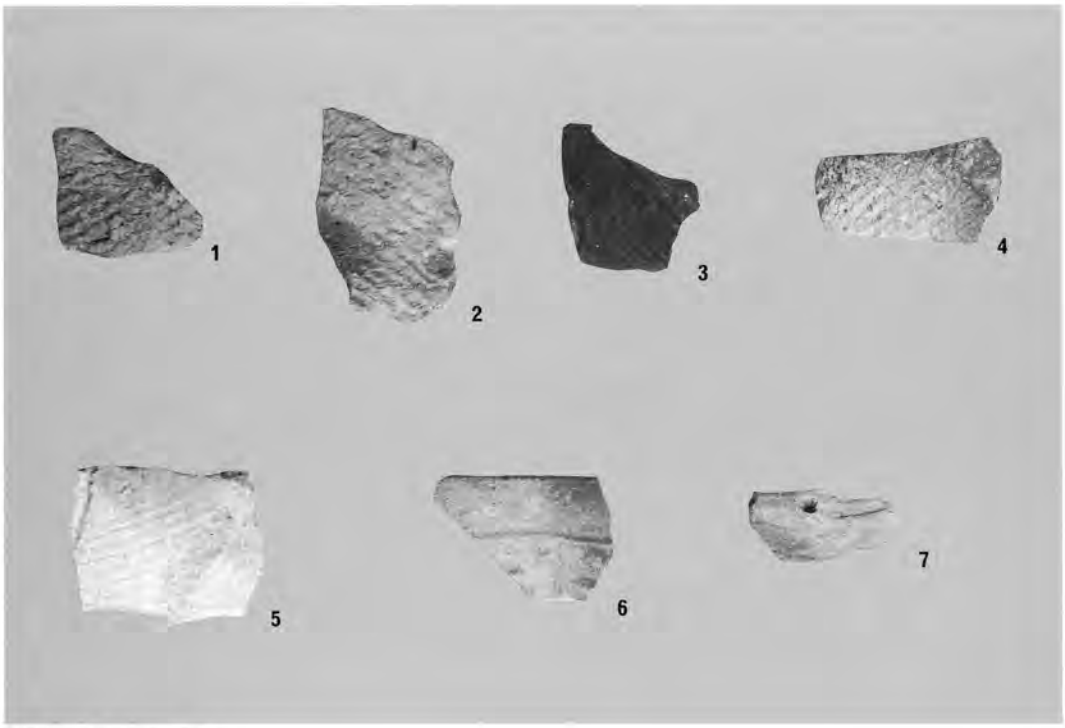
石器 (2) 1・2 S=1/2, 3・4 S=1/1

溜 原 A 遺 跡

調査前全景

調査後全景

土層観察用トレンチ



グリッド出土土器

下 片 田 遺 跡

調査前全景

グリッド試掘終了全景

第1号土坑

第2号土坑

第3号土坑

第4号土坑

第5号土坑

第6号土坑

第7号土坑

第8号土坑

第9号土坑

第10号土坑

第11号土坑

第12号土坑

第13号土坑

第14号土坑

第15号土坑

第16号土坑

第17号土坑

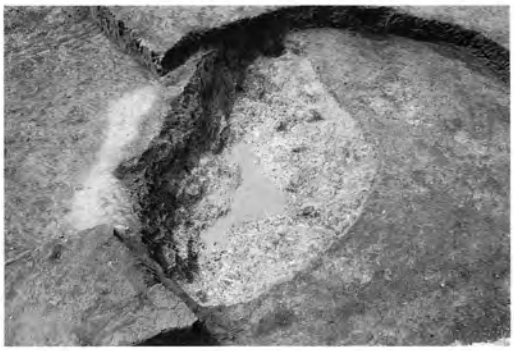
第18号土坑

第19号土坑

第20号土坑

第21号土坑遺物出土状況

第21号土坑遺物出土状況

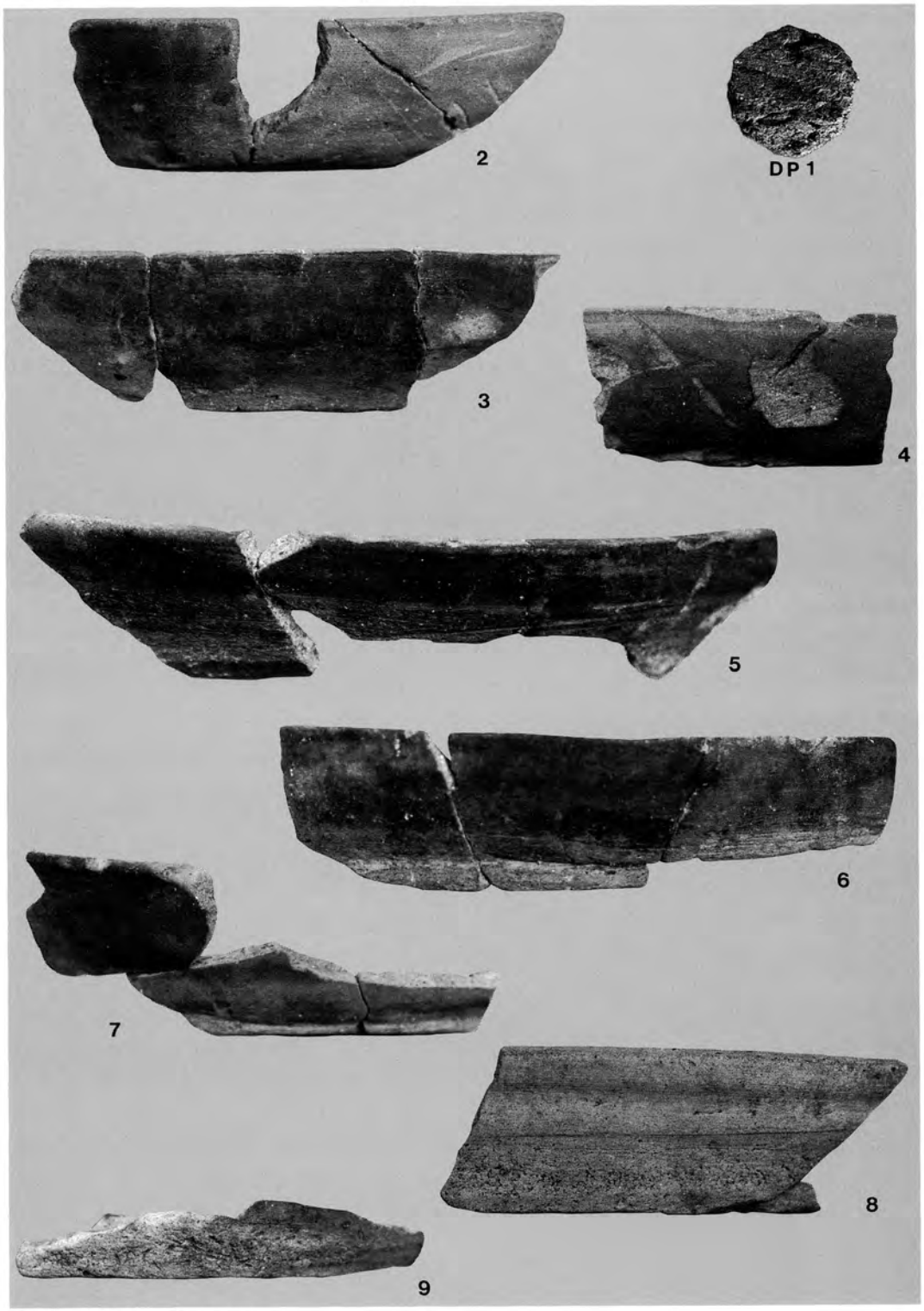


第21号土坑

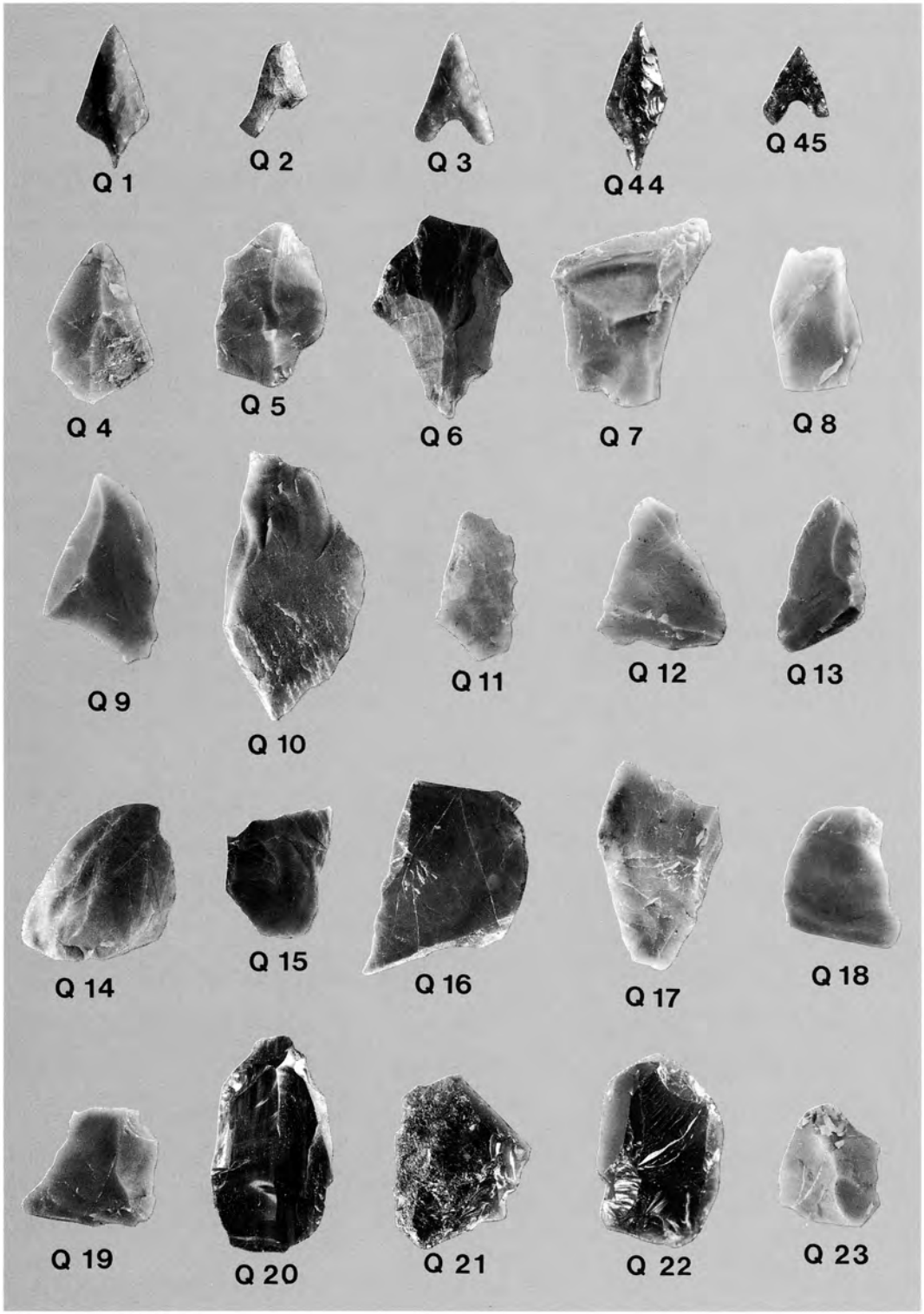
グリッド遺物出土状況

作業風景

作業風景

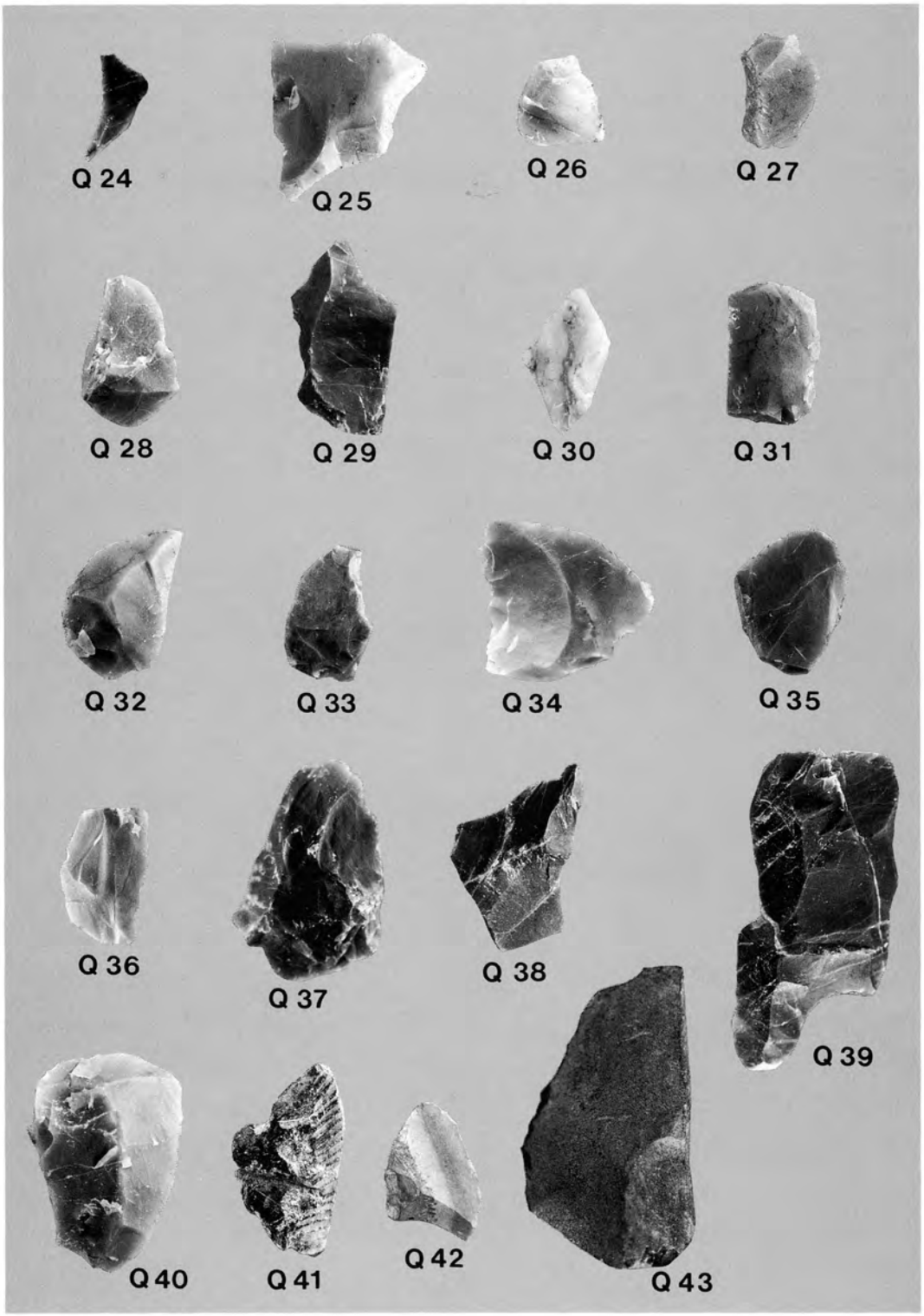


グリッド出土土器・土製品

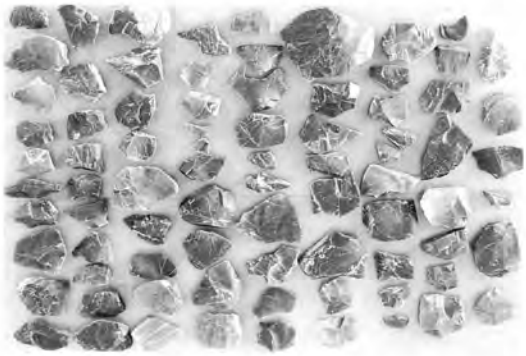

Q 1
Q 2
Q 3
Q44
Q 45
Q 4
Q 5
Q 6
Q 7
Q 8
Q 9
Q 10
Q 11
Q 12
Q 13
Q 14
Q 15
Q 16
Q 17
Q 18
Q 19
Q 20
Q 21
Q 22
Q 23

石器 (1) S＝2/3

下 片 田 遺 跡



石器 (2) S＝2/3



出土剝片・鉄製品　S＝1/3

グリッド出土陶器　S＝1/2

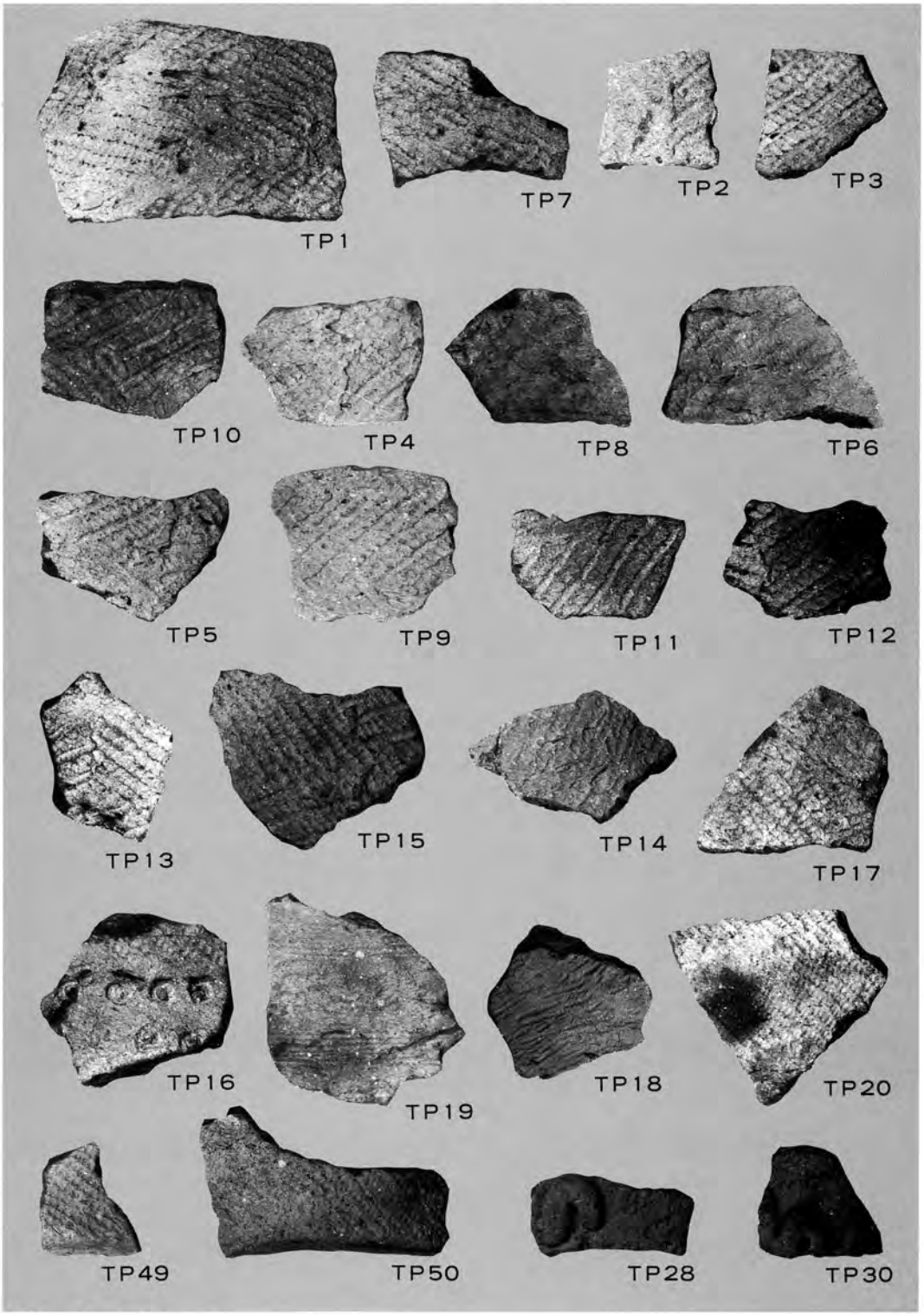
調査前全景

グリッド試掘終了全景

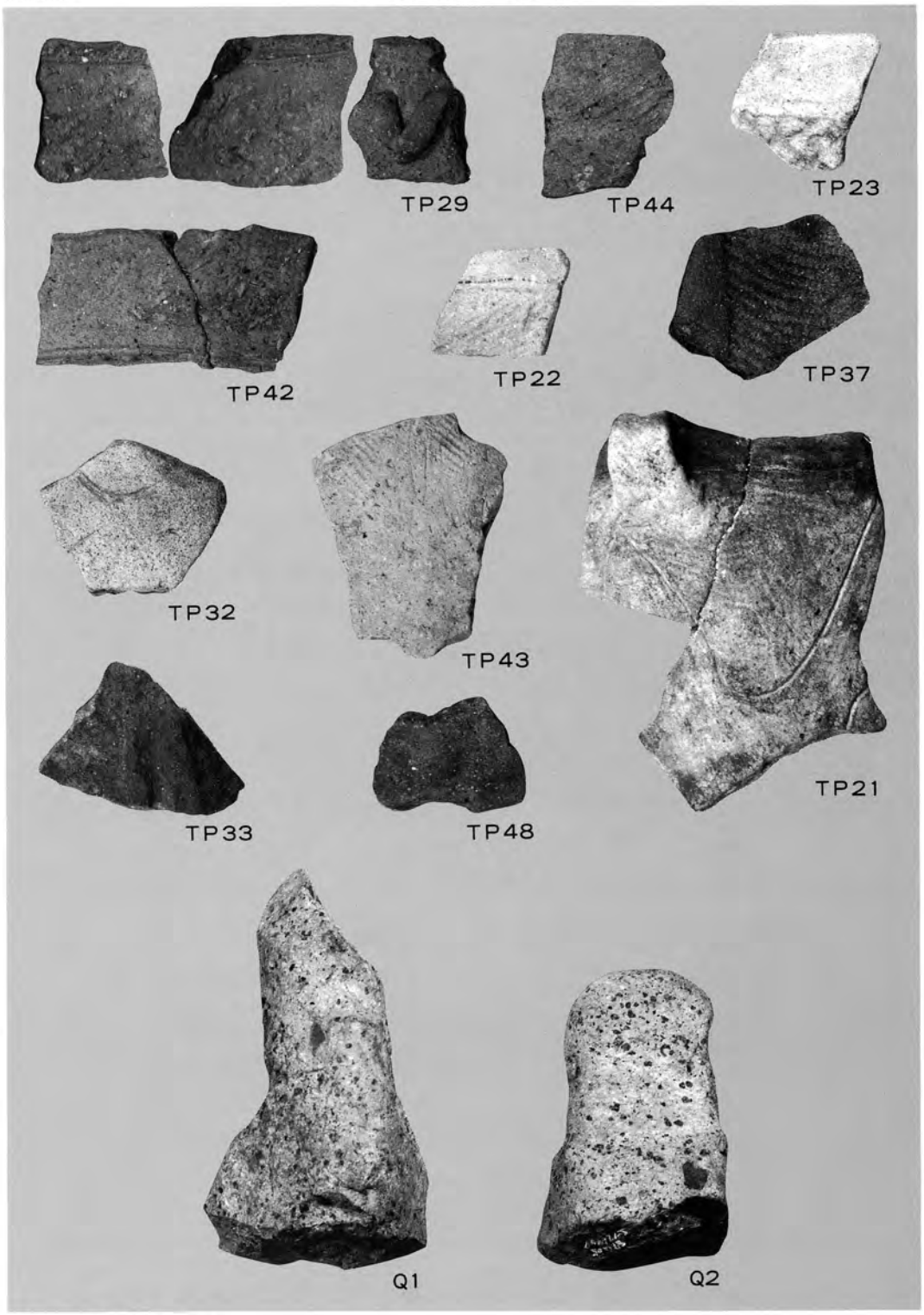
中新田A遺跡

作業風景

作業風景

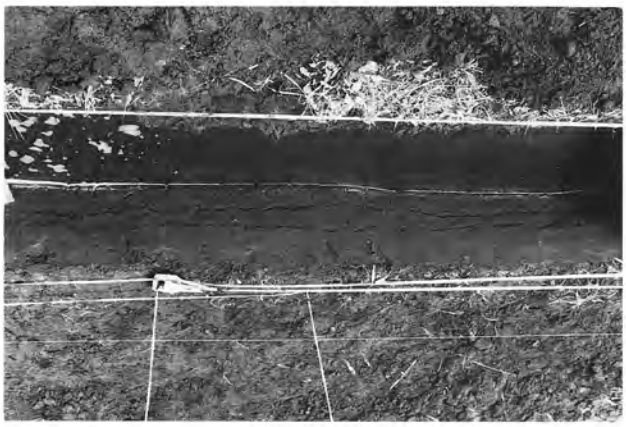

TP1
TP7
TP2
TP3
TP10
TP4
TP8
TP6
TP5
TP9
TP11
TP12
TP13
TP15
TP14
TP17
TP16
TP19
TP18
TP20
TP49
TP50
TP28
TP30

グリッド出土土器 (1)



グリッド出土土器　(2)

調査前全景



東西土層セクション

調査後全景

中新田C遺跡

調査前全景

グリッド試掘終了全景

第1号溝

第2号溝

上片田A遺跡

調査前全景

東西土層セクション

調査後全景

調査前全景

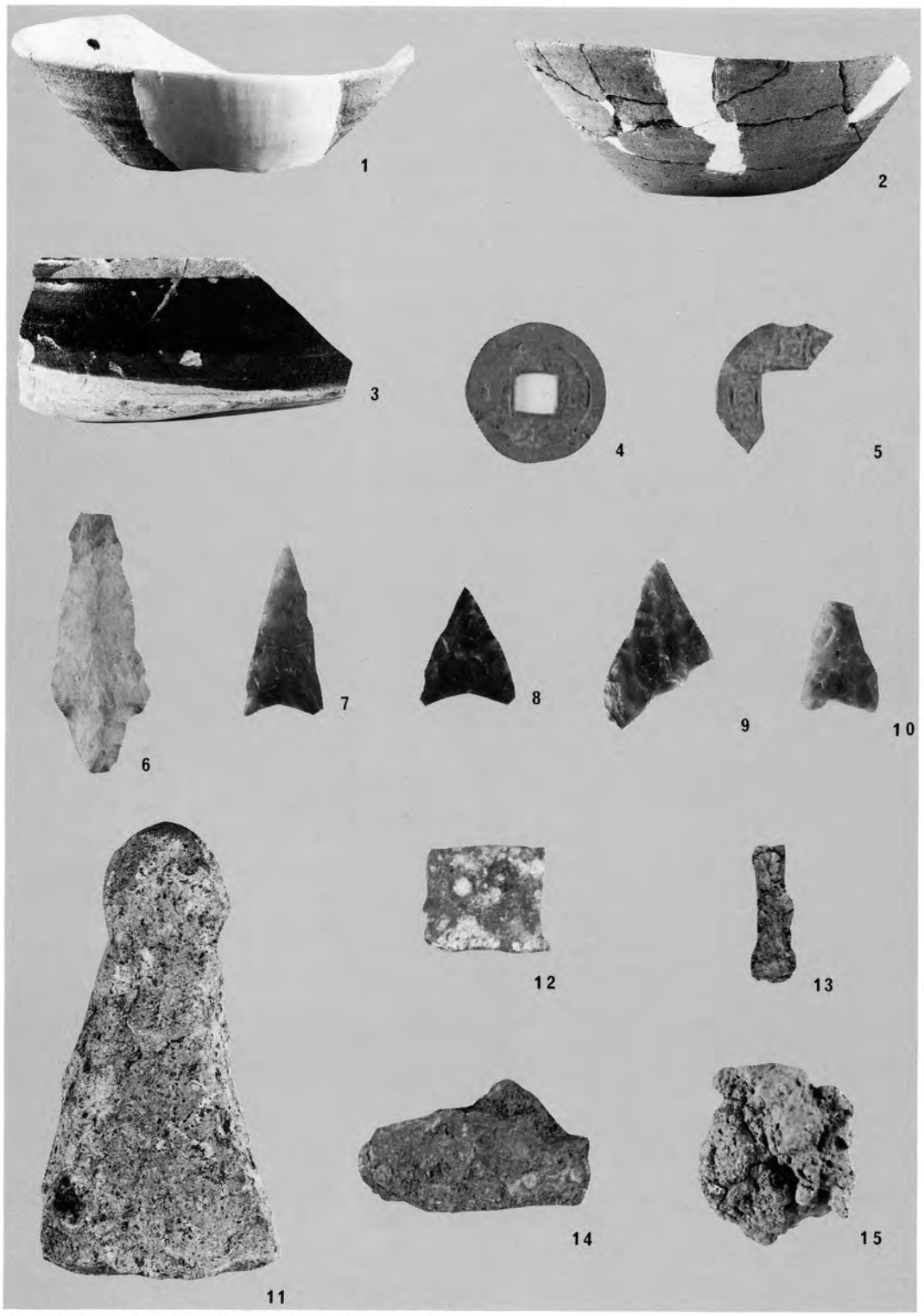
グリッド試掘終了全景

上片田B遺跡

遺構確認状況

第1号土坑

第1号溝



出土土器・石器・鉄製品　4～10＝1/1　S＝1/2

上 片 田 C 遺 跡

上片田C遺跡全景（航空写真）

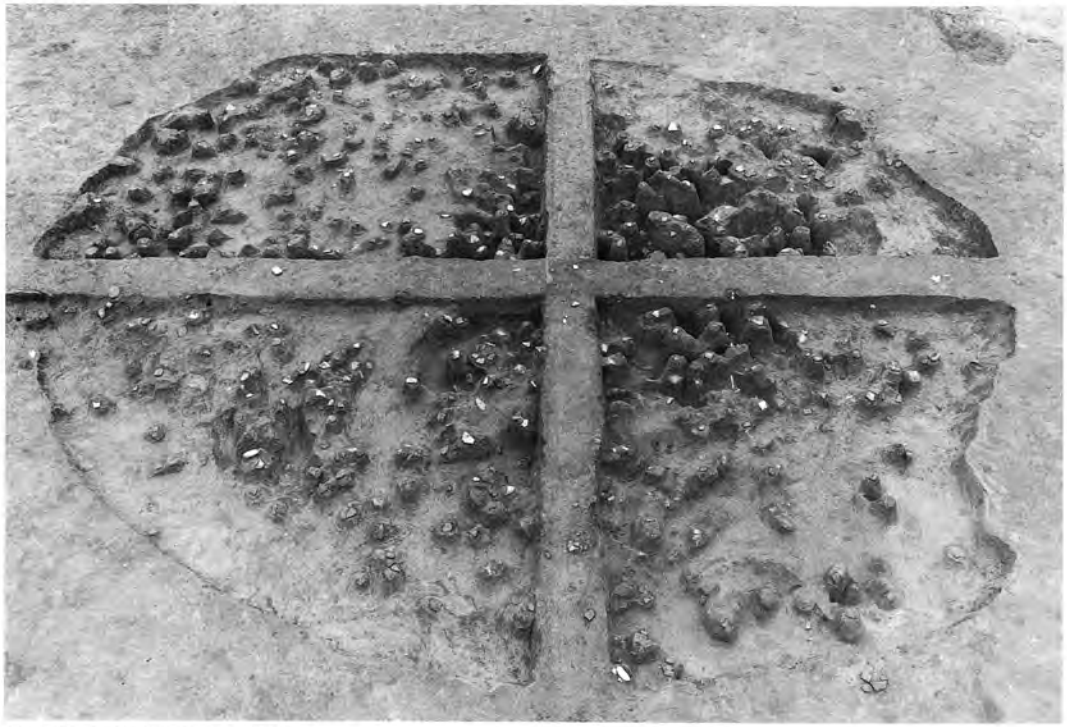
調査前全景

グリッド試掘終了全景

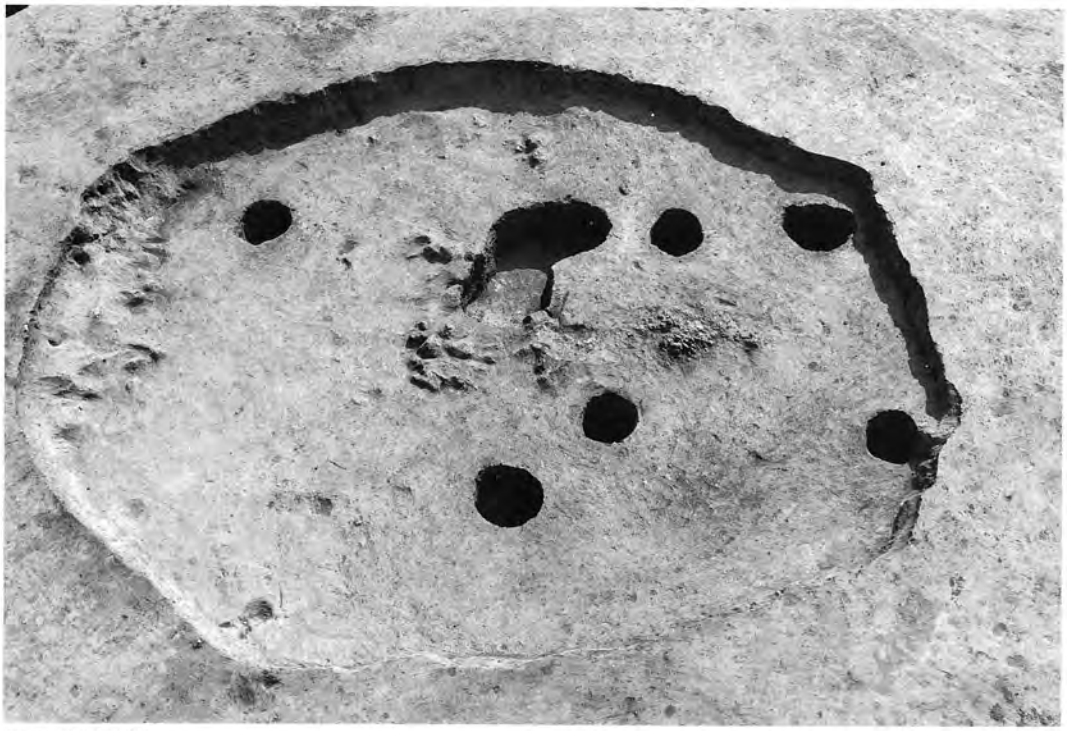
上片田C遺跡

作業風景

遺構確認状況



第１号住居跡遺物出土状況



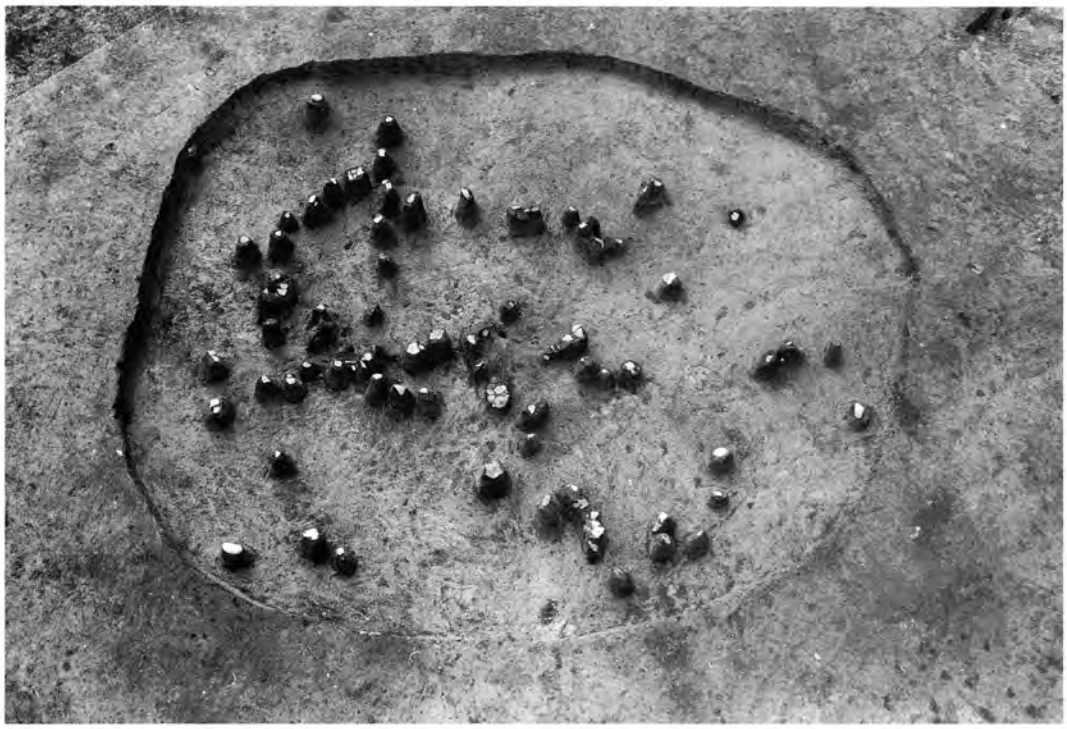
第１号住居跡

上片田C遺跡

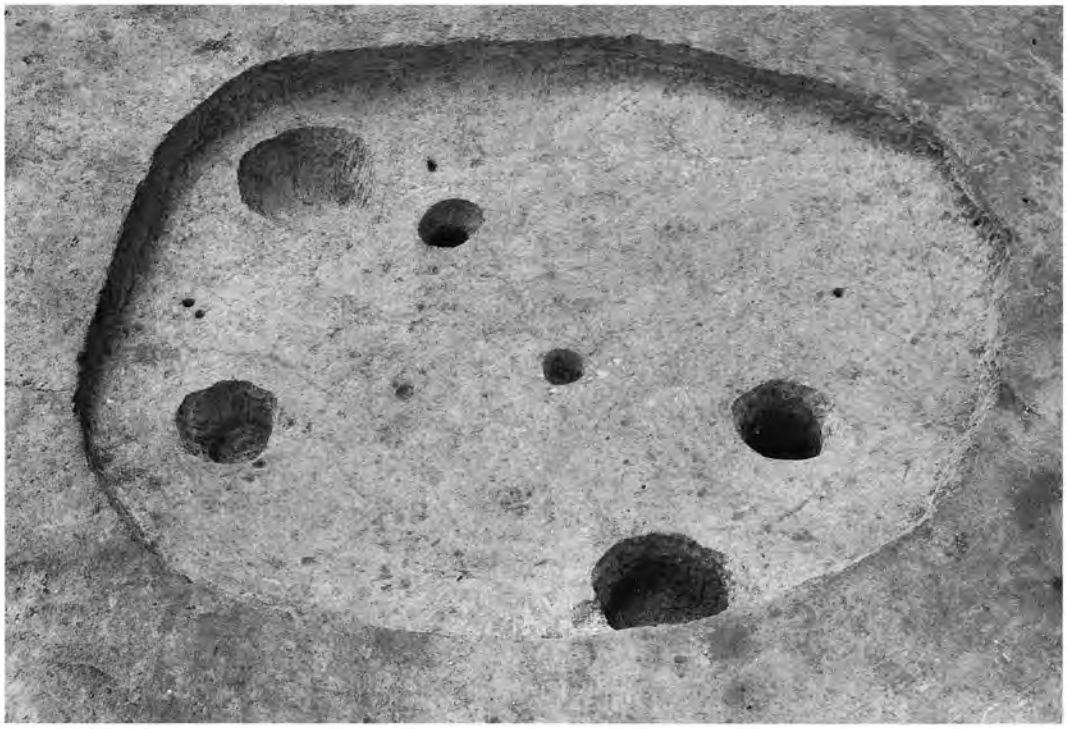
作業風景

第1号住居跡
遺物出土状況

現地説明会



第 2 号住居跡遺物出土状況



第 2 号住居跡

上 片 田 C 遺 跡

第1号土坑土層セクション

第2号土坑

第3号土坑

第4号土坑

第5号土坑

第6号土坑

第7号土坑

第8号土坑

第9号土坑

第10号土坑

第11号土坑

第12号土坑

第13号土坑

第14号土坑

第15号土坑

第16号土坑

第17号土坑

第18号土坑

第1号溝

第2号溝

第1号・2号・3号溝

第4号溝

第5号溝

第6号溝

第７号溝

第８号溝

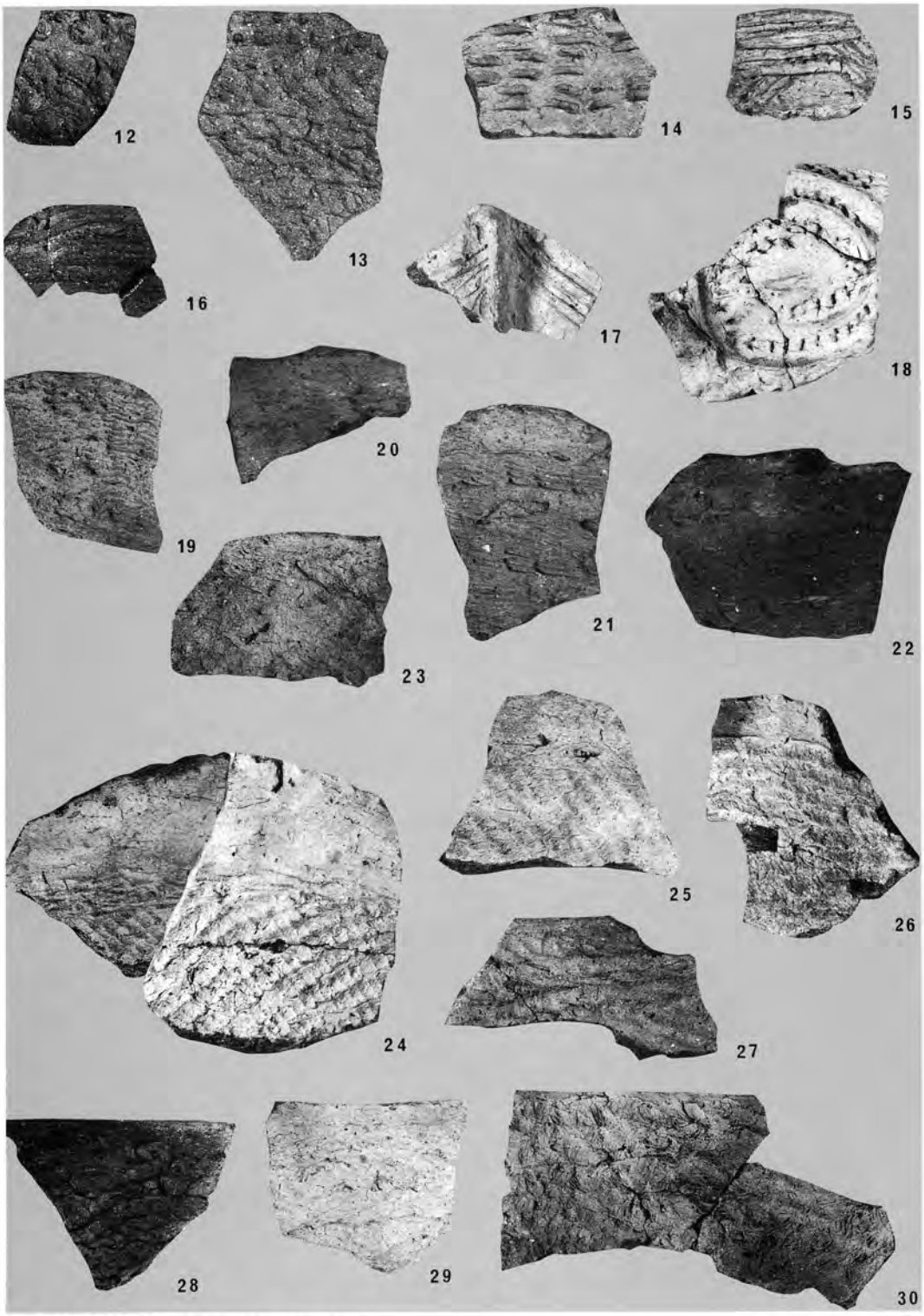
第９号溝

第10号溝

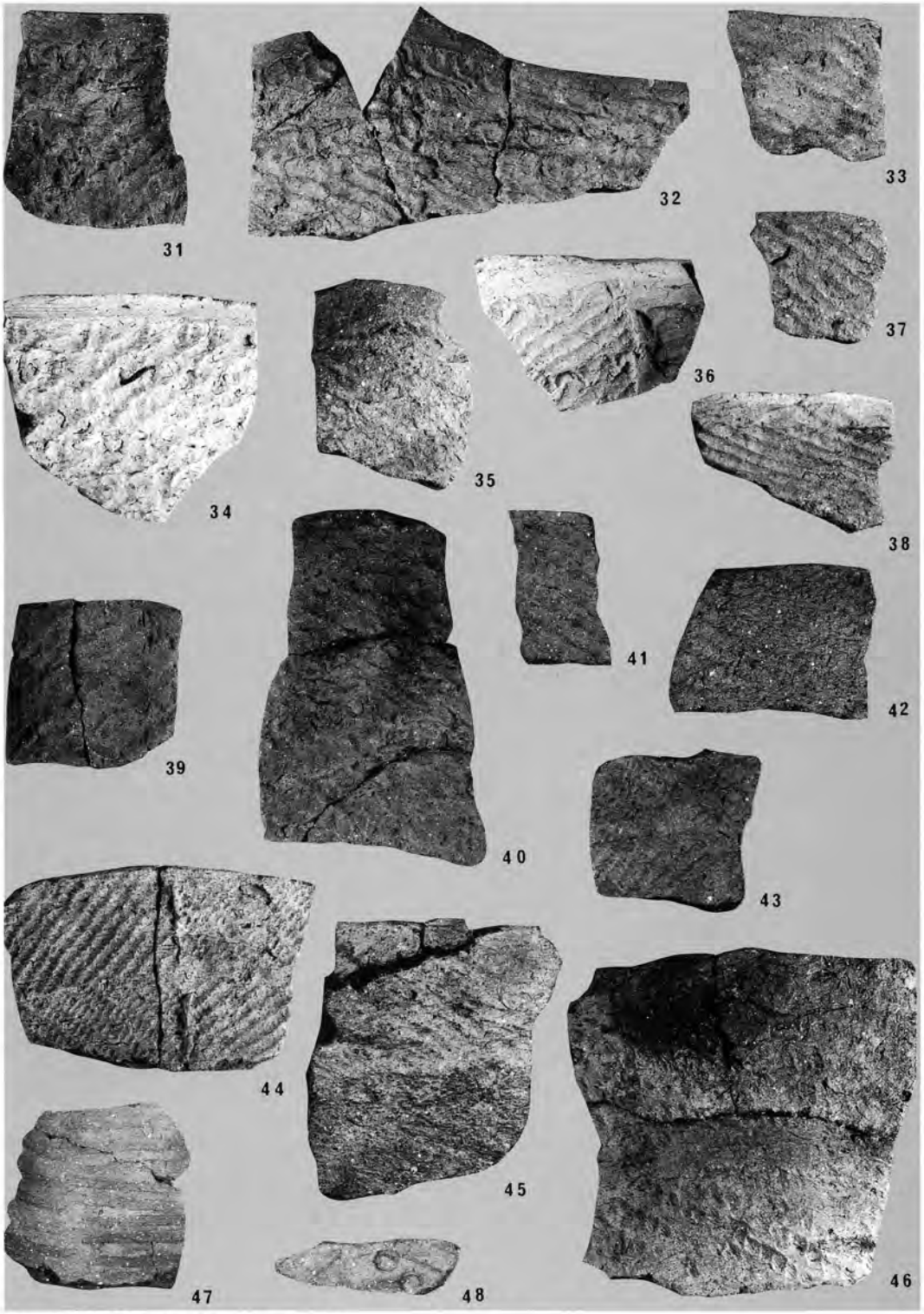
第１号井戸

遺跡全景

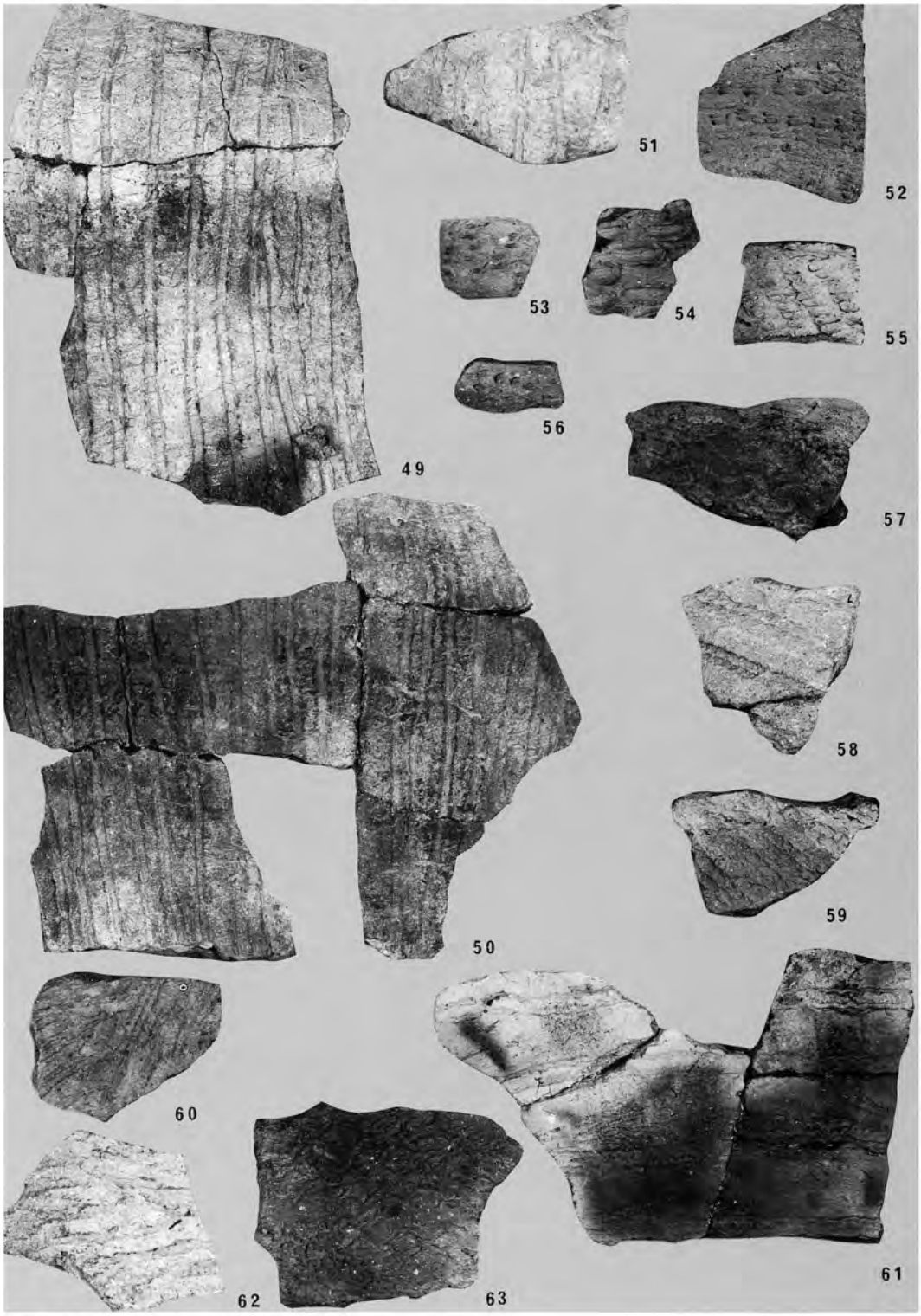
第1号・2号住居跡・井戸状遺構・グリッド出土土器　S＝1/2，1・2・8・10・11＝1/3



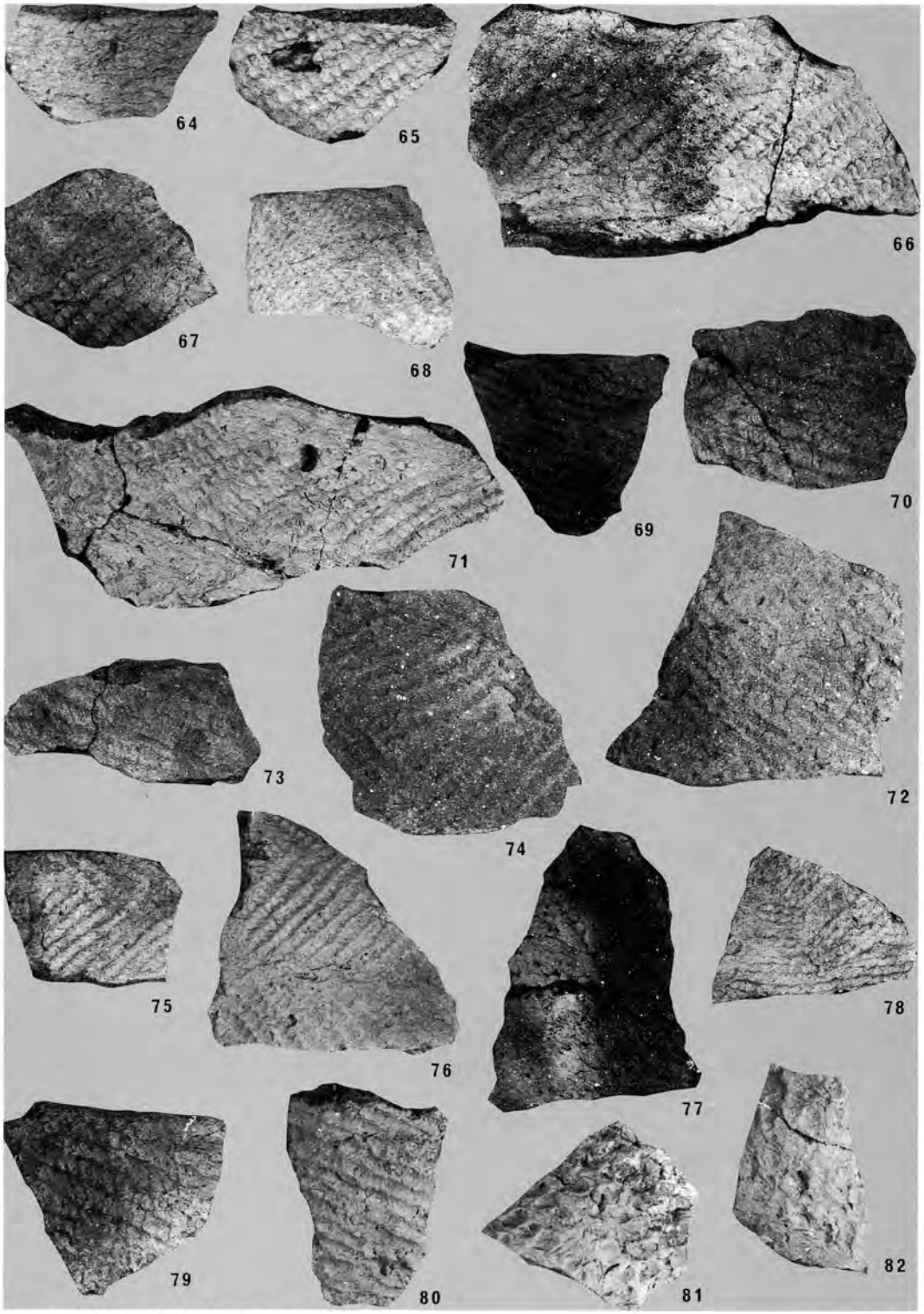
第１号住居跡出土土器　(1)　S＝1/2



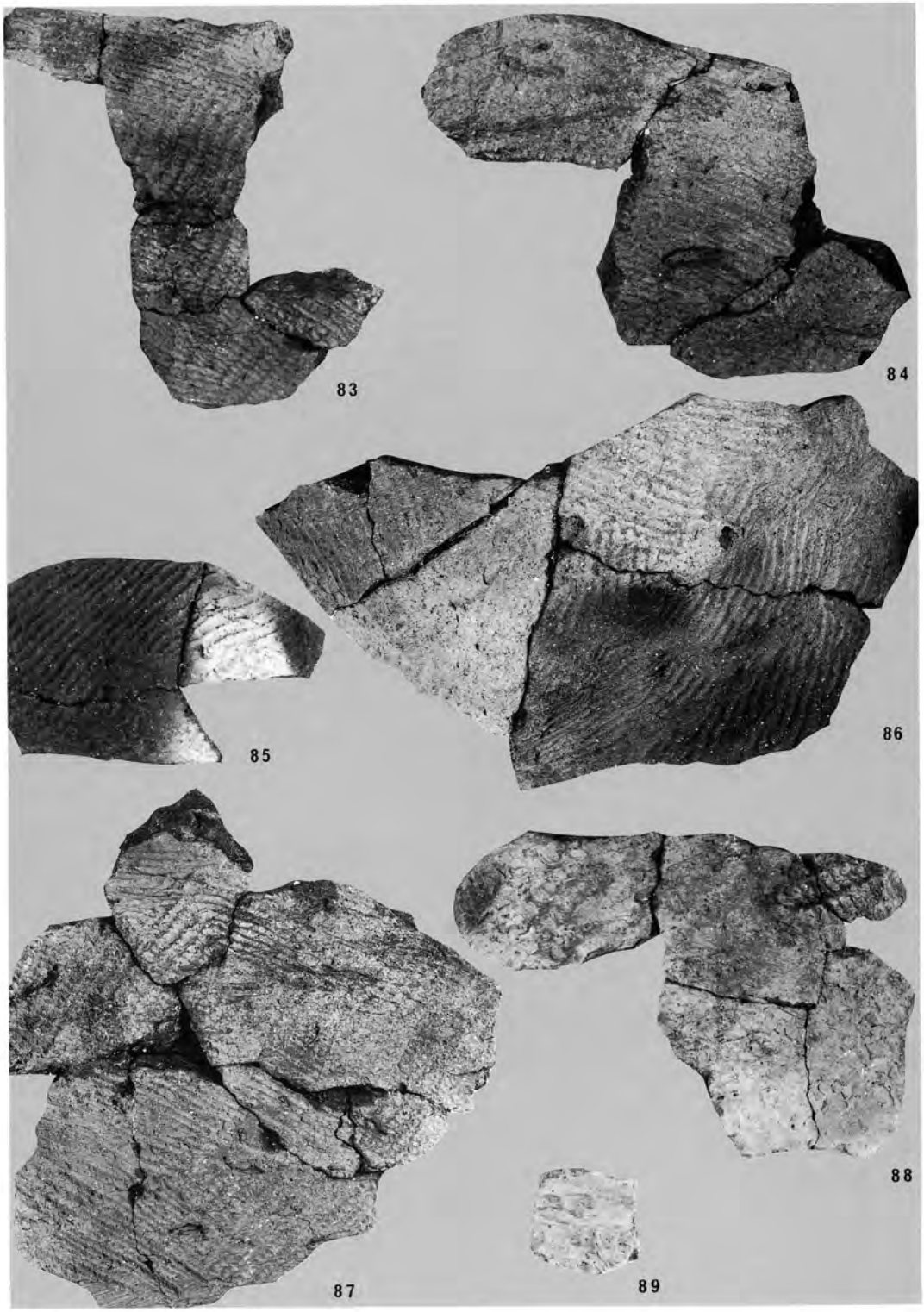
第1号住居跡出土土器　(2)　S＝1/2



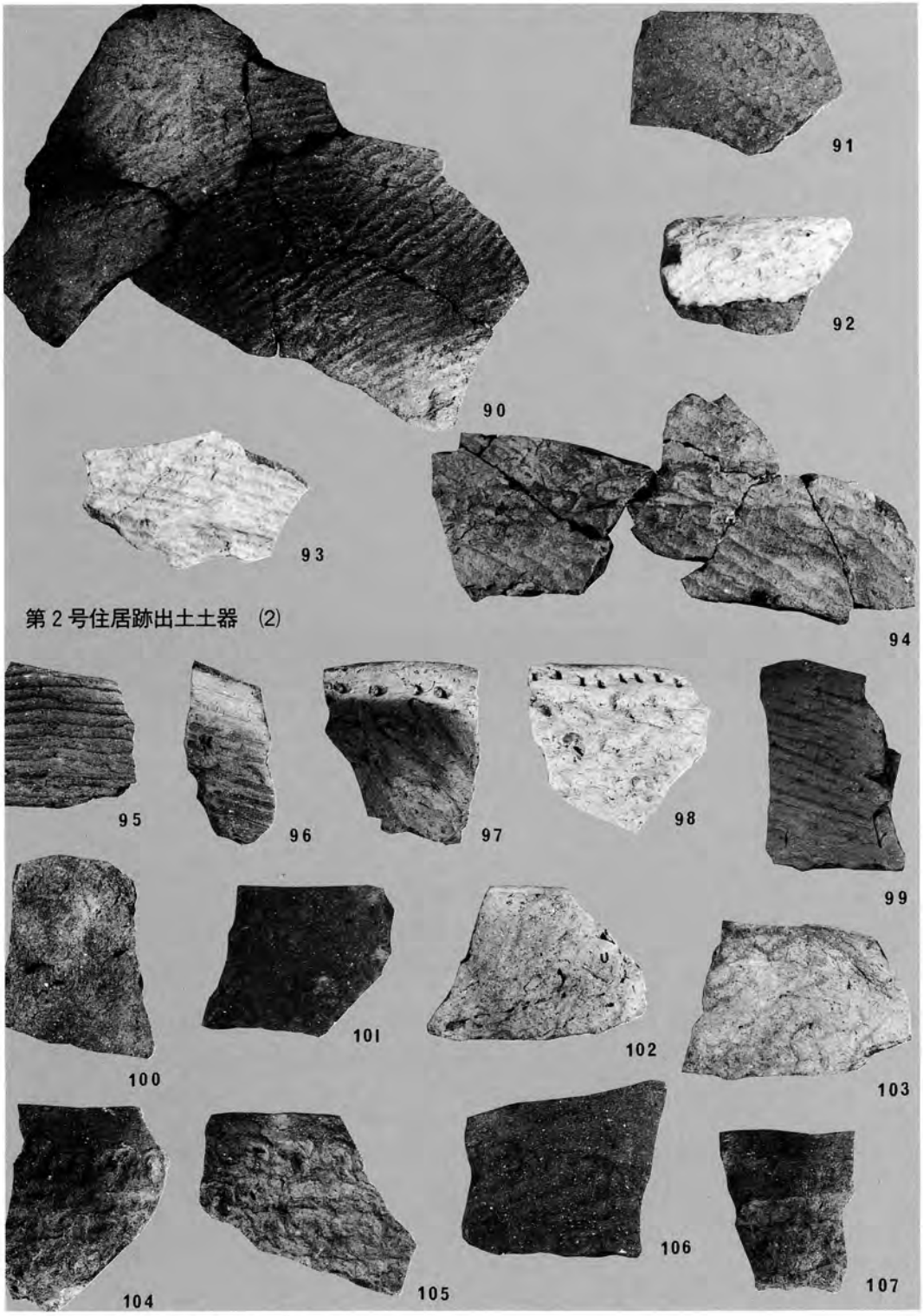
第1号住居跡出土土器 (3) S＝1/2



第１号住居跡出土土器　(4)　S＝1/2



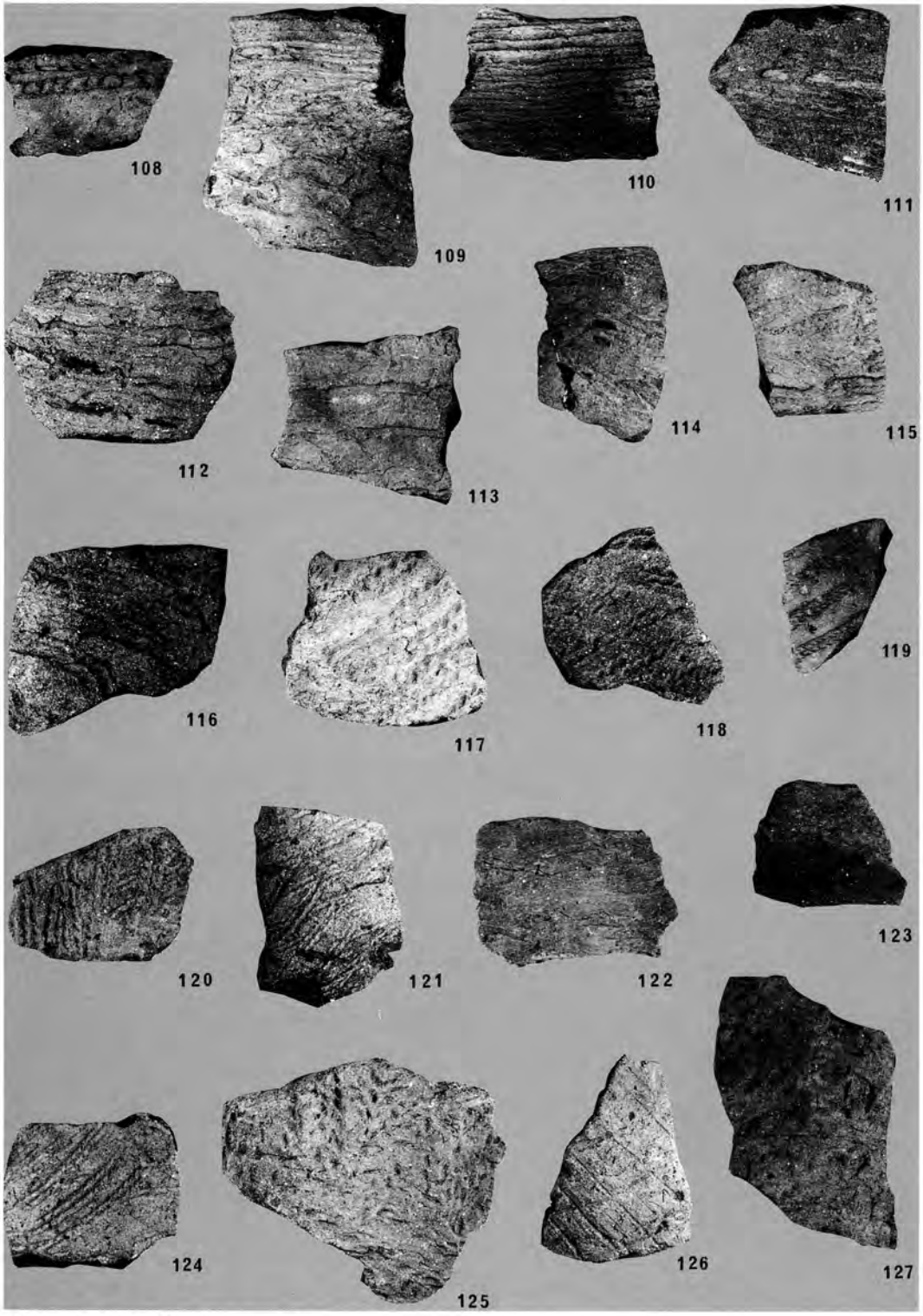
第2号住居跡出土土器 (1) S＝1/2



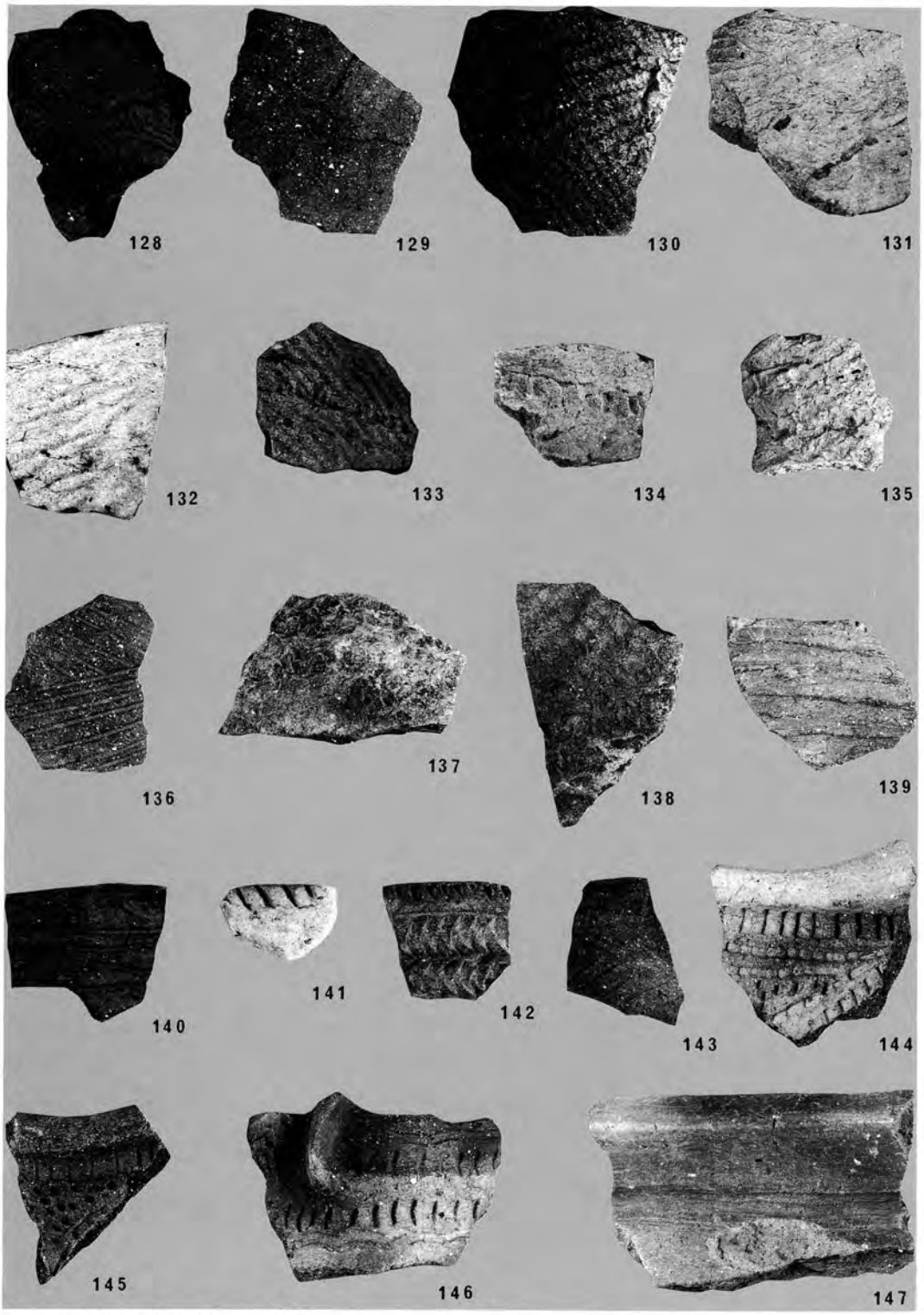
第2号住居跡出土土器 (2)

グリッド出土土器 (1)　S＝1/2

上片田C遺跡

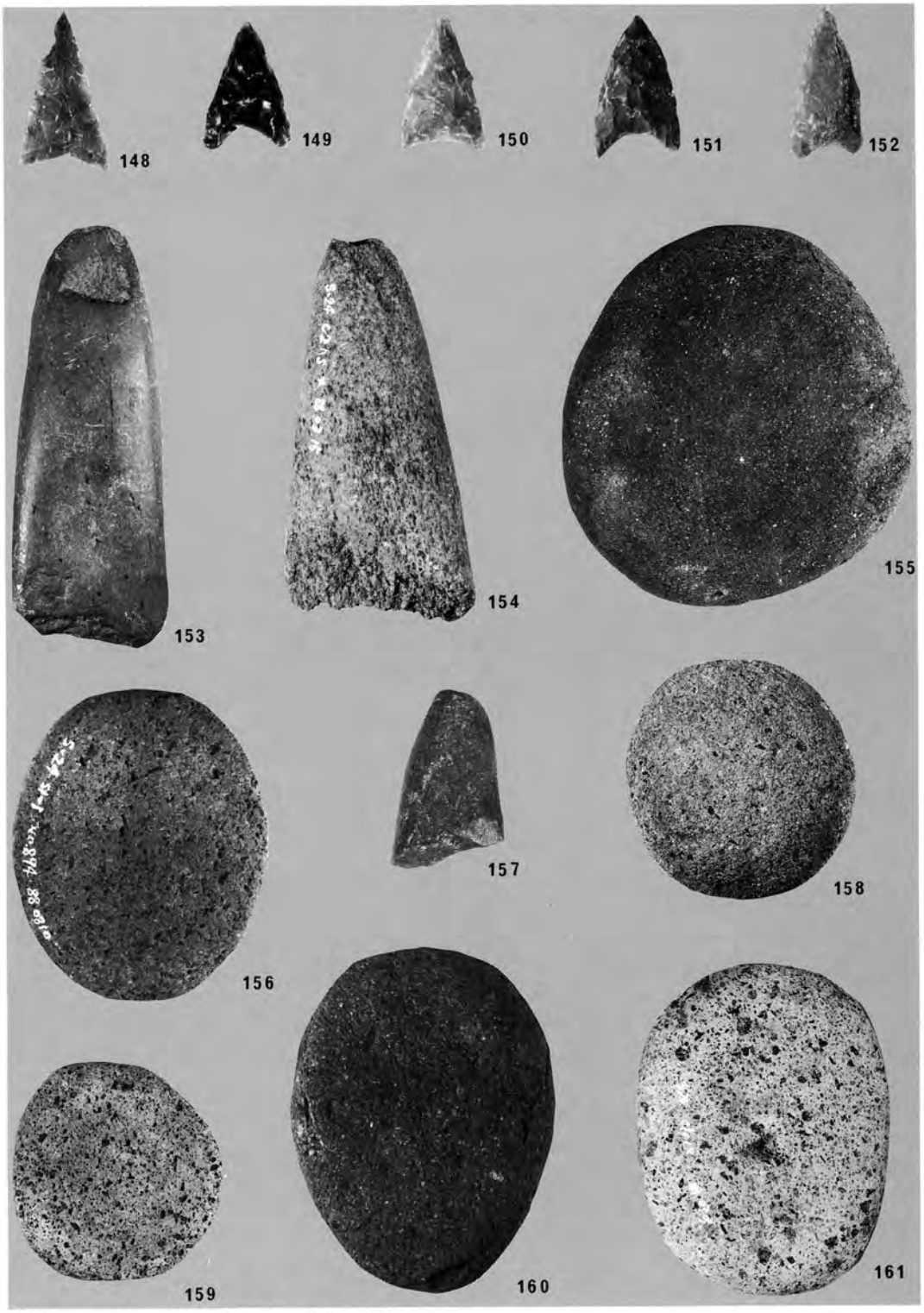


グリッド出土土器 (2) S＝1/2

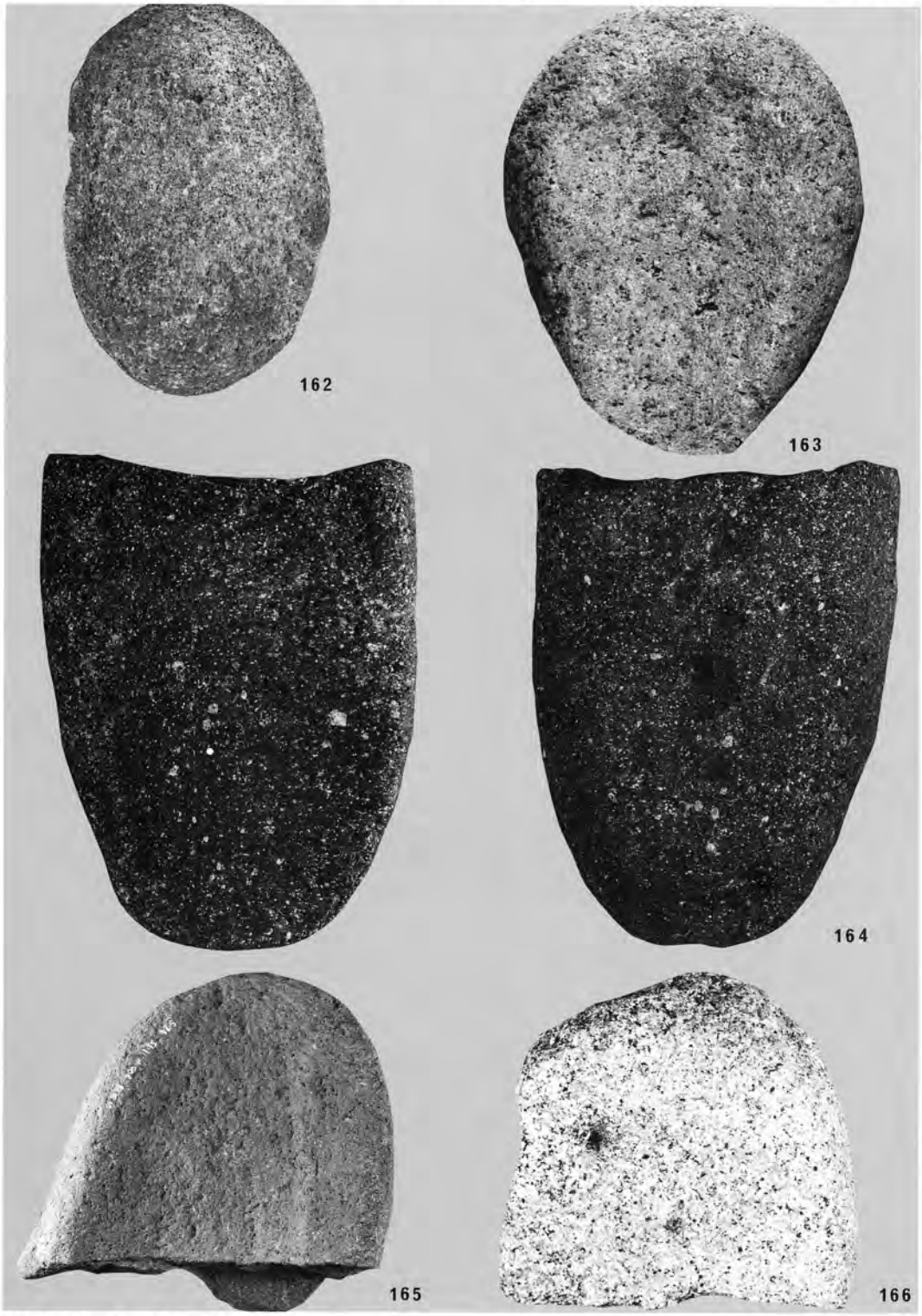


グリッド出土土器 (3) S＝1/2

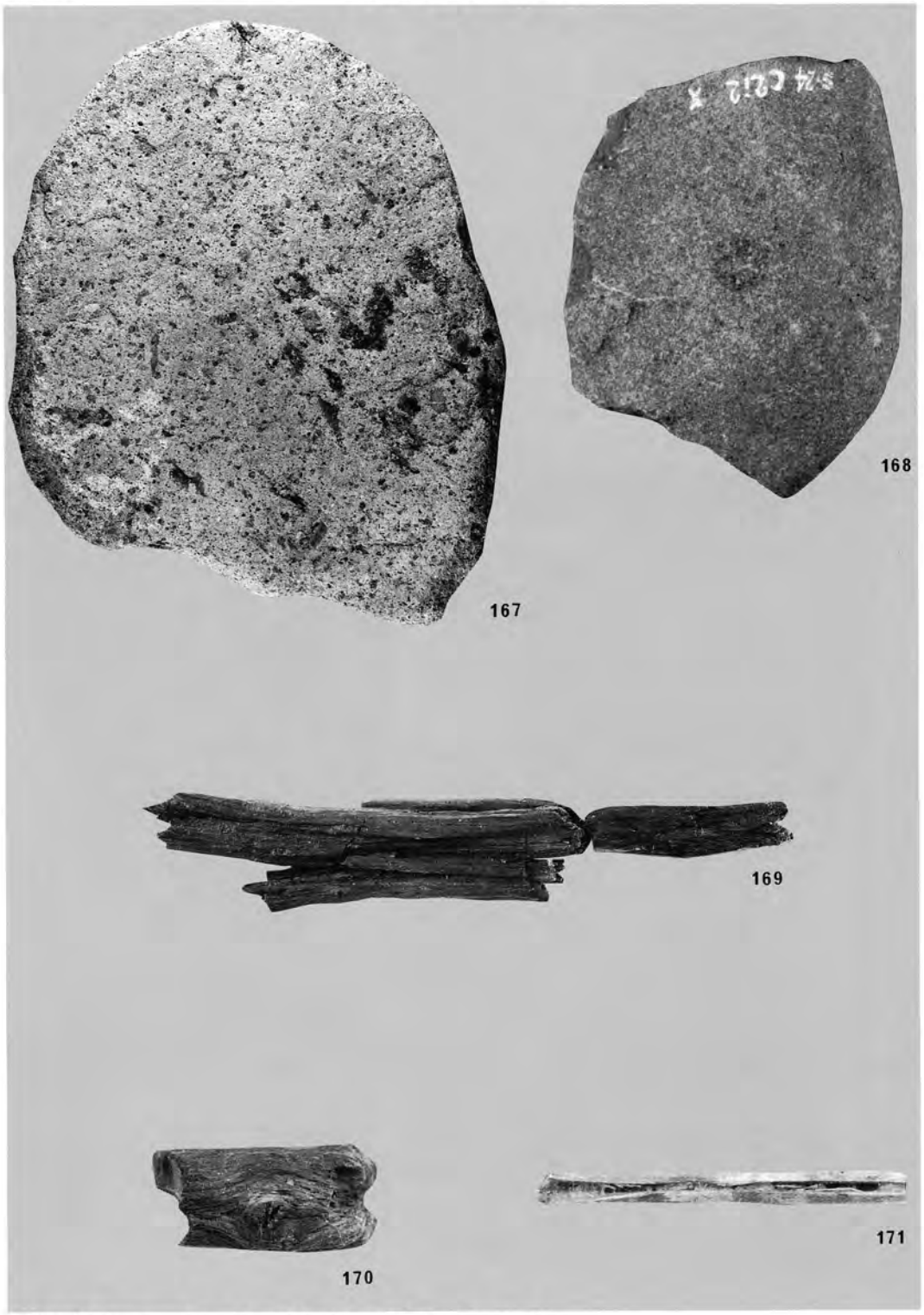
上片田C遺跡



石器 (1) 148～152＝1/1, S＝1/2



石器 (2) S＝1/2, 165＝1/3



石器・樹木 (3) 167＝1/3, 169＝1/2, 168・170・171＝1/1

写真図版掲載遺物対照表(1)

写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号
ＰＬ39- 1	第68図- 1	ＰＬ51- 1	第74図- 1	ＰＬ53- 38	第76図- 40	ＰＬ55- 75	第79図-123
ＰＬ39- 2	第68図- 2	ＰＬ51- 2	第74図- 2	ＰＬ53- 39	第76図- 44	ＰＬ55- 76	第79図-124
ＰＬ39- 3	第68図- 4	ＰＬ51- 3	第74図- 3	ＰＬ53- 40	第76図- 53	ＰＬ55- 77	第79図-125
ＰＬ39- 4	第68図- 7	ＰＬ51- 4	第74図- 4	ＰＬ53- 41	第76図- 54	ＰＬ55- 78	第79図-126
ＰＬ39- 5	第68図- 8	ＰＬ51- 5	第79図-139	ＰＬ53- 42	第76図- 55	ＰＬ55- 79	第79図-127
ＰＬ39- 6	第69図- 12	ＰＬ51- 6	第98図- 92	ＰＬ53- 43	第76図- 57	ＰＬ55- 80	第79図-135
ＰＬ39- 7	第69図- 13	ＰＬ51- 7	第74図- 6	ＰＬ53- 44	第76図- 56	ＰＬ55- 81	第79図-132
ＰＬ39- 8	第69図- 14	ＰＬ51- 8	第84図- 44	ＰＬ53- 45	第77図- 59	ＰＬ55- 82	第79図-136
ＰＬ39- 9	第69図- 15	ＰＬ51- 9	第84図- 45	ＰＬ53- 46	第77図- 60	ＰＬ56- 83	第82図- 3
ＰＬ39- 10	第69図- 16	ＰＬ51- 10	第82図- 1	ＰＬ54- 47	第77図- 62	ＰＬ56- 84	第82図- 2
ＰＬ39- 11	第68図- 9	ＰＬ51- 11	第95図- 1	ＰＬ54- 48	第77図- 63	ＰＬ56- 85	第82図- 10
ＰＬ39- 12	第69図- 17	ＰＬ52- 12	第75図- 1	ＰＬ54- 49	第77図- 64	ＰＬ56- 86	第82図- 13
ＰＬ39- 13	第69図- 18	ＰＬ52- 13	第75図- 2	ＰＬ54- 50	第77図- 65	ＰＬ56- 87	第83図- 14
ＰＬ39- 14	第69図- 19	ＰＬ52- 14	第75図- 3	ＰＬ54- 51	第77図- 66	ＰＬ56- 88	第83図- 22
ＰＬ39- 15	第68図- 10	ＰＬ52- 15	第75図- 4	ＰＬ54- 52	第77図- 70	ＰＬ56- 89	第82図- 4
		ＰＬ52- 16	第75図- 5	ＰＬ54- 53	第77図- 68	ＰＬ57- 90	第83図- 15
		ＰＬ52- 17	第75図- 6	ＰＬ54- 54	第77図- 72	ＰＬ57- 91	第82図- 5
		ＰＬ52- 18	第75図- 7	ＰＬ54- 55	第77図- 73	ＰＬ57- 92	第82図- 6
		ＰＬ52- 19	第75図- 9	ＰＬ54- 56	第77図- 74	ＰＬ57- 93	第82図- 7
		ＰＬ52- 20	第75図- 10	ＰＬ54- 57	第77図- 75	ＰＬ57- 94	第83図- 28
		ＰＬ52- 21	第75図- 11	ＰＬ54- 58	第77図- 79	ＰＬ57- 95	第96図- 1
		ＰＬ52- 22	第75図- 12	ＰＬ54- 59	第77図- 80	ＰＬ57- 96	第96図- 2
		ＰＬ52- 23	第75図- 23	ＰＬ54- 60	第77図- 83	ＰＬ57- 97	第96図- 4
		ＰＬ52- 24	第75図- 24	ＰＬ54- 61	第77図- 78	ＰＬ57- 98	第96図- 5
		ＰＬ52- 25	第75図- 25	ＰＬ54- 62	第78図- 99	ＰＬ57- 99	第96図- 7
		ＰＬ52- 26	第75図- 27	ＰＬ54- 63	第78図-100	ＰＬ57-100	第96図- 8
		ＰＬ52- 27	第75図- 26	ＰＬ55- 64	第78図-101	ＰＬ57-101	第96図- 9
		ＰＬ52- 28	第75図- 29	ＰＬ55- 65	第78図-102	ＰＬ57-102	第96図- 10
		ＰＬ52- 29	第75図- 28	ＰＬ55- 66	第78図-103	ＰＬ57-103	第96図- 12
		ＰＬ52- 30	第76図- 31	ＰＬ55- 67	第78図-104	ＰＬ57-104	第96図- 16
		ＰＬ53- 31	第76図- 32	ＰＬ55- 68	第78図-106	ＰＬ57-105	第96図- 17
		ＰＬ53- 32	第76図- 33	ＰＬ55- 69	第78図-108	ＰＬ57-106	第96図- 18
		ＰＬ53- 33	第76図- 38	ＰＬ55- 70	第78図-109	ＰＬ57-107	第96図- 19
		ＰＬ53- 34	第76図- 34	ＰＬ55- 71	第78図-105	ＰＬ58-108	第96図- 21
		ＰＬ53- 35	第76図- 36	ＰＬ55- 72	第78図-110	ＰＬ58-109	第96図- 22
		ＰＬ53- 36	第76図- 37	ＰＬ55- 73	第78図-112	ＰＬ58-110	第96図- 23
		ＰＬ53- 37	第76図- 39	ＰＬ55- 74	第79図-122	ＰＬ58-111	第96図- 25

写真図版掲載遺物対照表(2)

写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号
ＰＬ58-112	第96図- 26	ＰＬ58-127	第97図- 69	ＰＬ59-142	第98図- 97	ＰＬ60-157	第100図-15
ＰＬ58-113	第96図- 27	ＰＬ59-128	第97図- 70	ＰＬ59-143	第98図- 98	ＰＬ60-158	第101図-17
ＰＬ58-114	第96図- 35	ＰＬ59-129	第97図- 72	ＰＬ59-144	第98図-100	ＰＬ60-159	第101図-22
ＰＬ58-115	第96図- 38	ＰＬ59-130	第97図- 73	ＰＬ59-145	第98図-101	ＰＬ60-160	第101図-23
ＰＬ58-116	第96図- 37	ＰＬ59-131	第98図- 76	ＰＬ59-146	第98図-102	ＰＬ60-161	第102図-25
ＰＬ58-117	第97図- 42	ＰＬ59-132	第98図- 77	ＰＬ59-147	第98図-103	ＰＬ61-162	第102図-28
ＰＬ58-118	第97図- 47	ＰＬ59-133	第98図- 81	ＰＬ60-148	第99図- 1	ＰＬ61-163	第102図-32
ＰＬ58-119	第97図- 50	ＰＬ59-134	第98図- 85	ＰＬ60-149	第99図- 2	ＰＬ61-164	第102図-31
ＰＬ58-120	第97図- 51	ＰＬ59-135	第98図- 86	ＰＬ60-150	第99図- 3	ＰＬ61-165	第103図-33
ＰＬ58-121	第97図- 53	ＰＬ59-136	第98図- 95	ＰＬ60-151	第99図- 4	ＰＬ61-166	第103図-36
ＰＬ58-122	第97図- 55	ＰＬ59-137	第98図- 87	ＰＬ60-152	第99図- 5	ＰＬ62-167	第103図-34
ＰＬ58-123	第97図- 58	ＰＬ59-138	第98図- 88	ＰＬ60-153	第100図- 6	ＰＬ62-168	第104図-45
ＰＬ58-124	第97図- 62	ＰＬ59-139	第98図- 99	ＰＬ60-154	第100図- 7	ＰＬ62-169	第95図- 2
ＰＬ58-125	第97図- 63	ＰＬ59-140	第98図- 93	ＰＬ60-155	第101図-16	ＰＬ62-170	第95図- 3
ＰＬ58-126	第97図- 64	ＰＬ59-141	第98図- 96	ＰＬ60-156	第100図-12	ＰＬ62-171	第95図- 4

茨城県教育財団文化財調査報告書第53集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書3

三　和　地　区

平成元年9月25日印刷
平成元年9月30日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　株式会社　三栄印刷
水戸市谷津町1－50